ロザリオとバンパイア～Another story～

じーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロザリオとバンパイア～Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ０４１５Ｕ

【作者名】
じーく

【あらすじ】
　ある日の仕事帰り・・・俺は死んだ・・・
そして　死んだ俺の前に現れた女神？によって　新たな世界へ・・・

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ・・・死と旅立ち！（前書き）

例によって・・・主人公の死から　始まります！
ほぼ作者の妄想・想像で　話は進みます。
原作ではまだ語られて無い部分も想像＋妄想で表現してます！

そして　主人公は　強いです！　作品中の登場人物は原作と異なったりします！不快感のある方は　読まない方が良いかも・・・ベタですが　処女作なので　温かい目で見ていただければ嬉しいです。

意見・感想　大感激です　（笑）

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ・・・死と旅立ち！

『俺・・・死んだのか・・・』

別に死ぬのが嫌だったわけじゃない、

ただ・・・　死ぬ勇気がなかっただけだった。

俺の生前の名は、御剣　陽介

普通の小学校、中学校、高校まで行き　さっさと就職しようと考えて

某会社に就職した。

そこでの人間関係はけして良いものではなかった・・・

「仕事は　よくやってる。でもお前の人間性が問題なんだ！」と上司に言われた。

具体的なとこは一切言わず、会社の飲み会の席で気分良く酔っ払いながら

話してきた。

『そんなこと言われてもな・・・』という考えで頭の中がいっぱいになった・・・

会社に入ってこんなんばっかだ・・・

『何もかも嫌だ・・・しんどい、疲れた・・・』

頭の中がこの単語でいっぱいになった・・・

飲み会が終わり・・・　車で自宅に帰宅中・・・　ちょっとした不注意でそれは起こった。

キキー　　ガッシャーーーン!!!

前方より飲酒運転の車が逆走し軽自動車（俺の）と大型トラックの正面衝突。

どうなったのかは　言うまでもない。

俺の車は大破、相手のトラックは　フロントガラスが壊れたぐらい。

そのまま死んだ・・・

『まあこれでよかったかもな！いろいろ悩まなくていいし！未練なしだな！』

「へぇ・・・めずらしいねー」

（うおっ!!なんだ?）

いきなり後ろから声がしたので振り向くと・・・

真っ白のドレスを着た女性（かなりきれい／／／）が立っていた！

とゆーか浮いてた。

『誰ですか?貴女は?』

って言ってみたけど、ま・・・大体は想像はつくね。死んだんだし、神様?いや女性だ

から女神様か・・・　いるんだねーほんとに、たまに~キリスト教を信じなさい!~

的な宣伝カー見るけど、こりゃもっと真剣に聞いてたら良かったかな?

「へぇー　こりゃまた驚いた。アンタ何者よ?」

『いや、何者って・・・いきなり声かけてきたのアンタじゃんか!』

半分あきれるように言葉を返した。

「あははは、そりゃそうね。ごめんごめん!今までのこういう不慮の事故で死んだ人間って、死んだことに理解するのかなり時間かかってたんだよねー　その上死んだの認められなくてそのまま自縛霊になっちゃったり・・・　経験上さ!なのに貴方は直ぐに死んだの理解して受け止めて・・・尚且つ私の正体も推察してたからさ!あたし驚いちゃって!」

（てへへ~って顔されてもなー）

顔はめちゃくちゃ美人だからちょっと話すの照れくさかったけど意外とスムーズに会話できた自分に驚きながら話を続けた。シャイなのにね~　俺って

『なるほど、ってことは貴女は俺が考えてたとおりの存在で間違いないんですね？』

「そうだよー　びっくりした？アタシも君みたいなタイプの人間初めてだからビックリしたよ！」

なーんか　話が和んできたな・・・楽しいけど・・・

『はぁ・・・じゃ早速天国でも地獄でもどこでもつれてって下さい。もう未練はないですから』

と目を瞑り、空を見上げながら話した。すると意外な返事が返ってきた

「いや　つれてってあげたいのは山々なんだけど・・・ゴメンネ！君の死は天界では予定されてなかったんだよねーこれが！」

は？？

「？？？って顔してるけど事実なんだよ。　君はここで死ぬ予定じゃなかったの！だから天国にも地獄にも行くとこがないんだよ～どっちも今は不況でね～　予定のない人間を入れてあげる余裕なんてないんだ！」

ってことは？

『・・・何それ幽〇白書かよ・・・で、現世に残って働けって言うんじゃないだろうな？？某有名漫画みたいに！』

「あははははーそれもいいんだけど、これから忙しくなるんだよ！

ほら下界でナントカって言うテロ組織の頭殺っちゃったでしょ?その報復が・・・　えーどこでだったかな?　忘れちゃったけど　行われる予定なんだ!死者は軽く1万は超えるんだよ~　其の対処もしなくちゃならないから!今幽霊成り立ての君に出来ること何もないんだ!」

そんな明るい+きれいな顔で言わないでよ・・・　怒るに怒れん

『で、どーしろっていうのさ!　このまま世間をゆらゆら揺蕩ながら身を任せて浮かんでろって言うの?永遠に??』

マジでそれは嫌だ!鬱どころじゃない!転生すらできんじゃん!

「!!　それ!それだ!!」

『どれさ?』

あきれ顔でつっこんだ!とゆーかこの人?考えが読めるんだな。さっきから読まれてるし

・・・いい気はしないかな。。

「ま　いいじゃない女神様の特殊能力なんだからさ!大目に見てよ!」

『わかりましたわかりました!本題に入ってください!』

やれやれ・・・

「えーっとね　君さっき転生って言った（考えた）じゃん！本来別の人間に生まれ変わるにはいろいろとめんどーなのよ！行き先だったり、時代だったりで　そ・こ・で！　さっき漫画の話してたけど　君漫画好きなんでしょ？漫画の中に転生してあげるよ！それだったら簡単だし！」

（・・・は？それって・・・マジ？ってかその方が難しそうなんだけど・・・実在しないフィクションなんだし）

「ノープロブレム！」

『だから考え読まないでよ・・・も、いいけどさぁ　でほんとに問題ないの？』

期待しながら聞いてみた。

「ええ　漫画ってのは有名・無名関係なく魂が宿るんだよ！作者の思いからね！その思いに（魂に）干渉して　二次元世界を歪めて書き換えたらそれくらい簡単なのさ！実際世界観きまってるから　現実よりも遥かに簡単なんだよ！（仕事も楽だし、このままうろうろされてたら上司に名に言われるかわかんないし・・・）」

（・・・おい！最後の聞こえたぞ！俺でも！ま　いいか！）

『そうならそれでヨロシク！ずーっと悠久の時を生きる？より何万倍もいい！！』

「おっけー！ならなんの漫画にする？確か　前に先輩が言ってた人間はネギ〇って世界だったらしいけど君もそうする？」

（先輩って・・・それに何でネギ〇知ってんの？　ま　いいか　つっこまないつっこまない・・・）

『ネギもいいけど・・・ううーむ』

5分ほど考えて・・・

（そうだロザリオとバンパイア！最近買った漫画だし！原作大体覚えてるし！）

「おっけーロザバンだね！！お安い御用だよ！」

『（もー何もいわん）　うん！それで！あの漫画は妖怪が出てくる漫画だしただの平凡な人間だったらすぐ死ぬから（つくねは生きてるけどね・・・笑）特殊能力なんかも持たしてよ！書き換えるってことはそれくらいはできるよね？』

「うん！できるよ！いいよ！なーんでもいって！！」

（んー　・・・魔法使い？ゆかりちゃんがいるし・・・タライおとすだけってのもな・・・
ん？でも自分で考えた能力つけれんのなら、関係ないか・・・だったら精霊使いに
ワ〇ピースより自然系の付加能力つけて・・・　でも魔法も使えて・・・こんなもんかな？）

「いいよ！！それでも！！ってかメチャチートだね～。ワ〇ピの自然系って・・・覇気使えんかったら　完全に無敵じゃんｗｗ　ま　面白いからいいかな！笑」

（なんで女神様がそんなんしってるのさ?さっきといい　・・・
ま　いーか）

「もう頭の中読むのはスルーなんだね!つっこみ楽しみにしてたのに!ま　おいといて・・・能力はおっけー転生場所はどこにするの?どこでもいいよ。」

『えーっとね　三大冥王と顔なじみになりたいから　アルカードと対決する前にして欲しいかな?場所は朱染城そば　勝手に侵入するからさ!んでもって　アルカード戦が終わったらセカンドシーズンに飛ぶからね!パーティが固まってからのほうが絡みやすいし!転校生ってことで理事長に入れてもらう予定!』

「おっけー!（ついに声に出して言っちゃったな~なんか腹立つ!）おほん!それじゃ準備はいいかな??」

（ふん　そう何度もからかわれてたまるかい!）

『いいよ!ヨロシク!』

「んじゃ!いーってらっしゃーーーい!!」

（なんだ!!空に吸い込まれる!!）

『ううわあああああぁぁーーーーーーーーーーーーーーーー』

・・・・

「ふーよかったー　気分よくいってくれて~　実を言っちゃうと

あなたが死んだのワタシの不注意だったんだよね・・・ほんとはあの飲酒運転の人間が死ぬ予定だったんだけど・・・ばれて　天界に行かれてたら　ワタシ先輩に大目玉だったよー！はぁーよかった！」

「へぇ　そんな裏事情があったのか！良かったな　シェリア・・・」

ビクッ　ま　まさか・・・

「せ　せんぱーーーい！！！なんで　どーして！！」

「お前は隠し事してる時は癖があるからな！跡をつけてみたらこれだ！さぁーゆーっくりはなそうか？」

ひぃぃぃ！！

「ごめんなさーーーーーーい！！」

陽介にはもちろん聞こえてはなかった。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ・・・死と旅立ち！（後書き）

何だろ?この女神様・・・
プロローグなのに長い暗いー！！

そしてもっと旨くなりたい！
文字をうまくつかいたいー　笑

主人公　プロフィール（前書き）

主人公の詳細です！

主人公　プロフィール

プロフィール

氏名：　生前　御剣　陽一　　アルカード編　ジャック・ブロウ
学園編　御剣　怪斗

年齢：　没２０歳　→　不明・・・（妖怪）

身長：　１８８？

体重：　７５？

種族：　自然系（ロギア）　精霊使い（エレメントマスター）…分類的には　魔法使いの最上位　存在は確認されているが
謎の種族

能力：　自然系形態（マグマ　火　水　風　土　光　闇・・・ｅｔｃ）
魔術　（古文書　テレパシー　飛翔　結界術・・・　ｅｔｃ）

性格：　理屈屋でマイペース　情にはもろい面もあるが　基本的にはめんどくさがり
自分自身が面白いと判断すれば　積極的になる
しかし・・・本心は・・・　作中で！

主人公　プロフィール（後書き）

自然系って　強いですよね！
最初にでてきた時は
『どうすんのこれ！！』って
思いでした。
同じ気持ちの人もいるのでは？？

第1話　転生の成功　そして出会い

転生!!

陽介ｓｉｄｅ

ひゅ～～～どさっっ

『いててて・・・・　ん?ここは・・・』

(頭が霞む・・・俺はいったい・・・)

『そうだ!たしか女神の姉さんに転生してもらったんだった!で、ここは?・・・ッとその前に能力確認確認!』

ん～実際悪魔の力ってどうやってるのかわからんし・・・↑あたりまえだ!

おおっ　頭の中で思い浮かべたら能力が浮かんできた!しかも俺が知ってる自然系なら全

部使えるみたい!!便利～!!

『じゃ　まず!　むむむ・・・かあ!!なーんちゃって!こんなん言わんでもいいんだけどね。』

一人乗り突っ込みもぬなしいからさっさとやろ・・・

《マグマグの力》(実じゃなく力にしましたw)

『サカズキ好きだったんだよね！んじゃ・・・大噴火！！』

ドゴオオオオオォォン

ううーん快感！ってか技名パクッちゃだめだよな！考えとこっと

「だれだ！！」

！！！マズイ　ここって朱染城のそばだったんだっけ

陽介ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「貴様何者だ！！さっきの衝撃は　われわれに対する攻撃とみなすぞ！」

ううん　バンパイアだよな？　めんどくさいけど　アカーシャさん達とは　仲間になりたいからな・・・

『すまない　いきなり訪問して　君たちへの攻撃のつもりは無い俺の眷属がこの辺りに脱走してな。それをとらえていたんだ』

とっさの考えにしてはうまく言ったな！なかなか悪くないかな？多分・・・

「それを信ずる証拠が無い。その眷属とやらはどこにいるというのだ？」

やっぱいきなりは信じてくれないかな。ううむ

『そこにいるぞ?』

指差した先は。まだかなりの熱気を纏い赤みを帯びた岩石だった。

「な　なんだこれは??　火?違う溶岩か!」

『悪い　眷族を突き出して吐かせれば良かったんだがな、そこにいるとは言ったが　溶かしたから原型を留めてないけど信じてくれるか?』

バンパイア男ｓｉｄｅ
何だ?この男は・・・

あたりの熱気・・・初めは衝撃音で気づかなかったが　この尋常じゃない熱気はまさしく

溶岩のそれだ・・・人間であれば近づいただけで　焼け爛れてしまうだろう。

それ以前に溶岩を使う力なぞ聞いたこともない・・・バンパイアである俺たち（5人います。笑）
でも　溶岩なんぞを食らえばひとたまりもない。

どう出ればいいか・・・一茶様に知らせに行くか?あるいは・・・

『あー　俺からは絶対手は出さんぞ!でも攻撃してくるなら話は別だ。だから後者はおススメはできん!俺としては朱染家とは仲良くしたいんだ。』

「！！なっ」

考えを読まれた？こ　こいついったい・・・

『館の主は一茶というのか？よし！連れてきてくれ！ああ　主相手につれてくるってのは無礼だな・・・よし　手数だが案内をしてもらえないか？』

「・・・」

どうすればいい？

バンパイア男ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

男たちは陽一の声に全く反応せずこの溶岩の力を完全に警戒していた。

やれやれ　どうしたもんかな？まあ　マグマの力をいきなり出したのがまずったな・・・ん？

「何をしてるの？」

緊迫した空気（緊迫してたのは主に５人のバンパイアたちｗ）を破ってくれたのは　若い姿の女性だった。

第1話　転生の成功　そして出会い　（後書き）

次回はいよいよ　あの人の登場です！
お母さん！

原作ファンの方は分かるかと！

第2話　アカーシャ・ブラッドリバー

「何をしてるの？」

緊迫した空気（緊迫してたのは主に5人のバンパイアたちw）を破ってくれたのは　若い女性だった。

あれ？この人ってたしか・・・

「ア　アカーシャ様！帰られていたのですか？」

やっぱし！この美しい容姿間違えんな！／／／／　かわいい／／／／

ううん！　ぶるぶる顔を振るって惚けた頭を必死に戻した

「ええ　一茶さん達との旅行が終わったからね　楽しかったわよ！みんなにお土産あるからね♪　で　騒がしかったからここへ・・・いったいなにがあったの？」

「そ　それが・・・」

『あー　俺から説明するよ面倒を起こした張本人だし。まずは挨拶を・・・初めまして　アカーシャ・ブラッドリバーさん　私の名はジャック・ブロリと言います。』

丁寧にお辞儀をし挨拶をした。よしジャックって名前にしよ！この辺は！学園編では新たに考えよっとw

「ご丁寧にどうもありがとうございます。しかし　なぜ私の名前を？」

そりゃそうだよな・・・接触方法ぜんぜん考えてなかったからな・・・

それに2人で話したいからな　このバンパイアＡＢＣＤＥたち邪魔だな・・・ｗ

よし直球で行こう！

『知ってますよ！もちろん』

ブゥゥゥン

俺は直接頭の中に語りかけた

『実はあなたに会いに来ました。真祖のバンパイア　アカーシャさん』

「！！」

そりゃビックリするよな　見知らぬ男に正体をしかも真祖であることもばれてんだからさ

『落ち着いてください。私は貴女と2人で話したい、例のもうひとりの真祖・・・アルカードについて・・・問題なければこの人たちを帰してくれませんか？』

アカーシャ　ｓｉｄｅ

・・・見知らぬ男の人に私の正体を見破られただけでなく　あのアルカードのことまで

知ってるなんてこの人はいったい・・・それに屈強な館の警備員たちの慌て様・・・

只者じゃないわね・・・　それにさっきの頭に直接話しかけてきた所を考えると

この考えも筒抜けのはずね・・・ここは応じましょうか。

アカーシャ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「！！あ！ごめんなさい！よく考えたらジャックさんが私のことを知ってるのは　当然よね」

「え？そうなのですか？」

男達があわてた様子で尋ねた

「ええ　もう3年ほど前になりますか・・・ヨーロッパに行ってたときに知り合ったの　ジャックさんが初めまして！なんていうから戸惑ってしまったわよ・・・」

照れ笑いながら話を繋いでくれた

やっぱしいい人？だねアカーシャさんって・・・／／／

ううん　やっぱし顔が赤くなるのがとめれんｗ

「貴方たち　彼は大丈夫です。私が保証します。持ち場に戻ってくれてかまいませんよ」

「・・・分かりました」

バンパイア男　ｓｉｄｅ

完全に男を信用したわけではないが、あのアカーシャさんならば大丈夫だろう！

一茶の側室であるアカーシャの言葉は信用するに足ることをこの男たちは知っていた

為　割とあっさりこの場を離れた

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「さて、ここじゃなんだから　私の部屋に行きましょうか？」

ええ！アカーシャさんの部屋に！！そ　それはマズイ・・・いろんな意味でｗ

『いえ　人妻であり美しい女性であるあなたの部屋に入るのはちょっと
体裁が悪いですね・・・』

必死に照れてるのを隠しながら　おどけて見せたｗ

「ぷっ！」

ん？

「あはははは！貴方って愉快な方なんですね！最初の印象がどこかに行ってしまいましたよ？」

おお！なんかいい感じになっちゃった？　期待しちゃいそう・・・

駄目駄目！俺こんなキャラちゃう！！

『ほめ言葉として受け取りましょう！さて　本題ですが・・・』

「ええ　まずは貴方の方から聞きましょう　できれば　なぜ私のことを知ってるのかも教えて欲しいわね」

『では　3年前っていう設定はそのままにしましょうか！ま　ふざけるのは終わりにして・・・まず事の発端は　アルカードという化け物に　私の交友関係のあった村を滅ぼされたことから・・・』

この話は原作完全無視のオリジナルだけど実際に起きた事としていけるよねー

女神様に書き換えられたんだし！　w

「・・・そんなことが」

さっきまで笑顔だったアカーシャの顔が沈む

『すみませんこんな話からで・・・』

「いいです　顔に出ちゃいましたね　ごめんなさい！」

プルプルするしぐさ・・・かわいいなぁ～　いかんいかんシリアスに・・・w

『私が村についたのは　もう見る影もない状態でした・・・そこで死に掛けの友人に会いアルカードのことを知ったんです。そして貴方達のことも調べました』

「貴方達？」

また驚いた顔をした、その顔もかわいいw

『ええ　うーん口で説明するより実際やった方が早いですね。・・・古文書（アーカイブ）』

手をかざした先に映写機のように何もない空間に映像を映した。

「これは？」

『これは　私の魔術で　簡単に言えばパソコン、インターネットのようなものです。この世界のさまざまな精霊達に語りかけ情報化しそれを映像化することによって貴方達を調べました。アルカードを追っている3人の戦士　退魔師　御子神　天明　妖術師　東方不敗　真祖　吸血鬼　アカーシャ・ブラッドリバー・・・』

「・・・今日は驚いてばかりね。あなたの力も未知数というか　反則ぎみね　プライバシーの侵害よ？」

笑いながら　話した　　・・・・笑ってるのもかわいいなー　よし！もー慣れた！！ｗ

「私達を知っていた分けは分かったわ！それで目的は？想像がつくけどね。」

『ええ想像通り、共闘したいだけのことです。だから私はこの極東の地まで来たんです。友人たちの敵をとるために・・・』

「・・・気持ちは分かったわ　でもアルカードはこの世でもっとも危険な妖怪・・・生半可な力では吸収されてしまう。貴方のことだから調べてるとは思うけどね・・・だからこそ3名の屈強な仲間だけで　討伐しようと考えていますから・・・」

『私の力を見たい・・・ということですね？』

不適な笑みでアカーシャを見つめた。

「ええ　幸いなことに東方不敗さんは今日、日本に来てます。御子神さんはいらっしゃらないですが、3名中2名が認めれば　問題ないと思うので」

今までのアカーシャがうその人格に思えるほど　鬼気迫るオーラを出していた

ジャック　ｓｉｄｅ

さすがは不死の吸血鬼　冥王の首領となる女だな・・・

俺は心底喜んでいた　女神にチート能力を授けられた故圧倒的な力で滅ぼしてお終いに

なるのか・・・と心配していたが　アカーシャの雰囲気を見て敵の力量も大体把握

そこそこいい勝負ができる！

笑いが自然とこみ上げていた。

第2話　アカーシャ・ブラッドリバー（後書き）

ありがとうございました。

個人的には　表モカよりアカーシャの方が好きですね♪

もっとがんばりまっす！

第3話　力を魅せる

数時間後・・・

「アカーシャよ・・・その男が　先ほどの？」

場所は少し変わり　結界を張り進入できない空間にした　朱染城そばの峡谷である。

「ええそうです　４人目の戦士として　ふさわしいか我々に見せていただくため貴方を呼びました。」

「ふむぅ・・・」

なんだ？この爺さん．・・・ってそっか妖力を押さえ老人の姿をしてるんだったっけ？

じじぃの姿だったらやりにくいし　その上　手ごたえなさそうだ・・・　よし

『・・・俺の力量を見るのなら　その姿じゃ無理だろ？東方不敗さん？』

［Ｂｙ　ｍｙ　ｉｎｓｔｒｕｃｔｉｏｎ…］

（我が命により・・・）

［Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｐｅｒｓｏｎ　ｏｆ　，，，ｂｅｉｎｇ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｏ　ａｐｐｅａｒ，，，ｉｔｓｕｗａｒｉ　ｉｎ　ｔｈｉｓ　ｐｌａｃｅ！］

（この場に　姿をあらわせ　偽りの者よ！）

［Ｌｉｂｅｒａｔｉｎｇ！］
（解放！）

パアァァァァ

「ぬおおおお　こ　これは！！なぜわしの体が・・・」

『ああ心配しなくていい。　妖力を抑え偽りの姿をしていたのを俺の魔力で引きずりだしただけです。』

東方不敗　ｓｉｄｅ

ばかな・・・このような術聞いたことがない、わしの場合は妖力を抑えて　姿を変えていた

妖力を封じる術ならまだしも　引き出す術？メリットが全くない。あるとすれば　全力の相

手と戦いたいという思考の持ち主　戦闘狂なのか？なんにしても全くつかめん男じゃ・・・

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

アカーシャ　ｓｉｄｅ

思ったとおり・・・

力を見たいといったがその理由は力量を信じてなかったわけではない、絶対的ともいえる

力量を感じ取った故の行動だった。

あの人の言うことはまだ１００％信じたわけじゃないけれど・・・

何か暖かい感じもする

圧倒的な力とは裏腹にすべてを包むような優しさのような・・・

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『さ　やりましょうか！東方不敗さん？』

驚いた顔が瞬時に消え、若かりし姿の東方不敗もまた　不敵な笑みをこぼし

「ふはははは・・・面白いのぅ！　ワシもわくわくしてきたぞ！年甲斐もなくな・・・　こい！」

臨戦態勢に入る

こいつでいくか！『焔の力　自然系（ロギア）！』

『紅き焔炎（プロミネンス）』

ボオオォン

左右の腕を炎化し　不敗に飛ばす

「ふん!!」

バァン!!

妖気をこめた呪符を掲げバリアのようにジャックの攻撃を防ぐ!

「ぬううう!」

(なんじゃ?この力は!唯の炎じゃない。封炎作用のある符を使用しているのに消えん!)

「かぁ!!」

呪符を何重にも加え　消し去ることに成功する

『マジか・・・流石は　世界最強の妖術師!あの炎を消し去るかよ!』

実際に驚いている。自然系の能力は体のすべてをその属性にでき体の原型も留めていない、更にその属性を発生させることができるつまりは　尽きる事のない炎!それを消す・・・

(チートは結構お互い様ってことか?楽しくなってきたぜ)

「お主もな・・・あのような炎・・・伝説の不死鳥(フェニックス)や炎龍(サラマンダー)を見てきたがそれ以上じゃよ・・・」

(ふふふ・・・あれだけの攻撃で　妖力を根こそぎ持っていかれたようじゃ　使うか?次元刀・・・)

ブゥゥゥン

『マグマの力　自然系（ロギア）』

（くるか？あれは確か崩月次元刀・・・）

ってか力見るだけなのにかなりマジバトルになってんじゃんか！

って自分に突っ込んでみたｗ

「ジャックよ　ワシの最高の秘術を見せてやろう！」

（やっぱりかよ！）

『ああ　いいぜ！俺のもさっきの炎とは　桁が違うぜ！』

ボコボコボコ・・・・

左右の肩から腕まで　マグマ化する

（炎の次はマグマか！　聞いたこともないぞ　マグマなんぞ使う術は・・・確かに桁が違う様じゃな・・・）

『溶岩驟雨（ようがんしゅうう）！』

ドドドドドドドドドッ

大量の火山弾が雨のように降り注ぐ！

「くっ　次元回避！」

フッ

（次元をずらして　回避したが・・・　火山噴火の様な攻撃をしてくるとは・・・下手に出れん！）

『次元刀で空間外に逃げたか！』

マズイな・・・次元回避って気配も消えるのかよ。超人系の空気開閉（エア・ドア）も習得すりゃ良かったか？

考えていたのは数秒間だったが・・・

（！！）

「隙ありじゃ！」

ザシュ！！

『ぐあああっ』

ジャックの両の腕、足を切断した。！

「しまった！本当に切ってしまったわい！アカーシャ！彼を早く治療を！！」

（妖怪でも切れたら　治療なんてできんのじゃないか？不死者のアカーシャならともかくさ・・・）

「やりすぎよ！二人とも！！でも黙って見てた私も同罪ね　急いで

家の救護の者を」

（そろそろ　反撃するか・・・あんま倒れた振りしててもかっこ悪いし）

ボコボコボコ・・・地面を溶かし・・・東方不敗の背後に回りこんだ！

「な！！」

マグマの拳を東方不敗に当たる寸前で止める

『これでおあいこだな？　別に治療はいいよアカーシャさん。・・・で、まだやるかい？』

「ふはははは・・・ワシの負けじゃ。　お主は規格外じゃな！これは認めるしかないのぉ　ここまでの化物がおるって事をな。力量は十分すぎる。アルカード討伐に大きく力になってくれるであろう。のう　アカーシャよ。」

心底楽しそうな笑顔でアカーシャの方を見た。

「ええ、私も正直ここまでとは　思ってませんでした・・・ジャックさん貴方の提案の共闘・・・分かりました。　いえ　こちらからもお願いします。あのアルカードを倒すためにも」

深々と頭を下げジャックの方を見つめた

（そんなに見つめなくても・・・／／／　ええい！）

顔が赤くなっているのを誤魔化しながら

『ありがとうございます。アカーシャさん　東方不敗さん！これからよろしくお願いします。』

こちらも丁寧に返事をする。そこに・・・

「ええい！ジャックよ！その　敬語はいい加減やめてもらえるか？戦ってる時とギャップがありすぎて気持ち悪いわい！そういうギャップ萌えは　二次元美少女だけでええわい！」

『はぁ二次元？？？』

「ああ　この人は　日本の漫画が大好きでね　今かなりはまってるなのよ・・・かるく流してくれていいわ」

あ・・・そういえば　この人って二次元オタクだったっけ？

「流すとは　ひどいぞ！二次元は浪漫！浪漫なんじゃ～！！！」

東方不敗の悲痛な叫びが木霊した・・・

第3話　力を魅せる（後書き）

このころ漫画って　あるのかな??
自分で書いてて　自分でおかしいと思った・・・
不敗さんはそっちのイメージが強いんで・・・

第4話　三大冥王＋α　集合

「で・・・この男が例の？」

東方不敗との一戦が終わり数日後・・・アルカードがある場所で暴れているという情報を掴み行動を開始していた。

そして後の三大冥王となる御子神　天明と俺は出会った

（例によって　素顔が見えないな・・・この人）

原作どおり！御子神の素顔はフードによって　目元がよくわからなかった

まあ　いっか　ｗ

「ええ　お久しぶりね。御子神さん・・・いえ　今は御子神理事長といった方がいいかしら？」

理事？？んー・・・あ。そういうことか

もうこのとき既に陽海学園できてるってことか？

「ふ・・・　まだ　学園を立ち上げようと　計画したばかりの段階だ・・・　名前すら決まってないよ。名も無い学園に理事だけいても仕方なかろう。」

苦笑しながら　御子神は言った

なんだ・・・まだだったか　苦笑

『そちらが　最後の仲間の一人って事かな?』

(知ってるけど　まあ　しってんのもおかしいし辻褄あわしとかないとな)

「ああ　御子神と言う　君がアカーシャと不敗が言っていた　ジャックか・・・　見たところ・・・む?」

なんだ?人の顔見るなり　難しそうな顔して・・・

いい気はしない・・・って　しないこと多いな・・・俺　ストレス溜まりそう　苦笑

『なんだ?』

とりあえず　嫌なんで聞いてみた

「気にするな　君は何の妖か気になってな・・・　見たところかなりうまく正体を隠してるみたいだ。それで眉間に皺を寄せてしまったんだよ。」

・・・それで　初対面なのに　ギロリっ　っとみてたの・・・

『一応　納得したよ。初対面の相手に睨まれるのには慣れてないモンでな　ちょっと警戒した。』

苦笑　しながら警戒を解いた

「そういえば　わたしも貴方の名前しか知らないわね？　貴方はなんていう種族なの？」

・・・そういえばって　結構アカーシャさんっておとぼけキャラも出来るんだねー　カワイイけど

『聞いたら最後一生後悔する事もあるんだよ？』

ってかっこつけてみたけど・・・

「あなたの性格ならそう言うってわかってたわよ！・・・癖が出てるからね」

（ええ！なんで？？）

「ほら　動揺した（笑）」

（はぁ・・・　叶わないな・・・この人には）

俺は　しみじみそう思うのだった。

「話は戻すが・・・ワシもお前のことには興味があるのぉ。あの術にしても見たことが無いものじゃったし。」

後ろにいた東方不敗も俺に詰め寄ってきた

（何これ？尋問かよ・・・）

3人にいつの間にか詰め寄られていた。

『はぁー　わかった　負けたよ・・・』

勘弁してほしいね・・・　この空気

『まったく　まるで猛獣に囲まれた気分だよ・・・』

「ふふ　貴方がカッコつけてるからね　こっちも対応しただけよ。それに私達の事は知ってるのに　貴方の事知らないなんて不公平じゃない？」

「わしらは　結構な付き合いじゃから　チームワークは侮れんぞ？」

「ふむ　私は単純に君に興味が湧いただけなんだがな」

やれやれ・・・　くわばらくわばらってこう言うときに使うんだよな。

『ふぅ・・・　俺の名は　もう知ってるよな？　種族・・・か　難しい内容だ。』

ジャック　ｓｉｄｅ

この世界に来たとき・・・自分の種族　いわゆる設定について

女神様は俺のリクエスト通り精霊使い（エレメントマスター）という存在にしてくれた。

その種族は　存在は確認されてもなぞの多い種族だった　そして・・・その実滅んでいるという事実も・・・

確かに　設定はしてもらった。滅んでるのは　そういうことにしな

いと世界バランスが崩れてしまうらしい　・・・そして精霊使い(おれ)としての悲しみも・・・

（悲しい気分になるな・・・やはり）

俺はその事を仲間に話した

みんなは黙り込んだが　筋違いの同情はよしてくれと頼んだらみんな察してくれた。

『まあ　種族が滅んだのはそれが運命だったんだ　どんなものでもいつかは　滅ぶ・・・それが自然の掟だ。　だが・・・アルカードだけは　あいつのやったことだけは運命って言葉だけではすまされん。かたを付けたい。』

そして　知り合いの村が滅ぼされたという話も・・・作り話でなく確実に現実として俺の脳裏に焼きついていた。

（軽はずみな事を願うもんじゃないな・・・設定なんかさ）

こんなに　苦しいなら・・・な

この時、俺はもうこの世界と完全に同化したと確信した

ジャック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「・・・ほんとに」

『ごめんは　いらないよ。俺のせいで又暗くなったな　忘れてくれ。』

「強いな・・・貴様は」

御子神はジャックという男の底知れない闇とそれに勝る決意を見たきがした。

「確かに・・・のぅ」

見た目はどこにでもいる青年の姿をしている・・・だが、いったいどれだけの事を経験しているのか・・・

『強い・・・か　俺なんかが・・・な。』

そうつぶやく。

アカーシャ　ｓｉｄｅ

彼の心の闇・・・　知り合いの村がアルカードに・・・という話は聞いていたけど

ここまでとは・・・

軽はずみに彼の心に踏み込んだような気がしていた自分に後悔していた

（でも・・・ここで　誤ったところで・・・）

私は　謝るのではなく明るく振舞おうと考えた。これ以上彼に気をかけさせないように・・・

アカーシャ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「さあ　彼の事も分った事だしこの話はおしまい！・・・ね？」

アカーシャは　話題を変え・・・今後の行動について話し始めた。

第４話　三大冥王＋α　集合（後書き）

小説考えてると気持ちが入ります！

でもその気持ちに文章が追いつかない・・・

次回は　決戦です。

第5話　決戦直前（前書き）

この話は短いです。

第5話　決戦直前

数ヵ月後・・・

アルカードの正確な居場所を掴んだ4人は

今暴れている場所へ急いで向かい　そして・・・とうとう見つけた。

「見つけたぞ奴だ！」

一番前にいた　御子神が叫んだ

「奴め・・・いったいどれだけの人間と妖を食らったというのじゃ
以前にも増してでかくなっておる」

「アルカード・・・」

『・・・』

想像以上・・・　その4文字しか　頭に浮かんでこなかった

アルカードは妖や人を食らうことで巨大化するという・・・

それにしても　でかすぎる。原作で見たそれ以上に・・・

なぜ・・・だ？

（原作で見たのよりはるかにでかい・・・　そして妖力・・・）

ブレイクどころではない。自分のチート能力を使ったところでしとめきれるか・・・

不安が頭をよぎったが・・・

『やるしかないだろ！これ以上はやらせない！！』

「もちろんね。まずは　出来るだけ広い場所に誘導しないと。」

「うむ。」

「ああ。」

４人は臨戦態勢に入った。

第6話　決戦・アルカード

幾つもの　時を費やし　強大に成りすぎたといっても過言ではない
真祖・アルカードを
ついに4人の戦士は追い詰めていったのだった。

「これ以上時間を費やし奴を暴走させていると世界が滅ぶ、ここで終わらせるぞ！」

御子神が先陣を切り　破邪の杖を用い　退魔の障壁を四方に展開！

「邪なる怨念よ・・・退け」

「退邪悪（スピリッツ）・破砕封波（クラッシュエッジ）！」

アルカードの体の一部であり　眷属である無数の触手の動きを封じつつ　破砕していく。

そして　アルカード本体が見えた

「今だ！　不敗、ジャック！」

その背後より・・・

『まかせろ！』「うむ。」

「崩月次元刀！」

『雷の力　　自然系（ロギア）』

次元の刃と神なる雷が合わさる・・・

『「天覇・次元斬」』

バリバリバリッズッシャアアン！！

一面のアルカードの体の部分が吹き飛び　粉々になっていく・・・

『どうだ？』「ふう、あれでこられたら流石にたまらんわい・・・」

「っつ・・・確かにキツイな・・・」

アルカードを人のいない荒野へ誘い出すのに膨大な力を使い続けた

為か皆満身創痍だった

（ちッ不安があったが、全盛期がここまで厄介とはな・・・）

俺は　一瞬　意識を乱してしまった。

「いけない！！」

バッ

背後に回りこんだ　アルカード本体に唯一気づけた　アカーシャが

皆を庇う様に　仁王立ちをした。

ドスドスドスッ！！

無数の触手が俺の目の前で　アカーシャの体を貫いた！

アカーシャが気づけたのは偶然と幸運であった。

アルカードの放った　肉片はひとつずつが意思を持ち新たな怪物・・
・アルカードの眷属

として　４人に襲い掛かっていたのだ。

アルカードは本能的に　自分と同じ真祖　アカーシャをこの中で一番警戒していた為、

無数の眷属を使って　アカーシャと御子神・東方不敗・ジャックを切り離していたのだ。

故に　一番後ろにいたアカーシャがアルカードの接近に気づけた・・
・

『アカーシャ！！』

ズッシャッ

大量の血を流しながら　膝をつく

「油断・・・したわね」

虚勢を張っていたが・・・

「いかん　血を流しすぎじゃ！いくらお主でもこれ以上は命にかかわる！」

（不死のアカーシャにここまでするとは・・・いったいどうすれば）

東方不敗が回復の術を展開・御子神が辺りに四天結界を展開させた。

「ちっ　このままだとイタチごっこだ・・・　奴は　深手を負わしても時とともに再生する」

ジャック　ｓｉｄｅ

・・・俺は馬鹿だ！

自分の力に過信していた自分を呪った、アルカードの力量を見余りその上アカーシャにも

自分の油断で　深手を負わしてしまった・・・

原作を知っている俺はアルカードを封じるのは同じ真祖のアカーシャの力で封じていた

ことは知っていたが　それでは　このままアカーシャとモカの運命が原作通り悲しいもの

となる。

それを防ぎたかったのだ。しかし・・・力量を見余った今　それは不可能と悟った

（くそっ　どうすれば・・・）

ジャックｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ジャック・・・そう自分を責めないで　仲間でしょ？仲間を・・・大切な仲間を助けられるのだったらこれくらいどうでもないわ。」

『っ！！』

アカーシャはまるでジャックの考えを読んだかのように言った

「・・・ふふふ　もう結構な付き合いでしょ？貴方が何を考えてるかなんて顔を見れば分かるわよ？貴方ほど正確にはわからないけどね・・・　っつ」

ごふっっ・・・

鮮血が　辺りに舞った

「アカーシャ！喋るでない！今は休めるんじゃ！」

不敗がアカーシャを注意している際　後ろで御子神が叫んだ

「くそっ　アルカード・・・回復してやがる！雷撃による身体麻痺作用を起こしているはずなのに」

アルカードは雷撃で結うことの聞かぬ体の部分を自分から破壊し自身の再生能力を持

ち　回復していったのだ　荒っぽいやり方ではあるが　これ以上無い速さで回復している。

・・・

・・・あれを使うか

ジャックは奴(アルカード)を見ながら決めた

第6話　決戦・アルカード（後書き）

さて・・・どうするんでしょうね？　（笑）

突っ込みどころ沢山でしょうが
まあ適当に流してください！

第7話　決戦・揺るがぬ決意

ジャックｓｉｄｅ

手が無いわけじゃない・・・しかし　力量を見余った今、倒しきれるかどうかが　分からなかった。

自身の数多の自然系（ロギア）と魔術を駆使した　まだ試したことの無い力・・・

（いくらアルカードとは言っても元は　バンパイア・・・異常な回復力を上回る　力で破壊すれば再生前に絶命するはずだ・・・しかしおれ自身も唯では済まされんな・・・）

自然系（ロギア）・・・ワ〇ピースからパクッたチート能力　某漫画では２つ口にしただけで体が粉々

なって死ぬという。　しかし俺自身は　全ての力を使ってもどうでもなかった。

・・

しかし　それは別々に使ったらの話しだった。

ジャックｓｉｄｅ　ｏｕｔ

アカーシャ　ｓｉｄｅ

「はぁはぁ・・・？ジャック・・・？」

今にも動き出しそうなアルカードを見つめている　ジャックを見て
不安感がよぎった・・・

これまで決して長く共にいた訳ではないが　ジャックという男の事
を理解していた。

決して　仲間を裏切らない・見捨てない・そして仲間の為なら・・・
　理屈っぽくて
マイペースなとこもあるけど

それは　本人が無意識に本心を照れ隠ししているのだということも
分かっていた。

（考えが読めるのにそのことは　一切　面向かって否定しなかった
しね・・・）

思い出しただけでも笑みがこぼれる・・・あの　赤面した顔を思い
出すと・・・

そのジャックの今の顔は・・・不安・悲しみ・・・　そして・・・
強い決意が現れていた。

アカーシャ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『みんな聞いてくれ・・・』

ジャックが口を開いたと同時に

「だめよ!!!　うっ・・・」

アカーシャが痛みを抑えながら　叫んだ。

「どうしたのじゃ?」「無理はするな!」

2人は興奮したアカーシャを宥めた

「はぁはぁ・・・何をするつもりか分からないけど　自分が犠牲になろうだなんて思わないで!」

『っ!!』

(叶わないな・・・この人には・・・だが)

『アカーシャ・・・いいから聞け。そして2人も聞いてくれ・・・』

3人は　ジャックの方を見た。

アカーシャはまだ納得したわけでは無かったが、傷の深さと有無を言わさぬジャックの迫力に

口を閉ざした。

『これから　最後の反撃に出る。　ただし出るのは俺1人だ!』

この言葉を聴いた瞬間

「「「ふざけるな!」」」いで!」

3人がハモるかの様に声をそろえた

（ここまで　言われるなんてな・・・ほんとにいい仲間に巡り合えた。俺は幸せ者だ・・・な。）

「さっき言ったじゃない！そんなこと絶対認めない！ゆるさない」

「わしも認めんぞ！ジャックよ！」

「このままでは、世界は確かに滅ぶかもしれん・・・だが　貴様を犠牲にした勝利などに価値などは無い」

みんな・・・

涙が出そうだ・・・　だけど

『みんな勘違いしてないか？誰も命を捨てるなど言ってないぞ？』

「「「は？？」」」

またハモったな・・・うけるよ・・・さすがにな

『これからやる術は　俺自身試したことが無い！そしてほぼ全ての魔力を消費する（多分）全て消費すれば　俺は身動きが全く取れなくなるだろう。そこで動けなくなった俺を助けるために　皆は俺から離れたとこで待機してもらいたいんだ。』

・・・まぎらわしいわ！！って怒られたけど流石に信じにくいよう

だ特にアカーシャは・・・

「本当に?信じていいの??」

・・・上目使いで見るな!照れる／／／

『ああ　俺が約束破ったことあるか?』

「数ヶ月間だからのぅ・・・約束みたいなのした覚えがな・・・」

(空気読め!!二次オタジジィ!!)

本気で突っ込みそうになったわ!!

「ふふふ・・・分かったわ。信じてる」

「私も異議なし・・・だ。　貴様に賭けてみよう」

「ふっ　倒れた後はワシらに任せておけ　丁寧に扱ってやるわい」

『頼むぞ!マジでさ　(苦笑)』

俺は　アルカードを見なおした。

(あ・・・いかんいかん成功率１００%なら言わんのだがな　一応言っとくか・・・)

『アカーシャ。』

首だけ振り返り言った。

『もし・・・倒しきれなかったら、その時は・・・』

「わたしの妖力で封じるのね・・・」

!!分かっていたのか

「あれでも同じバンパイアだから　わたしの力の方が同調して封じやすいだろうって考えは初めから分かってたわ　でも　それは弱らせないと不可能だから・・・」

そういうことか・・・　だが分かってないな　自分の力で封じる意味を・・・　今言ったとこで

意味は無い・・・　万が一の時は絶対やる人だ・・・　どんな危険があってもな・・・

『自分を犠牲にするな。か・・・　こんな考えはお前に似たんだぞ？アカーシャ・・・』

「え!!」

『俺が心を読めるのは知っているだろ？お前の弱点は優しさだ。優しすぎること。愛するものを守るためなら・・・信頼する仲間の為ならばどんな事でもする！お前は　この旅の間　そうよく考えていたんだぞ？自覚ないかも知れんがな・・・』

「ちょっと・・・それって・・・」

ひゅっ！！

アカーシャが答える前にアルカードに向かい飛んだ。

第7話　決戦・揺るがぬ決意（後書き）

頑張れ！オリ主！！

後1話挟んで　戦闘再開です～

第8話　決戦・拭えぬ不安（前書き）

残された3名の会話です。

第8話　決戦・拭えぬ不安

アカーシャ　ｓｉｄｅ

今のは　念話？　周りには聞こえてなかったみたい・・・

わたしの考え・・・思いに似たって・・・

「ジャック！！！」

アカーシャ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

３人ｓｉｄｅ

「いかん！アカーシャここから離れるな！」

バリリッ

「きゃあ！」

何？　見えない壁が・・・

「奴め　我々の周辺一帯に結界を張ったな？この結界・・・見たことも無い構成でできているな・・・」

簡単には破れない・・・瞬時に理解した。

「みたいじゃな・・・結界術を生業とするわしでも　直ぐには解けんぞ！・・・アカーシャよ。あやつを信じるんじゃ・・・最後の念話ワシも聞かせてもらった」

不敗が口を開いた

「え？」

予想してなかった為　驚き東方不敗を見つめた

「奴の使う術は得たいが知れんが、念話は相手の精神に潜り語りかけているようじゃ。それぐらいならワシにもできる。骨が折れたがな。　不安になるのも分かる・・・それだけ奴にとっても不安なんじゃろう。ならば奴を信じ抜いて　奴の不安を少しでも削ってやろうではないか・・・」

口ではそう言っても　仲間1人に任せてしまった無念感は拭えそうに無いのは　アカーシャにも

理解できた

「不敗さん・・・」

御子神も横で頷いている・・・彼も又同じ気持ちだった。

「そ　そうよね・・・わたし達が心配してたら、彼も力いっぱい戦えないわよね？」

嫌な予感なんて・・・無い！！

信じてる・・・

絶対あんな奴になんて負けないって!!

３人ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第9話　決戦・完全なる終焉

『よし・・・行くか！！』

目の前の強大な真祖を前に覚悟を決めた

「う　ご　ご　ご・・・」

俺に気づいたのか、アルカードも回復した頭部をひねり俺の方に向いてきた。

『アルカード・・・大した奴だよお前も、憎しみ・悪意だけを見ればだが・・・な。　ここまでなれるものなんだな・・・』

この世の全ての人間を滅ぼす執念のみでここまで進化したアルカードに対して　俺が純粋に

感じたのは敬意だった。

『だが、貴様は間違った方に　進化したといわざるを得ない！貴様の進化はたった一人で人間はおろか妖しの世界をも狂わせる・・・未来（あした）を作れない歪な進化だ！　だから　ここでお前という存在を終わらせてやる！！』

「ぐるおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

決戦がはじまった！

（アルカードが動けない今しかない！）

『ぬうううぅぅぅ・・・・・！！』

自身の魔力の全てを両手に集中させる！

『Ａｌｌ　ｓｐｉｒｉｔｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｄｅａｄｓ…』

（全ての精霊（エレメント）達よ・・・）

『Ｇａｔｈｅｒ　ｉｎ　ｍｙ　ｐｌａｃｅ…』

（我が下へ　集え…）

『Ｃｏｍｉｎｇ　ａｂｎｏｒｍａｌ　ｐｈｅｎｏｍｅｎｏｎ…ａｑｅｎｃｙ　ｏｆ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ！』

（来れ　森羅万象・神代の力！）

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

（か　からだがバラバラになりそうだ・・・無理があったか？　自然系（ギア）の全てを融合（スパーク）させて巨大な魔力として使うなんて・・・）

意識が飛びそうになる・・・その時

「決めろ！負けるな！」

『！！』

（今・・・確かに・・・）

「主ならばやれる。必ず！」

（気のせいじゃ・・・ない！）

「あなたを信じてる！！」

『・・・へっ　あいつらぁ！！』

先ほどの苦しみが消えたようだ

『ここまで言われちゃあ、やらなきゃ男が廃るってもんだ！！』

『うおおおおおおおお！』

自然系（ロギア）の力はうねりを上げながらジャックの両の腕に宿った。

『これが・・・世界（みんな）の力だ！』

再度意識を集中させる

『Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ・・・』

（世界は・・・）

『Ａｌｌ　ｌｉｖｅｓ　ｓｔａｒｔ　ｆｒｏｍ　ｎｏｔｈｉｎｇ.』

（全ての生命は無より生まれる）

『Ｔｈａｔ　ｉｓ，　ｔｈｅ　ｚｉｌｃｈ　ｉｓ　ａ　ｃｒｅａｔｉｏｎ　ｇｏｄ.』

（即ち無とは創造神である）

「！！　　ぐるおおおおおおおおおおお！！」

アルカードが暴れだした。

（はぁはぁ・・・何が起こるか悟ったか・・・だが無駄だ　。先ほどの天覇・次元斬には身体麻痺以外にも退魔の力を刷り込んでいる・・・細胞を粉々にして再生したとしても後遺症・・・直ぐには動けない！）

「ぐるがあああああああああああ！！」

動けない　自信に気が狂ったのか

アルカードはただただ暴れまわった

『Ｔｈｅｎ，…Ｄｏｅｓ　ｔｈｅ　ｏｐｐｏｓｉｔｅ？』

（ならばその反対は？）

『Ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ｉｓ　ｒｅｔｕｍｅｄ　ｔｏ　ｎｏｔｈｉｎｇ．』

（生誕の逆　全てを無にする）

『Ｉｔ　ｂｅｃｏｍｅｓ　ｃｈａｏｔｉｃ　ｐｏｗｅｒ．』

（混沌の力となる）

『Ｔｈｅ　ｔａｂｏｏ　ｉｓ　ｂｒｏｋｅｎ　ｎｏｗ.』
（今禁忌を破り）
『Ａｓｓｕｍｅ　ｔｈｅ　ｐｏｗｅｒ　ｏｆ　ｒｕｉｎ　ａｎｄ　ｔｏ　ｍｙ　ｏｒｉｇｉｎ…』
（破滅の力として我が下へ・・・）

異常な力が・・・　大気が　地面が　全てが震えだした

『これで　最後だ！！アルカード！』

『ＣＯＭＰＬＥＴＥ　ＥＮＤ！』
（完全なる終焉（おわり））

キュンキュンキュンキュンッ・・・・・・・・

ド　　ン　！

それは　まるで　ビックバン　この世の始まりにして終わりのようだった・・・

ジャックの生存は・・・

「ジャックーーーーーー！！」

アカーシャの悲痛な叫びが木霊した・・・

第9話　決戦・完全なる終焉（後書き）

詠唱は考えてたらなーんか　恥ずかしかったです・・・苦笑

いろいろ参考にさせてもらった　台詞も・・・

分かる人にはわかるかとｗ

どうなったのかな・・・

第１０話　激闘の果てに

大爆発が起こった後・・・

仲間たちを護るかのように覆っていた結界が露と消えた

それが意味するのは・・・

「ジャック！！」

アカーシャは結界が消えたのとほぼ同時に駆け出した

「わし等も行くぞ！」「ああ！」

不敗・御子神らも　あたりを警戒しつつ　アカーシャの後に続いた

アカーシャ　ｓｉｄｅ

「なんて・・・」

周りの状況は　言葉では表せない程

凄まじい光景だった。

半径はどれほどまで及ぼうか・・・

ジャックとアルカードを中心にあたり一面が吹き飛んでいた。

「・・・ジャック　待機してろって　言ったのは　まさか　この事だったんじゃないで・・・　しょうね・・・？こッ　ここにいれば、わたし達も巻き込まれるから・・・ジャック！！答えて！　約束したじゃない！みんなで帰るって！」

アカーシャの悲痛な叫びが辺りを木霊した。

アカーシャ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「アカーシャ・・・」　「くっ・・・・」

2人は言葉が出なかった・・・

かけがえの無い友を失った・・・

その思いが　自らを責める

なぜあの時無理にでも止めなかったのかと・・・

「！！」

アカーシャが何かに気づいた！

それは灰のような物に埋もれていた

「まさか・・・」

急いで　そこへ向かう。それに気づいた2人も後に続く。

倒れていたのは・・・

「ジャック!!」

感極まりながらアカーシャは彼の体を抱き起こした

しかし・・・

ジャックは何も言わない。

「ジャック・・・?」

「アカーシャ!ジャックは無事か?」

東方不敗も少し遅れて到着した

「それが・・・息はあるのに　体温が異常に低くて　鼓動も弱いの・・・」

ジャックを抱きかかえながら　顔を青くしたアカーシャがジャックの容態を伝えた

「見せてみろ!」

退魔師である御子神がジャックの体を調べたところ・・・

「心配ないとは　言えんな・・・　おそらく魔力を極限まで消費した代償だろう・・・巨大なエネルギーとは術者の生命力にリンクし

ていることがある。ジャックも行く前に言っていただろう？」

確かに・・・術を使えば身動きが取れなくなるといっていた。

「でも　大丈夫なのよね？」

「ああ、　時がたてば　霧散した　奴の魔力が回復じゃろう。　・・・アカーシャよ落ち着け。普段のお主ならば　このくらい気づくじゃろうに」

（アカーシャの性格上それは皆無か・・・）

ジャックの言うようにアカーシャの最大の弱点は優しさにある

瀕死の仲間の手前　冷静にはなれないことは分かっていたことだった。

「そ　そうね・・・ごめんなさい。取り乱して・・・」

「何を誤る？」

「そうじゃ　皆無事じゃった。その上　アルカード討伐にも成功した。誤る場面じゃないじゃろ？　早く安全な場所へジャックを連れて行ってやろう。約束したしな　丁重に扱うと。」

そう言って御子神・不敗は笑いかけた。

「そうよね　早く彼を療養させないと・・・」

アカーシャがジャックを抱えた時。

「・・・ア・・・カ・・・」

ジャックが呟いた。

第１０話　激闘の果てに（後書き）

ありがとうございます。。

第11話　晴天霹靂

「ジャック！！」

アカーシャは驚いた

仮死状態に近い彼がこんなに早く意識を取り戻したからだ。

「おお！意識を取り戻しおった。」

「やはり・・・貴様は大した男だな。」

2人も駆け寄りそれぞれ労いの言葉をかけた

「みん・・・な・・・まだ・・・だ・・・」

息も絶え絶え　ジャックは答えた。

その言葉を聞いたその時

ドゴオオオォ！！

背後の地面が抉れ　アルカードの本体が出てきた

「「「な！！」」」

3者3様に驚きを隠せなかった

あれほどの大爆発で跡形も無く消えたと誰もが確信していたのに

その希望が打ち砕かれるように

アルカードはその姿を現した。

「・・・やるしかないわね」

これ以上は　ジャックに負担をかけれない・・・

何より　今彼は瀕死の状態・・・

今度は　私が護る！

アカーシャは覚悟を決めた

「ああ・・・　無論だ。」

御子神も同じく

「これ以上無い活躍の場じゃ。ジャックに全て持っていかれてはかなわんしな。」

そして東方不敗も同じ思いだった

3人が臨戦態勢に入ったその時

アルカードの異変に気づいた

第１１話　晴天霹靂（後書き）

生きてましたね～

どっちも反則です・・・苦笑

第１２話　真相　そして決着

アカーシャ　ｓｉｄｅ

（おかしい・・・奴の妖力が感じられない・・・）

アルカードは・・・真祖の吸血鬼の力は普通のバンパイアの力を遥かに凌駕する

妖力はバンパイアにとって力の源だ

そしてその妖力も強大。

戦ってきた間でも健在だった妖力が全くといっていいほど感じられたのだ

「彼の攻撃を受けて?でも　全てを払ったのになぜ動けるというの?」

全く理解できなかった。

アカーシャ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

皆が異変を感じている時

ジャックが答えた。

『ふぅ・・・まだ　回復には・・・ほど遠いが・・・』

喋りながら上半身を起こした

「無理しちゃ駄目よ！あれだけの力を使ったんだから。」

アカーシャが心配そうにジャックの方に向く

「今の主はいわば　抜け殻の様なものじゃろ？ならば　安静にしておらんか。ここからは引き受けたからの」

東方不敗も答える。

「いや　あのアルカードの様子は　明らかにこれまでとは違う、ジャックの攻撃を受けて妖力が消えたと言うのか？」

御子神は　アルカードの異変をそのままジャックに尋ねた

『俺の術は　8割方成功したが、残り2割が問題だった・・・』

まだ満足とは言えないが

喋れる程度まで回復したジャックは続けて説明した。

『あの時・・・アルカードは　防御の意味もなさないと判断し咄嗟に俺に攻撃し　攻撃によって　俺の力を相殺・・・　防御に変えやがった・・・　そのおかげで　術の2割は失敗し、アルカードを完全には消し去ることが　出来なかった。』

（あの状況でそこまでするとはな・・・ほんとにこいつこそが、反

則気味な化物だよ・・・）

『だが、　俺の闇の力を前面に展開し妖力を封じる事には成功した。だが、デカイの食らわした後に無茶をしたもんだから　しばらくあいう姿になっちまったんだ』

自然系（ロギア）のひとつ

『闇の力』　闇とは全てを引きずり込む・・・　それは　妖力として例外じゃない・・・

（代償はあるがな・・・）

苦笑をし　その後みんなに言った

『みんな、今のアルカードは無防備といっていい！頼む。これでけりをつけてくれ！』

「「「ああ！」うん！」」」

3人は一様に理解し　アルカードに最後の妖力をもって　封印を行った。

「ぐ　う　お　お　お　・　・　・　・　・」

最後の断末魔だというのだろうか？

その叫び声は　低くいつまでも耳に残るかのような　不穏な叫びだった。

第１２話　真相　そして決着（後書き）

ありがとうございました！

第１３話　消え逝く者

不穏なアルカードの叫びも消え・・・

アルカードの封印は完了した。

アルカードの封印はやはり　アカーシャが行い　アカーシャの妖力で行った為　２人の真祖の血が同調した。

（この場面（シーン）を変えたかったんだがな・・・）

後悔はあったが・・・

大切なものを失わずにすむことに感謝をしていた。

『アカーシャ・・・これからは　最初に言った通り　アカーシャの覚醒がアルカードの覚醒に繋がる・・・だからお前は、自らの妖気を抑えなければならないん・・・』

「わかってるわ」

最後まで言うまもなく　アカーシャは納得した。

封印を施すと時に全てを俺が話していた為覚悟は決まっていたのだった。

アルカードの封印を見守るという・・・そして　モカを・・・　悲しき宿命を・・・

『そうか・・・』

俺は安堵した。

護りたい・助けたいという思いはあったが　この女性は護る必要が無いほどに・・・

とても強かった・・・

力だけでなく心も・・・

「わし等も何かあれば　直ぐに駆けつける。1人にだけ任せるわけにはいかん」

「同感だ。それは私とて同じ・・・」

御子神・東方不敗も互いに助け合うと堅く誓った。

「ええ、ありがとう・・・　みんな。　さあ　帰りましょう。」

アカーシャが　振り返ったその時

しゅうううううぅぅぅぅ

ジャックの体が　金色の霧に包まれながら

少しずつ・・・　消えていくのが見えた

「え！」

この出来事に思考が停止してしまった

第１３話　消え逝く者（後書き）

ありがとうございます！

第１４話　また　会える

アカーシャ　ｓｉｄｅ

なぜなぜなぜなぜ？？？？

生きて帰ると約束した人が　消えていくの　きえてくの　キエテ

イクノ・・・？？

我を失い　そうになる寸前

「消えないでぇぇ！」

声を振り絞り・・・叫んだ！

アカーシャ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

他の２人も言葉が見つからず　立ち尽くしていた

アカーシャは目に涙を溜め、流しながら何度も叫んでいた

そして　戦いの疲労からか　ジャックの所まで駆け出すことができ

ずその場に倒れた

そこに

ポンッ

ジャックがアカーシャの頭に手を置いた　優しく・・・　包みこむように・・・

『・・・　　しばらくお別れだアカーシャ・・・それにみんな。』

ジャックが口を開いた

「貴様！絶対に死なんと言ったではないか！我々との約束を違えるきか！」

御子神もその場で声を振り絞り叫んだ。

「うっうっうっ・・・」

アカーシャは倒れこむ前に　最後の気力を振り絞り叫んだためか、声がこれ以上出てこなかった。

「女を・・・女を泣かせたまま　去ると言うのか！お主は！」

東方不敗も又声を振り上げた

『これは闇の・・・禁忌のひとつを限界まで使用したことへの代償なんだ・・・　体が闇に喰われる・・・　魔力と自然の力で闇を抑制しながら本来なら使うのだが・・・　その余裕が無かったからな・・・』

（闇なのに金色の霧とは・・・な　これが　闇に消えるものへの闇からの餞別なのかもな・・・）

ジャックは声を細めながら答えた。その後声を振り上げ

『だが、信じてくれ。必ず帰ってくる！このまま　女を泣かせたままでは終わったりしない！』

そして　再びアカーシャの傍に行き

『何十年かかるか分からんが、必ず会いに行く！その時　までお別れだ、みんな・・・　そしてアカーシャ、会いに行ったとき　お前の子供を見るのを楽しみにしているからな・・・　一茶と仲良くな。』

そして　上半身まで消えかかったところで・・・

「わたし・・・達は　かならず・・・？」

『ああ　かならず・・・』

焦点の定まらない目でジャックを見つめ

ジャックもアカーシャを見つめた・・・

いつもと変わらぬ笑顔で

『「・・・また　会える！」』

今度は約束を破らない・・・

堅くそう誓った

『じゃあ　またな・・・　俺の・・・最高の仲間たち・・・』

金色の霧に包まれ　ジャック・ブロウは背後の暁の空へと消えた

第１４話　また　会える（後書き）

ううー
主役が消えるってどうなんだろ??
良いのかな?

もっとうまく表現したいですが
難しいです。。。
とりあえず　第一部　完!って感じですかね?
苦笑

第１５話　勘違いと嘘　（前書き）

消えちゃった　主人公・・・

どうなるのでしょうか！

続きをどーぞ！！

お気に入りに登録してくれた方々　感謝感激です！評価してくれた人も！

まだまだですが　暖かい目で見てくれたら　嬉しいです。。

第１５話　勘違いと嘘

――全く無茶したねー君も・・・（笑）――

いつまでも続くかのような深遠の闇の中

それは聞こえた

前触れもなくね・・・

『ん・・・　誰だ？　　朝か？』

声に向かって　話しかけた

――あんたさー　朝か？って　ンな分けないでしょ！まったく　いくらなんでも　あんな無茶したら死んでしまうってわかんなかったの？？――

姿は見えない・・・

だが　声の正体はすぐに分かった

『なつかしい声だ・・・　あのときの女神さんか？』

――ええそうよ！　って　こんな会話すんじゃ無くて・・・――

声は　徐々に大きくなってきた

「せっかく　もう一度の人生として　送り出してあげたのに　なんであっさり死んじゃうのさ!もうちょっと賢く出来たんじゃないの?まったく・・・」

多分?目の前まで来てるであろう　女神に尋ねてみた

『・・・やっぱし　俺はまた死んだのか?』

2度死ぬってどんなんだよ・・・

わざわざ　チート能力までつけてもらってさ・・・

「まったくだよ!よく分かってんじゃん!せっかく能力あげたのに　能力の代償はもともと知ってたんでしょ?なのに　あんな無茶をしてさ」

あ　そうだ　この人?頭ん中読むんだった・・・　忘れてたけどやっぱりいい気はしない・・・

そもそも　闇の副作用はテキトーに考えたのがいかんかったかな・・・

俺消えちゃうし・・・

苦笑しながら　まだ見えてこぬ声に向かって話を続けた

『ああ・・・でも俺は後悔はしてないよ・・・』

「え?なんで?　たった数ヶ月間しか生きれてないじゃんか!」

あれ?考えてること読めるんじゃなかったっけ?　ま　いいか

『大切なものを・・・　かけがえの無いものを　護ることが出来た・・・　貴方の言ったとおりだったよ。作者の思いの世界・・・素晴らしかった。フィクション漫画と言っても　実際に会ってきたのは　本物だ嘘の存在じゃない・・・　俺のもとのいた世界じゃ出来なかったものを作れたそして護れた・・・後悔はしてない。』

『そして・・・　悔いも・・・ない。』

言葉を絞るように　そう言った

「へー　最初に会ったときは　変わり者だと思ったけど　アンタ変わったね・・・　なんかカッコいいよ!人間の癖にさ!」

最後のは余計だよ・・・　ま　女神にここまで言わせれたってのも凄い事なのかもな・・・

「そ　凄い事さ!　でも　アンタ　1つ勘違いしてるよ　それに嘘もついてる!」

は?

嘘ついてる??

『後悔してないのは　断じて嘘じゃないぞ!　あのアルカードは俺と同じ　反則系だ。直感で、っていうか　戦ってみて分かった　あれの強さは俺のせいだ!本来なら3人で仕留め、封印処理できていた（原作より）はずなのに、4人でも圧倒されかけた。俺と言う存

在をあの世界に書き換えたから　歪みが生じたんだろう。その　化物から　かけがえの無い仲間を護れたんだ！後悔したとは言わせないぞ！！』

興奮しながら訴えた

アカーシャ・御子神・東方不敗・・・　彼らとの絆は俺にとってかけがえの無い宝だ！

絶対に後悔など無い

「頭イイね！多分あんたの言ったこと　正解だよ．書き換えにはさまざまな　バグがおこることがあるって　先輩がいってたし・・・（忘れてたけどね！笑）」

最後の！最後の聞こえた！！忘れるなよ　ンな大事なことを！！

「後アンタ嘘ついてるって言ったのは　そのことじゃなくて・・・悔いのことだよ！」

『え？』

驚いたように　返事をした

「アンタ悔いないって言ったよね？それが嘘！・・・泣かせたままでいいの？」

『っつ！！』

赤面してるのが自分でも分かる

「凄いよね～　相手は　男いる女なのに　あそこまで　大切に思っちゃってさ！不倫しちゃまずいんじゃないの？（笑）」

こら！人聞きの悪いこと言うな！！　親愛だ！親愛！

「んー　親愛か・・・ちょっとつまんないかもね～」

『つまんないってな・・・』

苦笑した・・・　もう読まれてもいいや！

「あはは！やっぱ　アンタといて　退屈しないや！後もうひとつ勘違いしてるってのは・・・」

次の瞬間　辺りに光が満ちてきた

「アンタはまだ死んじゃいない！　世界は始まったばかりだよ。
まだ　終わりじゃないよ・・・　貴方の物語は続いてる・・・
最後まで　がんばんなさいよ・・・」

・・・光が満ちてくると同時に　声が小さくなり　聞こえなくなった・・・

第１５話　勘違いと嘘　（後書き）

最後まで頑張ります！　笑

第16話　亜愛とモカ（前書き）

ここで原作に介入します！
長かったなー……苦笑
といってもほとんどが原作です・・・

後決戦からメチャクチャ飛んでますが　気にしないでください。（笑）

第16話　亜愛とモカ

ひゅ～～～どさっっ

『いててて・・・・　ん?ここは・・・』

って　こんなの前にもあったような・・・　いつだっけ?忘れた。

『女神さまの加護・・・ということなのか?なら、ありがたく受け取っておこうか・・・　ありがとう』

天に向かい礼を述べた

ジャック　ｓｉｄｅ

しばらく歩き・・・

『ここは　どこだ?』

見覚えがあるような無いような・・・

『あ　見覚えがあるわけだ　ここ朱染城の傍の渓谷じゃん　不敗と一戦やったとこだ　懐かしいな・・・っと　場所も分かったし　今は何年だ?』

意識を集中させ、自然系の精霊に語りかけた。

ひゅうううぅ・・・　風の精よ・・・

『ん・・・　２００２年・・・あれから　１９０と６年後・・・か
それにしても、ずいぶん飛んだな・・・』

俺のこと　覚えてるかな？　アカーシャ、みんな・・・　忘れてても仕方ないよな？２００年だし・・・

『特にアカーシャか・・・とりあえず　会いに行ってみるか　後陽海学園と香港のほうもな。』

俺は、まず朱染城に向かい歩き出した。

ジャック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？？？　ｓｉｄｅ

ざわざわ・・・

「おい！こいつただのガキじゃねーか」「どうすんだよ？こんなん捕らえて」

男たちが会話をしていた

（中国語・・・？何だこいつらは・・・？　く・・・　さっき口を覆われたとき・・・　何か薬を吸わされたか？　体の自由が利かない・・・）

亜愛を探していた時、見知らぬ男達に捕らえられていたのは　９歳になったばかりのモカだった。

「さて　お穣ちゃん　1つ教えて欲しいね　今日あの家に黒ずくめの女が来なかったか？　日本名は亜愛　私達　その女殺しに来たね」

モカの髪を乱暴に引っ張り上げながら　問いかけた

（な・・・　こいつらの目的は朱染家じゃなく亜愛なのか？）

混乱しながらも男たちに問いかける。

「な・・・なぜだ？お前らはいったい・・・」

「おい・・・おしゃべりの　必要はねぇよ　あいつにかかわった奴は皆殺しにすりゃあいい　まずはこのガキをバラバラにして　館に投げ込んでやろうぜ」

男の一人が　サーベルを舌なめずりしながら　モカに近づいていった　周りの男も一気に沸いた。

「やれやれまったく・・・　みんな相変わらず野蛮なこと考えるね　カワイイのにもったいない・・・　・・・でも確かにそれ位しなきゃ　私達の怒り　収まんないね」

鬼のような形相をしながら　リーダー格の男が呟いた・・・

「ははは　そうこなくちゃ」

1人がモカの足を持ち上げた

「なっ!?何をッ・・・」

「まずは　このかわいいあんよから　ブッた切りましょーか・・・
せーの!」

容赦なく男はサーベルを振り下ろした

「うあああぁ」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ジャック　　ｓｉｄｅ

『なんだ?今の・・・殺気?それに血の臭い・・・だなこれ。　複数いるな　朱染城から　まだ結構離れてるのに・・・　様子を見に行くか・・・』

バンパイアは好戦的な種族でよく殺し合いにまでなるほどの戦いを身内でしてるときもあるが・・・

少しばかり大袈裟気がした為、俺は殺気がする方へ　向かった。

そこで見たのは・・・

ジャック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ブッ殺・・・」

ドド　スパァ!!

ビシャアァア

手刀で男達を切り刻む。

鮮血が舞った・・・

「・・・私に恨みがあるならば　最初から私を狙ってこい　それも出来ない小物のくせに　私の大切な妹にふれるなよ」

男に冷徹な目で睨み　血の着いた手を払った

・・・悪・・魔め・・・

それが男の最後の言葉だった

モカ　ｓｉｄｅ

「・・・すごい・・・」

モカは　自身についた返り血に触れながら思った

（恐ろしいのに見とれてしまった・・・　その強さに圧倒的残虐さに）

モカ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

敵が　全滅したのを確認した亜愛は

ぎゅっ・・・

モカに抱き呟いた

「無事でよかった・・・　さあぁ　おうちへ帰ろう」

モカは赤面しながら

「あ　ああ・・・　助けてくれてありがとう　亜愛姉さん」

命を救ってくれた　姉にお礼をした

「っつ！」

さっきまで　モカに微笑んでいた　亜愛が急に表情を変え　後ろを向いた

「ど　どうしたんだ？　亜愛姉さ・・・」

最後まで言う前に　亜愛はモカの口を手でふさいだ。

第16話　亜愛とモカ（後書き）

このシーンで主人公がモカを助けたらかっこいいんだけど亜愛との絆の方が微笑ましいのでそちらを優先させました！

ありがとうございます！

第17話　少女達との出会い

「・・・誰?そこにいるのは!」

さっきまで　全く気配を感じなかったのにいつの間にか　かなり近くに誰かがきていたのを感じた。

(この私が　これほどの接近を赦した?　・・・只者じゃない)

亜愛は　戦闘態勢に戻った。

「・・・パチパチパチ」

現れたのは　ジャックだった。

『これは驚いたな・・・　崩月次元刀・・・　誰に教わったんだい?可愛らしいお嬢さん』

ゆっくりとした　足取りで　亜愛に近づいていった。

「誰?貴方?貴方も私に恨みを持つ連中の一人かしら」

質問には　答えず警戒を強めた。

(次元刀のことを知っている・・・　この術を知ってるなんて・・・ますます　只者じゃない　何者?この男　隙が全く無い・・・)

背中に　冷たい汗を感じながら　相手の出方を伺っていた。

（モカがいる・・・　必ず護らなきゃ　私の大切な妹を）

一瞬モカを見つめ決意を強めた。

『警戒しなくても大丈夫だよ。俺は敵じゃないし、君のことも知らない（知ってるけどね！）アカーシャに会いに来ただけなんだ。館かい？』

モカ　ｓｉｄｅ

（なんだろ・・・この人　何か　温かい感じがする・・・）

［亜愛姉さん　この人は大丈夫だよ　きっと］

後ろにいた　モカが呟いた。

モカ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ううん・・・　ホントにそうかな？　でも　モカがいうなら」

警戒深い妹（モカ）が気を赦すなら・・・

モカの方をむいて話していたその時

ひゅっ

ジャックは一瞬で間合いを詰め　モカの前に移動した

「っつ！」

一瞬の出来事に驚いて　モカそのまま動けなかった。

「モカ！！」

亜愛は油断した　自分に腹を立て　男に攻撃をした

「次元刀！」

ぶぅぅん

次元刀で切り裂くはずだった・・・

しかし

ガキィィィン！！

男の手刀で止められた

「なっ！全てを切り裂く次元刀を・・・」

驚きを隠せずほんの数秒思考が停止してしまった

『あ！いや　ごめんごめん！この子・・・モカちゃんだっけ？　この子を見てちょっと驚いてね』

「わ　わたし？」

似てるな！

内心喜びながら　モカを見ていた

『そうそう　ひょっとして君　アカーシャの子かい？』

もう分かっていることだが　話の都合上！尋ねた。

「あ　ああ　そうだ　」

（隠しても意味はないから問題ないな）

それを聞いたその時

抱きついてしまった

「なっ！」

いきなり抱きつかれたことに驚いてしまい。

「こらーーー！！モカに何するのよ！」

亜愛はいきなりモカに抱きついてきた男を罵倒した

『ははははは　ごめんごめん！なんか　うれしくてね・・・モカちゃ

んか　いい名だ。・・・　約束を・・・　果たせた』

亜愛は怒っていたが　男の言葉で　少し怒りを納めた・・・　心なしか　男の目には涙が溜まってるように見えた。

「約束？」

疑問を投げかけた

『ああ　アカーシャさんとは　だいぶ前に約束してたことがあってね　必ず　また会いにくるって　君の子供に会うのを楽しみにしてるってな・・・』

「ううん　く　くるしい・・・」

抱きしめられて身動きが取れないモカは　結構な力で抱きしめてくる・・・しかも男性に

（男に抱きしめられたのって　初めてだが・・・　この人さっき感じた通り　やっぱり　温かい感じがする・・　わ　私何を言って・・・）

ぷるぷる顔を振り　惚けた顔を戻した

やばっ　強すぎたか！

『ごめんごめん　うれしくてついつい強く抱きしめちゃったね・・・
悪いんだけど　アカーシャさんに会わせてくれないかい　もうひとつの方の約束も果たさないといけないから』

抱きしめていたモカを開放し　彼女達に頼んだ

「いいぞ。　いいよな？　亜愛姉さん」

「ええ　彼が　敵じゃないってことは　はっきりしたしね　アカーシャさんに驚かせてあげようよ！モカ」

まだ、完全に気を赦したわけじゃないが

ひとまず警戒を解いた。

温かい感じをモカのように感じた為でもあった。

「ははは　亜愛姉さんはもう・・・」

そして　３人は　館へと向かい歩き出した。

第17話　少女達との出会い（後書き）

モカがいきなり気を赦すとは思えませんが…
話の都合上って事で勘弁してください…苦笑

モカたちの事知ってたのに　実際に会うとやっぱし嬉しいんでしょうね～オリ主はって考えてみました！

ありがとうございます！

第１８話　親愛なる女性

館へ行く道中・・・

「・・・ちょっといい？」

館へ先導するモカには　聞こえない大きさの声でジャックに話しかけた

『ん？なんだい？』

温和なキャラを演じるのもしんどいけど　この子達かわいいし苦じゃないな。

「わたしの次元刀・・・どうやって止めたの？」

『ああ　それ　彼の・・・東方不敗のと同じ力じゃないけど・・・うーん　やっぱり企業秘密ってことで！』

そう言って　亜愛の口元に人差し指を当てた。

「なっ！・・・もう／／／」

『ははは！悪い悪い』

ちょっと　ネタバレすると　あれは俺の魔力で無理やり次元を歪まして防いだ。

次元刀とは、結界術の応用　自分の存在する次元をずらして物体を透過し破壊する・・・

ならば　相手と同じ次元にずらし　受け止めればいい。

そうすれば、ただの手刀同士になる。

説明するのめんどくさいし　ッて理由じゃないよ!!話さない方が警戒して、もう攻撃してこないかもしれないから。

それに、東方不敗と違って乱用は出来ないし・・・　すごく神経使うからな・・・

「そういえば・・・」

前を歩いていた　モカが後ろを振り向いた

「自己紹介がまだだったな?わたしの事は　知ってると思うが　モカだ　もうすぐ9歳になる」

モカは挨拶し　ジャックに向いた

「わたしは亜愛よろしくね」

亜愛もモカに続き挨拶を交わした。

『ああ　そうだったね、俺の名はジャックっていうんだ　君のお母さんとは　古い付き合いでね』

「ジャック・・・？」

まさか・・・　この男　東方不敗の記述にあった　三大冥王と共に戦った伝説の精霊使い　ジャック・ブロウ？　でも彼は　あの戦いで命を・・・

（あ　この子なら　俺のこと知ってるかもしれないかな・・・　ん～　どうすっかな　追求されたら・・・まあいっか遅かれ早かれば れる事だし）

「貴方、もしかし「ああ　よろしく。　もう屋敷は見えてきたぞ」・・・」

モカちゃん、なんというタイミングの良さ！

よしもう面倒だから　このままで、

『おっ　ほんとだ　・・・懐かしいな　２００年ぶり・・・　か』

（２００年・・・　やはり　私の考えで間違いないな三大冥王・・・いや　四人だから誤りね・・・　四大冥王のひとり　精霊使い　ジャック・ブロウ・・・　どうする　厄介ね・・・　力の正体は詳しく載ってなかったから・・・）

なに考えてるか　分かってんだけどね

（原作どおりであれば・・・　この子を止めれば　アカーシャはアルカード食われることは無いが・・・　この子をどうにかすれば

アカーシャが黙ってない・・・か　俺がここにいる事で　この世界の運命が変化してるのならば　どうなるかはわからないのも事実・・・　傍観しているのが一番だな・・・少なくとも今は）

「ん？　どうしたんだ・・・？」

考え込んでいたジャックにモカが話しかけた。

『・・・いや　なんだかほんとに懐かしくてね・・・感慨にふけっていたんだよ。』

うん　うまくごまかしたな！

「ん～　じゃあさモカ　アカーシャさんを呼んでこようよ！　きっと喜ぶよ　古い友人が訪ねて来たの知ったらさ♪」

「そうだな　じゃあ　ジャックさんは　一階の客間にいてくれ　母さんをよんでくる」

『ああ　2人ともどうもありがとう』

いよいよ　再開か・・・　やばい　緊張する。　どんな顔すればいいのか・・・な？

約2世紀ぶりの再開。

あの時は　盛大に泣かした上　何十年って言ってしまったから・・・

まさか　2世紀も飛ぶなんて思ってもいなかった。

モカ・亜愛　ｓｉｄｅ

「ねーモカ！」

「何？姉さん」

二人は歩きながら話をした。

「あのジャックって人　昔のアカーシャさんの恋人だったのかな？」

「え？母さんの・・・？」

モカは顔を紅潮させて考え出した。

（あの人・・・確かにそんな感じがするけど・・・　でも何か違うような・・・よくわからないけど）

子供とは言っても女の子、色恋沙汰には興味津々のようだ。

亜愛とて例外じゃなかった。↑失礼だろ作者！『ごめんなさい・・・』

「あははは　そんなに考えなくてもいいんじゃない？私から言っといてなんだけど！あの人温かい感じがするから　浮気！！って感じじゃ無さそうでしょ？」

笑いながら　モカに話した。

「もー　やめてよ　姉さん！母さんが浮気なんて！」

子供でも浮気についての知識は一通り理解しているようだった。

・・・浮気ダメ！

モカの中では　浮気＝許せない！！という考えだった。

（でも　あの人は違う・・・姉さんが言うように。よくわからないけどそんな感じがするな・・・）

二人は談笑しながら　アカーシャを迎えに行った。

第１８話　親愛なる女性（後書き）

ここまで　信頼されたら、アカーシャさんとは結ばれませんね！笑

演技上手みたい・・・

ありがとうございました。

第19話　再開　果された約束

3人　side

「誰なの？モカ～　亜愛～？？」

「いいからいいから！」

「そうそう　あってのお楽しみ！」

モカと亜愛に連れられて　アカーシャは戸惑いながらも一階の客間の傍まで来た。

「あ　モカー　ちょっと　用事があったよね？」

「え？　用z・・・もがっ「いいからいいから！（2人にさせてあげようよ♪）」（息！息が！）」

半ば強制的に　亜愛はモカを連れて　かなりのスピードで離れた。

3人side　out

モカ・亜愛　side

「モカ！ここはやっぱし　2人きりにさせてあげようよ！その方が絶対良いって」

（それに、隠れてみててもあの人にはバレちゃうと思うし）

半ば強制的に連れ出したモカに話しかけると・・・

「きゅう～・・・」

モカは息が出来なかった為　酸欠で目を回しながら、気絶していた。

「きゃーゴメンモカ!!しっかり!!!」

モカが目を覚ましたのは　それからしばらく立ってからだった。

モカ・亜愛　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

アカーシャ　ｓｉｄｅ

「ふぅ　いったい何かしら?」

亜愛の行動がおかしいのでちょっと不安になったが、

「まあ　会えば分かるか・・・」

軽い気持ちで　客室の扉を開けると・・・

アカーシャ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『　・・・アカーシャ　久しぶり・・・だな。』

えっ・・・

アカーシャは目の前の光景が信じられなかった。

あの大戦からもう約２００年は経過している　もう死んでいるんだと・・・会えないんだと　あきらめかけていたのに・・・

『おいおい・・・酷いな。　死んだなんてさ！　ちゃんと約束したろ？必ず　また　会えるって・・・先に君の子どもたちにあったから順番逆になったけどな。』

・・・この考えをあっさり読んで聞かせる感じ・・・　この　温かい感じ・・・

「ほ　本物・・・・？？」

真っ白になりかけた頭で語りかけた。

『ああ　本物だ・・・　随分と待たせてしまったな。　アカーシャ・・・ただいま』

「ジャック！！！」

アカーシャは飛び出し、抱きしめた。

その存在が嘘じゃないと確かめるように。

「遅い・・・遅いよ・・・　何年・・・　何年たったと思ってるのよ！」

『１９６年かな？』

「ばかぁ！！」

しばらく　アカーシャは泣き続けた・・・

そしてジャックも目に涙を溜めた・・・

その二人の顔には　幸福で満ちていた・・・

あっという間に数時間たって・・・

これまであった出来事、家族が増えたこと、様々なことを

ジャックに伝えた。

そして　モカのことも。

ジャックは微笑みながら話を聞いていた。

『一茶と仲良くやってるのに　不味くないかな?これ』

ニヤニヤ　と微笑みながら耳打ちした

「仕方ないじゃない！そんなの！　早く会いに来てくれなかったジャックが悪いー！！」

顔を真っ赤させながら怒ったように答えた。

「でも・・・本当に大丈夫なの？体の方は・・・」

ここ数時間・・・何度聞かれたか分からないくらいその会話が続いていた。

その度　『大丈夫だって』っと答えていた。

（こんなに心配性だったっけ？俺のせいか・・・　やっぱり）

軽く失笑していた。

「そういえば　不敗さんや御子神さん達には会ったの？」

アカーシャが聞いた。

『いや　彼らにはまだあってないよ。何よりもまず　君に会いたかったからね。』

この一言で　アカーシャは再び顔を紅潮させた。

「もう！からかわないでよ！！」

『ははは、嘘じゃないのにな。でも君を一目見れて良かったよ　これからは　君にも会えたことだし　ちょっと人間界へ行こうと思ってる』

今後についてをアカーシャに伝えた。

「人間界へ？どうして？」

アカーシャが聞き返した。

『いつかは・・・　人と妖しは共存できるっていうのを信じてるんだ俺もな・・・だから　彼らの陰と陽を長い時間をかけてみたいと思ってな』

ってことにして　御子神たちに会いに行こう　陽海学園編に突入って事で。

「貴方らしいわね・・・　良いとこだけじゃなく悪いところも余すことなく見たいなんてね・・・」

側面しか見ていない人間と妖しが多いが故に人間と妖しは幾年月もいがみ合っているのだ。

「素晴らしいことだと思う・・・　私も見たいけど・・・」

顔が少し曇る。

『君には　かけがえの無い護るべき家族がいるじゃないか・・・今はその時じゃないさ』

微笑みかけながら　話す。

「そうね。今は無理でもいつかは・・・・ね」

『・・・地下のアレに関する　問題もあるが・・・　いつかは　君もモカちゃんたちとでも見て見たらいいさ』

「やっぱり　分かってたのね　家の地下のこと」

（うん、まあ　もちろんね）

ジャックは頷いた

『じゃあ　そろそろ俺は行くよ。一茶に会えなかったのは残念だが、よろしく伝えておいてくれ』

「ええ、わかった・・・」

少しくらい顔をした　アカーシャが頷いた

『アカーシャ・・・　俺は生きている。前と違ういつでもって分けにはいかないが、また会えるさ』

アカーシャに笑いかけた。

「ふふふ　やっぱり貴方は変わらないわね　・・・いってらっしい気をつけてね。　また・・・　また　会いましょう。　その時はモカ達と遊んであげてね！」

『ああ　そうだな　　楽しみにしてるよ。』

そう言い残し　ジャックは姿を消した。

しかし　この時点で知る由も無かった・・・

この約束は守られる事は無いということを・・・

第１９話　再開　果された約束（後書き）

もうちょい　滞在しろよ！って自分で思ったりしてます！笑

なーんか後の暗い未来を暗示してるかのような　終わり方です…

まだ　考えてませんが　苦笑

ありがとうございました！

第２０話　人間界へ（前書き）

人間界へやって来ました。

いろいろ考えてはいますが、なかなか難しいものです…　苦笑

なにやらアクセスが増えてました…こんな駄文に付き合っていただきありがとうございます。

第２０話　人間界へ

ジャックは人間界のとある場所にきていた。

『やっぱり　元人間の俺でもちょっと違和感があるんだな…　人間界って。』

アルカードとの戦いで数ヶ月・闇の狭間で2世紀、過ごしたジャックはもはや前世の記憶は

保持していても、身体機能から構造まで人在らざる者に成った事を実感していた。

『でも・・・　なんだろう。違和感があってもやっぱり懐かしい感じはするな…　こんなに良いとこだったっけ?人間の世界って?』

自問自答に苦笑しながら　ジャックは人間界に来たことを実感しながら、歩き始めた。

街中を歩いていると…

『ん?　なんだ?　この感じ…　妖気…だな。人間界にあるまじき力だ。』

街中の路地裏で不穏な力を感じていた。

『やれやれ　こういうことは勘弁してもらいたいものだ…　トラブルがあるのなら止めに行かんとな。』

やれやれと　だるそうにしていたが、ジャックは路地裏に入っていった。

ジャック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「な　何ですか？　貴方！さっきから私を付けたりして！！」

それは　若い人間の女性の声だった。

「ギヒヒヒ　これはこれは申し分けない…　可愛らしい人間にはちゃんと名乗らないとな…」

舌なめずりしながら　ジリジリと女性に近づいていった。

「俺の名前は　絶貴（ゼツキ）以後よろしく！」

そう　怪しげな顔をしながら話した。

「な　名前は　分かったは！そ　それで…　私に何の用があるっていうの？？」

普通じゃない　気配に恐れながらも　気の強い女性は勇気を出し男に問い詰めた。

「いやぁ　貴女のような気の強い尚且つ可愛らしいお嬢さんにストーカー（とりつく）するのが　好きなだけだよ？？それにアンタ

気が強いのはふりで本当は　怖がりなんだろぅ？　周囲にばれない様に虚勢を張ってるだけなんだろ？バレバレだぜ。目ぇみりゃだいたい分かる。」

男が　全部見透かしたかのような眼で見つめた。

「ッつ！！」

女性は一気に体が固まった。

この男が言っていることは　全て正しかった。

幼少時代、女性は友達と山の中で遊んでいた。その時　とても人間と思えない化物に襲われたことが

あったのだ。

幸い　襲われた場所のそばには　神社があり　その化物は霊的に清められた場所に恐れを無し

逃げ出したのだった。　友達共々無事に生きて帰れたが…　そのことが　トラウマとなり極度の怖がり

となってしまったのだ。　気の強いふりは　周囲にそのことがばれない様にした偽りの姿だった。

このことから　彼女はプライドが高い人間なのかもしれない。

「ヒヒヒ…　やぁーっぱり図星だな～　さっきも言ったが　そうい

う人間にとりつくのが大好きでねぇ～　ゆっくり　魂を食べさせてもらおうか…」

男は　完全に怯えた女性を見るとその姿に満足し　詰め寄っていった。

「や　やめて…　お　大声を出すわよ?」

女性は　勇気を振り絞り男に訴えた。

その姿にますます　男は興奮し、

「やれるものならやってごらんよ　アンタはもう逃げらん無いし…何よりここは人気の無い路地裏…　誰も気づかないさ」

女性の誤算は　唯のストーカーならば撃退するつもりだったことだったことだった。　だから　路地裏に

来たこともさほど問題にしてなかったのだった。

しかし　相手がまずかった。

「ひっ…」

女性は　叫びたいのに言葉にならなくなった喉を必死に押さえ叫ぼうとするが…

全くといっていいほど声が出てこなかった。

「さぁ～　十分怖がらしたし　恐怖に震えてキンキンになった魂っ

てのも格別なんだよな…これが。じゃ　いただきます～」

（きゃあああああ）

言葉は出ない…　だが　必死に叫ぼうとしていたが…　それでも何も出なかった。

その時

ガシッ

女性の目に飛び込んできたのは　飛びついてきた　男の体が空中で止まっている姿だった。

第２０話　人間界へ（後書き）

元ネタが妖怪漫画なので　やっぱり問題が起きないとって思いながら　考えてみました。

駄文失礼します…

ありがとうございます！

第２１話　トラブル発生　天邪鬼　（前書き）

大物以外と初めてやり合う話です！
やり合うとまで　いかないかな？　苦笑

第２１話　トラブル発生　天邪鬼

妖し？　ｓｉｄｅ

「な　なんだ？？　体が動かねぇ！！だ　誰だ！」

首根っこを万力のような力で握られ身動きが取れなくなった男は

姿の見えない相手に向かい叫んだ。

妖し？　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ジャック　ｓｉｄｅ

『…妖気を感じた時から　嫌な予感がしてたんだよな……』

『まあ　人間が妖しをいじめてる（滅多に無いけど　（笑））　だったら　もっと厄介だったからまだいいか』

確か　人間界において　人間に危害を加えるのは御法度だったよな？

どんな理由があっても…あの学園では……

そんなことを考えながら気配を消しながら　ジャックは２人のほうに近づいていったのだった。

ジャック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『おいおい　こんな可愛らしいお嬢さんに手を出すなんてそれでも男かよ？　ああ　男なら仕方ないか…　この子カワイイしｗ　でも同じ手を出すにしてもナンパとかにしときな。』

ポイッ

首を掴みあげながら無造作に放り投げた。

ガシャ！ガッシャアアアン！！

「ぐあああああっ」

男は路地裏に置いてあった大量の材木に頭から突っ込んでいった。

『ふぅ、マナーも知らん奴が多いみたいだな？やっぱし…』

やれやれと言わんばかりにため息を出しつぶやいた後女性のほうを見た。

一瞬女性は　ビクッ　っと体を震わせた。

『大丈夫大丈夫。何もしないから　お嬢さん怪我は無かったかい？』

そういって　笑いかけた。

（さっきの会話を聞くとこの子はかなり妖しに対してトラウマがあるだろうから　近づかないほうが良いな…）

自分が近づけば　更にショックを起こし　やばい状態になるかも知れないと判断し、

近づかず落ち着かせようとしたのだった。

「え？　ええ、あ　ありがとう…」

まだ　ショックから回復した訳ではないが　話せるようになった為

一先ず　助けてくれた人にお礼を言った。

『……はぁ　やれやれ　又ため息が出ちゃったよ。お嬢さん？動けるなら早めにここから離れたほうが良いアイツが起きて来そうだ。』

そう言って　先ほど男を投げ飛ばしたほうに向きなおした。

？？？　ｓｉｄｅ

今日は　人生で2度目の最悪の日だ……

襲われた女性は襲われる瞬間までそう思っていた。

だが、訳が分からぬうちに　襲ってきた男はもう1人の男に吹き飛ばされてのびていた。

そして　目の前の男は　私を確認すると、笑顔で大丈夫？って言ってくれてるし

何かいろんなことが同時に起きて更に混乱するけど

助けてくれたこの人？（人か分からないけど）は悪い人じゃない気がする…と言うか助けてくれたし。

お礼は言わないとね。

お礼を言った後…　男の人が　向こうを向いて頭をかいてさっきの人が起きてくるって言った。

多分…動けるようになったと思う。　この人が心配してくれてるし。

それにここにいたら　絶対邪魔になる。

急いで離れないと！

？？？ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「え　ええ　大丈夫です。動けます…」

ジャックに向かって言った。

『そうか　良かった。ならここから直ぐ離れたほうがいい。ああいう男は間違いなくぶっ飛ばされから、ムキになって突っかかってくるの見えてるから　ここにいたら　巻き込まれちゃうよ？』

そう言って　この場からの退避（エスケープ）を促した。

「は　はい！　分かりました！　あの……気をつけて」

そう言って　この裏路地から逃げ出した。

その後…

「てっめー!!何しやがる!!人の楽しみ＋食事を邪魔しやがって!!死ぬ覚悟はあるんだろうなコラァ!!」

復活した男が怒りを露にしながら　向かってきた。

『おい……』

冷たく鋭い眼で軽くその男を睨みつけた。

「ぐっ!!」

その威圧感に押されたのか、一瞬男はたじろいだ。

「大体お前も　妖しだろうが!人間は俺等の敵だろ?何でその人間の味方をすんだよ!この裏切りモンが!!」

いやいや、まず仲間になってないし、今日初めてあっただろうがよ…

男の言い分に頭を掻き、若干失笑しながらジャックは答えた。

『人と妖しは共存できるんだ。それぞれがルールを守ってな。その共存の中で　絆が生まれたら素晴らしい事だろ?お前が言うように完全に敵って言い切ったら　どっちかが滅ぶまで争うってのか?そんなのは　さらさら　ご免だな。それに俺は人間を敵なんか思っちゃいねえ。』

（元人間だしな……）

男に向かって怒鳴った。

「ッは！共存？クソ食らえだよ！　人間は俺のオモチャで食料だ！何いってんだよ馬鹿が！そのオモチャを奪おうってんなら……」

言い終えると……

メキメキメキッ

男が人間の姿から本性を表した！

「てめえから殺ってやんよー！！」

それは　2，3mは有る赤色の鬼だった。

『はぁ……いきなりこんなとこで正体なんざ見せんなよな。騒ぎになったらどうするんだよ…』

（路地裏ってのが　この際良かったな…）

『で　正体は何だと思ったら天邪鬼かよ……』

姿かたちから俺は男の正体を言った。

「ぎゃははは、そうだ！覚悟しろよ？この俺は本性を見せたときの腕力は　数倍に跳ね上がる！さっきのようにはいかねえぞ！　覚悟しやがれ！ぶっ殺してやらぁ！！」

そういうと天邪鬼は拳を振り上げ一気に打ち下ろした。

が…

ガシィッッ

男の拳が全く動かなくなった。

それどころか腕も動かず！

「な　何……??　ま　まったく　動かねぇ！な　何しやがったお前！」

『何って受け止めて掴んでるだけだけど?』

拳を掴んだまま　『それがどうした?』っと言わんばかりに答えた。

「ば　馬鹿言えッ　！こッ　この辺の妖しで俺の本気をんな片手で受け止める奴なんざいるわけが……」

『いるじゃん、ここにさぁ』

なるほどこの辺の妖しのガキ大将ってとこだったんだな?コイツ…　この辺りにはこんな感じの

奴がいっぱい要るって訳か…　考えただけで頭痛てぇ。

『こういう手合いは口で忠告しても無駄だよな?　体で分からせんと』

そう言って　ジャックは天邪鬼の腕を思いっきり捻り持ち上げた。

「いだだだだ！」

腕がねじ切られるかのような力で　持ち上げられた天邪鬼は　ただただ痛みに叫んだ。

「わ　わかった！　俺が悪かったー　やめてーー」

『ん……？さっきの大言は如何したんだよ。まったく…　だが』

ググググッ

腕に力を入れ。

『お前の行動を見て、ただで赦す気はサラサラ無い』

ポイッ！

また無造作に投げる。

今度は廃ビルであろう建物に。

ドッガラッ　ガッシャアアアアン！！

「ぎゃあああああああああああ」

男は今度は鉄筋コンクリートに頭から突っ込み完全にノックダウンした。

『喧嘩売ってくるんならまず相手の力量を正確に測れるようにするんだな。』

動かなくなった。男に忠告を施した。

第２１話　トラブル発生　天邪鬼　（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典…　作者都合上ｗ

天邪鬼。
かなり有名な日本の妖怪です。
人間の心を見抜く力があり、人を唆して悪いことをさせる。いつも相手と相手と反対のことを言うひねくれた妖怪。とりつかれると本心が言えなくなってしまうという。

…らしいですが、今回は，人間にとりついて　怖がらせたりするのが大好きで
怖がった人間の魂が大好物！（ありがちな妖怪ですｗ　原作では鏡のリリスから少しとりました。）
かぶってるのは　心を見抜く力だけです…　苦笑

失礼しました！

第２２話　人間との共存

『やれやれ……』

パンパンッ

手を払いこの場を去ろうとした時

「あの！すみません！！」

後ろから女性の声がしたので振り返った。

『ああ　君はさっきの。』

それは　先ほど天邪鬼に襲われていた女性だった。

「は　はい！ちゃんとお礼が言いたくて待ってました。ありがとうございます。」

『いいよ。そんなにかしこまらなくても、俺はやりたいようにやっただけだしね』

（ん？待ってた？？ッてことは…）

『君…さっきの見てた？俺がぶっ飛ばしてたとこ』

「はい！それはもうはっきりと！」

言い切っちゃったよ…　ってかキャラ変わってないかな?この人

『ええっと…　俺もそのさっきの奴と同じかもしれないよ?大丈夫?さっきの会話聞く限りじゃ君かなり怖がりで　なんか　トラウマ抱えてそうだし』

直球ドストレートで聞いて見た。

「確かに私は　幼いころあんな感じの化物に襲われる以来大の怖がりに成っちゃったけど…　貴方なら…」

『ん?」

最後のほうが声が小さくなったので、聞き返した。

「貴方なら大丈夫です!!!私を助けてくれたし!何よりカッコいいし、優しいです!!」

そこまでストレートに言われると流石にてれるんだけど…

『ははははは　ありがとう　俺もご想像通り妖しだ。でも　さっきのような奴とは違う、君たち人間と本当に手を取り合って良ければいいって思ってるんだけど、まだ夢物語だけどね。』

「それは　すばらしいことだと思いますよ…」

ちょっと表情を崩して話す。

『無理はしなくてもいいさ、君は襲われたばかりなんだから…　でも　これだけは　分かって欲しい　無数に存在する妖しの中には

俺のような考えを持つものもいるって事をさ。全部があんなクズじゃないって事をね…　ちょっとでも思ってくれたら　救われるかな？』

表情を崩した女性の心を読み、且つ自分の思いを伝えた。

「あ　いえ　ごめんなさい…　顔に出てしまいましたね…」

ジャックの言葉で　自分がどんな顔をしているのかを気づき謝罪した。

『今有ったことを考えると仕方ないよ。それじゃ　俺はもう行くから、これからは気をつけなよ。あいつらも大っぴらには　手を出したりしないと思うしね。とりあえず　路地裏みたいなベタなとこには入らないように！それじゃあね』

手を挙げ俺は　歩き出した。

「あ　あのちょっと！！」

『ん？』

ジャックを呼び止めた。

「あなたのお名前は何ですか？私　明石美佐って言います！」

そういえば　自己紹介してなかったね…

『これは失礼…　そういえば　名乗ってなかったね。俺は　ジャック。ジャック・ブロウっていう。』

軽く頭を下げ名を告げた。

「ジャックさんですか…　あのジャックさん今日はほんとにありがとうございました！あ　あの…又　会えますか？」

『ん…　そうだね。縁があればまた会えるさ。』

そう言って微笑んだ後

『それじゃあ　美佐さん　また。』

ヒュンッ

一瞬にして　その場から煙のように消えていった。

「妖しって…　子供のころの記憶で恐怖の塊にしか感じなかったけど…　あんな人もいるんだ…」

美佐の妖しに対する考えが完全に変わったわけではないが、

今日あった出来事をいつまでも忘れないと誓ったのだった。

後日……

この周辺で　縄張りを持っていた天邪鬼が人間を襲おうとしたら逆

に誰かにボコボコ
にされたとうわさが広まり、
周辺の妖し達が恐れ　人間に襲い掛かったりしなくなったそうです。
『まっ　結果オーライかな?でも力で抑えるのはちょっとヤダだけど…』
共存って難いな……　まぁ気長に…だな。

第２２話　人間との共存（後書き）

何か人間女性といい感じになりそうでしたが…
何も無いと思いますｗ

ありがとうございました！

第２３話　陽海学園（前書き）

結構飛んでます…　苦笑

陽海学園へ行っちゃいます。

温かい目で見守ってください！

第２３話　陽海学園

あれから数週間……

ジャック　ｓｉｄｅ

いろんな都市を巡って見たが、やはりどこに行っても妖し達は人間を襲っていた。

命まで取ろうとした者は極まれだったが、それは　人間が大掛かりで動いてきたら今後

動きづらくなるからと言う理由なんだろう（妖しの１匹を締め上げて聞き出した）

『やれやれ……　こんなんで　ほんとに共存なんてできんのかな？最近自信なくなったかも……』

確かに襲う妖しが悪いのは当然だったが…

人間のほうに非がないと言えば嘘になる。

他者を踏み台にし自らを肥やす為に悪事を働いているものや通りすがりの老人が肩にぶつかた

からと言って好き勝手に暴力を振るったりしている者もいた。

『前途多難…　だな、こりゃ。でも　長い時間をかけて見るって決めたし、何よりアカーシャに宣言してるからな…　泣き言言うのもかっこ悪いか。』

道中歩きながら　そんなふうに考えていると、

トンネルが見えてきた。

『ん?? このトンネル…　普通じゃない…　な。』

空間が歪んでいるような感じがする…

トンネルの先は光がまったく無く漆黒の闇のようだった。

立ち止まり、考え事をしていると1台のバスが目の前に止まった。

「ヒヒヒッ」

バスのドアが開いた運転席には、意味深な笑いをする運転手がいた。

(あ　この人? 確か…　ああ思い出した学園の謎の運転手だ　御子神の古い友人の)

頭で考えていると、

「そこの兄さんどうだい? 乗っていかないかい?」

乗車を進められた。

『おや?　乗っていいのかな　無一文なんだけど』

「ヒヒヒ　いいさ、理事長にツケとくよ。それに君は陽海学院に興味があるのだろう？」

『ん？そんな事言ったっけか？俺』

「隠さなくてもいいじゃないか、ジャック殿…」

やっぱりバレてるかだよな、気づかないふりしても意味無いな、もう。

『ははは　やっぱバレてたか、それで　御子神理事長は元気にしているかい？』

気づかないふりを止め　運転手に問いかけた。

「ああ　元気すぎて困るくらいにね…　まぁ　あの学園を切り盛りする為には　そうでなけりゃ勤まらんがね。」

又　意味深な笑みを浮かべ話した。

『ああ　元気ならいいんだ。そろそろ　アイツにもあっておこうと思ってたとこだよ。無料で乗せてくれるんなら　好都合だ。陽海学園までよろしく頼むよ。』

無一文だし…　日雇いのバイトくらいしたほうがいいかなぁ？　苦笑

「ああ　任せてくれ。」

バスのドアが閉まり　静かに走り出した。

～バスの中で～

『そういえば　御子神は俺が帰ってきてるの知ってるのか？』

運転手に問いかけた。

「なぜそう思うのかな？」

また　ヒヒヒっと笑いながら　話してきた。

（結構癖になるなこの感じ。）

苦笑しながら答えた。

『いや　あの異次元に繋がってるような　トンネルが不自然なタイミングで現れて、その上学園行きのバスまで狙ったかのようなタイミングで来たからね。そう思うのが自然だと思うが？』

「君は　鋭いね～　察しの通り　私は　理事長に言われて君を探していたのさ。この辺りにいるってことはわかってたからね。」

（ん？何で分かったんだろ？）

「学園の不良たちの間で　うわさになってるよ。君は　人間を襲おうとしたら　いつの間にか背後にたって叩きのめされるって話、赤みが掛かった茶髪に長身・真紅の瞳をした妖しだってね。君じゃ

あないのかな？」

（そういえば　何かと最近そういう場面（シーン）に遭遇するからうわさになったのか…　多分しらばっくれても意味無いな）

そう考えながら、

『あらら、うわさになるほど活発に行った覚えないんだけどな。まあ　ばれてるなら否定はしないよ。　全部が俺かどうかわかんないけど、最近そういうことしてんのは、俺だからな』

答えた。

「ヒヒヒ　人間に手を気軽に出す奴は　血の気が多い若い妖しかその土地でグループを作って組織的に襲ってる奴らが多いからね。だから　うわさが広がったんだと思うよ～。」

（なるほど、ワルのネットワークって結構凄いって事か）

説明を受けて　理解した。

「さあ着いたぞ。ここが陽海学園だ」

ひゅううドロドロドロ～って効果音を付けたくなるような雰囲気だった。

空の色は、赤紫っぽくて　雷がゴロゴロしてて　怪しい雰囲気……

『流石は妖怪ならぬ陽海学園、ぴったりな印象だよ』

「だろう？いいとこだよ～ここは。それじゃあ　ワシはこの辺で。」

あれ？案内してくれないの？って　言いたかったけど、

『ああ　ありがとう。』

学園をいろいろ見て回りたいし、自分で御子神を探すことにした。

第２３話　陽海学園（後書き）

ありがとうございました！

第２４話　黒い生徒（前書き）

第２４話　黒い生徒

しばらく歩き続けて……

……

……

……

『……広い』

想像以上に広い学園内に自分で探すと考えたことを後悔していた。

『ええっと…　確かここって、１・２年棟？だったっけ？ああもう！何でこんなに広いんだよー』

あれこれ悩みながらも　とりあえず校舎の中には入れた。

周りの視線が痛かったが…

（制服姿じゃなし　仕方ないか…　女子にじろじろ見られるのは慣れないな…なかなか。）

やれやれ　といった表情で職員棟を目指し歩きだした。

「おい！貴様止まれ！！」

突然背後から　声がしたので振り向いた先に、黒い制服姿の学園の生徒（多分）がいた。

『俺に何か様か？』

「貴様　学園を私服姿で登校していいと思っているのか？　ルールを守れん奴には粛清する必要があるな…」

物騒なことを言いながら数人で詰め寄ってきた。

『いや　俺ここの生徒じゃないんだけど…』

とりあえず　騒ぎになるのも面倒なんで事情を粗方説明したが…

「そんなものは信じられんな、本当にそうだとしてもならば　貴様は侵入者ということだ…侵入者は始末しなければならん　学園の平和のために」

学園の平和？

俺って悪？？

なんで？？？

思わずつっこみそうになった。

（黒い制服…そしてこの物言い…こいつらあれか　公安委員会か…又めんどくさい事に…）

思わずため息をしてしまった。

そうしたら気に障ったのか、

「貴様！今のため息、我々に対する侮辱ととる！さあ　こっちにこい」

（めんどくさいことになったか…　周りの生徒達も何か怯えているようだし、ここから離れてあげた方がいいな。）

『わかったわかった。付いていくよ。そんかわり終わったら理事長室まで連れて行ってもらうってのが条件だ。いいな？』

ざわざわざわ……

（何だあいつ、　公安に条件なんか出して…　分かってないのか？こいつらの事…）

ギロリッ

公安のリーダー格っぽい男が周囲に睨みをきかせると　一瞬で皆黙った。

「くくくくっ　いいだろう。貴様が無事で帰れたら…な。」

（やっぱし　随分恐れられてるなこいつら…　まあ分かってたことだが。）

公安委員会

それは　学園守護と掲げ力で悪を取り締まるため結成された武闘派集団

生徒によって組織された学園警察ともいえる部隊。

なのだが…

（確か　原作でも腐ってしまったって言ってたな…　ああ　実際腐ってるわ、こいつら。まあてきとうにあしらうか…）

そして公安の本部でもある学園の地下牢にいった。とゆうか連れて行かれた。（笑）

めんどくさい……

第２４話　黒い生徒（後書き）

ありがとうございました！

一度ツイッターでつぶやいただけで、メチャクチャアクセスしてくれてる……

ありがたい気持ちでいっぱいです……

大した文じゃないのに～

第２５話　公安委員本部（前書き）

拉致されてしまいました……　苦笑
場所は原作を知ってる方なら分かるかと！
リーダーはもろ原作のキャラのパクリです。

では！　よろしくです。

第２５話　公安委員本部

ジャック　ｓｉｄｅ

（ここマジで広いな、まだ着かんのかな…？　はぁ～面倒に巻き込まれるし学園は広いし…　案内してもらったらよかった…）

後悔後に立たずとは、まさにこの事であった。

（こいつらも　むさ苦しいし…　何が楽しくて男に囲まれにゃならんのだ！）

ジャックは　公安に付いて行くと言ったことに後悔していた。

後悔する事が多いよ！

ジャック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～地下牢にて～

やっと着いたよ……

『さっ　どうすんのかな？要望通り付いてきたけど。』

リーダー格の男に話しかけた。

「くくくくっ　まあ　無駄なを抵抗せず付いて来たことに関しては評価してやらんでもないが、その態度はいただけんな……」

リーダー格の男が周囲に目をやると１０数人の公安委員が詰め寄ってきた。

それぞれ木刀を持って。

（評価ってなんだよそれ、はあ…こいつも自分に酔ってるくちなんだな…　それにしても木刀って…）

『ああ　そういう趣向でくんの。まあ分かりやすくていいけど、怪我したくなかったら来ないほうが身のためだぞ？』

男達はその言葉に薄ら笑いを浮かべた。

（ん？何か面白かったか？こいつらの笑いどころはいまいちつかめんなぁ…）

頭をかきながら苦笑していると。リーダー格の男が、

「この状況で去勢が張れるとは大した男だ。もしくは只の馬鹿なのか？まあいい…　かかれ！！」

男の号令と共に一気に男達が沸き上がり襲い掛かってきた。

『よっと、』

ヒュッ

足に魔力を溜め　すばやく移動をし　何人かを同士討ちさせた。

所謂　縮地と呼ばれ術である。

「ぎあっ」　「ふごっ」　「ぎゃうっ」

それぞれが面白い発音をしながら倒れていった。

『あーあ　痛そう…　かわいそうになぁ』

取り囲んでいたはずの男がいつの間にか　背後に回りこんでいた。

「き　きさまーー!!」

男達は怒りを露にし、再び襲い掛かった。

リーダー格の男　ｓｉｄｅ

これは……どういうことだ?

公安に揃っているっ連中は　武闘派集団に相応しい能力を持った者で結成している。

それが　１０数人もいるというのにまるで子ども扱いだった。

（こいつ等が腑抜け過ぎるのか…　あの男正体は分からんが　まったく何も感じん…

確にスピードは厄介だが見切れんほどではない。）

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「くそがーー！！」

又殴りかかってくるが…

スカッ

ガッシャアアン

「うがっ」

勢いづいたまま　盛大にすっころぶ　こんな感じなのが１０分ほど続いていた。

（さ　大分同士討ちでリタイアしたけど　そろそろ手を出したほうが良いかな？人数少なかったら同士討ちもしなくなって　埒が明かなくなるし。）

と　思っていると…

「もういい！貴様らでは話にならん　下がれ！」

怒鳴り声と共にリーダー格の男が出てきた。

第２５話　公安委員本部（後書き）

ありがとうございます！

第２６話　公安委員長　歐龍（前書き）

なんかセンス無い名前…
バトルの真っ最中です。。

第２６話　公安委員長　歐龍

後ろに立っていたリーダー格の男が、しびれを切らし出てきた。

「歐龍様…」「歐龍様がやるぞ！みんな　巻き込まれんうちに離れろ！！」「お願いします！！」

（よほど　信頼されているのか　もしくは恐れられているのか…おそらく後者だな。なかなかの妖気だ）

歐龍と呼ばれる男が発する妖気を見て、

さっきの連中とは比べ物にならないことを確信した。

（まあ　比べるほどのもんじゃないしな　さっきの連中じゃ。）

倒れている男達をみて失笑した。

「貴様…　大言を吐くだけの力は持っているということか…　ならば　私が直々に相手をしてくれる！」

叫びあげた瞬間…

ヒュッ

先ほどの縮地を持って歐龍の懐に行き、

『もう　戦いは始まってんだろ?無駄口たたく余裕があんのかい?歐龍とやら』

バキッッ

盛大に蹴りを水月に向かって打ち込んだ。

「ぐあああっ」

ドガアアアンッ　バッシャアアアン!!

歐龍は　壁を突き破り外にあった池まで吹っ飛んでいった。

パンパンッ

蹴った方の足を払い。

『公安のボスってこんなもんだったのか?まあ　学園内じゃこれくらいが妥当か。』

あまりに歯ごたえの無いボスに向かいつぶやいた。

『さ　理事長のいるとこに案内してくれんか？　なんなら　職員室でもいいけど？』

残った公安の残党に　戦いの前に要求していた　理事長に合わせるという約束を

守ってもらおうと話しかけた。

しかし……

「へへへへへ…」「はははははは…」「あはははは…」

またまた　いろんな口調で今度は笑い出した。

（こいつら　コント集団かよ。いちいちやることがおもしれぇ。）

『何がおかしいのか知らないけ…　っっ！！』

背後に殺気を感じ、咄嗟にその場所から跳んだ。

バシュウウウウウ！

ズッガアアアン！

まるで　ビーム…青い光線のようなものが背後から襲ってきたのだった。

第２６話　公安委員長　歐龍（後書き）

ありがとうございました！

第27話　龍種　水龍（前書き）

公安のボスがキバをむきますー
さあどうなる？

第27話　龍種　水龍

ジャック　ｓｉｄｅ

正直……

ビビッた……　苦笑

背後からの攻撃をかわしたジャックは…そんな事を考えていた。

（油断大敵…　自然系（ロギア）に成ってないと生身だからな…　多分痛いじゃすまんかったな…今の攻撃。格下相手とちょっとなめてたな。）

ジャック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ほお　今のを回避するとは　やはり　速さは一級品だな…　ひょっとして貴様の正体は人狼（ウェアウルフ）か？」

さっき蹴り飛ばした欧龍がいつの間にか　すぐ後ろまで来ていたのだ。

『へえ　気配の消し方　上手いな…　攻撃の瞬間まで気づかなかったぞ？後　正体についてはノーコメントだ。』

初めて　ジャックがここの妖しを褒めた。

（この姿…　コイツ龍種か…）

水色の鱗に頭には角…そして龍のような姿…　欧龍の正体は　龍種
　水龍だった。

人間の世界では　荒ぶる水害は全て水龍の仕業と恐れられたという
伝説の怪物。

（そら　こんだけ偉そうにもなれるな…　龍種の末裔だったら）

「くくくく…　さあこの姿を見た貴様は生きては帰れん！我が公安にしてくれた暴行罪、貴様は死刑だ。」

『おいおい、因縁つけてきたのはそっちだろ?どんだけ自分勝手なんだよ！お前は！』

半ばあきれたように言い返した。

「私こそがこの学園の正義…　私がやることは全て正しいのだ。反論の余地など無い。」

この男は自分こそが正義…自分がこの学園の治安を守っていると信じて疑わない男だ。

そして正義（じぶん）に逆らう者、従わない者は、みんな悪。

正義（じぶん）の為だったら何やっても良いと思っている。

（…大体のこいつの思考は理解した。なるほどな、自分自身を絶対的正義と信じて疑わないか……
もう　いい加減失笑を通り越してむかついてきたな……）

ジャックという男は、基本めんどくさがりで、マイペース。
面倒事を極端に嫌い、極力争い自体も好まない性格なのだが…
どうやら、歐龍の高慢な考え、物言いに…

「なんだ?今度は黙りこくって　、念仏でも唱えてみるか?」
よほど自信が有るのだろう…　正体を見せた歐龍は先ほどの人間形態の時よりかなり高慢
な物言いになっていた。
『…せえ』
「くくく　気でもふれたか?ぶつぶつ言いやがってそろそろ死ね!」
まるで竜そのもののようなデカイ口を開けた。
「高水圧(ハイスプラッシュ)・水散弾(ショットガン)!!」
先ほどのビーム状とは違い、水の礫を散弾銃のようにして打ち出した。
(いくら　スピードに自信が有ろうがこれほどの量の弾丸をかわし

切るなんて不可能！）

「さあ　断末魔の叫びを聞かせて見ろ！！」

散弾銃と化した水礫がジャックに襲い掛かる。

『雷の力…』

『自然系（ロギア）！』

約2世紀ぶりに　自然系（ロギア）の力を解放した。

第27話　龍種　水龍（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典…　作者都合上w

龍種　水龍

その名の通り水を統べる竜である。
古代中国黄河文明にて、人間にとって母なる黄河を頻繁に洪水を起こし
人間達を苦しめたという。
人間達は、水害から都を守るため、生贄を出し水龍を静めたという。

結構てきとうですw
軽くスルーしてくださいね！　苦笑

第２８話　自然系開放

歐龍から打ち出された散弾は、公安本部自体をも破壊しながら、ジャックに向かってきた。

バシュシュシュシュシュ！！

ジャックの体中に水の散弾が浴びせられていく。

「ふっ　死んだか…？」

あたりは水煙でいっぱいとなっていたが、

体を貫いた感触は確かめれた。

故に勝利を確信したが…

『ふう…』

水煙を払うかのようにしながら

首をコキコキッと振って何事も無かったかのように、出てきて歐龍を見直した。

「ば　ばかな！！我が弾丸を受けてなぜ無傷なのだ！！」

『…うるせえって言ってんだろうが、　クソ飢餓が！』

歐龍　ｓｉｄｅ

馬鹿な…

理屈に合わん　確かに体を貫いたというのに何事も無いように立っているなど…

それになんだ？この男…　先ほどまでと雰囲気がまったく違う！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『学園内でのさばってただけのクズが、俺にここまでイラつかせるとはいい度胸だ。もう穏便には済まさんぞ！』

ギンッ！！

冷たく鋭い目つきで殺気を混じえながら　睨み付けた。

「ぐう！！」

（この私が睨まれただけで…凄まれただけで…　びびらされた？）

「ふ　ふざけるな！こ　この私を誰だと思っている！！！」

歐龍は圧力（プレッシャー）に耐えかねて、ジャックに向かって飛び掛った。

ヒュンッ

飛び掛ってきた歐龍をかわし、

『…雷神一天（らいじんいってん）』

拳に神なる雷を纏わせる。

『崩拳（ほうけん）！』

キュンッ

ド　　ンッ！

それは　雷速に匹敵するほどのスピードで歐龍の鳩尾をジャックの拳が貫いた。

「ぎあああああああああああああ！！」

水と雷…　どちらが相性悪いのかは言うまでも無い…

歐龍は、またもや吹き飛び…　体を痙攣させ動かなくなった。

『外の世界を知ったうえで得意げな口を出すんだな　ぼーや。』

完全に痛みと麻痺作用で動けなくなった歐龍に忠告を出しその場を離れた。

～公安本部～

「そんな！！歐龍様が！！」　「そんな馬鹿な！！」　「いったい誰が！！」

ジャックが出て行った後　なにやら公安本部が騒がしくなった。

どうやら　出払っていた公安委員の他のメンバーが戻ってきたようだ。

（やれやれ　この展開…　九曜（原作より）と同じになったな。

でもこの先輩あってのあの後輩か……）

何年か後に幹部となるものを思い出しながらそう考えていた。

『あ！　理事長室の場所……』

肝心な事を聞き出すのを忘れてしまっていた。

『…自力で探すか、戻るのも面倒だしな。』

めんどくさそうに…この場所を後にした。

それにしても…　俺ってこんなにキレやすかったっけ？

ちょっと大人気なかったかも…

反省！！

第２８話　自然系開放（後書き）

ありがとうございました！

水の竜に雷はひどいですね…

自分で書いてて同情してしまいました　苦笑

もっとうまく表現できないかなぁ～　悩

第２９話　再開　御子神典明

数時間たって……　だからドンだけ広いんだよ！ココは！！

と突っ込みながらも　何とか理事長室に辿り着いた。

『やっとついた……　長かったな～　妙な連中に絡まれたり…女子生徒に追っかけられたり…　学校ってしんどいかも…』

理事長室を見つけ　安堵しながら入った。

～理事長室～

「やあ　ジャック久しぶりだな。２００年ぶりか。それにしても学園に着いていたのは知っていたがずいぶん時間がかかったな？ここまでくるのに。」

相変わらず　フードをかぶり目元が見えない御子神典明と再会した。

『正しくは１９６年な、遅くなったのは私用があってな。ってか軽いなー。約2世紀ぶりって言うのに…』

苦笑しながら話した。

「ふふふ、私に久しぶり！っとか言われて抱きつかれたほうが良か

ったのかな？」

『それは勘弁だな。マジで。。。』

想像しただけで…

想像もしたくない。

男同士でなんかな…

「まあ　冗談はさておき　君がこの世に復活してたのはアカーシャから連絡があったから知ってたんだよ。」

なるほど……

『納得納得そういうことか　通りでタイミング良く現れたもんだあのバスが。』

謎は解けたって感じだな。

「ふふふ　奴は古い友人でな。案内を任せたんだ。いい奴だっただろ？ちなみにバス代の件は私が立て替えているから安心したまえ。」

意味深に笑いながら　話した。

『ああ　そういえばそうだったな。バス代ってジョークじゃなかったんだな…　さて、本題に入ろうか？　俺に用があってここに呼んだんだろ？』

（ん……？そういえば御子神の考えが読めんな…　腕が落ちたか？

俺。）

読心術がうまく働かない……

（でも　モカや亜愛やアカーシャ…この学園でも聞けたんだけどな？）

不思議がっていると…

「ああ　今私の体には特殊な術式を書いているからね。そう簡単には　今の私の考えは読めんよ。」

ジャックの考えを読んで答えた。

『なーるほど　結構俺のこと警戒してんだ。』

苦笑しながら答えた。

「いや　警戒じゃなくて考えを簡単に読まれるのはいい気がしないじゃないか。」

（そりゃそうだ　俺も嫌だったし……by女神）

納得し話し出した。

「では君に頼みたい事があってな、その前に君が最近人間に悪さをする妖しを止めていることは知ってる。そうする理由はなぜなのかをまず教えてもらえんか？」

御子神が頼みごとを言う前に最近の行動の意味を聞いてきた。

『ん？アカーシャに聞いてなかったのか？　俺は人と妖しは共存できると信じている。今は無理でもいつかは　本音で語り合えるまでに…な。　その為に少しずつ…焼け石に水だと思うが、行動していたんだ。後は人間たちの観察かな？』

ジャック自信の本心を話した。

「ふふふ　やはり…君は頼もしい存在だよ。我々陽海学園の目的も人間達との共存を掲げていてな。まず手始めに　人間社会に溶け込めるように化けるところから入っている。まあ　君の言うように本音で語り合えるようになるのが一番だが　そこまで出来るとは思ってはいない。少なくとも今はな。」

学園で学ぶ事、目的を一通り説明した後。

「君に頼みたいのは　人間界に入った時　妖しが何か悪さをしていればこの学園に引っ張ってきてくれないか？　完全に更生さすのは無理だと思うができる限りの事はしたい…　もちろん街中で見かけたら…程度の感覚でかまわないが？」

ジャックに妖しを特に人間界で溶け込めてなく、尚且つ人間を襲うような妖しを学園に連衡してくれというものだった。

『なるほどね…　それならかまわない。バチバチに働けって事じゃなさそうだし、何よりココなら安心できるしな』

（下手に痛めつけるだけで終わったら逆切れして人間を襲うようなやつも増えるかもしれないし…）

その気がありそうな妖しは徹底的に痛めつけたので、今までは特に問題なかった。

（力で抑えてもな…それは理想とはいえないから。）

「ふふふ　君はそういってくれると信じていたよ。では　期待している。この学園にはいつ来てくれてもかまわないし、ＶＩＰカードも渡しておこう、これがあれば怪しまれたりしないからな…　先ほどのようなトラブルも起こらなくてすむ。」

おそらく公安委員との絡みを言っているのであろうか。

『ありゃ！ばれたか…　やっぱり…　悪いな　いきなり暴れて。』

ジャックは素直に謝罪した。

向こうも十分悪いとは思っているが…な…　（怒）

「いや　問題ないさ。公安（かれら）の行動は特に近年は目を見張るものがあると思っていたしな。だが、やる事が多すぎて手が回らなかったんだ。これで少しは落ち着いてくれれば　ありがたいが、まあ無理だろうな。血の気の多い連中だから。」

（分かってるなやっぱ。）

さすがは理事長、実際に数年後に新聞部と公安の問題事件が発生するから、あながち外れでもない。

『良いなら良いさ。じゃあ　俺はまた人間界へ行くとするよ。実は温泉旅館に行きたかったんだ。』

冗談ではなく本気である。

前世の日本人の血がそうさせるのか…？　（笑）

「ふふふふ…　温泉か　それはいいな。わかった。ではいつでも来てくれ。期待している。」

『ああ、まあ任せておけ。後…なんだ…その久しぶりに会えてよかったよ。戦友。』

「ああ、私も同感だ。」

御子神と握手を交わし、理事長室を…　陽海学園を後にした。

第２９話　再開　御子神典明（後書き）

ありがとうございました！

第３０話　温泉

陽海学園を立ち去る際……

「何あの人！」「この学園の生徒かな？？」「ってか　かっこいー」

など言われながら　追い回されていた。

（おかしいぞ！前話ではもう後にしたってあったのに！！）

『何でこんなことになってんだー！』

「まってー！！」「どのクラス？？正体は何？？名前は？？」「きゃーー！！」

『ちょっ！そんなにいっぱい聞かれても答えらんないってっ！！！！うわっ何だこの数！！』

容姿は普通だと思ってた……

何でここまで？？って正直思ってたけど…

追われているなら逃げるが勝ち！

『じゃ！！！また今度――――』

「まってよーーー！」「まちなさーーい！！」「ギラッ！逃がさない……」

最後のこわっ…

決死の大脱出はしばらくたった後だったと言う。

『つ　疲れた…』

女子生徒のパワーは凄いものです。

御子神　ｓｉｄｅ

「ずいぶん学園内が騒がしいようだな？」

理事長室に呼んでいた教師に話しかけていた。

「そうみたいですね～？さっきも大変だったんですよ？公安がつぶされたーとか騒いでいたり。でも何か黄色い声援が聞こえてますから物騒な感じではないですね」

猫目…　後の月音たちの担任となる教師である。

「くくくく…　奴の容姿のせいで女子生徒に追い回されているんであろう。なんとも微笑ましい状況じゃあないか。　…不敗がみたらどうなるか…　くくくっ」

「はにゃ？？」

御子神は意味深に笑いながら、またアイツが学園にやってくるのを心底楽しみにしているのであった。

陽海学園を去り数日たった後…

ジャックはとある温泉宿に観光に来ていた。

「はい～　ご予約のあった御剣さんですね？お待ちしておりました。どうぞこちらへ…」

『どうもありがとう！』

一通り旅館の設備・時間帯の説明を受け、部屋でのんびりしていた。

『あの温泉発言マジだったの？って言われそうだけど、俺マジで温泉好きなんだよね～』

感じのいい旅館で、女将さんも雰囲気がいい感じで……　日雇いバイトしてお金貯めて……

『ここのところ、復活したばっかなのに戦ってばかりだから、たまには良いよな～こういうのも！さあ　温泉温泉♪』

ウキウキッランランッといった感じで温泉に向かった。

ジャック　ｓｉｄｅ

～露天風呂～

『はぁ～　良い湯だな～…　星空が綺麗だ…』

ここは山の中腹にある温泉旅館…

眺め最高　星空最高だった。

疲れがお湯の中に溶けて行くような幸せ感を満喫していたのだが……

「お…！　お…なしく…　さ…ぐな！」

何やら夜の山の中で不穏な気配と話し声が聞こえてきた。

『ん～??……人（妖し）が良い気分で温泉に入ってたのにブチ壊すのは誰だよ…』

口では　文句を言ってるが…

『…行かんわけにはいかんか…　妖し関係だったらある程度何とかしとかんといかんな。』

さっさと片付けてまたは入ろうと言った感じで、早々に温泉を上がり声がしたほうに向かった。

第３０話　温泉（後書き）

ありがとうございました！

温泉って良いですよね。。。
大好きです！　２６日は風呂の日ですｗ

さて…またまたトラブルが起こりそうです。
どうなるのか！！！

後、又登録評価人数が増えていました。

登録してくれた人にもただチラッと見てくれただけの人も評価してくれた人にも。
ただただ感謝感激です。

駄文に付き合っていただきありがとーです！

第３１話　少女と３人の男達

声がしていた方は…

そこは夜になれば闇があたりを支配し、人を寄せ付けぬ雰囲気を纏った森の中だった。

？？？　ｓｉｄｅ

「やっと追い詰めたぞ！ちょこまか逃げやがって。」

男が３人…

話の内容から察するに、誰かを追いかけてこの森に入ったのだろう。

「お前は　俺らに売られたんだ！つまり俺らが御主人！その後主人から逃げだすったーどういうことだよコラァ！！」

男の一人が怒鳴りあげた。

「っつ……」

怒鳴られていたのは…

１０代ほどの女の子だった。

（やれやれ…　これまた物騒なこと言ってるな…　大体売られたっ

てなんだよ?日本でそんなんあるのか?　まぁ裏の世界って奴か?
…やっと目が慣れてきた)

慣れた目に飛び込んできたのは……

3人の男達に囲まれた少女の姿だった。

「〜っつ!!」

少女は喋れないのか、言葉にならないような声を出し、必死に助けを求めているようだった。

「ったく　てこずらせやがって…てめぇ!」

男の一人が乱暴に少女に掴みかかろうとするが。

「よせよ。とりあえず捕まえられたんだ。それに　ガキとは言っても大妖のガキだ、あまり刺激するな。コイツは将来、我々に役に立ってもらわなければならない。」

おそらくその男達の中ではリーダー的な存在なのだろう。

男の発言に渋々従った。

「わーったよ!ならさっさと引き上げようぜ。」

「同感だ!さあ　さっさとたて!」

男達が少女の手を握り無理やり立たせた。

「あんまり　刺激してやるな。親に捨てられたショックからか、力が出せてないようだが万が一がある。」

「兄貴は慎重すぎなんだよ！」

「お前らが軽率すぎなんだよ！」

少女を連れ出しながら醜い言い争いを始めた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

（親に捨てられた…か　妖しの世界でもそんなんあるんだな…）

不思議なことではない。

人間の世界でも親が子を…子が親を…なんてことは日常茶飯事とまでは行かず

とも良くあることだ。

（何にしても胸糞悪い…　やるか…）

ジャックは気配を殺し、男達に近づいていった。

第３１話　少女と３人の男達（後書き）

ありがとうございます！

今回はとある大妖が出てきますｗ
一人は少女一人は・・・ですｗ

さて　誰でしょうか！！
お楽しみにですｗ
期待を裏切らないように……頑張ります。

第３２話　人でなしじゃない

ジャックは限りなく気配を殺し…男達に近づいていった。

「…む？」

リーダー格の男が急に立ち止まった。

「兄貴？」「どうしたんです？」

不審に思った二人も足を止めた。

「…誰か…いるな。そんな気配だ」

ジャックは限りなく気配を消し近づいていったのだが、男は僅かな気配を察知し

後ろを向いたのだった。

「何にも感じませんぜ？」

「いいから黙ってろ！」

有無を言わさぬ迫力で、部下の男達を黙らした。

「誰だ?俺達をつけているのは?」

まだ姿が見えないが…気配のした方へ声を上げた。

(ふうん…　中々やるな?あいつ…　気配を殺しても何かを感じ取ったか…)

ジャックは　バレたなら仕方ないと、姿を見せることにした。

「だれだ?てめぇ」

「俺らをつけてたのか?」

「……」

部下の男達は前に出て威嚇していたが…

リーダー格の男は後ろで見ていた。

『いやなに…　温泉にゆっくりつかってたかったんだけど、そこに物騒な声が聞こえてきたもんでね、気になったから見にきて、つけただけだ。』

両手を広げながら、説明をした。

(あの気配を感じれたのは　偶然だ……まったくのな、それだけで分かる…　この男只者じゃない。まずは出方を…)

「なめてんのかてめぇ！」

「ぶっ殺すぞ！！」

部下の2人は　態度が癇に障ったのか、ジャックに掴みかかるように詰め寄った。

（まったく…あいつら軽率すぎだ…　だが　泳がせるか…）

リーダー格の男は傍観していた。

『ん…　俺は基本的に争いは好まんが…』

「なんだ？怖がってんのか？コラ」

男が更に詰め寄り掴もうとしたが…

『あんな幼気な女の子を乱暴するような輩を見逃すほど人でなしじゃない。』

男が掴みかかった手は空をきり…

ドボッ！！

ジャックの蹴りが男の脇腹を捕らえめり込んだ。

ボキボキボキッ

「がッ　はッ！！」

ドゴオオン！！

骨の砕ける音を出しながら、男の一人は夜の闇へ吹き飛んでいった。

「てめぇ！！やりやがったな！！！」

もう1人の男は擬態を解き、男に襲い掛かった。

『半漁人か？なら…』

人差し指に魔力…　雷の力を集中させる。

『雷閃（らいせん）！』

指先を密着させ…　纏わせた雷の力を解放した。

「ぎゃあああああ！！」

一瞬で男の体内の隅々まで雷撃が走り、体の内から焦がし倒れた。

（妖しだしこれくらいじゃ死なんだろ。（多分！）これだったら指先だけの魔力ですむ。自然系（ロギア）は結構疲れるしなぁ。）

男の体をどかし、最後の1人の男の方に向いた。

第３２話　人でなしじゃない（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典…　作者都合上ｗ

半漁人

二腕二脚だが、鱗やエラを持つなどの特徴があることから水棲人（すいせいじん）とも呼ばれ、英語ではマーマン（Ｍｅｒｍａｎ）と称されることが多い。

っと紹介しましたが、あっさりいなくなりましたねｗ（笑）

最初の一人も同じ半漁です。あしからずｗｗ

第３３話　御伽の国（前書き）

ここで原作には無い御伽の国の連中が出てきます。。

ヨロシクです！

第３３話　御伽の国

男2人を倒して…

残り1人となった男（おそらくリーダー格）を見直した。

『で…？君はどうする？聞いてた感じ、君はその子の扱いもそこまで酷くなかったし、争いをあまり好まない身とすればこれで終わりにしてその子を離してもらいたいんだが。金の問題なら考えもある。』

もちろん御子神のことだ。

何言われるかは分からんが…

（まあ　出世払いで　苦笑）

「うちの身内をボコボコにしといて争いを好まないといっても全然説得力無いがな…」

皮肉を交えながら話した。

「あいつらは良い…　軽率すぎるしあそこまで出来が悪いと思わなかった。むしろアンタに興味がある。」

『男に興味を持たれてもうれしくないがな…』

うん！絶対ゴメンだ。ＢＬは無理ｗ

「まあそういうなよ。アンタみたいな男が仲間になってくれたら、助かるんだ」

？？？

『仲間に？俺は女の子に乱暴するような輩の仲間になるのは御免なんだが？君はそこまでひどくなかったけどな。』

即答で答えた。

「そういわず聞いてくれ、アンタも見た所妖しだろ？正体は分からんが…　それにこの子にはもう乱暴はしないさ。」

『まあ　話くらいは聞こうか。』

とりあえず　おそらく組織的な連中だと感ずいた為、実態を探ろうと話を聞いた。

「ははは、そうこなくっちゃな、俺達は妖しの敵である人間社会の転覆を目論み闇で活動してる御伽の国（フェアリーテイル）って言う組織なんだ。そしてこの子燦って言う名前なんだけど。この子も素晴らしい力を秘めていてね。来るべき目的のために優れた仲間が欲しいってわけさ。」

男はそういって自分達の組織についてを語った。

（御伽の国（フェアリーテイル）…ここで出てくるか…　まあ創立とか知らんし、合って

も不思議じゃないか。）

「俺は御伽の国（フェアリーテイル）第２３支部長　神無木　聖司だ。あんた程腕の立つ男ならＶＩＰとして歓迎するがどうかな？」

ジャックに問いかけた。

返答は…

『答えはＮＯだ。』

これまた即答した。

「ほう…　してその理由は？」

『俺は　人間を敵と思ってない。むしろ最近仲が良い！（笑）そして　何か組織の名前が気に食わない。御伽の国？？どの辺が御伽なんだ？って感じだ！』

思ったことをはっきり微塵も曲げず話した。

「…へぇ　妖しなのに人間の味方をすんの…　じゃあ　アンタはただの敵ってことになるな。後、組織の名前については大きなお世話だ。」

静かな口調で話していたが…　どこと無く怒っているように話した。

（あれ？コイツひょっとして人間の味方で仲間になるの拒否した事より、御伽（フェアリーテイル）の国を馬鹿にしたこと怒ってんのかな？そんなに気に入ってんの？）

苦笑しながら、

『そ。その人間達を滅ぼすって言うのなら…　俺がお前らを滅ぼしてやるよ…』

臨戦態勢に入った。

第３３話　御伽の国（後書き）

ありがとうございました！！
多分原作では２３支部までないと思います……苦笑

第３４話　海の大妖　セドナ（前書き）

オリジナルの妖怪ですｗｗ
神無木　聖司という名前はテキトーです。。
笑ってやってください…ｗ…

第３４話　海の大妖　セドナ

臨戦態勢に入ったのはいいんだけど……

女の子を巻き込むのはな……

『さ、まずその子…燦ちゃんだったっけ？　まず巻き込まれんように離れさせてあげな、聞く限りじゃ大事な戦力なんだろ？その子も。』

「ああもちろん。アンタに加えてコイツも失うわけにはいかないんで…ね！！」

男は少女の方に向くと見せかけ、振り向きざまに水を弾丸の様に放ってきた。

『っと！！』

夜の闇のせいか…　視界が悪いため少し被弾してしまった。

「へぇ…あれを交わすのか…　やっぱりアンタ惜しいよ。ここで殺してしまうのはな。」

冷徹な目で睨みつけてくる。

『まあ　あんたは俺の気配に唯一気付けたし唯者じゃないって思ってたけど、正直ここまでとは思ってなかったな。先ほどの攻撃…大

したものだ直前まで殺気を隠し、その上夜であることも利用して打ってくるなんてな。』

最近は水を使う奴とばっか戦ってる様な気がする…

俺って水難の相があるのかな?? 苦笑

以前戦った水龍 歐龍の水の攻撃より遥かに錬度が違った。

(まあ アイツは自分に自惚れすぎてたし… 比べてもな…)

苦笑した。

「そういいながら、アンタもおかしいぜ?当たった筈なのに涼しい顔してよ」

間違いなく当たってるのにこたえた様子がない為攻めきれずにいた。

『そうか?まあ俺もいろいろ経験してるからな… じゃ こっちのターンでいいか?』

というと同時に、

縮地を使い距離を一気に詰めた。

「っな!!(はえぇ!)」

ドボッ!!

男の脇腹めがけて蹴りを放った。

が…

『防いだか?』

脇腹を直撃するはずだった一撃を男は右腕でガードし耐えていた。

多少はダメージはあるようだが…

(やるな…こいつ。)

「スピードにはビビッたが(マジで)その蹴りは一度見せてもらったからな、馬鹿正直に同じとこ蹴りにきたら防御するぜ?普通」

ガードした右腕を振りながら話した。

「でもま、アンタはやっぱつええ…人間擬態のままでそこまでするたぁな…　出し惜しみしてられねーみたいだわ。」

しゅうううっ

男は人間の姿から徐々に姿を変えた。

『この姿…　セドナか!』

セドナ…海の大妖の一角。イヌイット神話で語られている冥府の王。

(確か…人間を殺すことに至高の喜びを感じるたちの悪い妖しだったな?)

「ははは！かなり強い相手だ。なら全力でいかなければならんだろ？」

ゴゴゴゴゴッ

背後に広がっている海（実は山の裏側は海が広がってます！）から津波が襲い掛かってきた。

「俺は海を統べる妖しの一角…　この大津波（ビックウォール）から逃れられるかな？」

『おいおい！馬鹿か？その子まで流されるぞ！』

ジャックは蹲っている女の子まで移動し抱きかかえ縮地を使いこの場所から離れた。

「言ったろう？出し惜しみすれば俺の方が殺られる可能性がある、その女の力は惜しいが貴様を始末する方を優先したまでだ！」

そう言い　呼び寄せた津波を纏い。

「水竜巻（トルネィヴ）」

ジャックの飛んだ先に向かって放った。

それは　まるで水が意思を持ってるかのように徐々に迫ってきた。

（どうする？俺だけなら楽に防げるが、この子がヤバい…　まあ見捨てるなんて選択は無いがな）

そう思いながら女の子を抱えている腕に力を強めた。

第３４話　海の大妖　セドナ（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典…　作者都合上ｗ

海の大妖　セドナ

イヌイット神話の海の神。冥府の王でもあり、人間を溺死させることに至高の喜びを感じている。
セドナは海底で、海の死者の国の管理者となっていたという。

ホントは冥府の女王で海の女神…　分類的にも名前的にも女性ですｗ
テキトーですｗ
すみません～ｗ

第３５話　もう１人の大妖（前書き）

これを読んでくれて（ありがとうございます！！）、尚且つ原作を知っている人は…

名前を見て気づいていたと思いますｗ

個人的にはかなり好きな原作キャラです。

第３５話　もう１人の大妖

『必ず守ってやるさ。』

やさしく包み込むように……

ジャックは女の子を抱えなおした。

「っつ…」

ジャックの腕に強く抱かれた女の子は、

正気を取り戻し

女の子はジャックを見上げた。

『大丈夫だ。俺に任せて置け。』

優しく笑いかけた。

その笑顔を見て安心したのか落ち着いたのか、女の子から強い妖気

を感じた。

「なんだ??この妖気は?アイツじゃない…まさか…」

妖気が感じるのはあの男の傍から…　ならば答えは一つしかない。

「――――――♪」

パッキャアアン！

襲い掛かってきた水の竜巻が弾き飛ばされた。

『これは…なんて綺麗な…歌声…　セイレーンの歌…か?というか君もしかして…』

（そういえば燦って名前…　あああ!!今気付いた!!!）

少女の正体は音曲の大妖セイレーン・そして後の陽海学園生徒となる音無　燦だった。

（今気付いた…　なんで　この子がここに?施設じゃなかったっけ?確か??）

おそらくはジャックが存在していることからの歪みから生じる現象だろう。

と気付いたのはしばらく後である。

「あ　あの…」

完全に敵の攻撃を防ぎ終わった後　ジャックを見つめた。

『（かわいいなやっぱ）どうもありがとな。こんな事できるのなら俺でしゃばったかな?』

笑いながら話すと。

ふるふるふる!

頭を左右に振り否定した。

『ははは!』

かわいいな燦ちゃんって。

和やかな空気だったが。

「貴様らーーー俺を無視するな!!」

男がそれをぶち壊した。

（…ぶっ飛ばす!!）

男に向きなおし。

『じゃあ　燦ちゃんだね?確か…後は大丈夫任せて。』

そういい自分の背後に燦を隠し、

『さて…　闇の力　自然系（ロギア）』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

闇の力を解放した。

以前使用した禁忌の術。使用法を誤れば自分自身を滅ぼす諸刃の力。

さあ今回はどうなる？

第３５話　もう１人の大妖（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典…　作者都合上ｗ

音曲の大妖　セイレーン

ギリシャ神話等で知られる海に住む半人半鳥の妖。
元々は神であったといわれ、その歌声は聞く者を惑わし
精神を破壊する強い力がある。

原作より引用…ですｗ

燦は非常に優しく綺麗な心の持ち主ですｗ
結構ひいきしてますね…
あまり活躍してませんが…　まだ子供って事で仕方ないかとｗ

第３６話　決着　引力と斥力

闇の力は非常に危険だ…

以前は体が闇に食われ約２世紀の間異次元の狭間を彷徨ってしまった。

（まあ　同じミスはしないがな。）

「最大級の水竜巻（トルネィヴ）を食らわしてやる！先ほど程度では防ぎきれるレベルじゃないぞ！食らえ！！」

「水竜巻（トルネィヴ）！！！」

再び海を纏い解き放ってきた。

『ふん！』

ジャックは両方の手を合掌させ。

『超重力（ブラック・ホール）』

黒球を作り出し　水竜巻に向かって放った。

「その程度で防げるとでも…んがっ！！」

それは突然起こった！

「な　なに…　地面に…吸い込まれる！き　貴様！　なにをしたぁ！！」

空中に飛んでいた男がまるで何かに引っ張られてるかのように大地へ引きずり込まれていた。

もちろん　己の技と共に。

『海って結構重力に影響されやすいんだぞ？干潮満潮だって月の引力の影響で水位が変わってんだからな。』

男はついに大地へ引き摺り下ろされ、身動きが取れなくなっていた。

「重力？？まさか！」

『そのまさかだよ。今放り投げたのは重力の塊だ。お前の技は付近の住民の皆さんに迷惑が掛かるからな、少々疲れるが荒っぽい手段を使わせてもらった。』

呼び寄せた津波と男は大地にへばり付き、津波は広がらなくなった。

ボキボキボキッ

「がああ！」

ついに重力に耐え切れなくなったか、体の骨が折れ始めた。

「おのれ！！こうなったら道連れだ！俺の体内には強力な爆弾を仕込んである！お前らもろとも吹き飛ばしてやる！！」

カチッ…

男はスイッチをいれた。

『…参考までに聞くけど　後どれくらいで爆発すんの？』

高笑いしている男に話しかけた。

「ははははは！！後１０数秒ほどさ！この爆弾はかなり強力だ！周囲数キロまで吹き飛ぶ！貴様の大好きな人間も巻き込んでな！！はぁーーーはっはっ八っはっハっハっは！！」

狂ったかのように笑い続けた。

『よし　１０数秒あれば十分だ』

「は？」

男が話すまもなく今度は一気に空中へ浮いた。

「な　なに！！！！！！！！」

状況がつかめない　さっきまで凄まじい力で大地に縛られていたはずなのに今度は一気に

空へはじき出されてしまった。

『重力・引力を使えんのなら　斥力だって使えるって思わなかったのか？まあそれどころじゃなかったんだろうがな』

ジャックは反転魔術を使用し、超重力（ブラックホール）を超斥力（リパルション）に変え解き放っていた。

上空のかなたへ。

「クソーーーー！！うわあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

男が見えなくなったと同時に。

ド　　ンッ！！

男が言うように凄まじい威力の爆発が起きた。

『能力（チカラ）は大したもんだが一手二手先を読むのが大切なんだぜ。』

もう吹き飛んだ相手に忠告を促した。

（でも…飛行機とか飛んでたらどうしよう……　それにこの山の有様…　）

共存を考える身とすれば……

心配事が尽きない幕切れであった……

第３６話　決着　引力と斥力　（後書き）

ありがとうございましたｗ

第37話　音無　燦

一晩明け…

空は朝日が立ち上っていた。

御伽の国（フェアリーテイル）との一戦も終わり…

『ん。　とりあえず旅館の方に戻るか。燦ちゃんも付いてくるかい？嫌じゃなければだけどさ。』

燦に話しかけた。

「……」

しかし、燦はジェスチャーをして必死に伝えようとするが、話そうとはしなかった。

（そうか…　確かこの子、妖力が強すぎて親に捨てられたことがトラウマでセイレーンの妖力（ちから）の源である声を出すのをやめたんだったな……（原作より）　それに確か極度の照れ屋だったっけ？）

『ああ　ちょっと待ってね。』

そう言うとジャックは少し大きめのメモ帳とボールペンを取り出した。

「！！」

意図を感じたのか、驚いた表情でジャックを見つめた。

『…悲しいことがあったんだろう？「声」を出すことにさ。なら無理する必要は無いさ。相手に意思を伝える方法は何も声だけじゃないしさ。』

そう言い取り出したメモ帳とボールペンを差し出し、そして笑顔で話しかけた。

『はい。とりあえず筆談から始めよう。慣れるまでさ。』

その言葉に燦は目に涙を溜めながら…　ボールペンを走らせた。

＞どうも…ありがとうございます…＜

『ははは　どういたしまして。さ　どうする？俺と来るかい？』

＞はい…！私にはもう頼りがありません。どうかよろしくお願いします。＜

『よし分かった。じゃあ行こうか。』

そう言って手を差し出した。

燦はその手をじっと見つめた。

『ん?ああ、ごめん手をいきなり繋ぐのは抵抗があるかな?』

ちょっと無神経だったかな?と思いながら苦笑した。

＞そ　そんなことありません！　唯…誰かと手を繋いで歩くのって初めてで…＜

また　目に涙を溜めながら話した。

『そっか、じゃあこんな俺で良ければよろしくね。』

そう言って再び手を差し出した。すると…

＞は　はい！＜

今度は迷い無く手を取った。その顔は幸せそうな笑顔だった。

第37話　音無　燦（後書き）

ありがとうございます！

第３８話　心優しき人

～旅館にて～

『ごめんなさい～！』

旅館は朝早かったため鍵がしまっていた。

「あらあら　ジャックさん。どうして外に？」

てっきり部屋で休んでいるとばかり思っていた為、驚いた様子で女将さんが聞いた。

『ああ　すまない…　昨晩俺の姪っ子が家出したって連絡があってね。一晩中探していたんだ。だから野宿する羽目になってね…』

苦笑しながら話し、燦に向かってウインクした。

その意図を感じ取ったのか。

＞ごめんなさい…　私のせいで…＜

筆談で詫び話を行い、会話を繋げた。

「そうでしたか…　それは大変だったでしょう。さあお風呂も入れます。ゆっくりしていってください。」

『どうもありがとう。この子の分の料金もちゃんと払うよ。』

一礼をした。

「いや　いいですよ！分けありなんでしょ？そのこの分はサービスって事で。」

女将さんは優しい笑顔で答えてくれた。

『そんな　悪いですよ！』

サービスしてくれるのはうれしかったが、流石に悪いと思い答えた。

「本当にいいんですよ。お嬢ちゃんもゆっくりしていってね。」

＞女将さんどうもありがとう…＜

筆談で話した。

「…じゃあ　暖かい料理をもてなすわね。」

女将さんは筆談で話す燦を見て話せない子と思ったのか少し言葉に詰まったが、

直ぐ笑顔になり　話し返した。

（本当に…良いとこだなココ…　今度来ることがあったら絶対寄ろう。）

俺はそう心に決めたのだった。

『はぁ～　美味しかった！』

旅館の料理を堪能し、しばらく部屋でゴロゴロしていた。

『そういえばさ　ほんとに良かったの？俺と同じ部屋でさ。』

話によると燦は今年で１３歳になるらしい…

子供とはいっても女の子…抵抗があるのでは？と思い聞いたのだが。

＞いえ…　そこまでしてもらわなくてもいいです。凄く恥ずかしいですけど…　嫌じゃないです…＜

顔を赤面させながら答えた。

『そっか、ならいいんだ。』

この子は、親の愛情に飢えているんだと思った。

妖力が高すぎるが故、恐れられ手が付けられなくなったんだろう。

（逆に一人にするのは良くないか…）

とりあえず　落ち着いたところで陽海学園への編入の話をしようと考えた。

第３８話　心優しき人（後書き）

ありがとうございました！

第３９話　実の娘のような…

暫く休憩した後…

『さて！また温泉を堪能してきますか！』

手をグーッと上に伸ばし少し背伸びをした。

＞おんせん？？＜

燦は温泉のことを良く知らなかったようだった。

『ああ、温泉はね…　ん、大きなお風呂かな？　お風呂はお風呂でもお湯に含まれる成分が普通のお湯と違って……』

詳しく話そうとしたが、

？？？

話すたびに？？？が増えているような気がしたので　話すのをやめ。

『とりあえず　普通のお風呂よりずっと気持ち良いお風呂かな？』

簡潔に説明した。

＞そんなに？？＜

『うん。なんだろうな……　疲れがお湯の中に溶けて行くような……　とりあえず入って見たら分かるよ。でも　ここ確か混浴だから先に入ってくるかい？』

＞こんよく？？＜

混浴についてもよく分からないようだった。

『混浴って言うのはね…　普通は男の子・女の子って別に用意しているでしょ？トイレとかさ。で、この旅館は1つしかないから男の子と女の子、一緒に入るって事だよ。』

一通り説明すると……

燦の顔が一気に赤くなっていった。

『ああー　だから！別々に入ろうって話してたんだよ！！混浴だからって一緒に入らなきゃいけないってこと無いからさっ！』

なんで俺まで赤くなってんの！

相手は小学生6～中学1年生なのに！！

ここまで　初心（うぶ）な感じをされたら仕方ないか。燦は娘みたいな感じだしw

＞あ　あの……＜

しばらくして燦が筆談（はな）しかけた。

『ん？なんだい？あ　先に入ってくる？いいよ待ってる。』

笑顔で話し返した。

＞い　いえ…　その…　嫌じゃなければ…＜

再び顔を赤くして。

＞わたしと…　その…一緒に入ってもらえませんか？？＜

『え？』

不覚にも少しフリーズしてしまった…

＞だめ…　ですか…？＜

『だめってわけじゃないけど…　どうしてかな？ッて思って　男だし俺、逆に大丈夫なのかい？』

聞き返すと、顔を赤めながら。

＞わたし…　あまり外の世界のことを知りません…　だから…　1人じゃ不安で。＜

なるほど、じゃあ仕方ないな。

『わかったよ。燦ちゃんが嫌じゃないなら、一緒に入ろっか？』

＞はい！よろしくお願いします。＜

顔は赤くしていたが満面の笑みで答えた。

温泉では…

一通りの入り方を教えた。

シャワー・かかり湯・定番の１００まで数えること……

そして　燦は髪の毛が非常に痛んでいるようだった。

女の子にとって髪の毛は大切しなきゃいけないことを教え、

頭を洗ってあげた。

すっかり借りてきた猫のように大人しかった。

最後は、露天風呂に連れて行き、星空を見上げながら一緒につかった。

頭はヒヤヒヤ体はポカポカこれって何だ?とクイズを出すと、

＞温泉!!＜

っと元気よく筆談(こたえ)た。

（まさかココまでスケッチブックを持ってくると思わなかったが（笑））

そして、温泉から上がり湯冷めしないように早く体を拭いて着替えるように教えた。

もちろん体を拭いたのは燦自身である　。

そして…

『な?凄い気持ちよかっただろう?』

と笑いかけると、

＞うん!　とっても!＜

と　とびっきりの笑顔で答えてくれた。

燦は俺にとって、実の娘のようだった。

第３９話　実の娘のような…（後書き）

下心は無いと思いますよ！！！
多分…ｗ

第４０話　嫁　陽海学園へ（前書き）

展開が早いような……苦笑
とりあえず原作レーンに戻してあげる事にしました。

ちょっとしたネタバレですが…

原作では母親の様な人は出来ましたが、父親のような人はまだ出来てません…
そのかわりになれたら～っとか
考えちゃいましたｗ
失礼しますｗ

第４０話　燦　陽海学園へ

数週間して…

しばらく俺と燦は一緒に行動していた、

人間の世界についてさまざまなことを教え、見せていた。

燦との旅は…

とても…とても楽しい時間だった。

時間がたつのを忘れるかのように…

しかし、やはり一人前になる為には人間との共存についてを…学業を…一通り覚えないと

この人間社会では生き残ることはできない……

そこで俺はそれとなく陽海学園への編入を薦めた。

＞わたし…　お父さんと離れたくないよ…＜

涙ながらに訴えてきた。

燦はこれまで一緒にいろんなところを旅したが、非常に聞き分けがよく、逆を言えば

子供らしくないと心配していたのだが…

（燦が子供らしい発言をしてくれたのは何かうれしいな…　後お父さんって読んでくれたのもなんかくすぐったい…）

微笑みながら燦に話しかけた。

『燦…　何もこれでもう永遠のお別れってわけじゃないんだよ。会いに行くさ。それにこれは君のためなんだ…確かに俺も君と離れたくない。だけど、この世界のこと・学業のことを考えると、やっぱり俺だけじゃ無理なんだよ…』

＞で　でも……　今までだってお父さんいろいろ教えてくれた…＜

もうほとんど泣きながら筆談（はなし）た。

『人間の世界で一人前に働くのは非常に大変なんだ……　学校も出てなかったら尚更…ね。俺も凄く苦労した…　燦には同じ思いをして欲しくないんだ……　必ずまた合いに来るから…俺が約束を破ったことあるかい？』

何かワンパターンのような気がしたが…

＞……無い＜

少し顔を暗めながらもきっぱり答えてくれた。

＞…わかった。お父さんの言う通りにする…＜

最後には　燦は分かってくれた。

俺達は、陽海学園へ向かった。

以前貰ったＶＩＰカードには、妖力を送ることによって　陽海学園のバスとコンタクトを取れるようになっていた。（今まで気付かなかった…　（苦笑））

陽海学園のバスが来るまで2人は、バス停のベンチに座って待っていた。

くいっくいっ

燦がジャックの服を引っ張り、

＞やっぱりどうしても…別れなきゃ駄目なの…？＜

と筆談いた。悲しそうな顔をして…

『燦…』

ジャック自身も燦のことを自分の娘のように思っていた。

離れるのは非常に辛い選択だが…

自分が成すべき（できるか定かではないが）人間と妖しの共存…

ここ最近は燦とともにいることからか、争いがありそうな気配がしても向かってなかった。

まだ子供の燦に戦いをあまり見せたくなかったのだ。

そして他の妖しを攻撃する俺の姿を…

ぎゅっ

ジャックは燦を強く…強く抱きしめた。

想いが、伝わるように……

＞＜

燦はスケッチブック（買ってもらった）を落とし、抱きしめ返した。

（想いが伝わればいいな…）

そんな風に考えていた。

第４０話　燦　陽海学園へ（後書き）

ありがとうございました！

アカーシャさんが親愛なる女性なら、燦は親愛なる娘ですかね？

ヒロイン…どうしよっか……

第４１話　陽海学園？

～陽海学園～

「さあ　付いたぞ。」

バスから降り、

『ああ　ありがとな。』　＞ありがとうございました。＜

一礼した。燦も筆談にてお礼をした。

「ヒヒヒ　いいさ、しかし君はほんとに優秀のようだ。人間界での活躍聞いてるぞ～。流石は冥王の１人といったところか？」

冥王という話を聞き、

『ん？俺は三大冥王とは違うぞ？』

ってか何で知ってんのかな？

不思議だったがとりあえず否定した。

「確かに　呼ばれてはおらんがね、わたしがそう思ってるだけさ…気にしないでくれ。それじゃあまたな。」

そう言ってバスを走らし　トンネルへと消えた。

＞お父さん…冥王って何のこと?＜

燦が不安そうに筆談いたが、

『そうだな、お父さんがずーっと昔にこの学園の理事長や他の仲間達と共に悪い奴をやっつけたから、その名前が付いたんだよ。』

笑いながら話した。

＞ほんとかな?それ＜

クスクスと笑い、談笑しながら理事長室に向かった。

～理事長室～

今回は何事も無くこれてよかった…

あの時（２６～２８話参照）みたいになったらやだったからね。

「やあ　ジャック…思ったより早かったな。連絡は受けている。その子については安心したまえ。既に編入手続きの方は取ってある。」

御子神には燦については一通り説明していた。生い立ち・妖力が高い・

そして正体はセイレーン＞音曲の大妖＜だということ。

＞あ　あの…　よろしくお願いします。＜

筆談で挨拶をした。

「ああこちらこそ。　この学園は君のような孤児も沢山いるからな…　彼らのことを君ならわかってやれるそうだろう?そして　新しい家族は本人次第でできるということもな。」

燦は自分と同じ境遇の子達だ沢山いることを聞いて、

＞はい！＜

力強く筆談(こた)えた。

「説明はこの猫目先生がしてくれる、分からないことは何でも聞きなさい。」

そういい猫目先生がきて。

「はあい！よろしくね！！燦ちゃん。」

元気良く話しかけた。

燦は少し驚き、たじろいだが、

＞こちらこそ、よろしくお願いします。＜

と　挨拶を交わした。

第４１話　陽海学園？（後書き）

ありがとうございます！

これで新聞部部長～銀・灰次の更正～まりんさんとの出会い～マデいけたら良いけど…ｗ

第４２話　運命のときへ…

ジャック　ｓｉｄｅ

（良かったな…）

俺はそんな風に考えていた。

燦は人見知りをしてしまう性格だったのだが、

思ったより早く、学園の先生と打ち解けていた。

『御子神…』

俺は御子神に話しかけた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『何かな？』

神妙な顔つきのジャックに不安を抱きながら聞きかえした。

『くれぐれも燦をよろしく頼む…な　あの子は俺にとって…もう特別な存在だ。』

自分の思いを伝えた。

「…やはり　お前はアカーシャと同じだ。」

確信したように御子神が語った。

『え?』

「お前は…　お前の最大の武器でもあり、弱点でもあるのは　優しさ…　アカーシャと同じな…　優しさだけでは何も変わらないと思っていたが…　その優しさがいずれこの世界を変えるのかもな…」

ジャックにそう伝えた。

『ふ…　そうかも…な。　だが　俺はその感情は絶対に手放さない…　情と言う感情は墓場まで持っていくつもりだ。　御子神…　1つ頼まれてくれないか?』

御子神のほうに向きなおし　小さな宝石のようなものを取り出した。

「これは?」

『これは、俺の魔力で作った精霊石(せいれいせき)だ。　この石を燦に渡してやってくれ。俺の替わりだ…』

それは、あの時(たたかい)と同じような悲しみ…揺ぎ無い決意が表れていた表情をしていた。

『お前…　何を考えている…?　何をするつもりだ?』

あの時の事が脳裏に浮んだのか…

御子神が声を荒げて聞いた。

『ははは！なんでもないさ。　気にするな。娘同然と思っていた燦と別れるんだちょっとナーバスになっただけだ。』

笑いながら答えた。

（悲しみといえば確かに分からないでもないが、あの表情は気になるな…）

御子神は少し不安を消せなかったが、状況を考えると仕方の無いものだと考えた。

「ふ　アカーシャといえば今度モカを預かるという話が出てな。近々来るはずなんだ。」

御子神が話題を変えジャックに話しかけた。

するとジャックは驚いた表情になった。

『…それは　確かなのか？御子神…　モカが来るって言うのは…』

顔つきが真剣になり聞き返した。

御子神は不思議に思ったが、

「娘のモカとお前は面識があるんだろう？なぜそんなに驚くんだ？娘には平穏な暮らしを…それがアカーシャの望みでな、だいぶ前からこの事は決まっていたんだ。アカーシャの性格少しを考えればわかることだろ？」

問題ないと言った様に話した。

『いや…　何でもない。そういえば久しぶりに会うかもしれないからな…　なあ御子神そういえばモカはもう何歳になるんだ?』

『確か…明日が誕生日らしいから、もうすぐ１０歳だな。』

!!!!

再び驚いた表情になった。

「さっきからどうしたんだ?　驚くほどの会話をしているとは思わんのだがな?」

御子神にすればジャックがそこまで驚く理由がわからない為、不思議には思ったが、不安感はそこまで無かった。

『運命の時が近い…か…』

御子神に聞えないほどの大きさの声で呟いた。

「なんだって?」

聞えなかった為、御子神は再度聞きなおした。

『いや　何でもない…』

御子神に背を向け燦のほうに向かって歩き出した。

『燦！どうだ？この学校についてはよくわかったか？』

いつもと変わらぬ笑顔で聞いた。

＞うん！とてもよくわかった！！私学校ってところに憧れていた事すっかり忘れてた…　もう大丈夫だよ！将来…お父さんに迷惑がかからないようにしっかりする！＞

『そうか…　それはよかったな！じゃあ燦少し俺は出かけてくるな。何十年来の友達に会う用事が出来たんだ。』

そう言うと燦は少しくらい表情をした。

『お前はまだまだこの学園で勉強しなきゃな。それに友達も出来るかもしれないぞ？』

頭を撫でながら答えた。

すると、少し暗かった表情が明るくなり、

「うん…　お父さん…　気をつけてね。」

筆談では無く燦自信の声で答えてくれた。

『！！…ああ　ありがとな。』

驚いた表情を見せたが…すぐ笑顔になり、燦に笑いかけた。

『じゃあ　行ってくるな。』

＜気をつけて…＞

筆談に又戻ったが……

（あの一瞬でも十分…だな）

そう思いながら理事長室を後にした。

第４２話　運命のときへ…（後書き）

ありがとうございました！！

第４３話　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ（前書き）

この話はほとんど原作引用ですｗ
幸せの絶頂って感じだったので、好きだったので乗せてみました！

第４３話　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ

ジャック　ｓｉｄｅ

『俺がこの世界に再び来て１年程か…』

陽海学園のバスに乗り俺は朱染城に向かっていた。

（モカがもうすぐ１０歳という事は…　アルカードが復活する時期だな…）

原作を知っている身とすれば、どうなるのかは知っている。

もはや完璧な未来予知のようなものだった。

（だが…　相手の…　アルカードの力量を前回は見余った。そして倒しきれなかった…　やはり変えられないのか？肝心なところは…）

不安感で押しつぶされそうになったが…

己を信じる以外他無かった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

朱染城　ｓｉｄｅ

ドン！　ドドン！

花火が盛大に打ちあがっていた。

それはモカに対する誕生日プレゼントだったらしい。

「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　Ｄｅａｒ　ＭＯＫＡ　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ♪」

『モカちゃん１０歳の誕生日おめでとう～～～～～♪』

一気に会場が盛り上がった。

次はプレゼントタイムに入る予定。

『ジャーン！これ私からのプレゼントよ。モカちゃん、がんばって作ってみたの～～』

そう言って一番手　刈愛は自信の身長よりも大きいプレゼントをモカに渡した。

空けてみると…

？？？のぬいぐるみだった。

モカは何のぬいぐるみかハッキリせずとりあえず、

「わぁ～～い　手作りくまさん！」

っと言ってみたが…

「あはは…一応うさぎさんなんだけど…」

ばっちり間違えたらしい…w

「うさぎさん！嬉しいなぁ！！うさぎさん！」

それでもぎこちない笑顔で喜んだ。

ちょっと複雑だった刈愛だったがモカが喜んでくれた為、さほど気にしていなかったが…

『カルア姉さんて意外と不器用よね～～』

心愛の痛烈な一言で一気に落ち込んでしまった。

擬音をつけるとすれば「ガーン！」がふさわしいだろう。

そして二番手　心愛は小ぶりなサイズなのに鉄製のテーブルを揺らすほどの

重量感のあるプレゼントを出した。

「わたしのはもっと可愛いわよ～」

「はは　何かな？しかしいつもケンカしてるココアがプレゼントを

くれるなんて何か照れる…」

顔を赤面させながらプレゼントを開けると…

バケバケコウモリがでてきた…

「あたしが捕らえたバケバケコウモリのこーちゃんよ！特技は武器に変身すること！モカお姉さまの式神にどうぞ！」

自信満々にモカに渡した。そして手渡す直前に、

『欠点は体重が１００ｋｇもあることだけど　後めっちゃごはん食べるヨ』

その言葉を聞く前に変身したコウモリを持った為、

「重ーーーッ」

重量感たっぷりで一気に両腕と腰が下がってしまった。

「アハハハハ…　え…遠慮するよ」

モカがコウモリを返し心愛の頭の上に乗せてあげた。

「えええええ！なんで！？」

自信満々だったのにまさかの返品に驚いた心愛は声を上げて聞いた。

「こいつは私より怪力のお前向きだし、何よりもうすっかりお前に懐いているじゃないか。」

心愛の頭の上に乗せたコウモリはよほどその場所が気に入ったのか動こうとしなかった。

そして撃沈者は2名になった・・・

「ん～　じゃあ私のは気に入ってくれるかな??」

そして三番手　亜愛はドレスをプレゼントした。

「……！　真紅のドレス…！」

それはモカの可愛らしさにピッタリのドレスだった。

「私達(バンパイア)は１０歳ごろからぐんぐん妖力が伸びて大人の仲間入りをしていくの。それにあわせて服も色っぽいの着なきゃね！」

亜愛は顔を赤面させながら「あいや～」っと想像以上の可愛らしいモカに見とれていた。

そして心愛は　鼻血を出した！　シスコンだな…かなりのｗ

「可愛(クーアイ)♪とってもよく似合うよ！モカ」

満面の笑みでモカに微笑みかけた。

モカは感慨きわまったのか…目に涙を浮べ

「アクア姉さん…みんな…　ありがとう…　とっても嬉しいよ本当に…ありがとう」

会場からは拍手が沸き起こった。

おそらくモカは今まさに最高の幸福感で満ちているだろう…

しかし…　それは　その幸福感は音をたてて崩れていくのだった。

第４３話　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ（後書き）

ありがとうございました！！

本当に幸せそうなシーンですｗｗ

見た事無い人は一回見てくださいね！オススメです♪

第４４話　運命は動き出した

ジャック　ｓｉｄｅ

ジャックが朱染城の傍まで着いたのはモカの誕生日の翌日だった。

（確か　歪みが無いのなら、今日の朝…　アカーシャと亜愛が…）

今の時間じゃ戦いを止めに行くのは時間的に間に合わない…

彼女達が戦うのは　避けられないだろう…

世界はどこまで歪んだのかまでは分からない…少なくともアルカードの力（バグ）は健在のはずだ。

せめてモカの誕生日は把握しておくべきだったと後悔していた。

（後悔してても仕方ないか…　やれる事をやる…だけだ！）

アカーシャだけじゃなく、モカもやられる…　そんな最悪の未来を回避するために…

まだ　少し離れている朱染城へジャックは全力で向かった。

side out

～朱染城～

「後悔してないの？アカーシャさん。モカをここから追い出した事…」

広い朱染城にいるのはたった2人だけ…

アカーシャと亜愛だけだった。

「おおかた…私の「正体」を知って避難させたんだと思うけど…正直意外だったもの。あなた達親子は何があっても離れないと思ってたから…」

「いつも一緒…　当然のように支えあって、誰よりも深い絆でつながっているようだった…　ずっと羨ましいって思ってたな…」

亜愛は少し悲しそうでそれでいて羨ましそうな表情をしてつぶやいた。

「モカはね…すごい難産で…　生まれた時には殆ど死んでいたの…」

じっと窓から外を見ていたアカーシャが口を開いた。

「死んでいた…？」

話が見えなくなりアカーシャに聞きなおした。

「そう…　その時　初めて神様に祈ったわ…そしてあの人にも…
「モカを護って…私はどうなってもいいから…この子だけは助けてください」って…」

あの人??

亜愛は口を挟もうとしたが躊躇った。

「その想いは今も何1つ変わってないわ」

優しい笑顔でアカーシャは言い切った。

亜愛はゆっくり目を瞑りながら…

「…私も大好き…　モカの事、一緒にいるだけで不思議とあったかい気持ちに慣れる。」

「あなたには特に懐いていたものね」

アカーシャは笑いかけながら話した。

「是是(シーシー)♪　性格は正反対なのに逆にそれが相性ピッタリで～♪」

つられて亜愛も笑いながら答えた。

「…だから感謝しているの　あの子を館から避難させてくれて。本当はもっと早くに行動するつもりだった…　でも、モカの事を考えるとどうしても二の足を踏んでしまって　気付けば1年以上が過ぎていたわ…」

亜愛はアカーシャにゆっくり近づきながら…　表情を一気に変えた…

「だってあなたが死んだら　モカは酷く悲しむでしょう?」

はたから見れば…悲しそうな表情に見えるのだが…その顔は酷く冷徹な顔にも見えた。

「私には目的がある　それはかつて最強と呼ばれたアルカードのように「真祖」の力を得ること…　だから血が必要なの　アルカードを倒して三大冥王と呼ばれたあなたの…「真祖」の血が!」

アカーシャは決して笑顔を崩さず。

「それで……真祖になってどうするの?アルカードのように自分を苦しめた人間達の世界を滅ぼすつもり?」

亜愛は少し表情を崩した。

「…いいのよ　遠慮しないで、私は逃げも隠れもしないし、今日この棟に誰も近付かない様言ってある…　邪魔は入らない」

「…謝謝恩(シェーシェー)にきるよアカーシャさん」

アカーシャは笑顔のままで

「　亜愛…人間を苦しめるのだけはダメ…　あの人が命を捨ようとしてまで護った存在だから…それだけは分かってもらうわ…　かかってらっしゃい…あなたが抱えている想い私が全部受け止めてあげる…　」

2人は臨戦態勢に入った。

第４４話　運命は動き出した（後書き）

ありがとうございます！

始まってしまいましたね…

避けられない事って　あるんですねｗ

オリ主！ガンバレ！！

第４５話　アカーシャｖｓ亜愛　…そして甦る魔（前書き）

ほぼ原作引用です。。。

ん～　難しいｗ

よろしくお願いします！

第４５話　アカーシャｖｓ亜愛　…そして甦る魔

～アカーシャＶＳ亜愛～

アカーシャは妖力を抑えている上、相手は義理の娘…相手が悪すぎる。

アカーシャは亜愛の崩月次元刀を防ぎきれず

幾らか食らってしまい傷を負っていた。

明らかに本気を出していないアカーシャに苛立ちを感じた亜愛は

「ん～　どうしたの？私の事受け止めてくれるんでしょ？私が欲しいあなたの「力」…こんなものじゃないはずよ。　真祖とは星のように気高い存在…　その強さは普通の吸血鬼（バンパイア）を遥かに凌ぎ、強大な妖気は漆黒の闇よりも深く…そして美しいのだという…」

アカーシャの血の付いた血を振り払い近付いていった。

「そろそろ見せてよ　アカーシャさん。伝説にまでなった真祖（あなた）の実（ち）力（から）を」

アカーシャは黙って聞いていた。

表情は決して変えず…

「ふふ…　確かに強いのね。でも　あなたこそまだ遠慮しているんじゃないの?この程度じゃ　私にダメージは与えられないわよ…」

シュウウウ　　ジュオオオォォォ

次元刀で付いた傷が…

「……！　何…」

(傷が…　治癒していく…！)

「あなたは自分が思っている程　冷徹な娘じゃないわ。たとえ血が繋がって無くても「母親」の私にはよく分かる…」

全ての傷がふさがり…　初めて表情を崩した…悲しい顔に…

「つらいならやめたっていいのよ亜愛…」

!!!

生涯孤独ですごし母の愛などとは無縁ですごしてきた亜愛は顔を赤くしながらも激情した

「……ッ!何をッ!!」

切りかかろうとしたその時…

「やめてぇぇ!!」

館に戻ってきたモカが叫んだ。

「どうなってるのこれ……　何でお母さんが血まみれなの？　ひどいよ！アクア姉さん　お母さんを傷つけないでぇ」

モカは叫ぶと同時に駆け出した。

「モカっ　どうして戻ったの！？来ちゃダメっ！」

近付いてくるモカに初めて動揺したアカーシャが叫んだ。

「…モカ……」

亜愛はモカを見つめた。

モカが亜愛を見る目はいつもの温かい目じゃない…

怒りの目…　亜愛が見た事が無い目…そして表情だった。

（ああ…　そうか、アカーシャさんの言う通りだね…　私はまだ躊躇ってたんだ…　あなたを悲しませる事　あなたに憎まれる事…おかしいなぁ、出会ったときからいつかはこうなるって分かってたのに…　わかってたのに――――…）

亜愛は目を瞑り上を見上げ…　その次の瞬間ッ

「危ない母さんーーーーッ！！」

次元刀…　アカーシャの体は1つから2つに分かれた、

鮮血が舞い飛ぶ…

亜愛は敵を見る鋭い目で…

「……　お世話になりました」

アカーシャにこれまでの…そして今の対話（たたかい）に対して礼をいった。

「お母さんーーーッ！！！」

倒れた母に駆け出そうとしたとき…

「来ないでモカ…　見ない方がいい…」

亜愛が立ちふさがった。

「どうして……　どうして……」

モカは目を白くし…　涙を流しながら体を振るわせた。

「ごめんね……モカ…　これが本当の私……　昨日館の地下で見せたでしょ？今も眠り続けるアルカードの姿を…　人間を憎み…世界を憎み…その全てを破壊する事で運命に抗おうとした孤高なるバンパイア…」

アカーシャの返り血を舐めモカを見つめた。

その表情は悪魔のような目つきをしていた…

そう1年前館の外で惨殺した中国の妖しを見るような目を…　そして一筋の涙を流し答えた。

「私はその遺志を継ぐアルカードの血族なの…」

モカはその目を見て俯き…呟いた。

『……け…』

よく聞えなかった為、亜愛はモカの方を見直した。

その次の瞬間ッ

「どけぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーー」

ゴッ！！！！

中国拳法をベースとし向上させてきた亜愛が回避できないほどのスピードと重さの蹴りが

亜愛の左側面頭に直撃した。

「がふ…」

ボキンッ　バキバキッ

ドカァアアアア！！

辛うじて防御は出来たが、防御した左手・首の骨が折れた。

そしてそのまま吹き飛ばされた。

「う　ううう　う　うわあああああああああ！！！！」

モカが泣き叫ぶと同時に

モカは凄まじい妖気で包まれた。

「なっ…　こ…これはっ…」

（凄まじい妖気…まるで漆黒の闇があふれ出てくるような…）

「ま…まさか　あなたが……」

亜愛は自分の目が信じられなかった…　なぜならそれはアカーシャにあるはずなのだから…

（真祖……！　そんな…どうして？真祖の力は遺伝しないはずじゃ…）

亜愛が混乱していたその時

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ　　ズ　　ズ　　ンッ

朱染城が大きく揺れた…

運命の歯車は回りだしたのだ…

第４５話　アカーシャｖｓ亜愛　…そして甦る魔（後書き）

ありがとうございました！

最近すっごく暑いです…　熱中症気味ですー！
仕事休みたいー！

愚痴失礼しました…ｗ

第４６話　封印の儀（前書き）

今回も原作引用です…その上長いですｗなんかそればっかな様な気がします…　ううーむ

原作の話に無理やりジャックを入れてみましたｗ

違和感があるかもです～

第４６話　封印の儀

ジャック　ｓｉｄｅ

『ッ！！！あれは！！』

後数秒で館に到着できる距離にまで来ていたジャックが目にしたのは…

館を覆いつくす　巨大な無数の触手だった…

忘れるはずが無い…あの姿を…

『アッ…アルカード…遅かったか…』

館を次々と壊していくアルカードを見てそう呟いたがすぐ気持ちを入れ替えた。

『アカーシャ！モカ！みんな　待っていろ！！』

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

御子神　ｓｉｄｅ

「ちっ…奴（ジャック）の様子がおかしいのと、引き取るはずの娘が来ないから嫌な予感はしていたが…　まさか　このような事に成っているとはな…」

歯軋りしながら朱染城を取り込む触手を睨み付けた。

「り…理事長…」

運転していた神父も冷や汗をかきながら車を走らせた。

御子神は声を荒げながら

「急げ…！　あれは決して眠りから覚ましてはならぬものだ…　あれが再び目覚めれば世界が滅びるぞ…！！」

神父に檄を飛ばした。

～朱染城～

モカはアルカードにつかまり捕らわれていた。

『モカぁ！！』

それを見た亜愛は助けに行こうとするが…

ボコオオオッ

背後より現れた触手に捕まってしまう。

「あッ」

ガブゥッ

その触手の1つ1つには口が付いており、その1つが亜愛の首元に噛み付いた。

「し…しまっ…」

モカと同じように捕らわれる事を覚悟したその時。

スパアァァッ

亜愛に纏わりついてた触手が2つに分かれた。

「…き　気をつけて亜愛　この触手に捕まると血も肉もアルカードに吸収されちゃうわよ…」

亜愛が振り向いたその先には…

「200年の眠りであいつは腹を空かせている　下手に妖気を発すれば「餌」だと思われて…　モカのように狙われちゃうわ」

またもや自分の目を疑った…　そこには…

「…！嘘…　あ…あなたはこの手で真っ二つにしたはずじゃ…アカーシャさん！」

アカーシャが立っていたのだ。

「生憎丈夫な体でね…　真っ二つくらいじゃ私は殺せないわよ」

亜愛は臨戦態勢をとろうとした。

しかし

「ごめんね亜愛…　さっきはあなたのことちゃんと受け止めてあげられなくて」

一瞬で自分の間合いに深く入られた為　亜愛は身を硬くした。

「…本当はもっと力になりたかったけど、このままじゃモカがアルカードに吸収されてしまう…　あなただってそれは望んでないでしょ？」

亜愛に語りかけた。

亜愛は一瞬考えたが…臨戦態勢を解き手を下ろした。

「じゃあ　これからの事…　今のうちにあなたにお願いしておくわね」

アカーシャは亜愛の耳元で何かを呟いた。

「な…何よそれ…　どういう事!?　それじゃ　あなたはどうなるの!?　それにモカは…」

取り乱しながら叫んだ。

「私も…これだけはやりたくなかったけど　仕方ないの…　モカを助けるには他に方法が無いの…　お願いしてもいいわね？　あなたは立派な「お姉さん」なんだから…」

亜愛を見つめ答えた。

「…お…おかー…さん……？」

意識が朦朧としながらも無事な母を見て涙を流した。

「待ってなさいモカ…　私がすぐにそこから助けてあげる」

アカーシャが２００年ぶりに自信の妖力を解放した。

『私じゃ無く…私達が…だろ？アカーシャ…』

「！！？」

突然声がした…懐かしい声だ…　その方を向くと

『遅くなった。アカーシャ　悪い…』

軽く謝罪をした。

「ふふ、そうね…でも以前ほどじゃないわよ？」

『ふふ、まあな。再開を懐かしむのは後回しにしたほうがよさそう

だ…　周囲の触手は俺と亜愛がやる。アカーシャはモカを助け出せ。いいな亜愛！』

後ろにいた亜愛に言った。

「ええわかった。」

突然現れた男に驚きながらも、ジャックと確認しすぐ臨戦態勢に入った。

「たのんだわ。ジャック。」

アカーシャはモカがいる方に向かった。

『モカを返してもらうわよ！』

亜愛が飛び出した。

『崩月次元刀！』

スパアアッ

無数の触手を切り裂いた。

『だめだ！亜愛！こいつらは切っただけではとめられない！』

切り裂いた触手が瞬時に元に戻り亜愛に向かってきた。

ドゴオオオ！

間一髪、亜愛を抱えて回避する事ができた。

『こいつらを止めるには　…こいつが一番なんだ。　『雷の力
自然系（ロギア）』』

左右の手を合わせ巨大な雷の槍をつくる。

『雷神槍（らいじんそう）』

バリバリバリッ　ズガアアアッ

ギエエエエェェェ

巨大な雷の槍はあたりの触手を雷撃をもって蹂躙していく…

『俺の親愛な人達に…又、手を出そうってのか？アルカード…』

睨み付けながら言う。

『…させねえよ！図に乗るな！！』

（凄い…次元刀が効かなかった触手が…粉々になって再生も出来てない…）

「あ　あなた　やっぱり、冥王の1人のジャック・ブロウ？」

亜愛は思わず口に出し聞いた。

『隠す意味はもう無いな…その通りだ。亜愛いいか。この辺りの触手は粗方やった。暫くは復活しない。復活しても決して捕らわれないようにしろ！俺はアカーシャの方へいってくる』

亜愛を地面まで下ろし、伝えた。

「まって！私も…」

最後まで言う前にジャックは人差し指を亜愛の口元に付けた。

『亜愛…お前はアカーシャと約束があるだろ…』

亜愛を見つめて答えた。

「そ　それは…」

俯きながら答えた。

『亜愛…アカーシャが言うように君は立派な姉だ…目的はあったかもしれないが、この1年はお前にとって宝のはずだ…　モカを頼んだ。』

そう言うとアカーシャの方へ向かった。

「ジャック…」

暫く亜愛はジャックが向かった方を見つめていた。

アカーシャは迫りくる触手を蹴りで次々破砕していった。

（数が多すぎる！）

無数の触手のせいでモカに近付ずにいた。

「い　いや…　お母さんッ…」

アルカードがモカの拘束を強めながらゆっくりと後退していった。

（まずい…アルカードがモカを連れて逃げてしまうっ…）

「させるかッ」

触手を無視し　モカのほうへ飛び出した。

その時

アルカードの腕から無数の針のような触手が飛び出してきた。

（くっ　こんなの相手にしてたら間に合わない…）

アカーシャは連れ去られていくモカをみて覚悟をきめた。

『そんな覚悟はしなくていい！』

すぐ後ろまで来ていたジャックがアカーシャを掴んだ。

「ジャックッ！！」

アカーシャを触手から庇った。

無数の針の触手の前で仁王立ちする…　そう…あの時のアカーシャの様に…

ドドドドドドドッ

無数の針がジャックの体を貫いた。

「ジャック！！」

アカーシャは叫んだ。

『アカーシャ！！』

ジャックはこっちを向き止まろうとしたアカーシャに怒鳴った。

『来るな！　…行けッ！』

『…うん』

アカーシャはモカの前に行き　ロザリオを首に架け封印の儀を行った。

第４６話　封印の儀（後書き）

ありがとうございました！

第４７話　さらば…愛しき人達よ

ジャック　ｓｉｄｅ

ジャックはあのアルカードが出した無数の針は単なるの針ではないと瞬時に理解した。

形状が異形だった為だ

針のように鋭いのに凝視すると肉眼で確認するのが難しい程の穴が開いている…

突き刺し…妖気を…あらゆる力を吸収する針だと確信した。

ならばいかに不死のアカーシャでも妖気（ちから）と血を同時に吸われたら…動けなくなる…

そうなればモカを…モカを助けられない…

未来は変えられない…　アカーシャの運命は変えられない…

むしろ俺が来たことによって、アルカードの力が有り得ないほど強大になっている。

そう…　全て（原作）を壊すかの如く…

２００年間も眠らされていたというのにこの妖力（ちから）だ…

アルカードの力（バグ）は俺（バグ）が背負う…

そう思いアカーシャを逃がしたのだ。

せめて…モカだけでも助かるようにと…

『また…　約束を破りそうだな…　モカ達と遊んでやるって言ったのに…な……　燦との約束も…　みん…な…　ごめん…な…』

封印の儀を行うアカーシャ…　そしてアルカードに喰われるアカーシャ…全てを見とどけた後…

ジャックは意識を失い

…そして　アルカードに取り込まれていった。

ジャック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

陽海学園　ｓｉｄｅ

「はあい！燦ちゃんこの記事ヨロシクね！高校生になったら絶対新聞部に入ってね♪」

そう言いながら　猫目先生は学園新聞の作り方を燦に教えていた。

＞うん！がんばるね！＜

笑顔で作業をしていると…

パキャアアアン！！

首に下げていた御子神理事長からもらったジャックの入学祝の宝石が粉々に砕け散った。

（！！お　お父さん…に貰った石が……！？）

それが意味するのは分からなかったが不安感は拭えず

「さ…燦ちゃん？？どうしたの」

燦は涙を流していた……

自分でも涙は止められなかった…

嫌な予感が燦を襲っていた…

第47話　さらば…愛しき人達よ（後書き）

2回も死ぬなよ！
自分で作っといて突っ込んでしまいました…

じつは学生編に飛ぶ伏線です。。

そろそろ小説のストックが無くなって来ましたので…
更新が遅くなるかもです…

付き合ってくれてる方々…
本当にありがとうございます！！

見てくれている方々に質問です！…一気に投稿してるのはどうですかね？？

毎日1話ずつ…とかの方が良いですかね？？

不規則な仕事のため…出せるとき（元気な時！）にバーンと一気に出してるのですが…
意見があれば聞かせてもらえませんか？？
ヨロシクですw

第４８話　切なる願い

アルカード体内

アカーシャ　ｓｉｄｅ

自分自身がどうなっているのかも分からない…

身動きが取れない…

まるで漆黒の闇に捕らわれているような感覚だったが…

アカーシャは安堵していた。

そして体内から封印処理を施したアカーシャは、

後はモカの幸せ…そして庇ってくれたジャックの幸せを願うだけだった。

しかし…

アルカードの体内で…彼女はジャックを見た。

無数の針に刺されまるで磔拷問を受けてるかのような彼を…

（な…なぜ？　彼は…彼の力なら無傷ですんだはずなのに…）

自然系（ロギア）の能力については一通り理解をしていた。
物理的な攻撃は無効のはずなのに…

（どうして！　なんで貴方まで…　あの時はあなたが護ってくれた…だから今回は絶対私が護るって誓っていたのに…）

「ジャックーーーーー！」

呼びかけてもピクリとも動かない…

そして徐々にアルカードに吸収されていくように無くなっていった。

（わ　わたしは　なんて無力なの？　仲間1人助けれないなんて…ただ見ているだけしかできないの…？）

絶望…

その二文字が頭の中にぐるぐる回った…

彼と娘達の幸せ…　それが願いだったのに…

「やれやれ……君、又無茶をして…　はぁ…なんでここまで自己犠牲神を出しまくってくるかな？こいつは…まったく…前世でもこんな感じだったのかな？？」

アカーシャは確かに見た…

アルカードの体内なのに…白く輝く女性を…

（誰！！）

声はもう出せなかったが、必死に出そうとしたら…

「あれ？？君私のこと見えるの？」

こちらに気付いた人？が話しかけた。

（貴女は誰？）

頭の中で会話した。

「君マジで見えてるんだね…　おかしいな？この世界で私のことが彼以外に見えるなんて…なんでだろ？これも歪みが生じたせいかな？」

（何を言ってるの？）

又頭の中で話した。

「見えてるんなら、いっか全て教えちゃおっかな…」

女神　シェリアはこれまでの事を全て話した。（簡潔に）

話した内容は…

ジャックはこの世界の住人ではない事…

そして、彼の思い…

そして、彼と同じ世界から来た私なら彼を助ける事が出来るということ…

（漫画の世界～なんていったらこんがらがりそうだしこれでいいか！見えちゃうのマジでおかしいんだけどな…　まあいっか。見えちゃったのは仕方ないし…）

一通り説明し普通は眉唾で簡単に信じないと思うのだが　アカーシャは信じた。

（彼を助けられるのなら神にでも悪魔にでも祈る）

アカーシャはそんな風に考えていた。

「いや、私神でも悪魔でもなく…まっ　いっか。それよりほんとに貴女を助けなくていいの？普通はこの世界に関与していいのは彼（この世界に転生さした本人から）だけだけど、君にも私の姿見えてるし助けられると思うよ？」

（私がここを出たらこいつ（アルカード）を解き放つ事になるから…）

そう　アルカードに取り込まれた目的は内部より封印するためだ。

ここから出てしまえば再び蘇ってしまう…

「やれやれ…君も彼に負けずと劣らずのおひとよしだね。」

女神は笑っているようだった。

（1つお願いいいですか?私を助けなくていいのでその代わりのお願いを…）

「んー!何でも言って叶えれる事ならしてあげるよ。」

女神は笑いかけた。

（彼の…ジャックの記憶を…消してもらえないかしら…?）

予想外の願いに女神は驚いた。

「その理由は?」

読心術を使うのも忘れ問いだした。

（彼の事…知ってるわよね…?彼がここから出れたとしても私のことを覚えている限り絶対無茶して助けようとするから…もうこれ以上見たくないの…!彼が苦しむ姿を…　お…お願い…!）

それは心からの願いだった…

シェリアはここまで澄んだ心を見たのは初めてだった。

「わかった…　本当にいいのね?彼は貴女を本当に大切に思っているのよ?そんな彼から記憶なんか消してもいいの…?」

（…ええ　お願いします…　彼を…）

意思は固いようだった。

「もう言わないわ、あなたの意志の強さ見ちゃったから…でも1つだけ断っておくけど完全な記憶の消去は無理だからね。記憶の綻びは必ず残ってるから　全てを思い出す可能性もあるって事だけは覚えといてね…」

シェリアはアカーシャに言った。

（わかったわ…　もう…意識が…持ち…そうにない…　どう…か彼…を…）

そして　アカーシャは意識を失いアルカードの体内奥深くへゆっくり沈んでいった…

「あなたの命がけのメッセージ…　確かに受けとったよ…　彼が惚れるのも分かる気がするわ…　約束は守らないと…ね　彼が聞いたらすごい怒りそうだけど…それもすごい剣幕で…　でも、こっちの願いも相当…重いから…」

そうシェリアは呟き　ジャックを救い出し…アルカード体内から脱出した。

第４８話　切なる願い（後書き）

ありがとうございました！！

第４９話　心に開いた穴（前書き）

暑い…　暑いですね…
マジで！
熱中症気味です…
みなさんは気をつけてくださいね！

第４９話　心に開いた穴

？？？　ｓｉｄｅ

ここは…どこなんだろう…

俺は…何をしてるんだろう…

男はまるで空中に浮いているような感覚捕らわれながら。

そんな事を考えていた。

『確か……　俺１度死んで……二次元の世界に飛ばされて…』

そこからの記憶がハッキリしない…

まるで…　心を黒く塗りつぶされ、ポッカリ穴が開いているような感覚に襲われていた。

『……夢だったのか…？　でもまったく思い出せない……　思い出せない…　大切なことがあったような…』

護りたい、という強い気持ちは顕在していたが…

『護りたい…？誰を？』

side　out

女神　side

自問自答している男を見ている者がいた。

（あっちゃあ…　記憶消しても想いまでは消えないんだった…この分じゃすぐに思い出してしまうかも…）

記憶を消し…この世界へ男を誘った張本人…

女神・シェリアだった。

（…あの娘との約束を簡単に破るわけにはいかないからね。…よし！）

シェリアは何かを思いついたのか、男に向かって飛んでいった。

side　out

「やっほー！」

背後から突然声が聞えた為驚いて振り向くと…

『あ！貴女は…確か俺が死んだときに会った…』

女性の姿を見て思い出した。

『そういえば俺…貴女に転生してもらって、そこから確か…』

女性の顔を見ながらなにやら思い出すように話し出したが…

「いやーごめんね!!私の手違いで、ロザバンの世界に送れなくて…　別次元に送っちゃって…　君ずっと亜空間を彷徨ってたんだよ!!!（嘘）」

なーんかぎこちない笑顔で説明を受けた。

『へ?そうなんですか??　でも…今まで何かあったような…　思い出せない夢を見ていたような…』

説明を受けても違和感を取り除けない…

その様子を見ていたシェリアが。

「まあ　私の手違いだったんだから深く考えないでよ!　それより、今度は間違いなく送ったげるよ!準備は良い?」

勢いで…話を折られたような気がしたが…

『まぁ　いっか!じゃさ、前にも言ったけど　三大冥王と…』

っと言おうとしたけど…

「ああ～　ごめんそれ!!　そこの時代には送れないんだ!以前

アナタに言われてその時代に飛ばしたんだけど…　さっき言ったとおり手違いで亜空間に送っちゃって…その間にその時代の話終わっちゃたんだ！送ろうと思えば遅れないことも無いけど…　かなり時間が掛かっちゃうよ？」

（苦しいけど…何とか言えたかな？？）

何とか今までの事を忘れた上で、あの世界（じだい）に帰って欲しいと思っているシェリアは即興の作り話を作った。

『あ…そーなんですか…　女神様でも結構できない事ってあるんですね…』

残念そうにため息を吐いた。

「（…腹立つけど　我慢我慢…）そーなんだよ～　ごめんね！経験不足でさ。時間的に送れるのはそうだね…　一番手っ取り早いのは…　やっぱりシーズン？からかな？？に行きたいって言ってたけど、早くて正確に送るのならそれがベストだよ！」

（ん…冥王と顔なじみになるのが結構楽しみだったんだけどね…まあしょうがないか…　また変な空間に行くくらいなら。）

『そうそう！変な空間にこちらとしても行ってほしくないんだよ！後処理大変だし！』

…この女神人（ひと）の考え読むの忘れてたな…

『はいはい…分かりました。じゃあ　？でお願いしますよ！』

ツッコミを入れず　早々に決めた。

「おっけー！んじゃ！いーってらっしゃーーーい！！」

（なんだ！！空に吸い込まれる！！…あれこんなの前にもあったよーな…）

『って、ううわあああああぁぁーーーーーーーーーーーーーーーー』

……

「ふぅー　とりあえずこれでいっか！後は彼が楽しくあの世界で暮らせれれば！これで記憶がもどっちゃったら…ま、仕方ないって事で！　…とりあえず、あんたとの約束ちゃんと護ったからね…　これで正しかったのかどうかは分かんないけどさ！」

そう言いながら、

シェリアは　姿を消した。

第４９話　心に開いた穴（後書き）

ありがとうございました！

記憶が無いってどんな感じなんでしょうかね？？
やっぱり　分からない事は表現しにくいですねｗ

駄文！失礼しました！

第５０話　学園生活へ（前書き）

いよいよ！原作突入！学園ドタバタ　ボコボコ　ラブ？コメディ（仮）へ突入です！
よろしくお願いします！

５０話までくるって思ってませんでした…苦笑
大した話・文じゃありませんが　付き合っていただきありがとうございます！

第５０話　学園生活へ

ひゅ～～～どさっっ

『いててて・・・・　ん？ここは・・・』

（んんん！！この感覚…前にも何回かあったような…　ああもう！やっぱしわからん！）

心に靄が出来ているようでかなり不満だった。

いろいろ　考え事をしていると…

「ケケケ…　今年は…生徒が増えそうだなぁ…　主よ…感謝しますぜ　アーメン…」

すこーし妖しい～コワ～い感じの神父？が目の前を横切りなにやら落し物をした。

『お！これって…』

その落し物は、陽海学園への入学に関するチラシだった。

『おお！やっぱりそうだった！！　…冷静に見るとすごいな…　こ

れこんな簡単に入学できるなんて…　怪しさ抜群なのにこれで入っちゃった月音って結構なお惚け君だよな…　あ　その家族もかな？
（苦笑）よし！早速俺も入学しよっと！』

チラシを見て即効で入学を決めた。

～陽海学園のバスの中～

窓の外をぼーっと眺めている少年がいた。

「何もかも人並み…　でも　まさか高校受験に全部落っこちるなんてなぁ…」

（んん…　あ～寝てた……　って　あれ月音じゃんか！）

バスに乗り学校に着くまでとりあえず寝ようと考え眠っていた間にもう1人…このバスに乗車していたのだった。

『やあ！』

「うわっ！！びっくりした！！」

いきなり　後ろから声が聞えた為　月音は驚き振り返った。

『君も陽海学園に入学するのかな？』

分かっていた事だが、話の都合上そう問い出した。

「ああ、はい。そうですが？」

『やっぱりそっか。実は俺もなんだ。よろしく頼むよ。』

「こちらこそ。（何か感じのいい人でよかった…結構不安だったし…）　あ、俺は青野月音です。よろしく」

『ああ、俺も自己紹介しないとな。俺の名前は御剣怪斗（テキトーです）って言うんだヨロシク。』

俺達は　互いに自己紹介をした。

自己紹介の後世間話をしていると…

「…あんた達…　話を聞く限りじゃ陽海学園に入学する生徒さんだね？」

バスの運転手が話しかけてきた。

「あ　はい。」　『ん。そうだよ。』

返事をすると…

「ヒヒ　だったら覚悟しておく事だ…　ヒヒヒ　この長～いトンネルを抜けるとすぐ学校だ」

「はああ！！」『ほう。』

不気味な声、雰囲気に驚く月音とその月音を見て楽しむ俺！（笑）

「ヒヒヒ…陽海学園は恐ろしい学校だぞ～～～！！」

「えええええええ！」

月音の驚く声…　そう奇々怪々な学園生活（もちろん月音にとって）が今始まったのだった。

（さ！楽しもう！）

第５０話　学園生活へ（後書き）

ありがとうございました！！

第５１話　記憶の片鱗（前書き）

はあ～　仕事しんどいです…
お気に入りに登録してくれた方々！すみませんおそくなりましたぁ！
ヨロシクです。

第５１話　記憶の片鱗

そして…

長いトンネルを抜け、殆ど別世界といっても過言じゃない陽海学園のバス停に着いた。

「ヒヒ…着いたぞ　少年達…　気をつけてな…」

『ああ！どうもありがとう。』

俺は運転手に礼を言った。月音は放心状態になっていた。

（そりゃそうか…　こんなおどろおどろしい場所じゃな）

楽しみながら見ていたが　やっぱかわいそうかな？っと同情をした。

ほんの少しね　（笑）

「…ちょっといいかな？少年…」

閉まったバスのドアが再び開き運転手が話しかけてきた。

『ん？？何かな？』

話しかけてくるのが意外だったが…　聞き返した。

「いや　君の雰囲気が私の知る友人に似ててね…　君、ジャック

って言う男を知らないかな？　赤みの掛かった茶髪に真紅の瞳の男なんだが…」

運転手は、いつもの（原作）雰囲気じゃなく真剣に聞いてきた。

『ジャック…？？　ん～　知りませんね。』

この世界に着たばかりだし知ってるはずも無い事だ。

「そうかい…悪かったな、引き止めて…　ヒヒヒ…じゃあ頑張ってくれ…」

『いや　別にいいですよ。ではまた』

ズキッ…

突然頭痛がはしる…

（…っ！何だ…）

頭痛はすぐに治まったが…

妙な違和感が頭の隅に残った。

『…ジャック？』

聞いた事ないことは無い…　外国の映画の主役ではこの名前の人物が多いし…

（なんだろ…　この感じ…）

考えていても答えは出なかった。

（とりあえず　月音のとこに戻るか…）

月音の方へと歩き出した。

第５１話　記憶の片鱗（後書き）

御剣怪斗君。

髪色　生前の色と同じ黒。

顔立ち　整った顔をしている。（ご想像してくださいｗｗ）

目　　普段は真っ黒ｗ　　バトルする時は赤くなる模様…

性格・身長は　以前のプロフのままでｗ

ありがとうございました！！

第５２話　赤夜萌香と青野月音　ｗｉｔｈ　怪斗（前書き）

よろしくお願いします！

第５２話　赤夜萌香と青野月音　ｗｉｔｈ　怪斗

頭痛も治まり…

月音の方へ行くと…月音と誰かが倒れていた。

（あれ？　月音誰かといるな…）

何やら　倒れているので近くまでいってみると…

（あ！モカだ！！さっそくの！そういえばここが初めて会う場所だったっけ？月音とモカが…）

それは、倒れたモカの太ももに手をあてがうと言うなんともうらやま…オホンッ　セクハラな展開だった。

『へぇ～　月音もいきなりでやるな～　初対面の美人にいきなりそんな事をするなんてな～』

ニヤニヤしながら　２人に近付いていった。

「い　いや、これは事故で…」

俺の言葉で自分がしたことを思い出したのか、

小さな声で「太もも触っちゃった～」っと言いながら、鼻血を出した。

（やれやれ　メチャ純情っていうのかな？　これで鼻血出すやつ初めてみたｗ）

月音の反応（リアクション）を見ながら楽しんでいると…

モカはいきなり正体を暴露！そして月音の血を吸っていた。

「うぎゃあああ　血ぃーーー吸われたーーーー！！」

「ってバンパイアーーー一　あの十字架とかにんにくが嫌いな！？？」

いろいろ忙しいやつだ…　まあ仕方ないといえば仕方ないか。

『月音。もーちょい落ち着いて話せ。こんな美人相手に落ち着けんのはわかるが　いくらなんでもやかましい。』

半分呆れ顔、半分にやけ顔で言った。

「でもーーー　血吸われたんだよ！！」

パニックになっていた…　笑

「はい　ごちそうさまです　あなたの血ってすご～～くおいしいんですね！すごい…」

『ははははは…』

笑いしか出てこないな…　なんとも賑やかな

「あ！あなたも新入生ですか？はじめまして！私は赤夜萌香（あかしやもか）って言います！こうみえてもバンパイアなんです。あなたは月音の友達ですか？」

っと　またまた正体を暴露した。

まあ…知ってるんだけどさ。

『あ！こちらこそ　よろしく！　俺の名前は御剣怪斗（みつるぎかいと）っていいます。後彼とは学園に来るバスの中で初めてあったからね。まあこれから・・・って感じかな？君と同じで。』

「そうですか。私も1人で不安だったんです・・・　こんなわたしでよかったら友達になってください！」

『いいとも、こっちこそよろしくね！　…そろそろ落ち着いた？月音』

挨拶を済ませると、月音の方に向いた。

「あ　ああ　うん…大丈夫大丈夫…こっちこそあらためてよろしくね。モカさん、怪斗」

（バンパイアっていったい…でもって　なんで怪斗はナチュラルに会話できてるのかな？）

不安でいっぱいだったが、（主に月音がw）とりあえず陽海学園へと向かった。

第５２話　赤夜萌香と青野月音　ｗｉｔｈ　怪斗（後書き）

ありがとうございました！！

第５３話　陽海学園の正体（前書き）

よろしくお願いします！！

第５３話　陽海学園の正体

「えーみなさん、ようこそ！陽海学園に！　私はこのクラスの担任になった猫目静（ねこのめしずか）です」

入学式が終わり…　教室で説明を受けていた。

（良かったなー　同じクラスになれて、月音とモカの！）

別クラスになってしまったら、楽しみが減ってしまう…　この偶然に感謝していると…

担任教師がこの学園の学ぶべき事・人間と妖怪について…一通り説明をしていた。

（あ！メチャクチャ動揺してるｗ　席後ろだからよく分かるんだよね～）

担任の説明の時俺は　月音の方を見た。

案の定　体ごと左右に動いたり突然震えだしたり…

気持ちはわかる…

とても不謹慎だと思うけど…

（やばい…　反応（リアクション）がおもしろ！）

俺は声に出して笑いそうになるのを必死に抑えていた。

「センセェ～～　人間なんてみんな喰ってしまえばいいだろ　美女なら襲えばいいし」

そこで生徒の１人が過激な発言をした。

たしか…　砕蔵？だっけ？はぐれの・・・

過激な発言だったが、

そこはやっぱし陽海学園！

「おおーーー　カゲキーーーー」

って盛り上がるばかり。

そう１人を除いて

月音　ｓｉｄｅ

（ひいいいいい）

頭の中が混乱！の文字がうろうろしていた。

（何だーーー！！？　何だこれ）

月音はバスの運転手の言葉を思い出し、体を振るわせた。

その最中…

「この学園は結界の中にある学園ですからね！ここの存在を知った人間には死んでもらってます！　なんっちゃって～」

クラスが笑い声で包まれる…

（ひいいいぃ　オレ正体バレたら殺されるーーー！　何でだ??何で人間のオレがこんな学校に・・・?）

月音は親父に貰った妙な学園入学チラシを渡され、入学したのを思い出した。

初めはかなり不安で入学を拒否したが、

何せ全ての志望校に滑った親不孝息子…

全力で拒否するのはさらに親不孝者だろう…

そしてしぶしぶ入学したのだった…が…

（親父ーーー　確かに高校も入れないの親不孝だって思ったけど流石にこんなとこやっていけないよ！！　早く…一刻も早くオレここから逃げ出さないと…）

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

怪斗　ｓｉｄｅ

（いやはや　席教室の後ろの方でよかった！！）

ちょっと性格悪いかな？っと思いつつ、明らかに挙動不審な

月音の姿を楽しんでいたｗ

（まあ　いきなりこんな学園（とこ）にきたらこうなるのも無理ないか…

影ながら応援するぞ～　月音！）

とか何とか考えていると…

遅れて入ってきた生徒がいた。

第５３話　陽海学園の正体（後書き）

ありがとうございました！

第５４話　モカとの再開（前書き）

よろしくおねがいします！

第５４話　モカとの再開

モカだ。

「すみませんっ！入学式の後後者に迷ってしまって…　遅れました」

「あら大丈夫よ　空いてる席に座って　まァかわいーコ♪」

モカが入ってきたら教室は大騒ぎ！

「美しい！」「こんなことクラス同じになれて幸せ～！」「変化にしてもあんなに美しくなれるやつなんていないぞ…」

なーんて会話の嵐…

（確かに改めて見ると綺麗な子だな…）

クラス中が盛り上がってるその時、

モカは月音を見つけると抱きついた！

この行動にクラスは大騒ぎ。

「やあ　ご両人。今は一応授業中だよ。愛し合うのは学校が終わってで良いんじゃないか？」

抱きついているモカに皮肉を交えながら話しかけた。

「あ…　カイト！！あなたも同じクラスだったの！？うれしい！！
2人ともいてくれて！！」

『おおっと！！』

月音の腕を組んだ状態で、怪斗の腕も空いたほうの腕で組んだ。

両手に花（男版）である。

（流石に恥ずかしいかな…）

月音、モカ、怪斗は改めて挨拶をし、それぞれ机に付いた。

HRも終わり…

3人は学校内を探検していた。

「すごいね！！この学園！廊下とかも広い！　2人ともあっち見てみようよ！！」

「う…うん　そーだね」『コラコラ…廊下は走らない。なんてな！』

「だって時間すごくもったいないし！」

手を繋ぎながら足早に校内を移動していた。

（な…　何だコレ　夢だ今日はまるで夢の中にいるみたいだ…　こ

んな幸せな思いできるなら　妖怪とかどーだっていいかもーーーッ）

明らかにぎこちない対応を月音はしていた。

（やっぱし、オモシロイな月音ｗ　反応（リアクション）が！ウブすぎ…　ん…？オレも結構シャイなのに何で結構スムーズに会話してるのかな？？）

何か引っかかるものがあった。

まるで前にも会った事があるような…

（な　わけないか…）

気のせいだろうと深く考えるのを止めた。

っと頭の中で考えていると、周囲が騒がしくなってきた。

「うわっ！！美しいッ」「あんな美少女見た事ねえぞ！！」「つっ…　つきあいてぇ…！」

初めは→のような会話だったが…　次第に怒気・殺気が混ざりながら…

「両手の男は何だよコラ…」「知るか！どけよッ！！コラッ」「どかねぇえと殺すぞテメェ達（ら）」「殺す…」

→っ的な声が聞えてきそうだった。

当然の如く月音は悪寒を感じ、体を震わせていた。モカには感じておらず「？」って顔をした。

オレはもちろんスルーw

「へぇ～　やっぱカワイイな～～」

前にいた男が話しかけてきた。

第５４話　モカとの再開（後書き）

ありがとうございました！

第５５話　困ったナンパ男（前書き）

よろしくお願いします。

第５５話　困ったナンパ男

前に立った男はクラスメイトの・・・

「あんた赤夜萌香(あかしやもか)っていうんだってな　オレ　同じクラスの小宮砕蔵(こみやさいぞう)！よろしく！」

周囲の怒気・殺気がおさまり…ざわめき出した。

「ところで　何でアンタみたいな美人がこんな男達(ら)と仲良くしてんだ？つりあわねぇだろ？」

砕蔵は怪斗を突き飛ばし、月音の襟首を掴み持ち上げた。

「きゃっ！！」『おっと…』

怪斗が突き飛ばされた為、モカはバランスを崩し怪斗の手を離した。

モカが倒れそうだった為、空いたほうの手で支えた。

「うわわっ！！？」

月音はまったく手が出ず成すがままの状態になっていた。

（こいつっ…さっきの…）

月音が砕蔵の事を思い出しているその時、砕蔵は乱暴に月音を叩き

下ろした。

「砕蔵だ！あいつあの小宮砕蔵だよ」「何でもタチの悪いはぐれ妖らしくて相当女好きで人間の女襲ったりしたらしい…」「人間社会で問題起こしすぎてムリヤリこの学園にぶち込まれたらしい」

また周囲がざわめきだした

「こんなクズみてぇな男どもよりオレの方がずっとマシっしょ？今から2人でどっか遊びに行かない？」

さらに一歩近寄り

「なあ？ちょっとつきあってよ」

「わ！」

顔を近づけてきた。

（モカさん月音を連れてここから離れて！俺が話しつけるから）

小声でモカに伝えた。

（でも…）

（いいからさ！ここ学校だよ！とって食いやしないでしょ？）

軽くウインクをして小声で話した。

モカは頷き

「ごめんなさい！！」

っと言いながら月音の手を握り走って離れた。

月音はその行動に赤面ｗ

（普通は男が女の手を引っ張って助けてあげるんだよ？？月音君？）

その姿に苦笑しながら砕蔵の方に向いた。

「オレは…にがさねぇぜ…　お前みたいないい女…」

舌なめずりをしながら呟いていた。

『女はもっと丁寧に扱うもんだぞ？砕蔵君？』

ため息を吐きながらもっともな事を言った。

「へっ…　うるせぇよ。女にフラれた分際でエラソーな事言うんじゃねェ！」

イキリ立ってきた為…

『いやっ　お前「ごめんなさい！！」って　言われてんじゃん…

そう考えたら俺よりやばくね？断りの定番だろ？ごめんなさいってさぁ…』

的外れな事を言われた為、さらにため息を吐き言い返した。清清しいカウンターのようにｗ

「んあ！！　何だと！？テメェ！！」

この言葉で切れたのか、

手の形状を変え殴りかかってきた。

『よっと！』

その拳をサラッとかわし、

『俺は　つまんないケンカはしたくないんでな。じゃあな　連れを待たしてるもんで』

「なんだ！逃げんのかコラァ！！」

っと砕蔵が振り返った先には…

もう怪斗はいなかった。

「っけ…覚えてやがれ　モカを手に入れた後はテメェを潰してやる…」

悔しそうに砕蔵は廊下から姿を消した。

第５５話　困ったナンパ男（後書き）

ありがとうございました！

モカさんは渡さないし、潰されませんね！

なんてｗ

第５６話　あれ能力は？

怪斗　ｓｉｄｅ

『さて…　モカと月音はどこかな？』

怪斗は一通り学園内を散策していた。

『あ！そういえば、能力確認しないと…　展開が早くて確認できなかった…』↑　《ごめんなさーーい！！》

（ん？何か聞えたような…　まあいいか、）

いきなり校舎で技なんかぶっ放すと流石にまずいので屋上に移動する事にした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

シェリア　ｓｉｄｅ

そんな怪斗を見ている女性がいた…

「ヤバ！！　能力そのままにしてたら、流石に前の仲間達に正体ばれるかも…　それで思い出したりしたら…」

たった数日で思い出されてしまったら…

流石に彼女に悪いわね…
見ていたのは女神シェリアだった。
「よし！」
何か思いついたのか、
怪斗の方へ向かった。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
怪斗　ｓｉｄｅ
『さて…　能力確認確認！』
ん～実際悪魔の力ってどうやってるのかわからんし・・・
（ん……　何かそれらしき感じないな…）
思い浮かべても、何やら集中してみても何にも起こらなかった。
（確かに、体術は申し分ないね…　一瞬で動けたし…　確か縮地法？って言うのかな？　でも肝心の自然系は～？）
考えても分からない為、とりあえず…
『この鉄パイプで自分をちょい　どついて見るか！使えてるのなら無効のはずだし』

屋上に落ちていたいかにも不良が使いそうな鉄パイプを持ち…

『そりゃ！』

自分に向かって打ち下ろした。

スカーーン！！

『いったーーーーーー！』

ある程度加減したとはいってもそこは鉄のパイプ！

おまけに頭に打ち下ろした為…

『痛い…　クラクラする～…』

フラフラしながら立ち上がった。

『何だよ…　あの女神さんちゃんと付けてくれてないじゃん…！もー！欠陥能力じゃんか！！』

第５６話　あれ能力は？（後書き）

ありがとうございました！！
能力が消えたーー！！

ってか　消されたんですがねｗ
あの人に　笑

第５７話　精霊魔導師（前書き）

なにやら

お気に入り数約４００、

総合評価で１０００も

付けてくれてました。

駄文に付き合っていただきありがとうございます！！

本文ですーよろしくお願いします！！

第57話　精霊魔導師

いろいろ騒いでいると…

「や！！」

いきなり　後ろから声が聞えた。

（…この展開は…）

後ろを振り返ってみると…

『やっぱり　女神（あなた）か！！』

姿を確認すると声を上げて話した。というか叫んだ。

「いやー　君が私のこと噂してるんじゃないかな～って、思ってちょっと降りて来ちゃった」

（絶対嘘だ…どっかで見てたんじゃないか？）

「あはは、まあ細かいことは無しにして…　本題に入るけど…　ゴメン！！」

いきなり笑顔から真剣な顔になり手を合掌させ謝罪をしていた。

『…何がですか？って聞こうと一瞬思いましたが、いいです。能力の件ですね？』

考えを全て読まれる為、何の事かは分かっていた。

彼女の考えの方はちっとも読めんのに…

「私の考え簡単に読めると思ったら大間違いだよ～！　なにせ女神様だし♪」

ちょっと前まで謝罪してたはずなのにあっという間にケロッっとした顔をしてた…

『はぁ～…　良いですよもう。　で？頼んだ筈の自然系（ロギア）の力は？後最終的に俺って何が出来るんですかね？』

とりあえず、考えを読まれる為　思った事すぐに伝えた。

「えっとね…　ワン○の自然系（ロギア）だけど…　やっぱし君はバグが起こる体質？なんだね…もしくは私のせい？分かんないけど　所謂エラーが出て使えなくなってるのー。ちゃんとインストールしたんだけどな～　いやー不思議！」

話し方を見るとついさっきの謝罪の感じは綺麗さっぱり消えていたw

「まーまー　そう睨まないでよ！　てなわけで、君に新たな能力をあげる為に来たんだよ！」

その一言で怪斗はとりあえず嫌な顔を止めた。

『ホントですかー？もー貴女には何度いっぱい食わされた事か…』

「あはは…　ちょっと否定できないのがあれだけど、とりあえずこれをどうぞ！」

そう言ってシェリアは拳より少し小さい赤く光る宝石を差し出した。

『ん？何ですかソレ？？　俺男だから宝石もらってもそこまで嬉しくないんだけど…』

金が欲しくないってわけじゃないが、生前は確かに欲しかった！！

何度宝くじに願ったか…　（苦笑）

しかし…今は金では決して買えない事をしている為か、そこまで執着は無かったのだった。

「ちがうちがう！お金だったら直接現金で渡すよ！その方が簡単だし　こんなまどろっこしい真似しないって。」

もっともらしい事を言ったのでとりあえず納得した。

『で？コレは？？』

改めて聞きなおした。

「これはね精霊魔石（エレメンタルトゥルー）っていって、とりあえず、君最初に魔道士って言って（考えて）たでしょ？　これを体内に取り込んだら使えるようになるよー！」

一通り説明を受けたが…

『じゃあさ…　自然系（ロギア）を使える石とかないの？その方が良いんだけどさ～』

もっともだ。

元々の希望はそっちだったから、

何よりそんな昔（Ｐｒｏｌｏｇｕｅ・・・死と旅立ち！より…）の事良く覚えてるよなこの女神（ひと）…

「記憶力はいい方だからね！んで自然系だけど…　あれ結構大変なんだよ？パソコンに例えたら容量が異常に高いんだ…　何せ体の構造をまったく別物に変えるんだからね～　初期段階でプログラミング成功してたら問題なかったけど～　壊れちゃってるみたいだから…　一から書き直すとなるとメチャ時間がかかる…　希望通りに作っても今回みたいなケースもある訳だから、成功するかもわかんない…　だからとりあえず～コレ試してみてよ！」

ん…なんとなく分かったような…わからんような…

とりあえず自然系（ロギア）は、諦めろと…

（チート使えない二次元転生ってな…　まあコレも修行？って感じで考えとくか…　無い物は無いんだし。）

「そそ！無い物は仕方ないって！ってな訳で…早く使ってみてよ！」

『はいはい！分かりましたよ！』

又読まれてしまった…っと思いながら、宝石を体に身に着けてみる

と…

体に入ってしまった！通り抜けるように。

『いや！ちょっと！！入っちゃったよ？……お！』

何やら体の奥から…

……

……

…

『何にも起こらんやんか！コラァ！！！！』

期待したのに…

「あははは！いいよ！ナイスそのボケ！」

女神大うけ俺はボケ？

どうでもええわ！

「まあまあ落ち着いて！もう来てるはずだよ？」

『ん？あれ…？そういえば…』

頭の中で…呪文？見たいな文字が…　それに図形が…

「分かった?君はこれからは精霊魔導士!まあ早い話、今思い浮かんだ文字はご想像通り詠唱文だよ!それ唱えたら使えるって訳、んでまあその辺のＲＰＧみたくレベルが必要!!っとかは無いから安心してね～ｗ」

（……これはこれで面白い力だな…）

「ありゃ?放心してるね～　まあ気に入ってくれたならそれで良いよ!んじゃね～」

そう言って女神シェリアは消えた。

『ってあれ?もういなくなっちゃった…　一言礼言わせてくれても良いじゃん…』

そう言いながら自分の力を確認しつつ、教室へ戻った。

シェリア　ｓｉｄｅ

「……よかったぁ～　即興の作り話にしては良く出来たかな?? しかし疲れたね…　もうそろそろ業務外ってことで…　眠いし…　まあ　後は何とかなるでしょ…」

大きな欠伸を１つ

シェリアはフラフラと飛びながら、

空へと消えていった。

side out

第57話　精霊魔導師（後書き）

ありがとうございました！
精霊魔導師……
無敵な体じゃないけど、
そこはやっぱり主人公　（笑）
強いと思います！
苦笑
ジャックさんよりは弱いと思いますが…

第５８話　人間と妖（前書き）

よろしくお願いします！

第５８話　人間と妖

それから…

月音とモカの３人で校舎内を探検した。

並び的には、モカ、月音、俺の順番。

（なんか…この２人初々しい感じがするから、横で見ているほうが楽しいんだよね♪）

そう感じながら、探検を続けていた。

「２人とも！あっちにいってみようよ！！」

モカは、月音の手を握る。

「う…うん！」

まだ全然なれてない月音はメチャ動揺しながら返事をした。

（おい！もうちょっとナチュラルに返事してやれよ月音）

小声で耳打ちした。

（む…無理だよ！なんか幸せすぎて…目まいが…）

ダメだこりゃ

まだ時間がかなりかかるなぁ～って考えていると…

「ほら！カイトも！」

モカは空いたほうの手で怪斗の手を握った。

月音・モカ・怪斗の順番になった。

『ははは…』

やわらかくて小さな手だな…

……

（なんだろ？やっぱり初めての感触じゃ無いみたいだ…　気のせいか？ううーむ…）

そう感じながら、学園探検を再開した。

「見て！月音！カイト！ここがこれから生活する学生寮だって！」

『ん？？』「寮…？」

モカが指差す方を見てみると…

『ほう…なかなか味のある校舎だな…　ピッタリといった感じかな

？』

吟味するように校舎を見ていた。

横で月音はプルプル震えていた（笑）

（ええ！！変わってない？？怪斗！こんな不気味なとこだよ！！）

（？？　そうか？この学園にはピッタリって言う印象はあるけどなかなか良いと思うぞ？）

（うそ！！）

（ほらほら！こそこそ話してないで、モカが折角ふってきたんだ、話せよ。）

男同士の秘密会議終了～

「ね…ねえモカさん、こ…こんなとこで3年間も生活を…」

っとモカの方を見てみると…

「すてき…♪威厳と風格のある建物…」

うっとりと見とれていた…

『だよな…』

怪斗も同意し話をあわせた。

「えええ！モカさんも！？うそ！　趣味変わってない！？」

まさかのモカの発言に驚きながら話すと…

「あれ？つくねってば、こういうの苦手なの？妖怪のくせに　そういえば　つくねとカイトは何の妖怪なの？」

（あ…　一気に血の気が引いたみたいに顔白くなってる！会心の一言だな）

つくねはそんな顔をしていた。

「え…いやそれは…」

ワザとらしい咳をしながら

（に…人間なんですけど…）

っと考えていた。

「あ…　正体バラスのって校則違反だっけ？ごめんね　今の質問ナシ！」

あはは～っと笑いながらモカは話し…

つくねもあははは…っと笑いながら話していたｗ

『まっ、今は授業中じゃないし…よく見ると周りは俺たちだけだし

…俺は別に良いよ言っても。モカさんも教えてくれたしね。つくねはねがすっごい真面目そうだから言えないってのも分からなくは無いけどさ』

つくねは、カイトが正体をバラしてもいいと言った言葉でメチャ動揺して、

次の軽いフォローにはメチャ安心していた

「ホント？ありがと～！！じゃ、つくねには又いつかおしえて貰うとしよっかな？」

モカは笑顔で話した。

『ん。俺はね、精霊魔導師（エレメンタル・マスター）だよ。』

校則違反2人目！正体カミングアウトをした。

「えええ！それって何かの本で見たことあったけど、確か存在だけは確認されているけど実態は分からないって言う種族だよね？一説には魔術師の祖先って言われているとか…」

モカは手を口に当てながら興奮したように話した。

「そ…そんなにすごいの？？」

バスで話したり、校舎で話したりした感じは普通の感じがしていた為、

つくねは、驚いたように話した。

「そうだよー　つくね！すっごいレアだよ！空想上の伝説の存在って言われてるんだよ？」

『ははは…　確かにそんな感じだけど。普通に話してね？正体とか抜きにしてさ！モカさんもバンパイアって西洋の大妖怪なんでしょ？俺もお目にかかれて光栄！って感じだったよ。』

興奮しっぱなしのモカを落ち着かせるように話した。

「そんな事無いよ！私なんて！　　でも…そうだよね！友達になったんだし…　えへへ　そういうのは何かおかしいよね！ゴメン」

とりあえず落ち着いた為いつもの感じに戻った。

（2人とも…　スッゴい存在なんだ・・・モカさんもこんなにかわいくてやさしいし・・・カイトは初対面の俺に対してやさしい学園唯一の男子だし…　本当に人間じゃないのか…）

つくねは放心しかけながらそう考えていた。

『つくねも俺のこと普通の友として扱ってくれるかな？』

第５８話　人間と妖（後書き）

ありがとうございました！

第５９話　胸元の十字架

ただいま放心中です！！って感じの…

そんなつくねを見ながら話した。

「え…　あ、うん！もちろんだよ。……そんなに凄いって思わなくて…　ちょっと驚いたけどもちろんだよ。」

ちょっと遅れて答えた。

その目は真実を語っている目だった。

「そういえば2人ともどっから見たって人間にしか見えないよ？本当に…その…」

言葉に詰まりながら聞いた。

「うん　もちろん。」

『そうだな…ちょっと見せてやるか。』

カイトは脳内にインプットされている術の一番初級であまり害の無い力を選び。

『いくぞ？　焔の追撃・・・』

掌の上に拳大ほどの大きさの炎をだし…

『氷結せし飛沫…』

炎を一瞬で凍らし　手で砕いた。

『まあ　手品みたいだからあんまり驚かないかな?』

2人のほうを見てみると。

「そんなことないよ!凄かったよ!!」「う…うん!凄い!!(あんなの見せられたら信じる以外無いよな…　仕込みって感じしないし…)」

っと答えた。

「わたしはね…　カイトみたいに見せられないんだ…人間っぽいってのもしょうがないの。」

そして胸元の十字架(ロザリオ)を見せ、

「私はね、この胸のロザリオを外すと凶悪でコワ〜い　本物のバンパイアになるんだよ。私はもともと争いとか嫌いだからさ　自分からロザリオを付けて力を封印してるんだ。」

「…ロザリオ」

(凶悪なバンパイアになるっていうのは信じられないな・・・)

『なるほど・・・正体がバンパイアなのに十字架(ロザリオ)を付けてるからお

かしいと思ったけどそういう理由だったんだな。』

モカの説明を聞き2人は言った。

『でも、モカさん、本物のバンパイアって言うのはあまりいい発言じゃないと思うよ俺は。』

「え?なんで??」

カイトの言葉を聞いて少し驚いて話した。

『そういう言い方すればさ、今のモカさんが偽者って言う風に聞えたんだ。そんな事無いだろ?モカさんはモカさん、そして『力』を持ったバンパイアもモカさん・・・だろ?　つくねもそう思うよな?』

「うん!そうだね・・・!俺もそう思うよ。」

つくねはいろいろ有り驚きっぱなしだったが、カイトの言葉には嘘偽り無く同意した。

「…　2人とも・・・どうもありがと・・・」

少し涙目になりそうにモカが話した。

「あ　でもね、封印しても『血』は欲しくなっちゃうんだ!」

あれ?さっきの感動の表情は??

って聞きたかったが…

スルスルっと俺は後退しつくねを前に行かせ・・・

「ちょっ・・・カイト！　あっえっ・・・わ　モカさ・・・」

至近距離までモカが来ていたので顔を紅潮させたその時。

「すきあり♪」

かぷり！ちゅー　ちゅー　ちゅー

「いってえええええェェェ」

『ははははは・・・』

微笑ましくも見えたため、暫く2人を眺めていた。

第５９話　胸元の十字架（後書き）

ありがとうございました！

第６０話　ナンパ男の嫉妬

カイト　ｓｉｄｅ

『ううーん・・・眠い・・・　あー　もうこんな時間か・・・』

目が覚めるともうすっかり朝だった。

『昨日はいろいろあったしな・・・　疲れじゃないと思うけど・・・
いい夢見れたし！　さて、学校に向かいますか。』

一通り身だしなみを整え制服に着替えて学園方面へむかった。

『あれ・・・？まだ全然生徒がいないや・・・』

いない筈、今の時刻は学園の時計で６時だった。

『あらら・・・あの部屋の時計・・・メチャずれてるじゃん。ふう・
・・　暫くうろうろするか・・・　教室でじっとしてるのもつまら
ないし。』

カイトはそのまま教室には行かず、歩き出した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

（夜が明けてしまった・・・　万が一に備えて退学届けなんて書いちゃったけどオレ本当にこの学校に残るか辞めるかどっちにしよう・・・　モカさんやカイトと別れるのも・・・）

あまり寝れなかったのか、つくねはげっそりとした表情で登校していた。

そこに・・・

「まてよ・・・　色男」

男がいきなりつくねに掴みかかってきた。

（砕蔵ッ！）

「テメェ　昨日は赤夜萌香と遊びほうけたらしいなッ　許せねぇッ何だてめェは！！」

ものすごい・・・　清清しいほどの嫉妬（ジェラシー）だ。

砕蔵はつくねを掴むと学園を囲んでいる壁に叩き付けた。

「が！？」

背中に走るあまりの衝撃でつくねは声を上げた。

「テメェの正体は何なんだ？ああ！正体はッ！！」

腕に力を入れながら、詰め寄った。

（やっ　やばいっ・・・　人間ってバレたら殺されるッ）

「正体??　オ…オレは　そのっ・・・　バ・・・バン　パイア・・・とか」

つくねは妖の種類をよく知らなかった為とっさに思いついたバンパイアを名乗った。

その言葉にイラついたのか砕蔵は、わざとつくねを外すように壁に拳をいれた。

ガコーーーーーン!

「うわーーーーー」

コンクリートの壁は粉々になった。

騒ぎになるかと思いきや、

そこはサスガの陽海学園!

「おおーーーー」　「パンチで壁がコナゴナに!!」「ほーーーー」

拍手喝さいがあがった。

「バンパイアだと!!バンパイアは不死で凶悪な西洋の大妖怪だぞ

！「力」にかけては妖怪一とも言われる！！テメェがそのバンパイア！？　ふざけんなッ！」

手のみ擬態を解きつくねの頭部を軽く鷲掴みに出来るほどの巨大な手でつくねを威嚇した。

「ひーーーー！手がっ・・・」

完全に腰が抜け立てなくなったつくねを見て。

「とにかくテメェ　二度とモカに近づくんじゃねぇ　次にあいつと話しただけでも殺すぞ！もう1人のやつにも言っとけッ！」

そう言い残し歩いていった。

「・・・・・・」

つくねは言葉が見つからなかった。

第６０話　ナンパ男の嫉妬（後書き）

ありがとうございました！

第６１話　人間と妖・深い溝（前書き）

よろしくお願いします！！

第６１話　人間と妖・深い溝

（シャ・・・シャレにならない・・・）

つくねは寮から急いで荷物を持ってきてバス停近くの墓場まで来た。

（ヤバイ！ヤバすぎるッ！素手でコンクリ　ブッ壊すし・・・　妖怪怖すぎるッ！殺されるーーーーッ）

墓場でバス停の方へ行ったり来たりしていた。

カイト　ｓｉｄｅ

『・・・ふあああああ・・・ムニャムニャ・・・　いかんいかん二度寝してしまってた・・・』

カイトは暫くはうろうろしてたが、やっぱし眠たかった為、木の上で暫く眠っていたのだった。

『ん・・・？？あれつくねとモカじゃん・・・何してるんだろ？？・・・降りるか。』

そう言い、木から下へ降りて言った。

side out

「ダメ！人間の学校なんて行っちゃ！　私人間なんて嫌いだもん！」

その一言でつくねは表情を曇らせ固まった。

「私ね…ね　実は中学まで人間の学校に通ってたんだ・・・　人間なんて誰も妖怪を信じてないから自分が変に思えてくる…　私は皆と違う私はいない方がマシだって思えてきて……　孤独だった・・・ずっとずうっと辛かったの・・・」

つくねは複雑な表情でモカの話を聞いていた。

「でも！つくねやカイトがバンパイアでもいいって言ってくれたから　私初めて一人ぼっちじゃないって思えたんだよ・・・」

笑顔・・・どこと無く寂しい表情と笑顔が混ざった・・・そんな表情で話し、

「言っちゃダメ！この学校で一緒にがんばろ・・・」

「もし！！」

！！突然つくねが話し出したため少しモカはたじろいだ。

「もしオレがその・・・君の嫌いな人間だって言ったら・・・それでも引き止める？」

「え・・・？」

予想外の言葉に表情が固まる・・・

「人間・・・なんだ　人間なんだオレ！　何かの間違いでこの学校に入っちゃったけどモカさん達とは違うんだ！」

「・・・・・・・・・！うそ・・・・！人間がこの学校に入れるわけーー・・・　うう・・・」

一歩・・・いやおそらく半歩ほどだろう。

モカは後ろに下がった。

それを見てしまったつくねは・・・

「モカさん・・・オレが人間って分かったとたんそんな顔をするんだ・・・　そうだよ・・・な・・・　カイトもきっと・・・　やっぱここは俺のいる場所じゃない！」

モカに背を向けた。

「ま・・・待って！　本当なのつくね！私・・・」

つくねの肩を掴む。

つくねは・・・

「放してよ！人間なんて嫌いなんだろ！　オレも妖怪の友達なんてゴメンだ！！」

モカの手を振り払い走って離れた。

「つくねーーーっ！！」

モカは叫んだがつくねが振り返る事は無かった。

『ちっ　おい！！待てつくね！！』

木から下りたときはもう遅かった。

つくねは、走ってバス停へと去っていった。

『モカ！ちょっとここで待っててくれ。つくねは今はいろんなことがあったばかりだから、心が乱れているだけだ。』

そういってモカを残し、バス停の方へと走って向かった。

「……つくね・・・」

聞えてなかったのか　頭に入らなかったのか、

モカはカイトの言葉は耳に入ってなかった。

第６１話　人間と妖・深い溝（後書き）

ありがとうございました！

第６２話　月音の一大決心（前書き）

よろしくお願いします！

第６２話　月音の一大決心

ジャックオーランタンの時刻表の前で…

つくねは立っていた。

（家に帰れればまた……ありふれた日常へ戻れる……　……でも…

…これで良いのか？……オレは…）

退学届けを見ながら考えていると、

ブロロロ……

バスが到着した。

そして自動ドアが開き

「ヒヒ…やっぱり逃げ出すかい　なぜかあんたはそうなるような気

がしていたよ。いいんだな？少年…　思い残す事が無けりゃ乗りな

…」

運転手がそうつくねに告げた。

（オレは…）

『…それでほんとに良いのか？つくね…』

！！

すぐ後ろにカイトがきていた。

『モカの…あの娘の孤独な思いを知ってそれでも逃げ出すのか？つくね…』

「だって…オレは人間なんだよ！モカさんはバンパイアだし…君は精霊魔導師（エレメンタル・マスター）だし…」

つくねは俯きながら答えた。

『違うな…　本気で逃げようと思ったのならこの学園の正体を知ったその日の内に逃げる筈だろ？お前が逃げようと決心したのはモカがお前を人間と知って見せたあの表情のせいだろ？』

「…っ！！」

つくねは一瞬体を震わせた。

『それは許してやれよつくね…　たった数日しか付き合ってないが、モカがあんな寂しそうな顔をするなんてオレも思わなかった……よほど苦しい思いをしたんだろうな…人間の世界で…』

神妙な表情をしながらいった。

「でも…」

つくねはまだ俯いたままだ。

『まず間違いないのはこのままだと、モカの心に酷い傷をつけるこ

とになる。初めての友達との突然の拒絶と別れでな。…それでいいのか？』

つくねは俯いた顔を上げた。

「…1つ聞かせてくれないか？」

『なんだ？』

「カイト…　カイトはどうなんだ…？オレは人間だ…　カイトはどうなんだ？」

真剣な表情で聞いてみた。

『……キザなことかと笑われるかもしれないが…　人間であろうと妖怪であろうと同じ命だ。流れる血は違ってもな。大切なのは中身なんじゃないか？人間にしろ妖怪にしろ…　俺の正体を知ってお前に友か？っと尋ねた時お前は嘘偽り無くもちろんだと答えてくれただろう？　その気持ちで十分…人間だろうが妖怪だろうが関係ない。それがオレの答えだ。』

カイトの答えを聞いたつくねは…

「オレ…　モカさんともう一回話してくる。」

決心した表情は、さっきまでの暗い表情じゃなかった。

『ああ。モカもきっと待ってるさ。行ってこいよ。』

「うん。」

つくねは走り出した。

「ヒヒヒ…　少年…　君もよっぽどのお人よしなんだな…　もしくはおせっかいか？」

話を聞いていた運転手が話し出した。

『ふ…　そう簡単に逃げ出されてもつまらないし、何よりいい結果にならないだろ？　…オレとしてもつまらない…という考えより寂しい…の方になってきたな…』

「ヒヒ…　あの男も君のような感じだったよ…　君は奴の生まれ変わりなのかも知れんな…」

運転手はそうつぶやいた。

『ん？？何か言った？？』

「なんでもないさぁ…　君も彼らのとこへ行ったほうがいい…」

そう言い、バスのドアが閉まった。

『…！！あ！そういえば砕蔵がくるんだった！！』

バス停を後にし走ってつくねたちの方へ向かった。

第６２話　月音の一大決心（後書き）

ありがとうございます！！

第６３話　十字架の開放（前書き）

よろしくお願いします！！
ウラちゃん出てきます。
こっちのモカさん……
メチャ久しぶりに出てきたような～苦笑

第６３話　十字架の開放

砕蔵は本性を現し、

割り込んできたつくねを片腕で払うように吹き飛ばした。

「ぎゃ……」

ドコーーン

「つくねーーーーー！」

モカはつくねの方へ駆け出した。

「ハハハハハハハハ！！どうした？自称バンパイアくんよッ　はぐれ妖のオレでも力では最強と呼ばれるバンパイアとは力比べしてみたかったんだゼ？　もろすぎだろ！カスがッ！！」

血だらけで倒れているつくねを見たモカは

涙ながらにつくねに話した。

「ひ…ひどい……　せっかく戻ってきてくれたのにこんなっ・・・ごめんね…やっぱり…人間と妖怪はこんなにも違うんだね…」

モカの目から涙が流れ落ちる…

「私だってバンパイアだもん　血を吸って人間を傷つけちゃう…
本当は…本当はずっと…　人間の学校でも友達が欲しいって思ってたけど…　やっぱりムリなんだね…　私もきっとつくねを傷つける事しかできないんだ…」

モカの言葉と流れる涙で気がついたつくねは…

モカの肩を掴んで、

「た…確かに…」

「つくねっ！！」

「オレ…弱くって…何のとりえも無いやつだよ…」

必死に自分の思いを…言葉に繋げた。

カイト　ｓｉｄｅ

カイトは墓場まで到着した。

『ちっ…　遅かったか…　って…おう！？』

何やら甘い感じのラヴの様な空間が……

今はさすがにタイミングが悪そうだと感じたカイトは、

とりあえず見守った。

（今2人の世界に割り込んだら野暮はオレだな…つくね…しっかり伝えろよ。）

side out

「でも…気付いたんだ　このまま逃げ帰ってモカさんと…別れるなんて嫌だ…　オレはモカさんと友達になりたいから…」

その言葉にモカは目を見開いた。

「たとえバンパイアでも…　オレはモカさんの事…　好きだよ…」

思いを…全て伝えた…

（よく伝えたな…つくね…）

すぐ近くで隠れていたカイトがつくね達の近くまで来た。

『それでこそ、男だつくね。よく頑張った。』

「カイト……」

つくねの視界にカイトが映った為、

必死に片手をあげ…親指を上げてウインクをした。

『に！』

カイトもそれを返した。

「何言ってやがるッ！お前らオレを無視しやがってッ！！寝てろやカスがーーーッ！」

つくねの背後に迫っいた砕蔵に蹴り上げられた。

「つくねーーーーーッ！！」『ちっ　テメェのこと忘れてた！』

つくねはモカの方に倒れこんだ。

（に…逃げて…　モカさん…）

手を伸ばしたが…

モカに届く寸前で力尽き、

腕が落ちた…

モカの十字架（ロザリオ）と共に…

「う…うそ…　ロザリオが…　外れ…た？」

ズ　　ンッ

モカを中心に…

この場所の全てが震えているような感覚が走った。

第６３話　十字架の開放（後書き）

ありがとうございます！！

第６４話　モカ覚醒（前書き）

久々の大量更新終了～　笑

ストック切れです……　苦笑

第６４話　モカ覚醒

「うおッ！！　なっ何ィいッ！？」

あまりの圧力（プレッシャー）に気圧される…

『これが…モカの…』

倒れたつくねの側でモカの正体を見ていた。

「…う…ん…」

つくねも圧倒的な存在感を感じ、目を覚ました。

そしてモカの言葉を…怖いバンパイアになるといった事を思い出した。

（モカさんの髪が…銀色に…）

体を起こしモカの方を見た。

『おい、つくね！ムリするな。大した怪我なんだぞ？』

つくねの体を支えた。

「あ…ありがとう…　でも…モカさん…」

『モカの本性って事だ、あれが。』

夜の闇がさらに深まるようにな感覚が…

「な…何だ　コイツッ…　こ…この威圧感ッ　別人だ！赤夜萌香じゃない！！」

『そんな言い方すんな。あれは同じモカだ。ただ違う方の・・・だけどな。』

つくねにとりあえず回復術をかけた後

カイトは砕蔵の側まで来ていた。

「なっ！！何でッ　テメェはこの威圧感の中ッ　そんな簡単に動けてんだよッッッ！！」

モカの威圧感に殆ど動けていない砕蔵は、

その中を悠々と歩くカイトに驚いていた。

その後ろでは…

キリィィィ……

モカが目を見開いた。

（これが…　バンパイア…）

つくねはモカの十字架（ロザリオ）を握り、

僅かに震えながら見ていた…　決して目をそらさないように。

「噂通りの赤い瞳！！　そして強大な妖気　こいつが…こいつがあの大妖バンパイア！？」

「……どうしたはぐれの…」

モカが初めて口を開いた。

それだけで砕蔵は巨体を振るわせた。

「私が…欲しいんだろ？得意の力づくで…　奪ってみろよ…　ほら…　どうぞ？」

動けなかった砕蔵だが…

ここまで挑発されたら…

「ううっ！　うおおおおおおおおお！！」

モカの体ほどある腕を一気に振り下ろす。

「モッ…　モカさん！！」

それを見たつくねは思わず叫んだ。

が、

「はっ…？」

「…この程度の力でこの私を襲うとは」

まったく腕が動かない…

（な…なんでよけねェ　何でビクともしねェーーーッ）

「身の程をわきまえるがいい」

ゴッ　　キャ！！

砕蔵の側頭部にモカの蹴りが打ち込まれる。

「ぎゃあああああああァ」

骨の折れる音をさせながら墓場の方へ吹き飛んだ。

「でかいだけの低級妖怪が力比べの相手にもならないな」

モカは手を払いながらそう告げた。

『……オレの連れに手を出したんだ…　それだけで終わると思うなよ…』

モカの横にいたカイトがそう言うと、

カイトは、人差し指と中指を立て、

空間に図形を書いた。

『氷神の鉄槌（アイシクルペイン）……』

砕蔵が吹き飛び倒れた頭上に砕蔵の巨体2～3個分はありそうな巨大な氷塊が現れた。

「がふっ…　は…　はぁ？…　な…に…　コレ…」

薄れ逝く意識の中で砕蔵は…巨大な氷塊を見た…

ズ　ズ　ンッ！

砕蔵は叫ぶまもなく…

氷塊の下へ…

第６４話　モカ覚醒（後書き）

ありがとうございました！！

第６５話　友達（前書き）

仲良くなるのが早いような気が・・・
カイトくんの器量が良いという事で　笑

第６５話　友達

（すごい…２人ともだけど…　特にモカさん…　怖いけど…　思わず見惚れてた……　どっちが…本当の？）

つくねはフラフラしながら、立ち上がった。

ゆっくりとモカはつくねに近付く…

（ああ…　もうダメ…だ…）

つくねはその場に倒れそうになった。

それをモカが抱きとめた。

（ああ…　凄く…　い…い…におい　オレの大好きな…　モ…カ…さ…んの…）

そのままつくねは意識を失った。

さすがに心配になったので

邪魔かな？と思ったけど、

２人の側にまで来た。

『気を失っただけだ…な…　ふぅ　よかった。　まあただの人間なのに大分頑張ったからな…』

無事を確認し、肩を下ろした。

『はは…　つくねを優しく介抱しているモカを見たらさっきの容赦ないモカが嘘みたいだな…』

「ふん…　お前こそ、あそこまでする必要なかったんじゃないか？あの程度に。」

僅かに顔を赤らめてモカはカイトに話しかけた。

『まあ　結構腹が立ったからね。それを言うならモカもあそこまで蹴り上げなくても良いんじゃないか？盛大にすっ飛んだと思うけど？』

「この私に挑んできたんだ　あのくらいの代償は当然だろ」

っと笑った。

『へぇ…　笑うモカはやっぱり　どっちも素敵だな。綺麗な笑顔だ。』

思った事をそのまま言った。というか声に出てしまった。

「なっ！！」

ヒュンッ！

それを聞くと殆ど同時に蹴りが来た。

『おおっと！！』

そのまま蹴りをかわした。

『ははは……　いきなりとは結構酷いね。ビックリしたよ。』

苦笑しながらそう答えた。

「ちっ…軽く回避しといてよく言う…」

互いに苦笑しあっていた。

『さあて…　モカ、つくねをこのままにしておけないだろ？　そろそろ行かないか？』

そう言うと…

「ああ…少し待て」

モカは十字架をとった。

「久しぶりに目覚めたばかりだからな…　まだかなり眠いんだ。すまないが外させてもらうよ。　…お前にはこれから手数をかけると思うがな、もう1人のおセンチなモカも見てやってくれ」

『はは　その役はつくねだな。できるだけフォローはするさ。俺たちは友達だしな。オヤスミ、モカ。』

友達…

その言葉に僅かだがモカは反応していた。

長い間封印されていた為か、

あまりなれない単語だったのだろう。

（……友か…　悪くは無いな…）

空を仰ぎながらそう思っていた。

「ああ……　ではまたな。」

そう言って十字架（ロザリオ）を付けたモカは、元の桃色の髪…元の瞳に戻り気を失った。

『あらら、運ぶのが2人に…　まあ仕方ないか…』

つくねはともかく、モカを乱暴に運ぶのは気がひけるので、

つくねは浮遊術（サイコキネシス）を…

モカはお姫様抱っこの要領で寮の方へ運んだ。

差別じゃないかって？

……

そんな事は無い！！

どっちも大切な友達だ。

でもやっぱ2人運ぶとしたら、

こうなるよな～！

つくね、モカの組み合わせじゃ誰でもさ！

うん！

……とか何とか……

そういろいろ考えながら、寮のほうへと向かった。

第６５話　友達（後書き）

ありがとうございました！！

第６６話　血は大切に……（前書き）

よろしくお願いします！

第６６話　血は大切に……

翌日…

『ふあぁぁ～　やっぱ疲れ溜まってんのかな?メチャクチャ眠い……』

欠伸を１つ２つとしながら、

学園に向かって歩いていった。

「おはよーー!!カイト!!」

うしろから声が聞えた。

モカだ。

『おはよ。昨日はよく寝れたか?』

「うん!なんとかね!!　いろいろと…あったけど、つくねも戻ってきてくれたし♪」

ううん!

笑顔がまぶしいとはこの事だろうなぁ。

そう思いながら、モカと一緒に登校していた。

『そういえばさ、ロザリオが外れたときのモカと今のモカは完全な別人格なの？』

知っている事だが…

やっぱり　本人から直接聞いてみたいからね。

「うん。そうだよ。　覚醒して人格が入れ替わっても意識はあるんだ。ぼんやりと曖昧だけどね。昨日のことも覚えてるよ。全部終わってわたし達を寮まで送ってくれたのカイトだよね！どうもありがとー♪」

そう言ってモカは抱きついてきた。

『……オレも一応健全な男子生徒だからね。照れるよ。モカ』

自分の心臓がバクバク動いているのがよく分かる……

つくねだったら、動けない上に言葉も出ないだろうな……

なんて考えていた。

「あはは……　嬉しかったから、ついつい抱きついちゃった！……でも…」

？？

なにやらモカの様子が……

「カイトは妖だよね？精霊魔導師（エレメンタル・マスター）って言ってたし……」

抱きついた状態で、じっと顔を見られていた。

『……んん！そっ　そーだよ？（近い近いって！！）』

顔が赤くなるのは止められない……

というかこの状態で照れない男（やっ）がいたら見てみたいもんだ。

「…だよね……　おかしいな…　わたし…」

そう言うと首元に顔を近づけてきた。

「欲しくなるのは人間の血なのに……　つくねの時だって、あんなに吸いたいと思ったわけは正体が人間だったからだし……　今朝で貧血気味だから…かなぁ…」

もはや会話では無く。独り言だ…

オレは確信した。

（血を吸われる！！）

「いい香り……ちょっとだけ！いいかな……」

モカは、ボーっとした状態だった。

『ちょーーーッと待った！！！』

流石にいきなり吸われるのは……抵抗がある！

相手は吸血鬼（バンパイア）だし…

注射を不快に思う子供かッ！！

って思ったけど、でも吸われるのは……注射の比じゃないよな？？

それにこの役はつくねのはずだ！

「あ！そー言わずにちょっと味見するだけでいいから。ね？」

モカはウインクしながら手を合わせてねだっていた。

『そんなかわいい顔してねだってもダメ！飲み物扱いしないでよ！オレ第一人間じゃないし！』

拒否していたが…

モカに上目使いで見つめられながら、頼まれると…

か・な・り心が揺らぐ……

必死に戦ってると……

そんな時救世主が現れた。

……つくねだ。

なにやら封筒？のような物を両手で握り締めていた。

『ほっ　ほら！モカ！つくねがいるよ。大本命血液所持者の！　ミネラル、コク…　サイコーなんだよね？』

じりじり追い詰められてた為、

思い切ってつくねを差し出すかのようにモカに言った。

「あ！ホントだ！！…昨日の事つくねにもお礼を言わないと…」

標的？が変わった瞬間を見た！！　（笑）

『（やりー！）だったらさ、早く行こう！朝の挨拶も兼ねてさ。』

「うん！」

そう言ってカイトとモカはつくねの方へ向かった。

「つくね、おっはよーー！」

がばっ！

「わーー！」

後ろからつくねの背中に抱きついた。

その反動で、封筒が音をたててやぶれ、
それと同時に強めの風が吹き、飛ばされていった。
『おっす！おはよ。つくね！』
少し遅れて、カイトもつくねに挨拶を交わした。
「カイト、モカさんおはよう。」
2人の方に振り向き挨拶を返した。
『おー！……てか　なにやら飛ばされていったけど大丈夫なのか？？破れてるし。』
そう返すと…
「うん。もう良いんだ！」
（間違って…無いよな　そりゃ不安もたくさんあるけど）
清清しい顔でつくねは答えた。
『そっか…　じゃ、教室へ行こうぜ。』
「「うん！」」
3人は教室へと向かった。

「そうだ！つくね…　昨日はありがとう…　つくねの言葉…　わたし絶対忘れないよ！」

道中　つくねに伝えた。

「いや…　そんな…」

モカの言葉に顔を赤らめた。

「あああ……　もう…　ダメ…」

「へ？　モカさん？？」

つくねにゆっくりと近付き……

「…我慢もーできない～…」

かぷり！ちゅうううう～

「！！！？　いってええェえッ！」

（つくね……　サンクス！）

横で2人を見ていたカイトは、心の中でつくねに礼を言っていた。

「また吸われたーーーッ」

つくねは首を押さえながら左右に行ったり来たりしていた

「ごめんねーー　つくねってやっぱりいい香りがするから…」

『ははは……相変わらず反応（リアクション）が面白いよな～つくねって、』

2人は動き回るつくねを見て笑いながら言った。

「ね…？カイト！」

カイトの方にモカが向き。

『ん？』

「いつかは……吸わせてね♪カイトの血もさ♪」

とびっきりの笑顔で言われた。

『……はぁぁ　わかった。考えておくよ。』

「やたーー♪」

もう断れる自信が無くなった。

反則だよその笑顔……

「2人とも笑わないでーーー！！ってかモカさん！オレを食料にしないでよーー！それにカイト！！オレの反応で楽しまないでよーーー！」

つくねは首を押さえながら腕を上下に振りながら言った。

言葉の内容からして、俺とモカの会話は聞いてないみたいだ。

さてどうなるか…

もし　オレの血をモカが吸って気に入ったら、

つくねは嫉妬する方に１００円！！

ううーんしかし……

やっぱ反応（リアクション）おもしろいな♪

この瞬間はとても妖怪の学校と思えないくらい。

穏やかな時間だった。

第６６話　血は大切に……（後書き）

ありがとうございました！ちょっと長めな話でした～！！

第６７話　勉強と女子生徒の群れ？（前書き）

よろしくお願いします！！

第67話　勉強と女子生徒の群れ？

とりあえず

遅刻しそうだったんで急いで教室へ！

もちろん血は死守！！

というか、つくねの血でモカは大分満足したみたいだった。（笑）

『さてこれから授業…か…　ううむやっぱり眠くなる…』

授業…

眠くなる原因の大部分だろう。

おそらく同じ意見の人も少なくないはずだ。

ぼーっとしていると……

「はーい！じゃあここの問を…　御剣君に解いてもらおうかな？」

ありがちなパターンである……

早速ご指名されてしまった。

この後の展開は…

俺「ううー　分かりません！！」

先生「ちゃんと聞いてたのー？だめよー　ぼーっとしてたら！」

クラス「あはははははー」

って感じに！

にはならない！

『三角比の定義を使った問題ですね。えーーっと　（省）です。』

黒板に答え書き先生の方を見た。

（まあ　この程度なら…問題ないな。）

そう考えていた。

「はい完璧よ！よく出来ました。」

「おおおおお！」　「すごーい！！」　「きゃー！！」

クラスから驚きの声が沸く。

（いやいや…そこまで難しいかな?数?レベルだし…　ってか「きゃー!!」って……）

ちょっと疑問に思ったが……

ここは陽海学園。

あまり深く考えないようにした。

生前……

というか転生前は、

学業がおろそかになってしまったら、阿修羅のような凶悪な教師（部活動の）に、

グランドでボコボコにされてた　いやーな記憶がまだ鮮明に残ってる……

だから、ある程度はできるようになったんだよね～……

出来るまでは地獄のようだったけど…　苦笑

思い出しながら、冷や汗をかいていると。

（すごいねーカイト！勉強得意？）

すぐ後ろの席のつくねが声を掛けてきた。

（いやいや、普通に教科書見ればのってるし！！勉強は大嫌いだが、赤点は取りたくないからな）

（！！教科書見ただけで分かるの？オレなんか数字と英単語の呪文にしか見えないよ！）

（……ちょっとはべんきょーしろ！つくね。久しぶりに聞いたわ！その数字の呪文って表現！）

あーや　こーやとやり取りしていると

「じゃ次の問題は…　赤夜さんお願いね！」

「はい！」

モカは立ち上がり、黒板に公式等を使い、

スラスラスラーっと解いた。

「はい！赤夜さんも完璧ね。よく出来ました！」

「おおおおお！」　「やっぱモカさんもすごーい！」

またまたクラスが沸いた。

（ほれつくね、モカもあーやってばっちり解いてるだろ？ちょっとは見習ってだな…ん？）

つくねの顔を見ると…

（モカさんスゴイ……）

ぽえ～っと呆けていた。

（ダメだこりゃ…）

その後…

つくねにも当たったが……

自分の世界から帰って来れず全く問題を聞いてなかったため、全く答えられなかった。

クラスが違う意味で又沸きあがった。

（……まあ　赤点はとらんようにな、つくね）

キーンコーンカーンコーン～♪

「はい　今日の授業はここまでね。みんな、もうすぐ実力テストがあるからしっかり勉強しておきなさいね。」

「うげぇえええ！テストなんてあんの？」「うわー全然自信ないし…」「うー！テストいやぁ！」

「じゃ！がんばってねぇ～♪」

クラス中で悲鳴が上がってるのを尻目に

先生は教室から出て行った。

『やーーっとおわったぁ…オヤスミ…』

授業が終わると同時に、

机に頭を下ろし寝始めた。

「あははは……カイト…ちょーーっといいかな？」

つくねが話しかけた。

『む？つくね…　オレは眠いんだ。聞いてやるが簡潔にな。１５文字以内に話せよ。』

うつぶせのまま答えた。

「テスト全然自信ないから手伝って。」

……やるな　つくね　１５字ぴったりか。

『眠い……オヤスミ。』

「って、えええ！スルーなの？今の？」

『…聞いてやるといったが答えるとは言ってないぞ？つくね。』

「そんなー！　ひどいや！！」

『これもつくねを思っての事だ。』

「嘘だ！！絶対楽しんでる！」

『嘘じゃないぞ！多分な』

「多分って何！」

コント終了！

「いや！コントじゃないから！頼むよ～　このままじゃオレやばいんだって…」

流石にかわいそうになってきた為

『…やれやれオレじゃなくてもモカに教われればどうだ？話するチャンスだし、何よりオレよりきっと頭いいと思うぞ？』

っと促してやった。

「…もちろんそれも考えたけど…　いきなり勉強教えてっていうのも……」

俯きながら話した。

『やれやれ、カッコ悪いわな…　はいはい。多少なら手伝ってやるよ。どこが分からないんだ？』

「ありがと！えっとね…」

つくねがノートを取りにいったその時、

「カイト君！！」「ちょっとさっきの授業で…」「数学なんだけど…」

あっという間に他の生徒に囲まれた。

女子生徒に！！

『へ？？』

いきなりの事で戸惑っていると。

「ちょっと！私が最初なんだから！」「何よ！わたしの方だよ！！」

「ああもう！！」

こんどは喧嘩が始まった。

『ああー！ちょっと！！喧嘩はやめて！ちゃんとみんな教えるから。』

止めようとしたのだが…

「このー！」「この！！」「なによー！」

ポカポカポカっと喧嘩が始まった。

子供の…

（このままだと…　ね…寝れない…　しかも　聞いてくれないし！）

という訳で、この場から脱出した。

「ああ！カイト教えてくれる件は？？」

暫く呆然と見ていたつくねはカイトが移動していくのが見えて聞いた。

『ちょい　今日はパス！！　なにやら嫌な予感が…』

的中！

カイトがいなくなったのに気づいた女子達は、

「「「あ！！まって！！」」」

いっせいに走って向かってきた。

『ちょ！！　うぎゃあ～～～』

もはや一瞬の出来事、

瞬く間にカイトは女子生徒達に

押しつぶされるように沈んでいった……

（オレが何したのさーーー！！）

「あはは……」

つくねは苦笑いするしかなかった。

「つくねー！カイトー！ジュース飲みにいこ♪」

モカがつくねのほうに駆け寄ってきた。

「ってあれ？カイトは？？」

さっきまでいたのに～っと、聞いてみると。

「あそこだよモカさん。」

指差した先には、

「まってよーーカイト君ーー♪」「教えてよーー君の事をさーー！」「グフフ……逃がさないわよ～！」

『待って待ってーー！！一度には絶対ムリ！！　というか休ませてよ！！！』

必死に廊下を逃げ回るカイトの姿があった。

なにやら、生徒数も増えていた。

「あははは……　カイト…　スッゴい人気あるんだね～…　ちょっと妬けちゃうかな……」

「ええ!!モカさん!!」

モカの言葉に驚き声を上げた。

「わっ!どうしたの??つくね??」

驚いて聞いてみると……

「いっ…いや…　何でもないよ!そろそろカイトを助けてあげないかな～って言おうと思って……」

「そうだね!あの時はカイトがつくねとわたしを逃がしてくれたし、今回は助けないとね♪」

そう言って、2人はカイトのほうへ向かった。

（ううーん……やっぱカイトもてるし…　勝てそうに無いや……）

つくねは、さっきのモカの言葉にかなり落ち込んでいるのだった。

『というか早く助けてーー!!』

第６７話　勉強と女子生徒の群れ？（後書き）

ありがとうございました！！

第６８話　カイト救出作戦？（前書き）

よろしくお願いします！！

第６８話　カイト救出作戦？

『ううむ…　昨日は酷い目にあった……』

カバンを片手に登校していると、

「おーい！カイト！！おはよう！」

……この声は、

『やあ　つくね君……　昨日は助けてくれてどうもありがとう…』

くらーい声でつくねに礼を言った。

……礼？って感じじゃ…

「うっ……　ごっごめん……　もう許してよ～……」

つくねは涙目になってしまった。

～回想～

昨日…

モカとつくねはあまりにも、カイトとその他大勢の女子生徒が、走り回るため、手分けして「カイト救出作戦Ａ」なるものをを遂行していた。

しかし……

運悪くモカのほうではなく、つくねの向かったほうにばかり、暴動の女子生徒とカイト出現した為、

唯の人間であるつくねには、抗う術が無かったのだ。

だけど…

追われている身からすれば……

目の前を横切ってるのに、救いの手も差し伸べず、苦笑しながら傍観してるようにも見える。

そして遭遇が１０回目に差し掛かったところ…　カイト救出作戦Ｊ！

勇気を出したつくねが女子達とカイトの間に割って入ってきたのだった。

その直後！

キ～ン～コ～ン～カ～ン～コ～ン～♪

「あ！！予鈴！」「次移動教室だったよね？？」「あん！！もうちょっとでものに出来たかもなのに……」「頭もいいし、運動神経もいいなんて…　グフフフ……次は…」

ッと言いながら女子生徒の集団はあっさり解散した。

コワッ…

同じ女子だよな？グフフは……

「あれ？？」

覚悟を決め身構えていたつくねであったが……

あっさりと解散した女子生徒たちを見て、拍子抜けしていた。

「あはは……　大丈夫？カイト…」

横でぜぇーぜぇー言ってるカイトに話しかけた。

『つ…つくね！！……はっ走ってる最中にっ！……ちらちら！　見えっ…た…』

息も絶え絶え…

当然ながら昼休みも全て消費しオマケに睡魔とも闘っていた（追い回されている時はサスガに忘れていたが）カイト君は、

体力的というより精神面に深いダメージ！を喰らってた為、
予想以上に、しんどくなっていた。
『はぁ～はぁ～……』
とりあえず息を整える…
「だっ　だいじょうぶ？？」
その背中をつくねが擦る。
『……つくね…　お前俺を見捨てたな？？？』
軽くつくねを睨んで話す。
「そっ！そんな事無いよ！！中々手が出せなくて……」
『いーや！結構お前とは遭遇したのに！！ってか、何度か目もあった！！でも、手を貸すどころか苦笑しながら見るだけ！！しかも予鈴と同時って……狙ってんじゃん！！』
「へう！！」
『うっがーーー　思い出しただけで腹が立ってきたぞ！！！　もーーべんきょー自分で何とかしろーー！！』
ハーレムって空想上の世界の出来事と考えていたが……
（こんなんはいらん！！！）

プンプンしながら去ろうとすると……

「わーーー　カイト！！！ゴメンってば！！！まってよーー」

つくねは後から追いかけていきた。

（男のハーレムなんざもっといらん！！）

『やかましー！もうこれ以上オレに走らせるなーー！』

……

……

…

その日つくねは、カイトの機嫌取りに精を出したそうな…。

教室に戻り机で寝ていると…

モカが帰ってきた。

「あははは…大変だったね～カイト！」

『ううむ……何であんなにパワーがあるの？女子って……』

「あはは！女の子は強いって言うからかな？？」

モカは笑顔で答えた。

『ううー　そういえばモカは何してたのさ……　オレがリアル鬼ごっこしてる時に……』

机に突っ伏したまま聞く。

「あのね、あまりにも追いかけっこ範囲が広かったから、つくねと手分けしてカイトを追いかけてたんだ！私の方は運が悪くてゴメンね！」

それで今までの間も探してくれてたのか……

授業開始直前まで……

『うう～～』

「ん？どうしたの？？」

『ありがとなー！！』

そう言うとモカに抱きついた。

「ひゃああ！！」

黄色い声が上がる。

「！！！」

つくねは驚愕の眼差しでこっちを見てくる。

「あああ！！！」「ちょっとーーー！！！！！」「カイト君！！！！！」「モカさんを！！！」「殺す……」

クラス中からも一斉に殺気・怒気が上がる…

モカ・カイト2人に対して。

暫く…といっても2～3秒ほどでモカを放した。

クラスのプレッシャーもあったが、何より冷静になってきたからだ。

『ごめんごめん……何かうれしくなってな…　つくねとはえっらい違いようだったからな～』

そう言ってつくねの方をキッっと睨む。

つくねは、暫く驚愕していたが…（さっきのハグシーンで）カイトの視線に気付き、両の手を合掌し謝罪のポーズをとる。

「いっいや！いいよ？　別に…驚いただけだから……」

モカは顔をそらせながら話す。

（なーんか気まずい……）

『あ！そーだ！！今度！お礼はするよ？モカだけは！』

「ううーーー許してよ……」

つくねは更に落ち込む……

「ほんと！」

顔をそらせていたモカが振り返り顔をぱぁぁぁっと明らめた。

『ああ！』

カイトが頷くと、

「じゃ、血を吸わせて♪♪」

満面の笑みで答える。

『げ！！』

一気に血の気が引いた……

（そうだった！！こんな事言ったらこう返されるに決まってんじゃん…）

後悔先に立たず…って感じだった。

「じゃ…早速…」

ジリジリ迫ってきた。

（！！）

とっさにつくねを前に出しスケープゴートにした！

「ちょっ！！カイト！！！！」

（これで許す！！）

「えええええ！！」

「あれ？つくね？？」

素早い動きでつくねを前に出した為、

モカにはいきなりつくねが現れたように見えた。

『オレのおごり！どーぞ！モカ！』

「おごりって何！！！」

うろたえるつくね。

「カイトのが欲しかったけどなぁ…　！！　ああ～　やっぱりつくね……いい香り…」

かぷっ　ちゅうううううぅ～

「いてえええええぇえぇ！！！」

とまぁ…こんな感じだった。

回想終わり！

「回想ながいよ!!　それにっ許す!!っていったじゃん!そういえばさ!!」

つくねが素早く突っ込んできた。

『んん?じゃあつくね!約1時間もの間全力で逃げ回るのと献血程度の血を吸われるの……どっちがしんどいか試してみるか???』

カイトはカウンターの如く返した。

「ううーーそっそれは…」

またまたシュンとなる。

『はは!もう結構からかって面白かったしそろそろ許す!!友達だしな。』

そう言うとつくねの表情が明るくなり、

「やっぱ楽しんでたの??ひどいや〜　でもよかった!!じゃあ明日の実力テストの…」

『じゃ!!行くわ……』

スタスタスタッ

「えええええ!待ってよ!!」

つくねは驚きながらも笑いながらカイトを追いかけた。

第６８話　カイト救出作戦？（後書き）

ありがとうございました！！

なにやらアクセス状況なるものがあることを最近知りました。
見てみると…

ＰＶ　５４２，１３０
ユニーク４４，６９０人

でした！！
こんな駄作に付き合っていただき本当にありがとうございます！
更にお気に入り登録・評価・感想をしてくれた方々もありがとうございます！

欲を言えばこれでロザリオとバンパイアの漫画が売れて……
漫画に忠実なアニメがでてくれたら…
なんて考えちゃいます。

アニメと漫画だったら漫画の方が好きなので！
アニメファンの方…　ごめんなさい！

でも、ロザバンが広がればうれしいですね～　なんか！！
では！！

第６９話　新たな出会い（前書き）

よろしくおねがいします！！

次に登場するのは・・・もちろんあのコですｗ

ヤッフー！！　（笑）

ちょっと短いです…苦笑

第69話　新たな出会い

……終わった。

ん？

何がかって？

もちろん授業が！！じゃん！！

……うん。

前の授業後見たく、襲われるの嫌だから……

自粛したつもりだったんだけど……

「まってぇーー」「今日こそ教えてもらうわよ～！君を！」「グフッ……グフフフフフ！」

うん…変わらないみたい。

グフッの人も変わらず参戦してるし……

ついに不気味な笑みしか言ってない……

（もっ　サスガにずっと走り回るのはしんどい…）

っと考えながら、空間に図形を書き、

『……疾風、今ここに我に宿れ俊足なる風…　「天翔る羽（フェアリー・ウィング）」』

ドン！！

身体強化（脚力）の補助魔法。

「あれぇ？？」「さっき……こっちに曲がったと思ったのに…」「むぅ…油断…したわね。」

相手の死角へと連続して動き続けたため、容易に撒くことが出来た！

『ふう……ここまで来たら大丈夫か、ううむ、最初ッからこうすればよかったな……』

ここは、校舎裏。

生徒が来るような雰囲気じゃない場所だった為、とりあえず一服していた。

『暫くはこうやって追っ手を巻くことにしよっと…　何回かすればサスガに諦めるでしょ。』

っというか諦めて欲しい……

オレの魔力だって無限じゃないし、

使いすぎはこれまた疲れる。

『まあ、補助の魔法だから問題ないっちゃ問題ないんだけどな…』

ぶつぶつ独り言を言う姿は、客観的に見てもおかしい…危ない人に
『だまらっしゃい！！』……はい。

暫くあたりをうろついてると、

「あ…ああ…」

声が聞えてきた。

『ん??』

（まさか…こんなに早く見つかった??）

恐る恐る声の方へ向いてみると…

「だ…誰か…助けて…手を…手を貸して下さい。急に具合が悪くなって…」

違った…

一瞬ホッとしたが（かなり）とりあえずその女のこの方へ向かった。

『ん、大丈夫か?立てる?とりあえず保健室へ…』

（って、このコどこかで…）

第６９話　新たな出会い（後書き）

ありがとうございました！！

第７０話　夢魔　黒乃胡夢（前書き）

でてきました！くるむちゃん！

シーズン？で一気にかわいくなったような気がするキャラですｗ

でもやっぱり、作者が好きなのは・・・

第７０話　夢魔　黒乃胡夢

（って、このコどこかで…）

見たことあるような気がして不思議に思ってたら……

「…ありがとうございます。私生まれつき体が弱くて…　む…胸が…発作的に苦しくなってぎゅ～って…」

寄りかかってきて、その豊満なバストを押し当てるようにしてきた。

腕にやわらかい感触が～

「胸がはちきれそうになるんですぅ～」

『ちょっ！近い近いって！！』

（うわわわ！やわらかっ…おっきっ…！オレな…何考えて…）

はい。健全な男子なのでムリ無いと思います！

思わぬ事が起きて気が動転してしまった。

「うふふ…　照れちゃって可愛い…」

胸を押し当てながら、上目使いで見上げてくる…

「君…　1組の御剣怪斗君ですね…？　カイト君…わたしの目を見て…」

『え！』

言われるがままに、その子の目を見た。

「私は黒乃胡夢(くろのくるむ)これから仲良くしてくださいね。」

そう言いながらカイトの目を見つめた…

カイト　ｓｉｄｅ

これは…たしか…魅惑眼(チャーム)？だったか？？

黒乃胡夢……

ああ！くるむちゃんね。

ヤバイ……　二次元世界(こっち)に来て結構経つからか、

原作すっかり忘れてしまいそうな……

（まっ　それはそれでいいか！展開が読めなくなるってのも良いかも！違和感無く溶け込めそうだし♪）

くるむの魅惑を受けながらそんな風に考えていた。

カイトは幻術・洗脳の類は受け付けない。

自身の自動魔法（オート・エレメンタル）の１つ、

「精神堅牢（メンタル・レジスト）」

幻術・洗脳といった異常な気配を察知すると発動する。

但し発動の条件は術者の精神面が万全もしくはある程度の余力があるときに限る。

…便利だな…

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

くるむ　ｓｉｄｅ

おかしい……

私の魅惑眼（チャーム）は完璧のハズなのに……

くるむは困惑していた。

夢魔（サキュバス）である彼女は、魅惑といった幻術を操る統べに長けた妖。

今までも何度か試し、この学園に来てからは百発百中の精度にまで向上していたのに…

この御剣怪斗という男は、なにやら考え事をしているような表情はしても、

「おもわず私に抱きつきたくなる」というふうに設定してる魅惑の術が全く発動しない。

（なぜ??）

side out

くるむからは困惑の表情が明らかに出ていた。

（ふむ、気付いたみたいだな。効いていない事に…　まあこれだけ時間がかかったら当然かな?）

『くるむ…ちゃんだったかな?　さっ保健室へ行こう。』

そう言うと手を握り（まだかなり照れくさかったが……　苦笑）とりあえずくるむを連れて歩き出した。

「ちょっ　ちょっとまって!!」

慌ててくるむが歩きを止めた。

『ん?どうしたの?』

不思議そうにくるむを見つめた。

「なんで……何も言わないの??あなた、私が術を使って操ろうとしてたのわかってるんでしょ?」

魅惑眼(チャーム)を防いでいる以上、

術を出している事は明らかに分かっているはずだ、

なのにその事に関しては、全くといって追求してこないのが不思議だった。

『ああ、そのことね。』

困惑しているくるむの方へ完全に体を向きなおした。

『まあ　こんな学校だし、他人をいきなり信用できなくて魅惑眼(それ)を使ったのかもしれないだろ??まあ　本気で操ってやろうとしたのかもしれないけど、絶対にそうも言えないからな。なら、とりあえず胸が苦しいって言っていた方を信じてみただけだよ。それに君は魅惑眼使わなくたって(そんなの)、十分魅力的だしな。オレはそう思うよ。』

と言って、笑顔で話した。

「ッつ!!……／／／」

くるむは数多くの男子生徒を虜にしてきたが、初対面で…ましてや術にかかってない状態の男子にここまで言ってくれたのは初めてだった。

(みんな…かわいい!っとか、胸がっすごい!!っとか言ってるだ

けであんまり内面を見ているような感じがしなかったけど彼は…）

別に容姿だけで寄ってきても、悪い気はしない、

そうやって数多くの男を魅惑し『運命の人』を見つけることが彼女の最終目的だったからだ、

身も心も結ばれるのはその後でよかった。

（でっ　でも！マズは赤夜萌香をやっつける事が重要！）

カイトとはその後ゆっくりと付き合ってみたい。

ひょっとしたらこの人が『運命の人』なのかもしれないから！！

「ごっ　ごめん！！何かすっきり治っちゃったみたいだからもう良いわよ！！あっ　私用事思い出したからまたね！カイト君！！」

そう言い、まさに脱兎の如く

この場から消えた。

『ありゃ…　何か変なこと言ったかな？……生前？もそうだけどあんまし女の子と付き合ったこと無いからよく分からんな……』

そう言いながら頭を掻き、この場を後にした。

第７０話　夢魔　黒乃胡夢（後書き）

フラグたったかなぁ……？？

つくねとはどうなるのやら……

ハーレムを書くのは苦手…なのでどうなるか・・・分かりません！！

ありがとうございました！！

第７１話　くるむの画策（前書き）

ちょっと短いです～・・・どんどんいきますーー！
頑張ります！
よろしくお願いします！！

第７１話　くるむの画策

「おっはよーー！！つくねっ♪」

それは登校中……

つくねを見つけたモカが飛びついてきた。

「わーーーーびっくりした！！　モっ　モカさん！！」

つくねは突然のハグ・スキンシップに驚きながら叫んだ。

「あああああ！！」「カイトって奴の次はあいつかよ！！」「なんだー毎日毎日！あいつといいカイトといいどういう関係なんだよ！三角関係か？？」

とか何とか、

殺気・怒気が混ざりながらまたまた大注目を受けてしまった。

（行為はスッゴいうれしいけど…この悪寒をとめてぇーーー！皆の視線が怖い！！殺されそう…　）

周りの空気は最悪だが…

（でも…　やっぱりモカさんとは仲良くなりたい！だからこの学園でやっていくって決めたんだ！！そっそれに！カイトがモカさんを好きになる前に……）

自分の今後についてを必死に考え抜いていた。

くるむ　ｓｉｄｅ

そんな2人を不快な視線で見ていた生徒がいた。

（ちっ……何よ！みんなモカッモカッって！！やっぱり！まずは赤夜萌香をやっつけないと…　その為にはさっきの男子生徒を…つくね…だっけ？）

今後の対策を練っていると…

「やっぱりモカさんって美人だよね～　女の私から見ても凄いわ！性格もとってもいいの！この間だってねぇ…」

「そうよね！！　でもモカの彼氏ってあのコなのかな？でも、カイト君とも仲良くしてる感じだったし…」

「うわっ！そうなの？？ずっるーい！　カイト君もけっこういい男だよね？？チラッとしか見てないけど！！」

女子生徒同士の会話が…

「なっ……」

その会話を聞いたその次の瞬間！

「なんですってぇぇぇぇぇぇ！！」

ビクッ！！！！！！

周りにいた生徒達が一気にビクついた。

（さっきのコだけじゃなく、カイト君も！！もう…）

「赤夜萌香！！ゆっ…ゆるせなーーーい！！ぜぇーーったい泣かしてやるんだからぁぁ！！」

そう叫びながらつくねの後を追った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第７１話　くるむの画策（後書き）

ありがとうございました！！

第７２話　接触と修羅場（前書き）

よろしくお願いします！！

第７２話　接触と修羅場

暫く経って……

作戦通り！

つくねに魅惑眼掛(チャーム)ける事に成功した。

（やっふふ～♪やっぱり彼が特別なんだね！私の術！ちゃんと使えてる！）

（わぁ…綺麗な瞳だ…　あ…れ…？このコにオレ…抱きつきたく……）

はぎゅうううう～

「キャーーー♪何するの～♪」

口ではそう言っても口元は…

（あ…れ？なにやってんだーーーオレ！体の制御(コントロール)が…）

モカ　ｓｉｄｅ

（うそ……つくね……？）

飲み物扱いしないで～っとつくねに言われ謝ろうとつくねを追ってきたモカは、

つくねにとって最悪の瞬間を見てしまっていた。

「な……な…」

言葉を失っていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ヒヒ…モテるねぇ　だが…女には気をつけろよ～　少年…」

「だれ！！！」

いつの間にやら背後を取られていたようだ。

ビクッっとあわてて振り向くと…

「ヒヒヒ・・・ただの通りすがりさ…」

そう言い、その妖しげな人物（バスの運転手！）は、葉巻を吐き出しながら去っていった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

モカはつくねを追わず、教室の方へ戻っていった。

廊下で壁にもたれかかった。

「まるで…恋人みたいだったな…　あんなにくっついて…　やだ…私なんでこんなにショックを…」

モカはつくねの言った、「オレは食糧じゃない！」ッと言う言葉を思い出し…

「私…ダメだな…　何で血を吸いたくなっちゃうんだろ…　もしかして…　カイトも…そう思ってるのかな…　自分が分からなくなってきたよ…」

心にズキリッっと痛みを感じながら、1人必死に考えていた。

《おい…　お前落ち込んでる場合か……　狙われているぞ》

「え!?　なっ何?誰??」

いきなり声が聞えて一瞬パニックになっていると、

「あなた…　バンパイアなんですってね?一部じゃ噂ですよ?赤夜萌香さん」

階段上から声が聞える…

「あなた!さっきつくねといた!いつの間にそこに…」

くるむは返事をせず階段下へ飛び降りた。

その姿に、

「うおお！可憐だ！」「見えたァァァ！！」「モカさん以外にこんなコがッ！！」「胸！！でかーーー！！」

生徒（ギャラリー）のそれは、モカに負けずと劣らない程だった。

（ふん！男ってやっぱしそんなもんなんだよね！やっぱあの人が特別なだけか。）

少し不快感を感じながらもとりあえずマズはやる事をやろうと、モカの方へ近付いていった。

「私は夢魔（サキュバス）の黒乃胡夢　あなたをやっつけに来たの」

「え……ちょっと自分の正体を明かすのは校則違反じゃ…」

（でも…私もつくねとカイトにバラしちゃったし…　でもあれは学校外で…）

自分の言葉に一瞬矛盾を感じていると…　すぐさま追撃が来た。

「我慢できないのよ！あなたは私の大いなる「計画」の邪魔する最悪に目障りな女だわ！」

くるむは、びしっ！！っとまるで　某アニメの…

『犯人はお前だ！！』ッと言わんばかりに人差し指を突きつけた！

「え？？計画？？」

待ったく身に覚えの無い事を唐突もなく言われたため戸惑いながらも計画を聞いてみると……

……

……

……

…

それはなんと！！

《陽海学園ハーレム化計画》

なるものだった！！！！！

皆、若干……いや、結構引いていた…

「計画（プラン）は完璧だったのに…　すぐにみんな夢中になるはずだったのに……」

わなわなと体を震わせながら、

「赤夜萌香ッ!!この学園の男達は私じゃなくあなたに夢中になっちゃったのよ!!!オマケに彼氏2人~っとか噂されちゃって!!(しかもカイトくんだし)(怒)許せないわっ!!私が女の魅力で負けるはず無いのに!!」

(逆恨み……)(ッ!すっげ・・・ある意味…)(ここまでくると清清しいかも…)

火花を散らしながら言い争う!ッというか一方的に言われていた。

うん…清清しい程の逆恨みだと思いm「うるさい!!」…はい…

(ううぅ・・・ついに…カイト君以外にも…)

『作者の愚痴やコメントはいらん!』ええええ!!カイトくん!!どっから??

第７２話　接触と修羅場（後書き）

ありがとうございました！！

かなりというかほぼ原作です・・・

ううー駄作だぁー　もっと文才を～

第７３話　修羅場と逃亡（前書き）

よろしくお願いします！！

題の通り…

逃げちゃいます！…　案外カイトくんは…

第７３話　修羅場と逃亡

まだまだ戦いは続いていた……

「だからあなたをやっつけて私のほうが優れている事を証明する事にしたのよ！まず！あの青野月音君をあなたから奪う事で！！その次は御剣怪斗君！！」

「えええええ！そんなっ　やめて！つくねとカイトは関係ないじゃない！！」

おろおろしながらも関係ないことを伝えると…

「さっき…近付いてみたけど…彼らってとってもいい香りがするのね…　特につくね君のほう…　まるで人間のように…」

ギクッ！！

そんな擬音が一瞬聞えたような気がした…

「彼の「血」！おいしい？あなたは彼を「食糧」として利用してるわけだ？でっ！カイト君は？？何！！彼も何かに利用しようとしてるのかしらね？ひっどい女！あはははは　２人を奪られた時のあなたの顔…見物だわ」

くるむは高らかに笑った。

すでに勝ちを確信してるように…

「ちがっ…　そっそんな…利用だなんて…　私は…」

気にしていた事を公然とバラされた為、モカはかなり動揺してしまった。

その時！！

『ふあああ…ううーん…うるさいなぁ　何の騒ぎ？？』

教室の扉を眠そうにガラッっと開けるカイトが…

その後ろからは…

「モカさーーん！！」

廊下を走りながらくるつくねが…

「「！！」」

そのタイミングはまさに…

（修羅場）　（うん…修羅場だな…）

周りの生徒（ギャラリー）が言う通り修羅場だ…

……

……

……

…

（えええ！何この空気…！！オレこういうのはちょっと……）

カイトはジリジリと後ずさりを…

「モカさん！さっきはゴメン！急に逃げちゃって…」

つくねはモカに謝罪を…

（おお！つくねもいるじゃん！面倒事…又の名を適任事は適任者（つくね）に任せよう！！）

『眠いなー　あー　つくねー　　授業始まったら起こしてなー　（棒読み）』

パタンッ

「え?? あ? うん…　わかったよ。…??（あれ…　何かいつもと…?）」

（こういうの…マジでダメなんだ、オレって…　耐性（けいけん）が…さすがにそんな補助魔法はもって無いし…）

そう思いながら、くわばらくわばらと自分の席へ向かった。

第７３話　修羅場と逃亡（後書き）

ありがとうございました！

逃げちゃダメですよね…

でも気持ちはわかるような…　苦笑

第７４話　くるむの…勝利？（前書き）

よろしくお願いします！！

第７４話　くるむの…勝利？

（よっよかった…魅惑眼（チャーム）の効かない彼がいたら失敗してしまうかもしれなかったから…）

くるむも2人同時の登場は予想してなかった為、

動くのが遅れたが…

「あーーー！つくねくんだーーー♪」

まずはつくねに自慢の胸を押し付けながら抱きついた。

「うわーーーーー　なんで!?くるむさんが??ま　待ってーーオレはモカさんに謝りに…」

デレデレ、ニヤニヤしながら言われても…

「何よ…　人が…　心配してるのに…　うれしそーな…　顔して…」

つくねは凄まじい妖気（オーラ）がはっきりと見えた気がした…

（モッモカさん!怒ってるーーー!メチャ怒ってる!!）

カイト　ｓｉｄｅ

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ……

『うおおっ！！』

少なからずいつもと違う雰囲気に少し心配（少しかよ！！）してたカイトは、

外の気配を探っていたら…モカの妖気をモロに感じ取っていた。

『封印されてるのにこんな妖気が出るって…　モカ相当怒ってる？？　あんな空気がする場所に行くのヤダなんだけど…　いつもと今回は違うか…な。それに…さっきのってくるむだよな…？』

あの修羅場の空気からスグにでも逃げ出したかった為、あまり周りに注意してみてなかったのだった…

『こりゃ…ヤバイな…　ムリムリ言ってる場合じゃないかも…』

そう呟き、再び廊下へと向かった。

決心をし再び向かったのだが…

『……あれ？モカ達は？？』

廊下にはもういなかった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

モカ　ｓｉｄｅ

校庭の扉前に座りながら・・・

モカは沈んでいた…

「わたし…　つくねやカイトのなんなんだろう…　友達…なのに・・・
・　わたしの本性（ほんね）は　血を吸いたいだけ…？カイトにも迫ったし…
私は…」

眼から涙が溢れていた。

《おい！未熟者、つくねは操られているだけだ。》

また突然声が聞えてきた。

「わっ！」

《「魅惑眼（チャーム）」所謂異性を虜にする術だな。》

声の出ている場所…それは、

「なっ　何これ？？ロザリオから声が！」

そう…ロザリオから聞えてきたのだった。

《私は、もう1人のお前だ。…深層意識からロザリオを媒介にし、

話している。≫

「え…もう1人のわたし？」

俄かには信じがたかったが…その「声」が続いた。

≪サキュバスは男を惑わす妖　その口付けをうけた男は永遠に虜になってしまうと言う…　急げ……このままでは完全につくねはくるむの下僕にされてしまうぞ。≫

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

（やふ～～～♪見た？あのオロオロした顔！たまんないよ～～）

よほど悔しかったのか。

歓喜の涙を流しながら、擬態を解いた尻尾を左右に振っていた。

つくねは…

（なんで？？なんで？？オレ、モカさんにあんな事を言っちゃったんだろ…）

こちらは逆にメチャクチャ落ち込んでいた。

悲痛な涙を流しながら…

（つくねくんもよく見るとかわいいかも？　いいね♪このままつく

ねくんを虜にすれば私の勝ち！）

そしてくるむはつくねを抱きしめ、

「落ち込んでるんだよね？つくねくん…　お詫びにくるむが慰めてあげる…」

（なんだーーオレ！モカさんとケンカしたばっかなのに！！こんなのばっかり！！）

くるむの胸で窒息しそうになっていた。

「（魅惑眼（チャーム））じっとして…」

互いに顔を紅潮させながらベットに横たわる…

「く　くるむ…さん…」

（だ…だめ…だ…　やっぱり　おかしい…　くるむさんを見てると…オレ…　いけない…　このままじゃ…）

くるむは魅惑の術最終段階の口付けを行うため、顔を近づけていった。

（わ　わたしまでドキドキしちゃうけど…　この口付けで…　これで赤夜萌香を見返せる！）

５ｃｍ…４ｃｍ…３ｃｍ…

徐々に唇同士が近付いていく…

「まっ…」

つくねは…唇が触れる寸前、

ガバッ！

つくねはくるむに抱きついた。

「きゃ！（あ　あれ？　さあ口付けを…）

くるむはつくねから離れようとしたが…

離れられなかった。

「ーーーーーー！」

第７４話　くるむの…勝利？（後書き）

ありがとうございました！

第７５話　くるむの暴走（前書き）

よろしくお願いします！

第７５話　くるむの暴走

「ごめん！できないよ！オレ…裏切りたくない人がいるから…」

つくねは逆らえない魅惑眼（チャーム）（くるむに抱きつきたくなる）を逆に利用し、魅惑の術（くちづけ）を防いだのだった。

ドクンッ……

くるむの心臓が高鳴る…

その行動はくるむを激しく傷つけた、

「どうして…どうして…　そこまでして…拒むの？そんなにあの人がいいの？？」

くるむは魅惑眼（チャーム）解除し、つくねを突き放した。

「え！！」

つくねはくるむの突然の激昂におどろいた。

「わたしが…　こんなに尽くしてるのに…　本当は恥ずかしい事もやってあげてるのに！！」

くるむは、翼・爪・尻尾すべて擬態を解いた。

「えええええ!!くるむさん!!?」

魅惑眼（チャーム）が解けた反動か、つくねは何が起こったのか理解できてなかったが…

自分の身に起こる事態は把握できた。

（いままで誰にも負けた事無かったのに…　あの女が…　赤夜萌香さえいなきゃ!!）

思いがけないつくねの行動・突然の挫折・傷つけられた負けられないプライド・そして一族の宿命…

様々な事が重なり、くるむにはもう冷静な判断が出来なくなっていた。

「もーーーー!!あったまに来た!!あの女にかかわるもの皆ぶちこわしてやるーーーー!!!」

くるむは爪を伸ばし、つくねに切りかかった。

「ひゃあああ!!」

その時、

「やめてーーーー!」

間一髪保健室にモカが入ってきた。

「モカさーーん!!」

「何!!」

つくねとくるむは共に驚きの声をあげた。

「つくねに…つくねに手を出さないでよ!!」

ドンッ!!

モカは両手で思い切り突き飛ばした。

「きゃ!」

くるむはモカの突然の乱入に驚いていたがそれより驚いたのは…

「ええ……!!!」

モカの凄まじい力にだった。

突き飛ばす力が強く、一気に窓の外へ飛ばされていった。

カイト　ｓｉｄｅ

『ううん　あいつら…　どこ行ったんだ?険悪なムードだったし…』

カイトは近くにいた生徒に事情を聞き、今の状態を把握した。

もちろん、くるむがモカの人気に嫉妬し、襲おうとしているというのみで、カイト＆つくね争奪戦！を省いた説明である。

当事者には中々話せない内容だしね…

『実際にあってみると、そんな悪いようなコには全然見えなかったし。話せば分かり合えると…　ううん…しかし…女の子って怖いかも…』

ガッシャーーーン！

探していると　窓が割れるような音がした。

『！！あっちか！！』

カイトは「天翔る羽（フェアリー・ウィング）」を発動し、音がした方へ向かった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

モカとつくねは下に下り、くるむと対峙していたが……

「ロザリオが外れない！おかしいな、この間は簡単に外れたのに！」

封印の十字架（ロザリオ）が外れず、

くるむの餌食になりかけていた。

「あはははは！しょせん馬鹿力だけのバカ妖怪ね！つくねくんも足手まといみたいだし！2人ともおとなしく死んでーーー！」

くるむの突進が来た。

その爪による斬撃は大木をバターのように切り裂けるほどの鋭利さを持っている…

オマケに最初の攻撃を避ける時、つくねは足を挫いてしまっていた。

ぎゅ…

モカは動けないつくねをぎゅっと抱きしめた。

「モカさん何を…？」

「わたし…こんな時になってはっきり分かるよ。」

（守りたい…　友達を失いたくない…　だって…生まれてはじめて出来た友達だもん！）

「つくねは大切な友達なの！血とか関係ないわ！！やるならわたしだけをやってーー」

モカは、はっきりと自分の気持ちに気付いた。

友達…　それも　初めての…　孤独な自分に出来た本当にかけがえの無いものを。

しかし、

今のくるむには何も伝わらない。

「笑わせるなーーー！」

斬撃が襲い掛かる。

（そんな…　元々はオレが惑わされたせいなのに…オレは…足手まといじゃ無い…）

「足手まといじゃないぞーーー！！」

叫びと同時にくるむの爪が2人を襲った

第７５話　くるむの暴走（後書き）

ありがとうございました！！

第７６話　暴走の果てに（前書き）

よろしくお願いします！！

第７６話　暴走の果てに

後一寸ほどでくるむの爪が届く距離！

その刹那ッ

『やめろ！くるむ！！』

ガキイイィィッィ！！

突然、何か硬いものにぶつかったかのような音がした。

「なっ！あ　あんたは！」

『頭を少し冷やせくるむ。大丈夫か？つくね、モカ！』

カイトが間一髪くるむの爪を受け止めていたのだった。

「カイト！！」

モカは、叫びながらカイトの方を見た！

その時…

パキィィン！

「は…外れた！」

カッ！！！！！！

封印されていたバンパイアの本性が凶々しい妖気と共に開放された。

妖気の開放だけでくるむは吹き飛ばされた。

「ひ……　うそっ…　何て　凶々しい妖気の渦…　栗色の髪が銀色に染まっていく…これがモカの正体！」

突然のカイトの乱入・モカの変貌、

くるむは更に混乱しそうになっていた。

「…手数を掛けたな　カイト、後1秒でも遅かったら危なかった。つくねを頼む、動けないほどじゃないが、足を負傷している。」

『わかった。後なモｋ「冗談じゃない！負けるわけにはいかないわ！」…？』

くるむは強大な妖気にたじろきつつも声を上げる。

「わたしは！わたし達サキュバスが男を誘うのは「運命の出会い」を求めているから！数少ない種を絶やさないように慎重に男達から選ばなければならないの！それを邪魔した赤夜萌香ッ！お前だけは何があっても許さない！！！」

『っておい！止まれって！くるむ！！』

カイトは声を上げるが、血の昇った頭ではもう周りが見えていないのか全く耳を貸さず、

モカのほうへ突進していった。

「だから…　どうした？許さないからこの私に牙をむくのか？脆弱な自己中心的女が…」

くすくすと笑いながらも眼を細め…

「身の程を知れ」

くるむの全身に悪寒が走る…

「うあああああああああ！！！」

爪を振りぬくが、

「のろい」

モカは回避しくるむの尻尾をつかみ…

「二度と飛べぬよう、羽と尻尾をむしり取ってやろうか」

尻尾を思い切り振りかぶる。

「や…やめーーー！」

ド　　ンッ！！

「きゃう！！　かはぁ……」

そのまま地面へ叩きつけた。

衝撃で地面に半径2メートルほどのクレーターが出来るほどだった。

「攻撃が直線的過ぎる頭を冷やせよ。そこまで私が憎いのか？」

モカは着地しくるむに近付いた。

「小悪魔ぶってる割に純情な小娘だな…　さて…二度と私にたてつけぬ様にしてやろう…　まずはその尻尾と羽をむしってやるよ…」

モカはゆっくりとくるむに近付いていく…

「う…　うぁ…」

くるむは立ち上がることが出来ず、その場で恐怖に震えていた。

モカが手を振り上げ、

振り下ろしたその瞬間…

パシッ！

『だからまてって、モカ。』

そのモカの手を受け止めた。

「え・・・？」

目を開けた先にはモカではなく・・・　カイトがいた。

（なぜ…わたしを庇ってくれる…の？）

「？　　どけ…　何のつもりか知らんが、そいつはつくねやカイト・・・お前を騙そうとした挙句、つくねの方は殺されかけた、その上先ほどのカイトの呼びかけには全く聞く耳を持たなかったんだぞ？」

モカはカイトに向かいといかけた。

『ん？モカ　オレは別にくるむに何かされた覚えは無いぞ？（たぶん）』

笑いながら答えた。

「……なぜ庇う？あの時の会話の流れを聞いていれば、そいつはお前にも何かしたのは明白だろう。例え本当に何も無かったとしても、お前は友(つくね)を殺そうとしたその女を許せるのか？」

モカの目つきがカイトとは対照的にッ細まった。そう、睨むかのように。

『確かに・・・くるむにもやりすぎな面もある・・・　そこは否定しない。だけど…』

くるむの方を向く。

「あ…う……」

僅かにまだ震えているが、ちゃんとこちらを向いた。

『頭は大分冷えたろ？モカもオレも冷やせって言ってたけどな。このコ…オレには本当に悪いコには全く見えなくてな。まあ、オレは今回、殆どといって良いほど絡んでないから…』

そういうと今度は側まで歩いてきていたつくねのほうを向いた。

『つくねはどうだ？このコに…これ以上鉄拳制裁を加えろって言うのか？』

つくねに問いかける…

するとつくねは首を左右に振り

「ううん、これで…いや　もう十分だよ。くるむさんも悪気があってやったわけじゃないだろうし…」

（！！！　カ…カイトくんだけじゃなく…つくねくん…も…）

徐々にくるむの溜まっていた涙の種類が変化していった。

「だってさ！カイトが言うように、オレもくるむさんって根っからの悪いコには全然見えないもん！きっと仲良くなれると思う！」

つくねは笑顔で答える。

『だろ！ちょ～っと過激すぎなとこもあるけどな！　それに刺激も…』

カイトもまた頭を掻きながら笑った。その時、

「うあああああん　ご…ごめんなさあああぃ」

くるむは本格的に泣き始めた。

カイトはくるむの側まで行き、頭を撫でた。

『ははは…　うん。悪い事したら、まずはゴメンだよな！　これで俺たちは友達だ。』

「っ…！！　あぁぁぁぁん！！」

カイトの言葉を聞いてくるむは更に泣き出した。

「あははは…　それに…力になってくれいてる今のモカさんも…ね」

「……！！」

モカはまさか自分にふられると思ってなかった為、少し動揺した。

「ちっ　誤解するな…　私はお前の血を横取りされたくなかったからだよ…」

そう言うとつくねからロザリオを取った。

『…んー？モカ照れt…』

ヒュッ！

言い終わる前に右ストレートが飛んできた。

パシッ！

『おいおい…軽いジョークじゃないか…　というか前より早くなってないか？手を出すの。』

モカの拳を受け止めながら苦笑した。

「お前は言う前に顔にでるんだよ。いつかちゃんと戦い合う(はなしあう)必要があるか？」

『光栄極まりない話だが、それ漢字が違う…　そっちの方は辞退するよ。モカお嬢様。』

「フン…」

そう言うとモカはロザリオを身につけ…気を失った。

第７６話　暴走の果てに（後書き）

久しぶりの大量更新終了です～
ありがとうございました！！

第77話　2人とも…（前書き）

来ましたラッキーセブンの話！！
あまり関係ありませんが…　苦笑
よろしくお願いします！！

第77話　2人とも…

翌日…

登校中に3人は合流していた。

『いやー　昨日は（も）大変だったな…　いろんなことがいっぱい有りすぎて…』

ため息混じりにそうつぶやくと…

「何いってんのさ！あの時、カイト逃げ出したじゃん！モカさんとくるむちゃんが廊下でいた時。」

つくねがツッコミをいれた。

『うぐ！！逃げたって言葉をつくねに言われるとは……』

つくねの絶妙な突っ込みに返す言葉が無く黙る。

『オ　オレはああいう雰囲気は苦手なんだよ！！』

とりあえず、唯言われるだけにはいかなかったので、反論を！

「そんなのオレだって得意じゃないさ！！」

わーわー言い争っていると…

「あ　あのさ…　ちょっと良いかな??」

モカが不安そうな顔をして話してきた。

「昨日…実はロザリオが話しかけてきてさ…」

悩んでるかのように、伝えた。

「えー　ロザリオが話しかけてきた!!」

『ふむ・・・』

つくねは若干驚いて、カイトはそこまで驚かず、モカのロザリオを見つめていた。

「うん・・・　でも昨日はその声に助けられたんだけど・・・　変だよね…封印が弱まってきているのかな?」

少しくらい顔をしながら続けた。

「　ねぇ…もし…　もし封印が効かなくなっちゃったら　2人とも・・・それでもわたしを嫌いにならないでくれる?」

カイトはまだ黙ってロザリオを見つめていた。

つくねは、

「もちろんだよ!ちょっとくらいコワくっても血を吸っても　オレ

にとってはモカさんはモカさんだもん！！」

まさに即行！自分の考えを伝えた。

「ホント！つくね…ありがとう！！！　あ…あのカイトは？わたしの事…嫌いになっちゃう？」

モカはつくねには満面の笑みで答えた。唯カイトは、まだロザリオを見つめていた。

（ちょっと！！カイトどうしちゃったのさ！いつもなら「つくね！しっかり伝えてやれ！！」って言ってるじゃん！黙っちゃって！）

いつもとまさに逆のパターン、

つくねがカイトに話すように促していた。

『ん…？ああ、すまん。ちょっとロザリオを見てたんでな…』

そう２人に言い、

『封印魔具系はあんまし知らないんだけど、壊れてる感じとか全く感じないんだよな…』

じぃー・・・・・っとロザリオを見つめていた。

えー…

ロザリオはモカの胸元に位置しているから、
凝視するって事は…
（何か恥ずかしいよう…）
モカは赤面していた。
（ちょっと!!カイト!あんまりよくないんじゃないの!!じっと見てるなんて!!）
モカの様子に気がつき、慌ててつくねがカイトに呟いた。
『あああ!!悪い悪い…　その…　下心とかはないんだ…　ごめん…』
つくねに言われると思わなかったが、
胸元を凝視していたのは事実。
すぐに誤った。
「　いっ　いやそんな…」
モカはまだ赤面していた。
『あ～　えっとさっきの話だけど、オレもつくねと同じだよ。』
気まずくなったが、とりあえず場を収めようと話した。

「ホント??」

モカは顔を明らめ話した。

『ただ封印が壊れるって考え方…　オレは好きじゃないか…な。』

続けて話した。　2人の顔には??が浮んでいた。

『君たちは、もうオレ達にとってもう友達だからな。封印が壊れる…っていったら、どちらかが壊れる…って聞えるんだ。モカが心配なのはわかるけど、たとえ　モカの封印が効かなくなっても…　ん…とな…言葉では表現しにくいけど…　裏も表も無い…いや、表裏一体になる…かな?そういう風に考えてみたらどうだ?2人で1つ…みたいにさ』

そう答えた。

……暫くモカは黙って聞いていたが。話し終えると同時に。

「うん!!　カイト!ありがとう!!わたし…そんな考え方出来なかった!そうだよね…二重人格でも　裏のわたしもわたしなんだよね!」

そう言って　カイトにお礼を言った、

その瞳には僅かに涙が溜まっていた。

(…やっぱし…カイトには敵わない…かな)

つくねは若干落ち込んでいた。

カイトの言った事はとても素晴らしい考え方だった。

異論はあるはずも無い、

だが、そう答えられなかった自分に少し腹が立って言ったのだった、

そんなつくねに気がつき、

『まあ…　言うのがちょっと遅れたのが心象悪いな。その点つくねは真っ先にどっちのモカもモカだって言ったから、スッゴい想ってるんだな…』

そうカイトが言うと、

「えええ!そ、そんなオレはそんな大それた事…」

沈んでた顔が吹き飛び一気に赤くなった。

「うん!!わたし!!2人とも大好きだよ!!」

モカは満面の笑みで2人の腕をくんだ。

ドキッ

この言葉につくねもカイトも…　モカ自信も赤くなった。

（まずい…　女の子にここまで面向かって言われるとさすがに照れ

る…顔に出てるよな…）

カイトは頭を掻きながら苦笑し、つくねとモカは俯いていた。

その時、

「おはよーございまーす！」

ジャンッ！！ッと言う効果音をつけてみたくなる。

いきなりの事で、驚きつくねは地面にダイビング！！

カイトはビクッ！！っとなりながらふりむく。

『びっくりした！！』

モカもまた驚いて振り向く。

「くるむちゃん！！何でまたっ…」

そんなことにかまわず、くるむは続ける。

「つくねくん！カイトくん！クッキー焼いたんだけど一緒に食べな

い??」

笑いながら話す。

「へ…?何でオレ?」

『ん?オレ達??』

困惑しながら聞くと…

「やーーー　ほらっわたし…生涯1人だけの「運命の人」を探してるっていってたけど、ちょっと問題が発生しちゃって……」

そして、満面の笑みで顔をこちらに向け、

「わたし!!2人とも好きになっちゃったの!!」

えええええ!!!

3人それぞれ驚愕していた。

「ほら、カイトくんは身を挺してわたしを庇ってくれたし!つくねくんは酷い事したわたしをあんなに優しくしてくれて、許してくれたし…　2人に惚れちゃいましたよ!!人間じゃないんだし!一夫多妻じゃなくて一妻多夫!!で!」

『えええええ!!惚れって…　オレも!!』

カイトはまたまた驚愕!

「一妻多夫って…」

つくねは放心……

それぞれオロオロしていると…

くるむとモカはバチバチバチッ…と火花を散らしていた。

「ちょっと！くるむちゃん　何言ってんのさ　何とかしてよー　2人とも！！」

「いっそのこと今すぐ結婚して～　2人とも～！！」

『ちょ…これは　オレにとったら解決不能問題なんで……』

「やっぱり前途多難だーーー」

校舎内逃げ回る…

周りの生徒の視線が痛かった。

第７７話　２人とも…（後書き）

ありがとうございました！！

第７８話　負けられない！！（前書き）

よろしくお願いします！！

第78話　負けられない！！

「ほ…本当にいいの？つくね…？」

「う…　うん…」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・

そこは校舎の外の墓場。

2人は顔を赤らめながら見つめ合っていた。

「あ…ああ嬉しい　つくね…」

「モカさん…」

2人の距離が近付く…

「初めてだね…　つくねから血を吸わせてくれるなんて♪♪」

かぷっ　　ちゅうううぅぅ

「ぎゃあああああああああ」

……

つくねは叫び墓にもたれかかり、モカは両手で頬を触り悶えていた。

「つくねの血……　おいしい……♪」

（おかげで貧血気味…　でも　モカさんわかってくれないんだよなぁ…）

首筋から血が吹き出ていた…

（で、でも！カイトに負けられないよな…　今のところ…　人間（おれ）が勝ってるのこれだけだし…）

貧血気味でふらふらしているつくねの行動原力・・・はそれだった。

大切な友達だけど…　やっぱりモカさんと仲良くなりたい。

カイトはライバル！それもかなり強大…

カイト本人がどう思ってるのかが不明だったが…

（でも…やっぱり仲良くなりたいってだけじゃダメなのかな…）

そして授業が始まるため、教室へ向かった。

『よ！長かったな、どこにいって…ってつくね！！』

つくねの顔を見るとまるで生気を抜かれてミイラみたいに！！

反対にモカは肌が艶々していた。

笑顔も綺麗だ。

（おいおい！大丈夫か？？）

つくねに話しかけると…

（ん…　だっ　だいじょうぶ　だいじょうぶ…）

フラフラの手を上げた。

（あのな…　そこまでになるまで血をあげるなよな…　やれやれ。）

ため息を吐いていたが、さすがにここまでになってたら心配だ。

（オレもモカに血狙われてるし…　半分ずつあげて負担を軽くしようか？人間よりは血が無くなっても…　まぁ大丈夫だし。）

そう小声で話すと…

「えええええええええ！！！ほんと！！！！！それ！！！！」

突然立ち上がり、叫んだ。

モカに血を～の部分でかなり驚愕したらしい　苦笑

血まで負けてしまったら・・・・・・

（ばっばか！！）

クラス中が注目する。

つくねが我に返りオロオロすると…

「はいー　青野君の言う通りですよ～今日から部活をやってもらいまーす。」

そう担任の猫目先生が言った。

「あっ！！そうですか！！あ　あの確認したかっただけなんで…すみません。」

何とかごまかせたつくねは謝罪した。

「はーい！後〜確認する時はなるべく大きな声出さないで欲しいなー！先生驚いちゃうから。」

「はい…注意します…」

そう言い席に着いた。

（何やってんの？？いきなり…）

つくねに苦笑してると…

（カッ　カイト！！良いよ！そんなの！オレからモカさんにあげたんだし！自業自得だし！モカさん喜んでくれてるだけで嬉しいし！！）

小言は小言なのだが…

反応（リアクション）がでかい…

（わかったわかった。落ち着け、狙われてるって言っても味見程度だっていってたし、吸われたとしても基本的には吸血鬼（バンパイア）が吸うのは人間の血…　オレは人間と違うからつくねの方が良いって絶対）

やれやれといわんばかりに、話した。

（ほっ…）

つくねはあからさまに安心していた。

（やれやれ…　やっぱ嫉妬するに１００円！掛けて正解だったな。

賭け相手はいないけど　苦笑）

とりあえず、その後は秘密談義も終わり、

部活動の説明を聞いていた。

第７８話　負けられない！！（後書き）

ありがとうございました！！

第７９話　体験入部と逃走劇？（前書き）

よろしくお願いします！！

第７９話　体験入部と逃走劇？

「いいですかーー　部活は全員参加でーす！皆さんいろんな部を見学して自分が入る部を決めてください！私が顧問の新聞部とかも見学にきてねーー　↑《宣伝》」

って訳で、

陽海学園の部活動体験入部が始まった。

『んー部活…　か　しんどいのはカンベンなんだよな…』

憂鬱だ・・・・・・

部活！の単語だけで　転生前の地獄を思い出しそうで…

「ほら！２人とも！！いろんな部があるよ！早くいこ！！」

モカが手をつかみ駆け出した。

「う　うん！！」

『わっ　たた！！ちょっとまって！！』

つくねは相変わらず緊張気味。

カイトは　昔?を思い出していた為　油断していた。

暫く廊下を進んでいくと…

部室が並ぶエリアについた…

ごちゃごちゃごちゃ

ざわざわざわ…

それは…

ありえないほどの人だかりだった…

(何これ…　満員電車かよ…　こりゃ見に行くだけで骨がおれそう…)

カイトはあまりの人の多さに、げんなりしていた。

「っすごいねー!これ全部部活の勧誘かな?」

つくねは逆に興奮しながら話した。

『まあ…　何事にも程々が一番だけどな…』

「あはは！にぎやかで良いじゃん！2人は何部に入る??」

……・・・・・・

『強制だったら　しんどくない部！！だったらどこでもいい！』

「「あははは…」」

2人は苦笑していた。

実は昔人間界でいた中学の部でかなりしんどい思いをしていたことをカイトから聞いていたのだった。

頑なに主張する理由もわからないことは無い。

「あ！水泳部なんてどうかな??」

「！！！?」

つくねの発言を聞きモカは顔を強張らせる。

「オレ…　実は小学校まで親にスイミングスクールに通わされててさ。健康のために…っとか言われて（水泳ならモカさんにいいとこ見せれるかも…）」

つくねは苦笑しながら説明した。

それに対しモカは…

「いや…あの…わたし…」

モカは少し慌てていた。

『ああー　あのつくね??』

話を途中から聞いていたカイトはつくねに話しかけた。

「?」

『あのな…つくね、バンｐ「きゃーーー!!」ビクッ!!』

カイトが驚き振り向いた先には…

「カイトくん!!どの部にはいるのーーー!!!」「きゃあ!!今日もかっこいい!!!」「グフフフフウウゥ!!!」

またまた多数の女子生徒（顔なじみの…）だった…

…人数は…大分減ってる。

超粘着質、コアなファンだろうか??

4~5人の女子生徒だと言いなおそう。

『げげげげ!!』

振り向いた瞬間…

いや振り向く前から異様な殺気とも取れる気配が感じた為、すぐに体勢を整えられていた。

『じゃ　じゃあ　つくね！モカ！先にいっててくれよ！！　また後で！！』

そう言い駆け出した。

「へ？ああ！カイト！！」

「！！！」

突然の出来事に2人とも驚いていた。

『ああ！後なモカ！！』

走って逃げる前にモカの側に来て、

『つくねはバンパイアを知らない！無理&無茶すんじゃないぞ！』

「え！？」

話を返す前に…

ドドドドドドッ！！！

走っていってしまった。

つくねとモカは女子生徒たちが走り去る過程で生まれた突風に煽られていた。

どれだけ・・・？

『ちょっとーーー！！諦めたんじゃなかったのーーー！！』

走りながらも叫ぶ！

「簡単に・・・」「諦めて・・・」「なるもんですかーー」「グフフフ…」

『えええええ！！こわっ！！！』

走る走る走る！

そして……

校舎に悲鳴が木霊する…

残された2人は、呆然としていた…　苦笑

第７９話　体験入部と逃走劇？（後書き）

逃走劇？！っとありますが・・・
実際はもっとあるでしょうね・・・苦笑

描写が三回目なんで・・・　苦笑

ありがトーございました！

第８０話　新聞部はどーお？（前書き）

よろしくお願いします！

第８０話　新聞部はどーお？

走って走って走って・・・

身体強化魔法もつかって・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・

『ま・・・撒けた・・・・・・・』

とりあえず…近くの教室に身を隠す事にした。

息を潜めて隠れる…

『あぁー疲れた…　あの子達ひょっとしたらかなり高位の妖じゃないんかな？　体力といい…　スピードといい…』

腰を下ろし天井を見つめながら呟く。

彼（カイト）は、男（やろう）には、強気でも、女（じょせい）にはかなり弱いみたいだ…

これが弱点にならない事を…祈るばかりである。

『……』今回はだんまり？↑『うるせぇ！』

しばらく隠れていたら…

「あらーー？貴方は」

教室の奥から誰かが出てきた。

『！！』

びっくりして顔を上げると…

「あなたは確か御剣君ねー！ひょっとして　新聞部を見に来てくれたのかなー？？」

猫目先生だった。

『ああ…ここ新聞部の部室だったんですね…すみません。緊急事態だったので逃げ込みました。すぐ出て行きますよ。』

そう言い立ち上がった。

「あらあら　さっきの騒ぎは、君だったのねー　ふふふ　人気がある見たいね～　以前もそうだったし！」

『人気はいいんですが…　ちょっと加減をしてもらいたいです…』

頭を掻きながら苦笑する。

「あははは、それはムリなんじゃないかな？？　女の子だもん。観念して捕まってあげたら～？」

『それは全力で拒否します…』

捕まったりしたら・・・

とって食われるかもしれない・・・

・・・・・・・・やっぱしムリ!!

暫く先生と話していたら、

教室の周りは静かになってきた。

『お!　大分落ち着いてきたか…　じゃあ先生、迷惑かけました。俺行きますね。』

「うん。またねー　あー後!!新聞部なんてどうかな?人数少ないから困ってるし　大歓迎だよ??」

勧誘されてしまった、

暫く考えて…　（ふり!）

『ん～　連れを待たせているんで、相談してきますよ。ＯＫが出たら部員が増えるかもしれませんから、ちょっと待っててもらえます?』

そう伝えると。

「おっけー!!期待して待ってるよ～!」

そして、部室を後にした。

『さて…っと　あいつら…どこにいるかな？　……まずはプールか…　一応ムリするなって言ってるから大丈夫だと思うけどな・・・・・』

つくねが水泳部はどうか？という会話を思い出し、

学園プールへ向かった。

暫く歩いていると…

ダダダダダダッ！

『む？　殺気！！』

走る足音があからさまに聞えてきた為振り向くと…

「カーーイトッ！！」

『わーーーー！くるむ！！』

ズッダーーンッ！

くるむがダイビング・フライングボディプレスをかましてきた…

おかげで廊下に倒れそうになった。

…まあ　堪えたけど。

「やふふーーー！こんなとこで会えるなんて！やっぱり、運命の人だね！！好き！！（告白！）」

豊満な胸（バスト）を押し付けながら告白！

しかし……

『・・・・・・・・・・（息ッ　息ッ）』

カイトは窒息でそれどころでなかった…

……

……

……

ぽくぽくぽく

チーーーン・・・・

第８０話　新聞部はどーお？（後書き）

ありがとうございました！

中々進まないですね・・・・・・

まだ原作で言う1巻後半・・・　ゆ〇りちゃんとか、み〇れちゃんとか、る〇さんにいつ会えるのやら・・・

作者が最も会いたいのは・・・　筆談の彼女だったりして・・・

苦笑

第８１話　水泳と吸血鬼（前書き）

よろしくお願いします！

第８１話　水泳と吸血鬼

カイト・くるむ　ｓｉｄｅ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

ふっかーーーーつーーーーー！！！

苦笑・・・・・・・

『いや…　マジで死ぬかと思った…』

ちょっとまだ、酸素が体に行ききってないのか、

フラフラしていた。（笑）

「ご…ごっめんね…　カイトに合えたのが嬉しくってつい…」

焦りながらも謝罪をした…

（ストレートすぎーー！こんなにはっきり言われたら！怒れない！

怒るつもりは無いけどな…）

顔色が青から赤に…

信号かよ…　苦笑

『ははは……　もう大丈夫だよ。ちょっとまだ息苦しいけど…
ああ　そうだ、くるむ　つくね達を見なかった?』

「ん?つくね??見てないけど、なんか男子達の話じゃモカが、水泳部に入るとか何とか…　言ってたよ!」

近付きながら、どさくさに紛れてキスをしようとするが…

『えええ!!マジでか?』

急に大きな声を出した為、思わず下がり失敗した…

「（後ちょっとだったのに…）うん。そう話してたよ。でも　おかしいでしょ?確かバンパイアって水が…」

残念…　と言う顔を出しながら話した。

『やっぱし…　そんな展開か…　つくねはその事を知らないんだ。
だから　水泳部にいったんだろ…　モカがムリして。』

「ええ!…でも　かなり有名な話よ?バンパイアの事　圧倒的な力の持つ種族だけど　結構弱点多い妖だって、」

つくねが知らない〜の部分が腑に落ちなかったのかくるむは不思議そうに話した。

『ああ…　まあ、けっこーつくねは疎いんだよな～　そういうことに。じゃなけりゃ、モカにとって毒でしかない所にわざわざ連れてかないって…』

（まさか…　人間だよ！ってカミングアウトするわけにはいかんし…）

「ふーーん…　まあいっか…　とりあえず　様子を見に行こう！（もう1人の旦那さんに会いに♪）」

くるむはニッコニッコしながら　腕を組んだ。

『はいはい…　あそこの部は…　なんか嫌な感じもするし…　ちょい早めに行こう。』

そう言って　足早に、学園プールへ向かった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そこは、学園プール。

水に入れないモカはプールサイドでつくねを眺めていた。

…そう　水泳部員に囲まれ　いちゃいちゃ　ベタベタしているところを見ていた！

（ムカムカ！もう…限界！！）

暫くは我慢してたが、やっぱりムリ！だよね…　苦笑

「いい加減にしてっ　つくねは結局　女の人と仲良くしたくて　水泳部に入りたかったの！？　わたしもう見てらんない！もうわたし行くから！！」

プールサイドのパラソルつきテーブルに両手で一撃…

グシャアアア！

粉砕…

「わああ　モッ　モカさん！誤解だよっ誤解！！」

叫んでも、女子部員に抱きつかれた状態じゃ説得力がない…

つーんっとしながらモカは離れていく。

「まって！モカさん！わかってよ。オレ…　モカさんと一緒に泳ぎたかったんだ！オレはーー」

プールサイドまで近付き必死に叫ぶが…

「何よ！わかってくれてないのはつくねのほうだよ！」

「え…？」

モカの叫びにつくねは驚いてしまった。

「わたし…　本当は…」

モカが訳を話そうとしたその時！

パッシャッ！

「きゃあ！！」

先ほどまで　つくねと泳いでいた　水泳部部長である一之瀬魚（いちのせたまお）がモカに向かって水を飛ばした。

「…見学は自由だけど　ケンカは目障りね　それに子供じみてるわね…　わかってくれるとかくれないとか…　くだらない！男と女に必要なのは奪うか奪われるかでしょ？泳ぐ気がないのならさっさと出て行ったら？」

そうはきすてた。

「きゃああ！水が！！」

モカは水を体に浴びパニックになっていた。

「モカさん！！？」

「まって！！つくね！ちょっと待って！！」

慌てて、プールサイドから逃げ出した。

「あら…　うわさは本当だったのね…！」

逃げ出すモカを珠魚は悪意のある顔で微笑みながら見ていた。

そこはプールサイドの下。

「はぁ…　はぁ…」

バチッ　バチチッ

まるで放電…　どこかがショートしているような音がしていた。

《この馬鹿がっ…　なぜプールになど近付いた！》

「ま…　またロザリオ…が…」

苦しんでいる最中…またロザリオから声が聞えた。

《水を浴びればそうなって当然だ！水と妖気が反発しあって電気が走ったように体が痺れるだろ！？水は私達バンパイアの弱点なんだぞ！！》

そう…バンパイアは「水」の持つ清めの力に非常に弱く水を浴びれば体がしびれ、その上妖気を出せなくなってしまうのだ。最悪の場合死にいたる事も在る。

《お前の体はもう1つの人格である私の体でもあるんだぞ！！無茶な行動は慎め！もうつくねなんかに振り回されるな！！》

「や…やだ…」

表のモカは苦しみながらも拒否した。

《何…？》

「もう嫌だよ…　こんな体…　どうしてわたしは皆と一緒じゃないの　変だよ…　わたしもつくねと泳ぎたいよ…」

人間界にいたころの…

他人（にんげん）と自分（あやし）は違うと言う劣等感…

モカはそのことを思い出し涙を流していた。

《……》

そんなモカ（表）にもう何も言えなかった。

第８１話　水泳と吸血鬼（後書き）

ありがとうございました！

察してあげてもいいと思うな～　つくね君・・・　苦笑

第８２話　水泳部の本性（前書き）

よろしくお願いします！

第８２話　水泳部の本性

一方そのころ…

水泳部員は本性をあらわし…

次々と体験入部してきた男子生徒を襲っていた。

「し…　新入部員を餌扱いする危険な部活があるってきいたけどまさか本当に!!」「わーーーにげろーーー!」「人魚(マーメイド)!!」

逃げ惑う男子部員達。

「皆の精気も吸わせてね～!」「逆らっても無駄だよ?わたし達水の中じゃ無敵だから!」「だーいじょうぶ!命までは盗らないから♪」

水泳部員はプールに巨大な渦を作り、逃げ場所を奪っていた。

「（なんてことだっ!人魚ってこんなに怖いものなの??　襲われる!!殺されちゃうーー!!）」

水の中でもつくねの反応(リアクション)は健在!

左右に動きオロオロしていた。

カイトがこの場にいればまず笑っていただろう…　笑　　↑「そっそれどころじゃなーーーい!」　つっこまれた…

その時、

「ふふ…　あわてなくても大丈夫…」

水中から珠魚が出てきてつくねの背中に抱きついた。

「ひっ！」

いきなりだった為軽く悲鳴を上げた。

「あなたは特別よ　月音くん！実はね…　私　入学式の頃からあなたに目をつけていたの…　それからはずっとあなたに夢中なの…だってホラ…」

そういうと…口がどんどん裂けて言った。

「月音くんって人間みたいなおいしそうな匂いがするから…」

そして耳まで口が裂け大きく口を開けた。

「ずっとあなたを食べたくてぇ！！」

「うあああああああ！！」

つくねが叫び声をあげたその時、

「つくねーーーーーー！」

声が聞えた…　その声の主は…

「モカさーーーん！！！」

「つくねっ！これはいったい！！」

モカに気付いた珠魚はつくねを抱きかかえたまま振り向いた。

「何よっ！また来たの？　邪魔しないでッ　泳げもしない　クズ妖怪のくせに！」

「！！（泳げない……？）」

その一言につくねは驚いた。

「図星でしょ！？！有名な話だもの　水がダメなあなたは何も出来ないのよね！？ザマないわ！！せいぜいそこで見てな・・・」

その言葉（セリフ）を聞く前に。

（バカにしないで！わたしだって！！）

モカはプールに飛び込んでいた。

「「えええーーー！！」」

バッシャーーーーンッ！！　バチバチバチバチッ！！！

モカが飛び込んだその場所だけ、

まるで雷が踊っているかのような風景だった。

「きゃあ!!いったい何が!!」

「モカさーーーーん!」

『マジかよ!!あいつ!!』

「ちょっと!!何でモカが水に…飛び込んでんの!?」

そこにくるむとカイトが来た。

『つくね!!早くモカを助けろ!』

「カイト!!くるむさん!!いったい!」

つくねは聞こうとしたが、

『細かい話は後だ!バンパイアは水には入れない!!急がないと死ぬ!!急げ!!』

その話を聞いた瞬間…

今までのモカとの話を思い出した。

一緒に泳ごう…　泳ぐのは楽しいよ…

つくねは駆け出した。

（オレ…モカさんになんて事を…）

そこに…

「ちょーっとまった！あなたは私の獲物なんですからね！！みんな！行かせちゃだめよ！」

珠魚の号令で他の部員がつくねに詰め寄ってきた。

「どいてくれーー！！」

しかし、つくねは止まらずモカの方へ向かった。

「つくね！！」

くるむは助けようとしたが、

『くるむ！動くな！！』

カイトが引き止めた。

「なんでよ！このままじゃつくねが…　っ！！」

振り向いたその先に、青いオーラと図形に囲まれたカイトがいた。

その瞳はいつもの黒い瞳では無く、紅く・・・　まるでバンパイアのようになっている・・・

『あんまし、女の子には使いたくないんだが・・・　そうも言ってられないようだ。』

そして右手を上に上げ

『疾風怒号・それは荒れ狂う天の叫び・・・・』

そしてプールの方を・・・　人魚達を指差し

『荒れよ暴風の嵐(ハヴォック・ゲイル)！』

ギュルオオオオオオオッ！！

その瞬間！つくねを取り囲むように接近していた人魚達は突然の暴風に身動きが取れなくなっていた。

「きゃああ！！！」「何！！これ！！！」「水の中で身動きが取れないなんて！！」

そのままプールの水は２つに割れた。

『今だ！行けっ！つくね！！』

「うん！（モカさん・・・　ゴメン）」

そして　つくねは飛び込んでいった。

「何なの？？これ！！」

１人取り残された部長珠魚はプールの状況に唖然としていた。

人魚達が水に束縛されているという、通常なら考えられない事だ。

その時！

ドッゴオオオオオン！！

先ほどの暴風が強大な妖気が出ると共に消えた・・・

第８２話　水泳部の本性（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典…　作者都合上ｗ　久しぶりに！！

マーメイド

よく知られている伽話の優しいイメージと違い。
船乗りの間では有名な水難を暗示する　不吉で恐ろしい海の妖。

その美しい姿で船を引き寄せては人間を遅い、
船ごと沈めてしまうという伝説もある・・・

原作の引用ですね～
美しい・・・かなぁ・・？
特に部長さんは・・・　良かったら見てみてください！
シーズン？　１巻です～♪

第８３話　水泳部との決着（前書き）

よろしくお願いします！！

第８３話　水泳部との決着

「「「「こっ！今度は何！！」」」」

またまた起こった予想外の出来事・妖気に珠魚と他の部員が叫んだ。

カイト・くるむ　ｓｉｄｅ

『ふう・・・もういいだろ。』

暴風が消えたのは、術を使うのを止めたからだった。

「すっ　すごい・・・」

くるむはモカの強大な妖気とカイトの力に驚き立ち尽くしていた。

「えーっと・・・　カイトはもう助けてあげないの？モカたちを・・・」

雰囲気がいつもと違うため・・・

いつもの様に話しかけれなかったみたいだ・・・　苦笑

『ん？ああ　モカが開放されたからな・・・　もう大丈夫だ。それ

に・・・』

「ん？」

『オレは女の子には極力手は上げたくないだ・・・　情けないかと思われるかもしれないけど。』

頭を掻き、苦笑しながら答えた。

「・・・（やっぱり　カイト・・・ステキ・・・）」

そして、くるむはカイトに抱きつきにいった。

今は空気読んでー！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「うっ・・・　うそっ　これが噂に聞いていたモカの正体？この威圧感・・・　まさか　これほどの・・・　これがバンパイア！！」

そして　モカが水の中から出てきた。

「・・・よくも　・・・よくも好き放題やってくれたな・・・」

強大な妖気を纏ったモカが珠魚を睨んだ。

「くっ・・・何よ！　どこまで邪魔すれば気がすむの！？月音くんは私が目ェつけたんだからね！絶対あなたなんかには渡さないんだ

から！！」

そう言うと再び部員達に号令をかけ。

「さっきの妙な風？も無くなったことだし！あんたには消えてもらうわ！！！」

動けるようになった部員達は一斉にモカの方へ向かった。

モカを威嚇するように周りで泳ぎ始める・・・

「あなたがどれだけ強いか知らないけど、水という領域（テリトリー）では人魚が上！命乞いするなら今のうちよ！！」

腕のヒレを出し構えた。

「・・・フ・・・・・・・・・　食う事しか頭に無い　低妖（サカナ）の分際で笑わせるな」

その言葉が癇に障ったのか、

「何をー！」「この女ー！！」「死ねー！」

一斉にモカに襲い掛かった。

バッ！！

それをモカはジャンプで回避。

しかし、やはり水によるダメージは大きいのか、動きは良くなかっ

た。

「動きが鈍いわ！！口では強がっても　ずいぶんと弱ってんのね！！空中ではいい的よ！！」

部員全員で空中に飛び出した！

「死ねーーーーー！！」

「モカサーーーーーん！！」

あまりの数につくねは思わず声を上げた。

『まあ落ち着けつくね。』

「っ！！　カイト！！　でも！あんなに人魚が！！」

つくねは慌てていた。

『よーく考えてみろ。　確かに水棲生物である人魚は水の中では最大限の力を発揮するな。だけど・・・今は？』

そういうと同時に。

ゴカァァッ！！

「！！！？」

「こうも簡単に釣れるとは、やはり魚（サカナ）だな、　身の程を知れ」

モカの右フックが珠魚の側頭部を捕らえそして他の部員は、

ドガガガガガガッ！！

「「「きゃああーー！！」」」

左右の脚の回転蹴りで一掃した。

バッシャアアアン！

そして皆プールへ落ちていった。

『な？　空中は人魚の領域（テリトリー）じゃないさ。』

「そそ！当然よねー♪」

・・・・・・・・・・

『そろそろ・・・オレから降りてもいいんじゃない？』

くるむはカイトの上に乗っていた　苦笑

「やふふー♪　もうちょっと！（カイトの戦闘形態（バトル・バージョン）見たのわたしだけー♪）」

「くるむさん？？」

つくねが苦笑しながら見ていた。

「ああ！！つくね！わたしあなたの事も大好きだからね！！」

そう言いつくねの方へ降りた。

『やれやれ・・・』

苦笑しか出てこなかった。

第８３話　水泳部との決着（後書き）

ありがとうございました！！

第８４話　水泳部（人魚）戦後…（前書き）

よろしくお願いします！
中々進まないな～　もうちょっとで1巻終了ですね！

第８４話　水泳部（人魚）戦後…

傍から見ればモカの圧勝なのだが……

やはり、バンパイアの弱点の１つである

「水」はモカに深いダメージを与えていた為。

モカは暫く膝をついていた。

『モカ・・・　大丈夫か？』

カイトはモカの方へ行きプールサイドに置いてあったバスタオルを手に取り、

『水滴１つ・・・ついてるだけでも結構やばいんだろ？　これで拭いておいた方が良い』

手渡した。

「・・・・ああ　すまない。」

モカは無表情のまま受け取りつくねの方へ向かった。

（・・・今はちょっと・・・フォローできんな・・・）

そのままモカを見送った。

「あ・・・あの・・・　モカさん・・・・」

モカはつくねの側に来ると

パンッ！

モカはつくねに平手打ち（ビンタ）をした。

「！！」

「ちょっと！つくねに何を・・・」

くるむが駆け寄った。

「あっちのモカが泣いていたぞ・・・・・・・」

その言葉にくるむは黙り、つくねの表情は変わった。

モカは目を瞑り話し出した。

「泳げないという・・・他人と違う劣等感で自分を責めてな　あいつは今までそうやって人間の社会で傷ついて生きてきたんだ。」

そして　目を開きつくねを見た。

「自分の事しか考えられぬような男に私の側にいる資格は無い！失せろ・・・　月音」

つくねは呆然としていた。

そしてくるむはつくねを慰めていた。

モカはカイトの側まで行き、

「タオルすまなかったな。」

ロザリオを手に持ち、カイトにタオルを渡しながら話した。

『厳しいな・・・　つくね（あいつ）は何も知らなかっただけなんだがな。』

まだ、呆然としているつくねを尻目にモカに言った。

「・・・無知は罪とまではいかないが、気付ける場面はあっただろう、そこは月音の落ち度・・・だ」

『ああ・・・　確かにちょっと不謹慎だったな。あの時ちゃんとオレがつくねに伝えていれば・・・　そこはオレの落ち度だ。すまなかったな。モカもそろそろ休んだ方が良い。結構なダメージだろう？』

そう言うと、

「ふん・・・　大した事は無い。」

やはり強がった。

（やっぱり強がったな・・・まあらしいっちゃらし・・・）

「なんだ!?」

ギロリと睨まれた。

心読めるの??

『ははは・・・　いや　なんでも無いさ・・・　おっ　そうだモカちょっといいか?』

モカに近付き話しかけた。

「む・・・?なんだ?」

モカの頭上に右手をを伸ばすと・・・

ヒュッ!!

前蹴りがかわりに飛んできた!

パシッ!!

『大・真・面・目なんだ。オレの落ち度分を返す。ちょっとだけ我

慢してくれないか？』

前蹴りを受け止めながら話した。

「ちっ・・・何なんだ？」

モカはカイトが真剣な顔をしていた為か素直に我慢した。

『ん・・・　そのまま・・・』

そして・・・カイトは目を瞑り・・・

『健やかなる活力よ・・・花の香りよ・・・此処に来りて　仲間に快方の光を・・・』

右手から鮮やかな青い霧のようなものがモカに降りそそいだ。

「・・・これは。」

モカは驚きながら眺めていた。そしてカイトは目を開いた。

その瞳は赤い・・・　真紅の色だった。

（カイトの目が・・・）

変化したカイトの眼に驚いていたその次の瞬間。

『健やかな風（リジェネ・サークル）の囁き・・・』

パァァァァッ・・・

「ん・・・・・　（何だ・・・いい匂いが・・・　体が・・・・）」

モカはなにやら体が楽になっていくのを実感していた。

『・・・っよし！　これで　暫く休めばすぐに良くなるだろうさ。』

そういい右手を元に戻した。

「いったい・・・　何をしたんだ・・・？今・・・・」

体が快復したのはわかったが・・・

『ああ、今のモカは大丈夫でも、もう1人の方のモカは大丈夫じゃないかもしれないだろ?だから、念を入れてやったって訳さ。おせっかいかもしれんがね。弱ってるモカもまぁ　魅力的だが・・・・・』

そういうと軽くウインクした。

ゴスッ！

顔面パンチがきた・・・

片目瞑ってたため、距離感が・・・掴めず・・・

『ぶっ！！　・・・なぜぇ・・・・・・・　ゆだんしたぁ・・・・』

クリーンヒットしてしまった！

「ふん！身の程を知れ！」

そういうとモカは後ろを向いた。

「まあ・・・　ありがとうな。カイト。」

後ろを向いている為、モカの表情は見えないが・・・

どんな顔をしているかは想像がついた・・・

『ててて っ・・・　ははは・・・　まぁ　つくねにオレと同じ力があったら　同じことをしてたと思うがな・・・やつは　最近の人間にしては珍しい・・・裏表の無い本当に澄んだ心の持ち主だしな・・・　その辺は大分わかってるんじゃないか？じゃ無けりゃもう1人のモカがあそこまで慕わないだろう？』

そういうと・・・

「・・・ふん」

モカは鼻で笑いそのまま・・・ロザリオを身につけた。

「すまない・・・後は頼む・・・・」

『ああ　頼まれた！』

モカは、元に戻り意識を失った。

『さて、連れて帰るか。つくね・・・は駄目みたいだな・・・　やれやれ』

つくねのほうを見ると　よほどショックだったのかまだ立ち直れてなかった。

『くるむ！』

「なにー？」

つくね達の側まで行き、

『オレはとりあえず、モカを送っていくから、つくねを頼む。今はまだ頭が冷えんだろ・・・　とりあえず　教室へ頼む』

「うん！わかったよ！！（つくね・・・わたしが慰めてあげるからね～♪やっふふー♪）」

・・・？？なにやら聞き分けがいいような気がしたが・・・

『サンキュ。』

特に気にせず、モカを保健室へと連れいていった。

・・・・・・・・・・・・

その日の授業。

保健室に連れて行ったモカはそのまま早退し・・・

つくねはまだ立ち直れていなかった。

（一応フォローは入れたんだけどな・・・　つくね繊細過ぎだよ・・・　苦笑）

第８４話　水泳部（人魚）戦後…（後書き）

ありがとうございました！！

第８５話　新聞部へ！（前書き）

よろしくお願いします！！
やっと入部しますね・・・　苦笑

第85話　新聞部へ！

三日後・・・・・・

まあ　多少はつくねは立ち直ったが・・・

肝心のモカが登校してないから・・・

つくねと共に教室へ向かっている途中・・・

「あら　カイトくんにつくねくん！ちょうどよかった！」

猫目先生に話しかけられた。

ヤバっ　部活勧誘されてたのにそのままにしてた！！

「もー　カイトくんってば　友達と相談するって行ってたのにそれっきりで！！」

『あああ！ごめんなさい！ちょっといろいろあって・・・』

ちらっとつくねのほうを見る。

「で？もう入る部活は決まった？あなた達とモカさんだけがまだ決まってないのよー　だからね！新聞部なんてどうかな？誰も入らなくて　潰れそうなのよー！　ねっ！ねっ！」

両の手をあわせ頼むように、勧誘・・・？いや、お願いをしてきた。

『んー　オレは良いですけど、（楽そう～だし♪）つくねは？』

つくねに聞いてみると・・・

「えっ！・・・その　（静かで落ち着いてそうな部活だ・・・
モカさんがいなけりゃ何部でも・・・）でも・・・オレ・・・」

なにやらまだ、立ち直れてないみたいだ。

あれから、モカが来ていない事を考えれば必然と思われるが・・・・
・・

つくねは目を瞑り、俯いた。

その時、

「良いですよ！わたしその部に入ります♪」

声が・・・聞えた・・・

「え・・・？あ・・・！」

『おっ！』

振り向くと・・・

「おはよー！つくね！カイト！」

「『モカ！』さん！！」

つくねはモカの登校に涙を流していた。

・・・・・そこまで！！

「モカさぁん！！二度と戻ってこないかと思ったよーー！！」

『おいおい・・・　泣くな泣くな・・・　二度とって　まだ三日じゃんか。でも　良かったよモカ。体の方は大丈夫か？』

「うん！でも回復のためにずっと寝ててね～　ねぼーしちゃったよ・・・」

てへへ～っと頭を掻きながら苦笑する。

（やっぱりモカさんは笑顔でなくっちゃ！！！）

『ん～　あれ？一応モカに術をかけておいたんだけど・・・　効かなかったのかな・・・？』

つくねはモカに見惚れ、カイトは少し困惑していた。

「んーん！そんなこと無いよ！水の影響は初日からすっかり無くなっちゃったしね！もう1人のわたしもお礼を言ってたよ！どうも、ありがとねーカイト！！」

モカは笑顔で答えた。

『そっか・・・　なら安心だ。どういたしまして！』

話しているそのとき。

「じゃあ！3人とも新聞部！決定ねーー！！」

猫目先生が乱入！

《ようこそ！新聞部へ！！》を掲げた。

「「『わああぁ！！』」」

モカの登場の影響で申し訳ないが先生を忘れていた為、ちょっと驚いてしまった。

そこに・・・

「はぁーーい！わたしもその部に入部しまーす！！」

くるむも着ていた。

「くるむちゃん！！」

『いつの間に・・・』

「だってー　カイトにつくねも入るんでしょ！　だったら　わたしもって思うじゃない♪」

そう言いながら　カイトとつくねに抱きつく。

「ぐえええ！」『うお！』

悶絶しそうになるほどの衝撃・・・　苦笑

「くるむちゃーーん！わたしもいるんだからね！！」

モカがそこに入ってきた！

「べー！っだ！！モカに負けないんだからね！！」

またまた火花を散らす2人・・・

（前途多難だな・・・こりゃ、　つくねが言った通り・・・）

2人に囲まれながらそんな風に考えていた。

第８５話　新聞部へ！（後書き）

ありがとうございました！

第８６話　新聞部部長（前書き）

よろしくお願いします！

第８６話　新聞部部長

「・・・えーさて皆さんよくウチの部に入ってくれました！それではこれから　陽海学園新聞部の部活動を始めまーす！」

ワーーー　パフパフパフッ！！　♪

って感じになると思ってたけど・・・

し――――――ん

僅か部員４名・・・

（そりゃ　シーンってなるわな・・・）

あきれていると・・・

「先生・・・なりゆきで入部してこの部の事全然知らないんですけど・・・　たった４人なんですか？　新聞ぶって・・・」

早速つくねが疑問を投げた。

「あら　まさか――」

先生が質問に答える前に・・・

「すみませーーん」

ガラッ

「ほら来たわよ　もう1人の部員が」

部室に誰かが入ってきた。

「いや～～～　申し訳ない　初日から遅れてもうて・・・」

まず見えたのはバラの花束だ。

「はじめまして　オレ新聞部部長　森丘銀影（もりおかぎんえい）　よろしく！」

顔をキラッっとさせながら自己紹介をした。

（部長！！？）

（ん・・・　大体どんなキャラかは想像ついた。）

（へ？そうなの？カイト！）

（ああ、まっ　すぐわかると思うぞ。）

つくねと小声で話していると・・・

「おお！　先生に聞いとったけど　何て美しい新入部員なんや！！」

そう言うと持ってたバラの花束をモカとくるむに差し出した。

「オレの事は　「ギン」って呼んでな！　ギンちゃんでもＯＫ
ああ・・・べっぴんはんには赤い花がよう似合う！」

キラ　キラ　キランッ！って感じかなぁ・・・

なんとも表現しづらい感じでモカ達に話していた。

（・・・な？つくね・・・）

（う・・・ん　何かまた個性的な人だね・・・）

（男は完全スルーかよ・・・）

ため息交じりであきれていると・・・

ギン先輩はモカをじっと見つめていた。

「？？」

モカが少し引きながら不思議に思っていると。

「ギン君は2年生でたった1人の部員でーす。　部でわからないことは銀君に聞いてね！」

「フッ　頼ってくれてええでーー」

先生が軽く紹介、ギン先輩はまたもやキラキラッ・・・

（つくねー　カイトーわたしちょっとこーゆー軽そーな人苦手ー）

（（ははははは・・・・・））

くるむにそう言われたが・・・苦笑しか出てこなかった。

「・・・えっと　それじゃあ　わたしはこれから職員会議で席をはずします。後の部の進行はギン君よろしくねー！」

「ああ　まかせてや！」

さっさと先生は退場・・・

「え！？　先生もういっちゃうの！？」

つくねが慌てて確認すると。

「ごめんねーそれじゃあ、みんなも先輩とは仲良くね？」

あっさり退出して言った。

（早い退出だなぁ・・・　ほんとに顧問なのかなぁ・・・？）

ふぁぁっと　欠伸をしながらそんな風に考えていた。

第８６話　新聞部部長（後書き）

ありがとうございました！

第87話　見えちゃったけど！！…あっ（前書き）

よろしくお願いします！

第87話　見えちゃったけど!!…あっ

「・・・えーー　というワケで　まずオレから新聞部がどないな部か説明しとくな新聞部の目的は校内新聞の発行!学園内のあらゆることを取材して新聞にするのが活動内容やな　取材のためなら危険の中へも突っ込んでいく!言うとくがウチは甘い部ちゃうで　入った以上は覚悟したってや!」

一通りの説明の時　表情が真剣になった部長。

一瞬部室の空気が変わった。

「何か頼りがいのありそーな先輩だね?」

「え?うん…　そうだね。」

「……しんどそうかも…」

カイトだけ若干違った意味で雰囲気が変わっていた。

(文化部ってことで嘗めてた…　ううん…)

落胆…

(ちょっと!カイトどうしたの?)

くるむが聞いてきた。

（ううー…ん…）

まだ悩んでいるようだ。

（くるむちゃん、カイトは部活動に対してなにかトラウマを持っているらしくってね。多分ギン先輩の話で思い出してるんじゃないかな？）

（そーなの…　じゃ！）

ガバッ！

くるむはカイトに抱きついた。

『わあぁ！』

突然の事にビックリして声を上げてしまった。

「大丈夫だよ！カイト！！一緒にがんばろうよ！」

そう言いながらカイトにしがみつく。

『ん…？　あ　ああ！ありがとな。くるむ。』

一瞬驚いたがすぐに理解した。

「お前らな～　ウチは甘い部とちゃうって言ったばっかやろー？ちゃんと部長の言う事は聞くもんやで！」

注意された…

『あー　すみません…』

「ゴメンなさい…」

くるむとカイトは素直に謝った。

「なーんてな！　う・そ・や！カタイ事は言わん！　楽しくやろうや！これ　ウチの宣伝ポスターや後ろの壁に貼っといてや！」

そう言いポスターを取り出した。

『「「はい！」」』

「先輩ーーーポスター貼るのこんなに上の方で良いんですか？」

「いや　もうちょい上やな！」

モカとくるむがポスターを貼りギン先輩が指示を出していた。

「変なポスターだね…」

『個性があって…まあいいんじゃないか？』

つくねとカイトはポスターを取り出していた。

『さて…もうちょいポスターとってくるわ。』

「うん！よろしく！」

カイトは資料室へ入っていった。

（それにしても…ギン先輩って軽そーだったり　まじめだったり…いったいどんな人なんだろ？）

何気なくギン先輩の方を見てみると…

しゃがみこんでなにやら見上げていた。

（まさか！！この人！！！）

そばに行くと…

バーーーン！！

モカさんたちのパンツがばっちり見えてしまった！

「先輩！何やってんスか！！　やめて下さいっ―　まさかこんなことのためにわざと高いところにポスター貼らせているんですか！！？」

つくねがギン先輩の視界を遮るように身をのりだした。

「…は？　何のことや？」

知らぬ存ぜぬ…　苦笑

「とぼけないでください！今2人のスカートの中覗いてたでしょ？」

追求すると…

「フッ　アホな　このオレがそない　お寒い事するわけないやろ」

またまたキラキラ顔を輝かしながら知らぬ存ぜぬ…

「何ィィーーーーッ！！」

2人が騒いでいたため　モカたちが降りてきた。

「？　どーしたんですか？？」

ガチャ…

『ふぅ…　サスガ部員数4名…（いや　1名か？オレ達入ったばっかだし）　ぜーんぜん整理してないわ資料室…　メチャクチャになってんわ…　埃被ってるし・・・　ん？　どうした？』

資料室からカイトが出てきた。

「いやーな　つくね君が自分らのパンツを見てもーたんやって！」

『あらら・・・』

「「ええーーーーーーーーーー！！？」」

モカとくるむはビックリ仰天！

顔も赤くしていた。

「いや先輩でしょそれーーーーーーッ！！」

つくねは必死に誤解を解こうとするが…

自分も見ちゃったけど！！っといってしまい…

パンッ！　パンッ！

モカとくるむに左右の頬にビンタの一撃を貰ってしまう。

『大丈夫か？つくね！顔がおたふく風邪みたいになってるぞ・・・』

「はっはっはー　アホやなー自分　おかげで今日の部活はおひらきやー」

つくねは無言で呆然としていた。

「ううー　なんでぇ・・・・」

第87話　見えちゃったけど！！…あっ（後書き）

ありがとうございました！！

第８８話　ギン　行動開始！（前書き）

よろしくお願いします！

第８８話　ギン　行動開始！

怒りながら?教室を出て行ったモカは・・・

「やだ・・・本当につくねに見られちゃったのかな?恥ずかしい・・・　今日はどんなのだっけ・・・?」

そーっと　自分の下着を確認しようとしていた。

その時、

《・・・何をやっているんだ?》

「きゃあああ!」

またロザリオから声が聞えた。

「な・・・何だ・・・　ロザリオ(あなた)か・・」

《・・・何だとは何だ・・・　それより気をつけたほうがいい。》

「え?」

一瞬驚いたが、すぐに声の主が分かったため落ち着いたが、話の内容に再び驚いた。

《あいつからは何かやばい匂いがする　強い力でも秘めている匂いだ・・・　あのギンって男には気をつけておけ・・・》

「！！！」

ロザリオの声の忠告で間違った事はこれまでに無い・・・

その為モカはその言葉を真摯に受け止めた。

翌日の登校中・・・

つくねはモカを見つけた。

「モカさん！」

話しかけると・・・

「わたし　えっちな人ヤダ！」

顔を紅潮させながらキッパリ！

「えーまってよ！まだ怒ってんの！？昨日のは事故なんだってばー」

「事故でもダメ！もーつくねなんて知らないもん」

つくねはまたまた呆然とした・・・擬音をつけるとしたら「ガーン」だろう・・・

（本気じゃないけど・・・　見られたお返しに暫く口聞いてあげないんだから）

モカは舌をぺろっと出して悪戯をしている顔を作った。

その顔を見るとモカはそこまで怒ってはいないようだった。

『おはよ。　2人とも。』

そこへやってきたのはカイト。

「カイト！おはよー！」

「ああ！カイト！！モカさんに言ってー！事故だって！！」

ヨヨヨヨ～っとしがみついて来た。

『コラコラ！オレは男にしがみつかれて喜ぶ趣味は無い　離れろ！』

手で頭を掴み離した。

『大体オレあの時いなかったし・・・　何にも見てないから言いようが無いだろ？』

「あああ！！そーだった・・・」

またまた落ち込んだ・・・

ガーーーン・・・

そんな3人を見ている男がいた・・・

「なぁちょっとええかな?そこの君ら」

登校中の女子生徒に話しかけていた。

「ちょっと教えてほしいんやけど」

ギン先輩だ・・・

いつもどーり

キランッっとさせ　さわやかに話しかけていた。

「なんですかー?（いい男♪）」

「あのつくねってやつとカイトってやつ・・・モカさんといつも一緒におるけど　なんなんかなぁ?どっちかとつきあってんの?」

モカたちのほうを指を刺し聞いていた。

「（なんだモカさん目当てか・・・）えーーー　よく知らないけど・・・　確かにあの3人良く一緒にいるね・・・　カイト君はわかるけどつくね君はつりあわないと思うな～」

そしてもう1人の女子生徒が、

「つくね君普通すぎ！モカちゃんって　女の私から見ても惚れ惚れする美しさなのに！カイト君はかっくいいけどね♪　でも・・・ホラ　噂じゃつくね君がカイト君より一歩リードしてるらしいじゃん。モカさんがつくね君の首にキスしてるの見た人もいるって！付き合ってるのかも・・・」

「！！？」

その言葉にギンは体をブルブル震わせた・・・

「あかん！シャレにならんでェ！それはシャレにならんでェー！つくね君ッッ！！！」

頭を抱えながら叫びだした。

女子生徒はその行動に驚き逃げていった。

（こーなったらつくねをモカさんから嫌われるように仕向けなアカン！）

ギンは1年校舎へ向かった。

第８８話　ギン　行動開始！（後書き）

ありがとうございました！！

第８９話　罠に掛けられた月音（前書き）

よろしくお願いします！

第８９話　罠に掛けられた月音

くるむが後を付け見たのは・・・

ギン先輩がつくねに覗かせて、

その瞬間をカメラに撮っていた。

おまけにつくねは、覗きの犯人として女の子達にボコボコにされてしまい・・・

モカに何か言われて更につくねが落ち込んでしまった。

モカがつくねを嫌うのは願ったりだけど　さすがにこのままじゃつくねがかわいそう・・・

わたしは　なんとか誤解を解こうと決心するが・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なにやら廊下が騒がしい・・・

『くるむ・・・こりゃ何の騒ぎだよ・・・』

多数の女子生徒に囲まれたくるむを見て声かけた。

くるむが男に囲まれてるなら分かるが、女に囲まれてるのはちょっと想像しにくいし・・・

「カイト！！」

周りの女子生徒たちに真実を言っても信じてくれない。

それどころか庇ってるって言われて非難されてた時カイトが来た。

「カイト！聞いて！！つくねが！！！」

『？』

カイトにいままでのこと全て話した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時刻は夜・・・　場所は校舎の屋上・・・

モカはつくねを信じて待っていた・・・

そこへ

「何や・・・　こんなとこにおったんか　モカさん　もう夜やで
ほら今夜は綺麗な満月や」

ギン先輩がやってきた。

「ギン先輩・・・」

モカの表情は暗い・・・　夜と関係なく。

「聞いたでつくねの事　覗きで捕まった・・・そやな？　まだ監禁中やって？　そんなやつのことを待ってるんかモカさん？」

「・・・・・・」

モカは何も言わない、ただ顔を暗くし俯く・・・

「誰が撮ったか知らんけどこんな写真も出回っとったで」

ギン先輩がそう言い　見せたのは数枚の写真・・・

「これはっ・・・！！！」

「覗きの現場写真やな・・・　まあ　その写真はつくねくんには黙っといたれな　あわれすぎる　それにモカさんも　もうそないな奴のことは忘れてしまえや」

モカの傍まで行き肩を抱く。

「今夜はオレがなぐさめたる」

（・・・くくく　これでつくねはアウトやな・・・　そん次はカイトやな・・・　でも今日は満月・・・自分を抑えられへん・・・な。）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

監禁中のつくねは何とか脱出しようと葛藤していた。

「くそっ!!開かない!!!」

扉に何度も体をぶつけるが扉はビクともしない・・・

「獣だ・・・ギン先輩は女の子のためならなんでもやる・・・　このままじゃモカさんまで!」

何度も何度も・・・ぶつけるが・・・やはり扉はビクともしない・・・

絶望しかけたその時、

「・・・くね　つくね」

窓から声が聞えた。

「くるむちゃん?」

「つくね！こっちよ！」

窓から手が見えた。

『世話の掛けるやつだな。やっぱ。』

そしてもう1人の声が聞えた。

「くるむちゃん！！カイト！！」

声の主に気付き歓喜の声を上げる。

『つくね！窓からちょい離れてろ！』

「・・・！！うん　わかった！」

つくねは窓から離れる。

カイトは拳に意識を集中させる・・・

すると、

拳に光が集中していった。

『おらぁ！！』

そのまま拳を振りぬき・・・

ド　カ　ンッ！！

壁に大きな穴が開いた。

『つくね　大丈夫か？』

壁を壊し中へ入った。

「つくねーーー！！」

カイトに続き、くるむも中へ。

「2人ともありがとう・・・　そうだ！モカさんが危ないんだ！！」

そして　3人は監禁部屋から脱出した。

第８９話　罠に掛けられた月音（後書き）

ありがとうございました！

第９０話　瞬速の大妖　人狼（前書き）

やっと投稿～　　いやぁ・。・

時間がかかってすみません!!

今回はいつもよりちょっと・少し・多分長いです・・・　苦笑

１話１話区切るのスッゴい下手糞なんで・・・　我慢していただければ・・・・

改善できれば一番なんですが・・・

はい！　今回はギン先輩との絡みです～　題名の通り！　よろしくお願いします!!

第９０話　瞬速の大妖　人狼

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「きゃあああああっ　放してぇ！！！　何するんですか先輩！！！」

夜の屋上でモカの声が響く。

「何って優しく抱きしめとるだけやんか？」

ギンは淡々と答えた。

「ちが・・・・！　今　ヘンなとこ触ったでしょっ」

そうモカが叫んでも・・・

「はは　今夜は満月やろ？　オレ満月の夜は力があり余ってすぐ自制心なくしてしまうんや」

淡々としていた。

「だからじっとしとき　暴れられるとムラムラしておかしなってまうやん」

そういって唇を近づけた。

「やっ！！　いやぁ　やめて！！」

モカは力いっぱい両手で突き飛ばした。

ド　　ンッ！！

「わあああああ！！」

ギンは突き飛ばされた衝撃で屋上の壁に衝突した。

「・・・つくねは　つくねは覗いたのわざとじゃないって言ってたもん・・・」

モカは渡された写真を放り投げた。

「だからわたしつくねを待ってるの！こんな写真よりわたしはつくねのことを信じたいから！！」

「・・・・・・」

吹き飛ばされたギンは、無言でゆっくりとモカに近付いていく。

「ははは・・・マジか・・・　驚いたわ・・・　ほんま健気やなぁ・・・　男2人もおるらしいのになぁ・・・」

先ほどの突き飛ばされたダメージは全く無いようだ。

「つくね君のことはそんなに信じてるんやなぁ・・・　二股かける子とは思えんわ・・・」

「ふたま・・・　何言ってるの！！」

モカは顔を赤らめながら言った。

「しってるでぇ　カイト君とも仲がええんやろ？　ずるいやん・・・
自分はそないなふうにしておいてオレは拒むんかい・・・　でも
ますますホレてもーたわ　モカさん・・・」

「！！　そんなんじゃ・・・　カイトもつくねも・・・　わたしの
大切な・・・」

モカは戸惑っていた。

どちらも初めてできたかけがえの無い友達だ。

二股なんて・・・

うろたえていると、ギンの姿が徐々に変わり始めた。

「さっきも言うたとおり・・・満月の夜は自制心弱なるんやぁ・・・
」

変化していた顔が・・・強大な妖気と共に変わった。

鼻・耳・キバ・・・その姿は・・・

狼だった。

「こないに・・・　気持ちが高ぶってもうたら・・・　すぐ自分が

おさえられへんなるやないか　こうなりゃ　力づくでオレの女になってもらうで！　赤夜萌香！！」

まるで野獣・・・

ギンはモカに襲い掛かった。

「きゃあああ！！」

その手がモカに触れる直前。

「ちょっと待ったァーーーー！！」

何者かの声が聞えた。

ギンは驚き振り返ってみると、

また驚いた・・・

つくねだ。

でも　おかしい。あいつは今監禁されているはずやのに。

「何でお前がここにっ・・・」

「つくね！　くるむちゃん！　カイト！！」

つくねはカイトの浮遊術（サイコキネシス）で屋上まで運んでもらったのだ。

くるむが抱えて飛ぶと言っていたが・・・

力仕事?は男の役目だろう。

『放課後の屋上とはまた・・・ベタな・・・』

そのまま　カイトは屋上に着地した。

「そうか・・・　お前らが・・・　よくもええとこで邪魔しよって・・・このっ!」

ギンの怒りが高まり・・・妖気も上がっていく。

「すっこんどれやぁあぁあ!!!!」

ウオオオオオオオオォォ!!

『人狼(ウェアウルフ)・・・　大妖がここにもいたよ・・・』

人狼はバンパイアに告ぐ2人目の大妖怪に分類する妖だ。

「これが・・・先輩の正体??性格(なかみ)と同じで獣だ!!!」

つくねは思った事をそのまま口に出してしまった。

『あー　つくね?　思っててもなるべーく　口に出さない方がいいと思うぞ?逆上してくると思うから。』

「あ”・・・」

「んやとー　コラァァァァ!!」

忠告遅し！

興奮してる今のギン先輩には結構効いたみたいだ。

「そ・・・そんなことよりモカさんを！」

つくねはモカの方へ走り出した。

「ま！まってつくね！人狼はバンパイアと並ぶ大妖怪よ！！まともに言っても勝ち目は！」

くるむが叫んだが。

既にギンはつくねが走り出した瞬間に既に動き出し、

ドガァッ！

足払いをしてつくねをモカの方へ蹴り飛ばした。

「調子にノンな！ボケが！！」

「つくねーー！」

つくねとモカが絡まりながら倒れた。

「きゃああ」

「死にたくなけりゃあな・・・モカさんから手ぇー引けや　つくね君・・・」

ゆっくりとした足取りでつくねの方へ近付く。

そして。

「さっさと去ねやァ！！！」

その声と同時に走り出した。

・・・・がっ

ツルッ！

「な・・・！！なんや??　床が滑る！！！　ギャン！」

ズガァァァ！

ギンはそのまま滑って行き屋上のフェンスへ激突した。

ギンの移動速度のそれはかなりの速さだ。

その速さのままぶつかったのだから・・・

『痛いわな・・・そりゃ・・・』

床に手をつけたカイトが皮肉じゃなく実際に感じながら言った。

転倒(こ)けさすだけの筈だったのだが・・・

サスガは人狼と言ったところだろう。

あの速度のせいでそのままフェンスの方まで滑って行ったようだ。

慣性の法則?だっけ??ちがうか・・・

「てめぇ・・・か?　カイト・・・　何したんや!!　　・・・これは」

床を良く見てみると・・・・　氷が張っていた。

『氷結領域(セリシウス・ドメイン)・・・　ツルッっと滑ってもらおうかと思ってな。　頭に血が上りすぎだから回りが全然見えてないんだよ?ギン先輩。ちょっと頭冷えただろ?』

これは皮肉をたっぷりと込めた。

「なめよってからに・・・」

ギンは鋭い目で睨みつける。

「カイトかっこいい♪」

がばーーーッ!!

『わぁー!!』

むにむにむにっ!

くるむは胸を押し付けながらカイトに抱きついた。

『っっっ!!（息ッ!息ッ!!またこれ!!）』

さっきの緊迫していた空気はどこに行ったのだろう??

その光景を目の当たりにしたギンは、

「う・・・う・・・」

ワナワナと体を震わせていた。

それに気付いたカイトはくるむを引き剥がした。

『つっ!!ぷはぁ!!　くるむ!!頼むから今はちょっと空気読んで!!　危ないから!!』

くるむの肩をつかみながら言った。

もちろん顔は目の色と同じで真っ赤っ赤・・・

「ごめん／／／」

くるむは真っ赤なカイトにキュンっとしながらもカイトを離し離れた。

その時!!

「うらやましいやないかーーーーー!」

・・・・・・・・・・

『「はい??」』

コケにされて怒ってたんじゃないんだ・・・

ええっと・・・

この空気に困っていると・・・　苦笑

カアアァ!!ギュウウアアァ!!

ギンの背後から強大な妖気が迸った。

第９０話　瞬速の大妖　人狼（後書き）

ありがとうございました！！

もうちょっとで1巻終了～・・・　まだかぁ・・・　作者的には早く４姉妹の皆さんや、中国などに行きたいんですが・・・　苦笑

がんばりますので　よろしくお願いします！！

第９１話　女たらしの末路・・・（前書き）

よろしくお願いします！

モカさんガンバッテます！

カイトくんもがんばってぇーー　苦笑

第９１話　女たらしの末路・・・

つくねがカイトが戦ってる隙にモカの十字架を外して封印を解いたのだ。

「・・・赤い瞳・・・まさかこれはっ！　バンパイア！」

モカはその赤い瞳でギンを睨みながらその場に降臨した。

並みの妖ならばその行為だけで萎縮するものなのだが。

「・・・フッ　フ・・・フフ　これがモカさんの正体なんか・・・ハハハハハ！！美しいでッ！　最高やッ！　変心後の姿も美しすぎや赤夜萌香ッ！！」

どどーーんって感じの擬音を付けたい・・・

さっきのカイトとの小競り合いはすっかり忘れてしまったみたいだ。

あんなに青筋立てて睨んでいたのに・・・

『・・・・・たいしたもんだな　あの先輩・・・　ここまで来ると』

「ははは・・・」

完全に忘れ去られた2人は苦笑しかでなかった。

「バンパイアでもかまわへん！ブッ倒してでも必ず俺の女にしたるッ！」

そう言い放ちモカに飛び掛った。

「・・・！！ふざけるな　このっ！」

モカはカウンターの手刀による突きをするが・・・

ヒュンッ！！

「どこ狙とるんや？　こっちやで」

目の前にいたはずのギンが屋上への階段のある建物のほうまで移動していた。

「きっ・・・消えたッ！」

「疾いッ　物凄い素早さだわッ！」

つくねとくるむはモカの攻撃をあっさりと回避したギンに驚愕していた。

『残像だけは追えた・・・厄介だな。あの速さは』

相手の速度の差はどうしようもない事だが、

戦いに時間が経つに連れて目は慣れてくるものだ。

だが、慣れるのかどうか分からない程のスピードだった。

よしんば見切ることが可能だったとして。

そこまでの時間を与えてくれるとは思えない。

「そうだわ！カイト！！さっきやったみたいにもう一度滑らせちゃえば！」

くるむがそう提案するが。

『同じ手が2度通用すると思ったら痛い目をみる。それにあのスピードは地面の一点を蹴って即座にその場所へ移動しているみたいだ。地面との設置時間が短すぎるからさっきのようにはうまくいかんだろ。』

「じゃ　じゃあ・・・どうすれば！」

つくねが声を出そうとした時、

ギンの瞬速が再び発動した。

「バンパイアが「力」なら人狼は「速」の大妖！そしてこのスピードは月の光が強いほど速さを増すんや！今夜は月が最も輝く満月！！！」

そう言いながら屋上を縦横無尽に駆け巡る。

それはまるで閃光（ライトニング）だ。

「満月の夜の人狼は無敵やでッ！！！」

残像を残しつつ移動している為まるで影分身をしているようだ。

「なっ・・・・！（見えない・・・！これが人狼・・・・）」

モカに動揺が走る・・・

これほどの速度はお目にかかったことが無いからだ。

（こんなモカ初めてみるな・・・ちょっとラッキーかも・・・　よし！手は考えた。）

カイトは周囲に呪文形式の陣形を描く。

ゴウッ！！

今は無風の夜の筈なのに不自然な風が生まれた為　２人は驚いていると。

『ちょい　２人ともオレから離れてて、飛ばされるかもしれないから。』

挙動不審にしている２人に言う。

振り向いた2人はその不自然な風はカイトから生まれていた事に気付いた。

「何を!?」

『大丈夫。モカを助ける為さ。まあ　あくまでフォローだけどな。(戦う相手取ったら　モカにボコられそうだし・・・)』

そう言い軽くウインクしながら　2人を見つめた。

いつも信頼している人の顔だ。

言葉は少ないが信頼するに値する。

2人は互いに頷きカイトと少し距離を測った。

『よし!　天海に住まわれる数多なる精霊達(エレメント)よ・・・　我が声に耳を傾け、地上に慈悲なる涙を・・・』

カイトの周囲が再び風の様な物に包まれる。

そして空に手を掲げた。

『雨奇晴好・ラナリオン』

空に向かってカイトが集めた風?が解き放たれた。

「な・・・なにしたの?今の??」

くるむもつくねも顔に???を作りながら話しかけた。

『すぐに分かるもーちょい待って』

そう言うとモカの方を見た。

モカはまだ一太刀も浴びてはいない様子だったが、明らかに押されていた。

「くそ・・・　やはり厄介な速さだ。」

「くくく・・・やるなぁ　モカさん！このワイの速度でここまで足掻くんか！大したもんやでぇ・・・　でもな・・・」

そう言うとモカの方へ一気に距離を詰めた。

「満月が出てる限り勝つのはオレやーーーッ！！」

ドガアアアア！！

ギンの一撃がモカに・・・・・・

「ああッ！！モカさーーん！！」

つくねは驚きながらモカの方へと駆け出そうとする。

『大丈夫・・・だ　つくねよく見てみろ。』

横で見ていたカイトは顔をニヤッっとさせながらつくねにいった。

「え・・・？」

カイトに言われ冷静さを少し取り戻したつくねはモカの方を改めてみてみると。

モカはギンの腕をがっちりと掴んでいた。

「ば・・・ばかな・・・　止めよった！なんでや？？」

さっきまで殆ど対処出来てなかった攻撃よりさらに速度を上げた一撃をあっさり掴んだモカにギンは驚愕していた。

その時、

ポタッ・・・

つくねの頬に冷たい感触がした。

「雨！？　しまった！！月が雲に隠れとるやんけ！！　月がでてへんとオレ力でーへんねやーーーーッ！！」

うろたえだすギンを見てつくねは思わずズッコけた・・・

「しかし何でや！　今日は天気晴れのはずやで！！　満月で晴れやからオレ行動したのにーー」

1人でうろたえてるのはギン。

モカは、なぜ雨が降り出したか分かっていた。

カイトと目が合いウインクしてきたからだ。

（ちっ・・・　余計な事を・・・）

プイッと背を向けギンを掴む手の力を上げた。

メキメキメキッ・・・

その増した力と殺気に気がついたギンは、

「フッ・・・待てあせるんやない　月がのーなっても人狼をナメたらあかんで　大妖怪の底力見せたるわ！！」

ギンも手に力を込め。振り上げた。

「おとなしくオレの女になれや　モカァーーーーーーーー！！」

襲い掛かるが。

ゴキャッッ！！！

モカの蹴りがギンの眉間にカウンター気味にヒットした。

これほどのゼロ距離接近戦では「速」よりも「力」の方が圧倒的に有利だ。

ましてや腕は「力」の大妖に握りあげられている・・・

あわれギンはそのまま屋上のフェンスへ・・・

「ギャン！！」

ガッシャアアン！！

激突した。

だが不運はまだ終わってなかった。

メキメキメキッ・・・

モカのけりの威力とギンの体重でフェンスが悲鳴を上げ・・・

ガッシャアアン・・・

「あっ・・・・・・　キャィィィィィィイン！！！」

グチャッ・・・

そのまま屋上から姿を消した。

「軟弱者が・・・お前に私の相手が務まるか・・・　身の程を知れ。」

『ははは・・・さすがにここまでになるとは思わなかった・・・
天罰ってやつかな?』

「ぞ～～って感じだ・・・　死んだ??」

「だ・・・だよ・・・ね・・・?」

苦笑しながら3人はモカに近付いていった。

「私に言い寄るならまず自分を鍛えなおす事だな・・・」

「えっ・・・?」

つくねは驚きながら自分自身を指差した。

『ははは!　モカにそう言われちゃあ　頑張るしかないよな?つくね。』

笑いながらつくねの首に腕を回す。

「ぐええ　カイトっ!!　苦しいって!!」

「ああ!わたしも!!」

くるむもつくねに引っ付いた。

「くるむちゃん!」

つくねは照れながらジタバタしていた。

その時カイトとモカの目が合った。

「何をいってるんだお前もだぞ・・・？カイト。」

『ん？なにが？？』

カイトはつくねを開放し（まだくるむがいたけど・・・）不思議そうに聞き返した。

モカは顔を背けながら。

「言い寄ると言うのなら、鍛え直せ！っといっただろう・・・　以前私に一撃入れられていたしな・・・」

照れていｒ「ギロリッ！」・・・

なんでもありません！！

『ああ・・・ははは　そういうことね。まあ善処はする。　・・・しかし今日は結構得したかも・・・モカの動揺した顔も見れたし・・・。』

最後の方はボソッっと言ったのだがばっちり聞えていたみたいだ。

ビュン！！

鋭い回転から、回し蹴りが飛んできた。

ドッバシンッ！！

『・・・心なしか・・・??　この会話(パターン)する度　技が強力になっていっているような・・・』

受け止めながらモカに聞いた。

ううん・・・　防いだ腕が痺れるな・・・　苦笑

「カイト　分かっていてやってるだろうが！　最初はそんなキャラだったかお前？　減らず口を叩けるんなら私自ら鍛えるのを手伝ってやるぞ?私はまだ暴れたりないのだが?」

物騒なことを言ってきた。

『結構これはこれで反射神経を養う事が出来てるな・・・それに・・・』

そういうとカイトは少し顔を赤らめた。

「む・・・?なんだ?」

いつもの表情じゃないカイトを不審に思ったモカは聞き返した。

『ああ・・・　なんだ・・・　その・・・』

顔を背けた。

「?」

『鍛えなおしてくれるのは魅力的だが・・・　なるべく蹴りは控え

て欲しいかな・・・　目のやり場が困る・・・』

モカの蹴りは殆どが見事なハイキックだ。

無論着ている服は陽海学園学生服＝スカートだ。

今回の事件の原因でもあるスカートの中の絶景が蹴りを受け止めた事によって見えてしまったのだ。

中の絶景が・・・・・

オマケに鋭い回転からの回し蹴り・・・

そりゃめくれるわな／／／

「つっ！！！」

言われている事の意味に気付いたモカは、

モカは受け止められた足とは反対の方の足でカイトの側頭部を蹴り上げた。

ドガァァ！

『ぐえっ！！』

完全にそっぽ向いていたためまともに食らってしまった。

『痛いって・・・モカ・・・』

尻餅をつき、座り込んで受けた場所を擦りながら答えた。

「ふん！身の程を知れ！馬鹿者が！！」

モカは顔を真っ赤にさせていた。

『はは・・・　ははは・・・』

「フッ・・・」

最後は互いに笑いあっていた。

モカ（裏）とこんなに笑いあったのははじめてかもな・・・

そのころつくねは・・・

「やっふぅーーー！つーくねー♪」

「むぐぐぐ！！（くるむちゃんー！！息ッ　・・・死！！）」

くるむのハグハグ攻撃？に襲われていて呼吸困難になっていたのは2人は知らなかった・・・

翌日の新聞部初仕事の最中。

4人は新聞を配布していた。

「号外ー号外ー！　新聞部の号外です！」

朝の登校の時間を利用し新聞を配っていた。

『お！　あそこに掲示板あるじゃん！あそこも利用しない？』

「あっ！ほんとだ！うん丁度よさそうだね。わたしが張ってくるよ。カイト新聞一枚頂戴！全部渡しちゃったから。」

『ほいほい、おっけー！』

カイトはモカに号外の一枚を渡した。

「うん！」

モカは掲示板まで行き、踏み台を使い新聞を掲示していた。

「まさかこんなのがオレ達新聞部の初仕事になるとは思わなかったね」

つくねが掲示板の側まできた。

「ほんとだよねーー！」

モカも笑いながら答えた。

「・・・あ　ねぇ？モカさん・・・　あ・・・」

振り向いた先には丁度モカのスカートの中が見えていた・・・

いやー　懲りないなーつくね君。

「きゃあ！今上見ちゃダメ！！」

モカの後ろ蹴りがつくねの顔面に炸裂！！

「ぐへ！！」

つくねは後ろに仰向けに倒れた。

「つくねー！！」

『懲りないな・・・もうフォローせんぞ？つくね。』

カイトは笑いながら、くるむはあわてながらつくねを見下ろした。

その上でモカは・・・

「もうえっちなのは懲り懲りだよ・・・」

っと顔を赤くさせながら呟いた。

～号外内容～

青野月音は無実！！

のぞき騒動の真犯人は2年1組　森丘銀影でした・・・！

※にこやかスマイル写真付き！もちろんカメラ持ってる　笑

そのころのギン先輩は・・・

体中に包帯を巻いていたのだが、

真相を知った女子生徒たちはそれでも許さず追いかけていた。

まあ　当然だろう。

女の子達は何で怪我してるかしらないし～

知りたくも無いみたいだしー

「このーーー！！」「コロすーーー！！」「まてぇーーーー！！！」

しかしギン先輩は・・・

「フッ・・・どないしたらあの赤夜萌香をおとせるんやろなーー」

追われながらも考えている事は変わらず・・・

ある意味　男らしいのかな？

覗き・盗撮は犯罪だよ♪

よいこの皆（読者）は真似しないでね♪

第９１話　女たらしの末路・・・（後書き）

ありがとうございました！！！

やっとーーー！
原作１巻分の話終了ですね！
次回の話で例の子が初登場します！トンガリ帽子が似合う子が♪
わかる方にはわかりますね♪

よろしくです！！

一口妖怪辞典…　作者都合上ｗ
瞬速の大妖　ウェアウルフ

凶暴で野生的な獣の妖。
普段は人間の姿をしているが、月夜の晩に狼に変身する。
１６世紀以降は月との関係が知られ、月の光が強いほどその力は増すと言う・・・

はい！そのまま原作紹介です！！
この先輩は強いんだーって思いますが・・・
まあ・・・　主人公達には勝てませんね！補正的な意味でも♪
カイトくん！！戦ってェ！！

第９２話　試験結果と魔女っ子（前書き）

よろしくお願いします～！！

じつは！！　作者はこんなに試験結果がよかった事なんか一度もありません！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いいじゃん・・・小説で現実逃避しても・・・　ぐすん

まあ・・・冗談は置いときまして・・・遅くなりましたが。

駄文ですが見てやってくださいい。

第９２話　試験結果と魔女っ子

さてさて・・・

先週？はいろいろありましたが・・・

忘れちゃならないことがひとーつ！！

妖怪が通う学園なのだが、

学生の本分は学業！！

『そう！その通り！！間違っても部活で軍隊みたいなしごきを受けるだけの為に、がっこーにきてるんじゃなぁーい！！！』

ぐっと拳を握り上に上げた。

「・・・・・・・カイト？誰に言ってるのさ？」

後ろで不審者を見るような視線はつくね。

『・・・・あ　いやぁ・・・　すまんすまん・・・　いろいろあったんだよ・・・』

ず～～んってな感じで肩を落としながら答えた。

「あははー！まあ　しっかりしてよ。カイト！！　ほら！試験結果発表今日だよね？皆で見にいこ！！」

側にいたモカが早速行こうと提案。

『そうだな。（過去？に捕らわれてちゃダメ！文字通り生まれ変わったんだし・・・）よし！２人とも試験はばっちりだった？』

気を取り直し２人を見ながら聞いてみた。

「うん！それなりにね！」「・・・・・ううん・・・・」

おんやぁ・・・

対照的なお２人だこと・・・

『つくね大丈夫か？まさか・・・欠点とかは・・・』

心配そうに聞くと。

「あああ！それは大丈夫大丈夫！カイトだって教えてくれたし・・・
欠点取ったらあわせる顔ないさ・・・　でも・・・張り出される事なんて無かったから・・・」

ああ　なるほど。

成績があらわになるしな。

『ま、いいじゃないか。受け入れろ。これがこの学園の方針なんだし、競争心を煽る良い事だとも取れるし。とりあえず、行こう。』

「うん・・・」「うん！」

台詞だけでどっちがつくねかわかるなぁ・・・

まあ　元気出してください！　苦笑

ここは妖怪たちが通う秘密の学校

《私立陽海学園》

ここではたくさんの妖怪たちが人間社会に適応するための勉強をしている。

妖怪ならではの授業もあるが教育の課程（カリキュラム）は人間の学校が基本（ベース）だ！

まあ　所謂基本的普通科の授業「５教科」＋家庭科などの実習。課外学習などがある。

んで　もちろん５教科は試験があり、人間の学校と同じ中間テスト、期末テストなどがあるのだ。

つまり　ここにいる妖怪たちはいずれは人間の社会の大学や企業へと旅立っていくものもいるのだ。

※陽海学園には大学はありません。高校以上は人間社会で学びます。

ざわざわざわ・・・・・・

ここは　学校玄関の側。

試験結果が張り出されている掲示板前である。

「うわぁぁぁ!!テスト結果がはりだされてるぅ!!!」「みっみたくねーーー!!」「はいってなーーい・・・」

様々な声が上がる・・・

1年生・256人中100番までの成績が張り出されている。

赤夜萌香（あかしゃもか）・・・13ばん!!

「すげぇーーー　モカさん13番だって!」「学園一の美しさを誇りながら頭も良いなんて!!」「性格も良いし!!」

モカの周りに男子生徒が集まる。

「「「「完璧だ!!!理想の女性NO．1だーー!!」」」」

一斉にハモッた・・・　笑

「きゃ・・・」

対するモカはびっくりしていた。

『ははは・・・　すげー　人気だなモカ。』

その男子生徒の間を縫うようにモカに近付いていったのは御剣怪斗。

御剣怪斗（みつるぎかいと）・・・15ばん！！

「きゃーー！！」「カイト君だ！！」「やっぱ　カイトくん頭良い！！」「今度勉強一緒にしよーよーー！」

カイトの周りにはモカとは逆に女子生徒が集まる・・・

また襲われるかと思ったが、

サスガに、広場には人数が多いからリアル鬼ごっこするには狭すぎるようだ。

歓声だけだった・・・

『ほっ・・・』

あからさまにほっとしていた。

「あははは。カイトも人の事言えないじゃん♪」

『・・・はははは・・・・　追いかけられないだけ　モカよりマシだよ・・・』

やれやれっと思っていると。

「モカさーん！カイトー！」

声が聞えた。

この声は・・・

青野月音（あおの つくね）・・・１２８ばん

見事にど真ん中。

よく言えば平均レベル。

悪く言えば平凡・・・

「・・・」

ああ　黙っちゃった♪　↑「うるさーーい！！」

「ええっと・・・　すごいなー　やっぱり２人とも・・・　オレも見習わなくちゃ」

『まあ　勉強が全てじゃないからな　つくね。まあ　教えていた身から言えば　赤点とらなくて良かったよ。』

カイトはつくねの結果に対しある程度好評。モカは、

「そんなこと無いヨ！」

と照れていた。

「（よし！　もう勉強得意じゃないのばれてるから・・・）今度モカさんも教えてよ！３人で勉強しよ！！」

（おいおい・・・　ここは2人でって言うだろ？）

小声で肘を突きながら言う。

（いやいや・・・まずはホラッ！3人でさ・・・）

つくねも返す。

はぁ・・・っとため息をしていると。

「じゃあ！！そのかわり血を吸わせてね♪　つくね！！」

つくねはズッコケた！

『ははは・・・　さすがモカ。』

笑っていると・・・

「カイトもだよ！　前に吸わせてくれるって言ったじゃん♪」

『げっ！！』

モカのターゲットはつくねだけじゃなかったんだね・・・

その後は、ワイワイ騒いでいた。

もちろんオレは血は死守！！

そんな3人を見ている者がいた。

仙童紫（せんどうゆかり）・・・1ばん

「・・・・・・」

ドキドキッっと僅かに緊張しながら3人を見ていた。

その生徒は周りの生徒に比べ一回り小さい子である。

高校生には見えないほどに、なぜなら・・・

「おめでとう・・・紫さん　また一番だったようですね」

その背後から声を掛ける者がいた・・・

説明の邪魔された!!!

「さすが天才少女・・・　まだ11歳なのにとび級で入学したのはダテじゃなさそうだ・・・　でもいいですか調子に乗らないでください　私から見れば君なんて乳くさいだけの青二才なんですよ」

生徒2名を引連れゆかりに近付いていった。

「・・・委員長」

ゆかりはオロオロしていた。

しかし　続けざまにはき捨てた。

「だいたい何ですか　この格好は！完全に校則違反でしょう　私ははみ出し物が大嫌いです！」

そう言ってゆかりを突き飛ばした。

「きゃっ　や・・・やめて下さいです～～」

その騒ぎに周囲の生徒が注目する・・・

ざわざわざわ・・・

「なんだなんだ・・・？」「ホラ　例の天才少女の・・・」「また自分のとこの学級委員長にいじめられているよ・・・」

皆口々に呟くが誰も止めたりしないようだ・・・

その理由は彼女の正体のせいでもあるだろう・・・

「君の存在は学級委員長として　頭が痛いですねぇ・・・」

周りの声が聞えたせいか・・・

少しイライラしながら顔を近づけた。

「どうせ正体は魔女(まじょ)なんでしょう？汚らわしい！君と同じ学級ってだけでヘドがでますよ」

その一言はゆかりも怒った。

目をキッっと睨ませながら。

持っていたステッキで落ちていた石を操ったのだ。

そして、

ヒュッ！　ゴツン！

「でっ！！」

男の後頭部に直撃した。

間抜けな顔をしながら・・・　苦笑

「プッ　あはははーー　ザマミロですー」

ケタケタケタと笑っていると・・・

「何だコラァッ！！今何をしたんですか！君はァーーーーーーッ！！！」

頭の一撃と笑われた屈辱・・・周囲の目線・・・　男は逆上し、

両手を振り上げ襲おうとした。

「やめてっ！！」

2人の間に割ってはいる生徒がいた。

第９２話　試験結果と魔女っ子（後書き）

あの委員長・・・・・・・なんかキライだぁー！

笑

ありがとうございました！！

第９３話　宣戦布告！（前書き）

よろしくお願いします！！

第９３話　宣戦布告！

止めに入ったのは・・・

モカだ。

「・・・ごめんなさい　通りすがりなんだけどほっとけなくて・・・
女の子に暴力はやめて下さい・・・」

モカが両手を広げ、ゆかりを護るように立ちはだかった。

「何言ってんだ！委員長に石ぶつけて暴力振るったのはそっちの・・
・」

ガシッ！！

委員長の側近にいた男は最後まで発言できなかった。

首に異常な力を感じたからだ。

『おいおい・・・　こんな小さい子１人にお前ら何人がかりだよ。』

ミシリッ

首筋に痛みが走る・・・

「いだだだ！！！だっ誰だ！！」

カイトは首を握り上げそのまま委員長の側まで放り投げた。
何とか、委員長は仲間を受け止める事に成功していたが、
まあ、いきなりやられた為、当然のように声を荒げた。
「っく！何ですか！！あなた達はぁ！！」
大声で叫ぶ。
『・・・委員長ってやつは　クラスの代表・・・　模範にならなくちゃーな・・・　いじめなんてしちゃーな。』
こちらも負けず、結構大声で言うと・・・ギャラリーも集まってきた。
「おい・・・　モカさんとカイトがいじめを止めに入ったぞ。」「カイトくん・・・素敵・・・」「そうよねー　大人気ない感じ～」
ざわざわざわ・・・
あまりに回りの注目を集めた為・・・
「くそっ・・・　（ギャラリーが多すぎますね・・・・・・）　いいですか！紫覚えておきなさい！行きますよお前達！」
バツが悪そうに逃げる様にその場を後にした。

「あっ　ありがとうございますっ　助かったです～　わたしは仙童紫っていいます」

そこは、校庭のベンチ。

ゆかりは助けてもらった2人にお礼を言っていた。

「いいのよ！ねぇ　カイト！つくね！！」

『ま、あーゆー嫌味なやつは好かんから、大した事じゃないさ』

「そうだね・・・　（オレ何もしてないけど・・・）」

それぞれがかまわないと言った。

「あっ！そーだ！聞いてたよ。同級生なのに１１歳なんだってね！しかもテスト１番？頭良いんだねー　ゆかりちゃんて！その服も素敵だし。」

（１１歳って小学生？？）

『へぇ・・・　そりゃ凄い　テスト１番も大したものだな！』

２人で褒めまくり！

ゆかりはテレながら慌てていた。

「・・・やっ　そのっ　素敵だなんて・・・　そんなことないですっ・・・　私なんてっ！！」

おろおろ　あたふたしていた。

ううむ　初々しい。　笑

「ステキなのはキレイで優しいモカさんの方です～　だって実はわたし――――・・・」

ゆかりは　がばーーっとモカに抱きついた。

「わたし　モカさんが好きなんです～～」

「きゃあ！！」

「『えええーーーー！』」

突然のハグシーンに驚く2人。

「隣のクラスのモカさんを見かけるうちにだんだん好きになっちゃったんです・・・　助けてもらった今心が決まりました！　付き合ってください・・・　嫌ですか？こんなわたしじゃ・・・」

うるうるしながらモカを見つめた。

「え・・・あの友達なら・・・」

勢いが凄い・・・断れないわな・・・

「わーーい　うれしいです～～」

ぐりぐり～　ハグハグ～

「きゃあーー」

『ははは・・・　元気いっぱいだなこの子・・・』

「カイトさんもありがとうです！　モカさんほどじゃないですけど！あなたの事も好きですー（ライバルですけど・・・・）」

モカに抱きつきながらこっちを見て言った。

『はは・・・　光栄だよ。』

ゆかりはそのまま抱きつきながら、一緒について来た。

「わぁ♪モカさんて見た目より胸おっきいですーー」

胸をモミモミしながらモカに抱きつきながら歩いていた。

「ひゃあ・・・」

更に・・・エスカレートし・・・

「やわらかーーい！こんなの夢見たいです～　」

モカを押し倒していた・・・

「やめ・・・　何だか力が抜けちゃう」

なんとも・・・百合的な・・・

『まあまあ・・・　元気良い事・・・・仲が良い事・・・は良い事だよな・・・？つくね』

「いやいやいや！！止めなよ！　待ったーーー女の子同士で何やってんの！！」

つくねが止めに入るとあからさまにゆかりは不機嫌な顔をした。

「ジャマしないでくださいです～　わたしあなたの事もよく知ってるんですよ！

青野月音

成績　　：中の中

運動能力：人間並

趣味特技：なし！

まさに絵に描いたような平凡男！！」

ががーーーん・・・

（まあ・・・子供は素直だからな・・・これは大ダメージだな・・・）

つくねは頭にきている様子だった。だけど相手は子供だから・・・

更にゆかりは、

「モカさんとはまさに月とスッポン！カイトさんならともかく！！
あまりにもレベルが違いすぎです～！」

つくねはカイトさんなら～の部分で更にダメージを食らっていた・・・

結構・・・かなり気にしていた部分なんだって・・・　苦笑

「わたしはモカさんが好きだから・・・　あなたみたいな人に美しいモカさんを汚されたくないです！」

「・・・・・・・・」

つくねは何にもいえなくなった。

（おい！あんまし気にすんなよ・・・子供が言ってる事だ。つくね・・・）

（ううう・・・・でも・・・）

やれやれ・・・

「だから宣戦布告ですーーー！マジカルステッキ！」

ジャーーンと取り出したのは可愛らしいステッキ。

『おっ　魔法具だ。』

「そうですー　これを使って二度とモカさんに近づけなくしてあげるです～～」

ステッキを掃除道具入れに向ける・・・

すると・・・　箒・ちりとり・バケツ・・・掃除用具が次々飛び出し・・・

「なぁあああああ!!」

ドカァ　ズガァ　バキャアン　めしゃ・・・

つくねを蹂躙した・・・

「つくねーーー!」『おいおい大丈夫か?』

「な・・・何コレ・・・?」

ボロボロになってますね・・・

つくね君。

「コレは魔法です～　カイトさんが言った通りこの魔法具(マグ)で魔法を発動して操ったんですー!」

そういうと嬉しそうにポーズをとりながら、

「わたし魔女なんですー　これからはモカさんに近付く男はわたしの魔法で撃退しちゃいますーー♪」

バアーーン！！

４人目正体カミングアウト！！

「正体明かすの校則違反じゃ・・・」

「うるさいですー　モカさんに近付かないでくださいですー！」

そのまま掃除用具を操り、

ドカァ　ズカァ　ペシペシ！　ぐちゃ・・・

「ぎゃああ！！」

再びリンチ！

『まっ・・・まーまーそこまでしなくても・・・な？』

カイトはゆかりを説得していた。

「むう・・・カイトさんがそういうのなら・・・今の所はカンベンしてあげるですー！　でもカイトさん・・・？」

『ん？』

カイトのほうを向く。

「わたし達はライバルです～　モカさんはカイとさんにも渡さないです！カイトさんに負けないです！！」

ビシッっとステッキを向けられた・・・

『ははは・・・まぁ　仲良くやろうな？』

そのままステッキを手で下げ、頭を撫でてあげた。

「きゃっ！何するですー！ライバルだって・・・ふあぁ・・・」

『ライバルよりは友達の方がオレは嬉しいさ。出来ればつくねもな。』

苦笑しながら撫でていた手を離した。

（誰かに撫でられたの・・・パパさんママさん以外で初めてでしたです・・・　ううん！カイトさんは強力なライバルです！！）

「もう！子ども扱いしないでください！」

顔を赤らめながらモカの方へ向かって飛びついていった。

「ううう・・・・」

哀れつくねは・・・

ボロボロになっていた。

その日の部活・・・

「え？　仙童紫？」

部室にいたのはくるむとつくね。

モカとカイトはクラスの用事で遅れていた。

カイトがモカにくっついてもつくねの様に　そこまで攻撃的じゃないみたいだ。

「うん・・・すっかり困っててさ・・・」

つくねは度重なる掃除用具リンチでボロボロになっていた。

「新聞部の活動もあるのにゆかりちゃんのおかげでモカさんに話しかけることも出来ない・・・だからほんとはオレとモカさんがあたっていたクラスの用事なんだけど、無理言ってカイトに変わってもらったんだ・・・」

シュンっとしながらくるむに相談していた。

（やふ～～　おかげでわたしはつくねと2人っきり♪カイトがいないのは残念だけど！　とりあえずナイスよ！仙童紫！！）

くるむはガッツポーズをして喜んでいた。

「わたしもその子の噂知ってるよ！天才少女って言ってもまだまだわがままの子供らしくて、悪戯ばっかりして二組の人たちに嫌われてるんだって」

顔を近付かせながらつくねと話した。

「えっ・・・　そうなの？？」

つくねは若干引きながら話を聞いていた。

つくね達が話している時・・・

その部室の外では・・・

「モカさんにぞっこんなつくねさんは念入りに潰しとくです！　マジカルアイテム！わらわらくん！！」

ゆかりはどこからか　わら人形を取り出した。

そして、髪の毛のようなものを入れ・・・

「えい！」

わら人形を操り人形の手で人形の頭部を強打した。

すると・・・

めしぃ・・・

つくねが自分で自分の顔面を殴っていた。
目の前で見ていたくるむはワケが分からなかった。
「ちょ・・・つくねーーー！！」
ぶはっーーーー！っと鼻血をながす・・・
「わぁーーー！！体が勝手に動く！！」
暫く1人格闘が続いた。
「ちょっと遅くなっちゃったね。」
『まあ　仕方ないさ。まあ、まず間違いないのは、ぜーーったいオレ達のせいじゃない！！』
理科担当の先生に頼まれ資料を運んでいたのだが・・・
理科の実験で使う魚がいなくなった！と言うことを、言われて探しに戻っていた。
『サカナ！ッていう時点で嫌な予感はしてたけど・・・　授業で使うものに手を出すなんて・・・』

「あははは・・・おかげで大変だったね・・・」

そう・・・資料のサカナがいなくなってしまった為、2人でもう授業が終わった上級生の理科担当の教師のところまで借りに言ったのだ。

もちろん猫目先生（犯人）にはきつく言って！

そして　部室前まで来た。

「ん？何か部室が騒がしいよ。カイト。」

『ほんとだ・・・　なーんか嫌な予感が・・・まあ　とりあえず入ろう。遅れてるし。』

「そうだね！」

モカは遅れてごめん！ッといいながら部室に入った。カイトもそれに続いて入ってみると・・・

むにゅむにゅ・・・

なんと・・・つくねがくるむの大きな胸を揉んでいたのだ・・・

「なななな！！！」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

恥ずかしながらカイトくんはフリーズ、モカは取り乱していた。

まさか・・・つくねがあんなことするとは・・・

「あああ！！！モカさん！！こっ　これは違うんだーーー！体が勝手に！！！」

「きゃあああん！」

胸を揉まれているくるむもさすがに恥ずかしいのか顔を赤くしていた。

「ちょっと！くるむちゃん！！また魅惑(チャーム)の術使ったんでしょーー！」

モカは顔を背けながら、くるむに言った。

「なっ！違うわよ！！そんなことしてないわ！！」

くるむがガバッっと立ち上がったその時！

つくねの手がくるむのスカートの・・・くるむのパンツを掴みそのままずっこけた・・・・・・・！！

つまり・・・・・・・・

「やああああん！」

××××××！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第９３話　宣戦布告！（後書き）

ありがとうございました！

第９４話　ゆかりの中の闇（前書き）

よろしくお願いします！

第９４話　ゆかりの中の闇

衝撃的な光景を見てしまって・・・・・・

暫くフリーズ・・・どころか　シャットダウンしそうになったよ・・・

『・・・やれやれ　外にいるのゆかりちゃんだろ？　出ておいで・・・』

窓の外に声を掛ける。

初めはあまりの光景に気付いてなかったけど、

冷静に観察・・・してみると、

若干の魔力を感じたのだ。

ゆかりはビクッっと体を震わせてしまったため、

彼女のトンガリ帽子が窓から見えてしまった。

「あああ！ゆかりちゃん！！」

『やっぱり・・・』

観念したのかゆかりは部室まで入ってきた。

「なんで分かったですか？」

『魔力が若干感じたからかな？それに・・・　つくねを攻撃するのは今のところ君だけ。・・・だろ？』

腕を組みため息をつきながら答えた。

その時！つくねはもう我慢できなくなったのか。

「そのコをなんとかしてくれーーーっ　もーー完全にあったまきた！！！」

だあああああーーーっと大声を出し訴えた。

しかし・・・ゆかりは謝るどころかモカの後ろに隠れ。

「べーーっ！」

なんとも可愛らしくあっかんべーー！！

ぐっ！！

つくねは拳を握りこんだ。

頭に四っ角をたっくさんつくって・・・

そのつくねをみてモカは・・・

「つ・・・つくね・・・まぁまぁ・・・」

宥めようとした。

とりあえず今まではこれで収まっていたのだが、さすがに今回はそうはいかなかった。

「モカさんも甘やかしすぎだよッ!!!」

『つくね・・・!とりあえず落ち着け、そんなに怒鳴るな。うるさいし。』

カイトもモカに続いてつくねを宥める。

「カイト!しっかり言ってあげなきゃ、悪戯はダメだって!!」

『まぁ・・・そうだよな・・・さすがに・・・』

これぱかりはつくねが言ってるのは正論・・・

多分・・・　というかつくねは魔女のことを全く知らないはずだ。

彼女がどういう風に周りから見られていたのかは想像できる。

それを考えるとそんなに責められない。周囲の環境が最悪なのだ・・・

だけど・・・

『ゆかりちゃん・・・とりあえずな。謝ろう　一言でも良いからさ
それで仲良くなっていくもんだからさ。』

しかし　ゆかりは何も言わずプイッっとソッポ向いた。

（こりゃ時間がかかりそうだな・・・）

ゆっくりと落ち着いて話そうと思ったが・・・

つくねはそうはいかなかった。

「モカさんも！迷惑だって言ってあげなきゃゆかりちゃんの為にもならないじゃないか」

「それは・・・そうなんだけど・・・」

慕ってくれるのは迷惑じゃないが過度なスキンシップはちょっと・・・と言った意味でのことだったが、

ゆかりにはこの言葉がかなり効いた。

（・・・！！　迷惑・・・・！？モカさんまで・・・）

その表情を見たつくねは声を少し落とし、

「ゆかりちゃんも・・・こんなことばっかりやってたらいつか友達いなくなって　一人ぼっちになっちゃうよ！？」

ゆかりは体を震わせた。

「へ・・・平気です～～　わたし天才ですから！　レベル低い友達なんてこっちから願い下げですーーー」

笑いながら答えた。

（・・・・かなりムリした笑いだな・・・）

カイトはその笑顔に何もいえなかった。

表情は笑っているのだが・・・・・

目は・・・

でもつくねは、

「ゆかりちゃん！！！」

声をあげ叫った。

「それに・・・」

ゆかりはその声には臆することなく答えた。

「それにわたし・・・もともと一人ぼっちだし・・・」

寂しそうな笑顔・・・

でもオレには　これも本当の顔じゃない。

そんな風に見えた。

でも　みんな静かになり、つくねは悪そうに声を下ろし、

「ゆかりちゃん・・・・・」

近付いていったがその時！

クルクルーーー！！

ステッキをゆかりが回すと・・・

金盥がつくねの頭上から降ってきた。

ガン！！

「ぶっ！！！」

うん。ドリフのコントだな・・・苦笑

「っ～～～～～ッ！！」

体をプルプル震わせていると。

「あははははーー　ひっかかったですーーー」

手をくるくる回しゆかりは笑っていた。

「このーーーーー！」

つくねは怒って追いかけようとすると、

ゆかりは逃げて行き、モカがつくねを抑えた。

「待って！本気で怒るなんてひどいよ！つくねっ！」

顔を近づけ，つくねを止めた。

「ええ！何で俺が怒られるんだ！！モカさんこそあのコの事はもう放っときなよ！！」

つくねは　やはり納得がいかないのか、

モカに詰め寄っていた。

（時間がかかる・・・よな・・・　いや、友情は付き合いの長い・短いじゃない・・・　何とかできる・・・　いや　しなきゃな。でも　まずはつくねか・・・）

ゆかり　ｓｉｄｅ

「・・・・・・」

ゆかりは下をむきながら、ひたすら走っていた。

悲痛な表情を浮べながら・・・

そして・・・

《11歳だってあのコ・・・》

今までの・・・ことが・・・

《生意気だよねー　何であんな子供と一緒なクラスなわけ??》

頭をよぎっていった・・・

《汚らわしい魔女の格好して》

これまでの差別の記憶が・・・

《魔女って妖怪じゃないだろ!?　人間に近いよな!この学園にいる資格ないよ　お前・・・　やめてくれよ・・・》

頭の中をいつまでも巡っている・・・

だからつい強がってしまう。

「1人ぼっち・・・　平気だもん」

と・・・

全然平気じゃない・・・

本当は・・・・・・・

頭の中が・・・　真っ白にとまでは行かないが・・・

何も考えられなくなっていた・・・

だから、

目の前に立ちはだかっている男に気付かなかった。

ドンッ！

「きゃっ！　いったぁ～～バカっ　何処見て歩いてるんですか～～っ！！」

涙を拭いながら叫ぶ。

痛みで涙が出ていると誤魔化しながら・・・

しかし、ぶつかった相手は・・・・・

「ぶつかってきたのはそっちでしょ。紫さん・・・　礼儀も知らん学園の恥さらしめ」

委員長だ。

悪意の有る表情を見せながら数名の仲間を従えていた。

仲間の数は・・・先ほどより多かった。

「！！・・・・・　委員長！」

表情が強張る・・・

「この前　君に公衆の面前で恥をかかされましたよねぇ・・・・　私は・・・ゆるしていませんよ」

そう言うと委員長は・・・擬態をゆっくりと・・・顔の半分ほど解き舌なめずりをしながら、

「きみが１人になるのを待ってたんですよォ」

そう言いゆかりの腕を掴み強引に学園の外へ出て行った。

第９４話　ゆかりの中の闇（後書き）

ありがとうございました！

第９５話　悲しき魔女の実態（前書き）

よろしくお願いします！！

第９５話　悲しき魔女の実態

部室ではまだつくねは怒っていた。

「だからもうゆかりちゃんの事は放っときなって！！」

つくねは、カイトやモカがゆかりを庇うのに納得がいってなかった。

「でも・・・・」

モカは必死につくねを説得しようとする。

『つくね！相手は同級生といってもまだ１１歳だぞ？それに魔女って言うのは・・・「だからー！！」・・・』

最後まで言う前につくねが割り込んできた。

「１１歳でも！ダメな事はダメだって、しっかりと教えないといけないじゃないか！　こっちは本当に痛い目に合わされてるんだよ！！　カイトも！モカさんも！なんでゆかりちゃんの肩ばっかり持つんだよ！」

つくねが２人に訴える・・・それを聞いたモカは、

「そんなんじゃないよっ！！　つくねこそ何でわかってあげないの

？ゆかりちゃんのこと！かわいそうじゃない！！」

ついに大きな声をあげ、飛び出していった。

「あ・・・モカさん！！もう、何で！？俺が悪いって言うの？？」

つくねはワケがわからなくなった。

『つくね！　とりあえず最後まで話を聞け！』

少し怒気を込めつくねに話す。

「え・・・？」

つくねは、カイトのほうを向きなおした。

『あのな・・・　魔女って言う種族は・・・遥か昔から差別の対象になっている種族なんだ・・・　人からはもちろん・・・　妖からも疎まれ、嫌われている種族なんだ。』

カイトが少し表情を暗めながら話した。

「え・・・嫌われてる？」

つくねが驚いていると、くるむが。

「つくね知らないの？　ほら「魔女」って「妖怪」か「人間」かよくわからない存在でしょ。だから、大昔は「境界の者」・・・つまり妖と人を結ぶって考えられていて今じゃ半端者！っとか言われてて差別される種族なんだよ。おまけに人間達にも嫌われてて、昔は

魔女狩りとか魔女裁判！っとかあってさ」

くるむが一通りつくねに説明する。

『そう・・・　くるむ、サンキュ説明追加してくれて。』

「いーよ！　でもほんとにつくねって結構知らないんだね・・・妖の事さ」

つくねはドキッっと体を振るわせた。

『まぁ・・・知らない方が良いってこともあるだろう？　先入観でその者を判断して・・・　歪ませて・・・　思考を狂わせて・・・真に内面を見なくなる・・・　そんなの悲しいじゃないか、皆同じ・・・「生きている」のにさ。』

つくねはその言葉を聞き、この学校を去ろうとした時のカイトが言ってくれた言葉を思い出した。

《人間であろうと妖怪であろうと同じ命だ。流れる血は違ってもな。大切なのは中身なんじゃないか？・・・》

オレは・・・知らなかったとはいえ・・・ゆかりちゃんに酷い事を・・・

「そうだね・・・　あのコ・・・本当に今までずっと一人ぼっちだったのかもしれないね・・・」

くるむも少し表情を崩す・・・

一人ぼっち・・・

この言葉がつくねの頭に引っかかる・・・

そして理解した。

モカさんがなぜ・・・あんなにゆかりちゃんを庇っているのかを・・・

ゆかり　ｓｉｄｅ

ここは学園の外・・・

乱暴に連れてこられたゆかりは、そのまま乱暴に木に押し当てられた。

「きゃあ！！」

「汚らわしい　汚らわしい・・・　魔女とは何て汚らわしい存在でしょう！」

メキメキメキ・・・　ミキャ・・・

委員長とその仲間達は擬態を完全に解いた。

「いいですか・・・？　君みたいなコはウチのクラスには要らないんです・・・　この学園から消えてもらいましょうか！」

リザードマン。

それが正体だった。

「きゃああ！！　こっ　この！！」

ステッキを振りかざすが。

バクンッ！！　むしゃむしゃ・・・

ステッキを食べられてしまった。

「こいつ・・・どうしてやりましょうか・・・」「食べちゃおう！霧も深いし誰にもバレないって・・・」

仲間達も近付いてきた・・・

「ああ・・・　ステッキが・・・　（わたし・・・　ステッキがないと魔法使えないのに・・・）」

これで攻撃手段が無くなってしまった・・・

その次の瞬間、委員長が大きな口を開け迫ってきた。

「そうですねーー！！食べてしまうのも良いですねぇ！！！！」

「きゃあああああ！」

ゆかりは叫び声を上げた・・・

誰も来てくれる筈ないのに・・・

「やめて！！！」

後ろから誰かの声が聞えた。

この声は・・・

（モカさん！）

「やめて・・・ゆかりちゃんから手を放して！！」

委員長はモカを見ると忌々しそうに舌打ちをした。

「またあなたですか・・・赤夜萌香さん、面倒な所を見られましたね・・・」

そして指を鳴らし、仲間達を向かわせた。

それを見たゆかりは慌てて、叫んだ。

「逃げてっ！モカさん逃げてくださいっ！！食べられちゃうっ！わたしなんて放って逃げてェ！！！」

しかしモカは止まらずゆかりを見つめた。

「大丈夫だよ・・・・　わたしが身代わりになるから・・・　ゆかりちゃん　　強がっちゃダメだよ　1人でダメな時は助けを求めて良いんだよ・・・　もっと素直になってよ。わたしの事好きって言うけど本当は甘える相手が欲しかったんだよね？　イタズラも・・・誰かにかまって欲しいから・・・でしょう？」

モカは少し泣き笑いのような表情で・・・ゆかりに話した。

「えっ・・・　モカさん・・・何を言ってるですか！早くどッか行ってくださいです！」

図星だと自身でわかってはいるのだが・・・　どうしても・・・やっぱり意地を張ってしまう。

そんなゆかりにモカが続けて言う。

「わたし・・・　わかってえたんだ・・・　ゆかりちゃんずっと淋しかったんでしょ　一人ぼっち・・・辛かったんだよね？　わたしもそう・・・ずっと辛かった・・・　だから力になりたいの。わたし絶対ゆかりちゃんの事　放っとかないからね・・・」

ゆかりが目を見開いてモカを見る・・・

その時、

「何言ってんです！！？　私達をシカトするとはナメてるんですか！！！」

忘れ去られていた委員長が激怒し仲間にモカを襲わせた。

「やめてェ！！！」

ゆかりは委員長の腕を思いっきり噛み付いた。

「いてぇ！！何するんです！！このクソガキャあァ！！！」

「きゃああ！」

鋭い爪でゆかりを襲った。

「危ない！！！」

ガバッ！！

その間に入ってくる者がいた。

それは、つくねだった。

ゆかりを助けようとして・・・

ザシュッ！！

背中に傷を負ってしまった。

「つくねーーーっ！！」

モカは驚き、つくねの方へ駆け寄った。

ゆかりは・・・

背中を・・・自分を守ったが為傷ついた背中を見て驚いていた。

なぜ、自分なんか・・・　ずっと酷い事してきた自分なんかを助けてくれるのかと・・・

「つくねさんっ！！　なっ・・・なんで・・・　どうして　わたしなんかを・・・」

つくねはさっきまでの怒っていた顔じゃなく・・・

とても優しい笑顔だった。

「さっきは・・・ごめんね・・・　オレにも少しわかったから・・・ゆかりちゃんの事・・・　オレにも力にならせてよ・・・　だからもう自分を一人ぼっちだなんて思わないで。」

ゆかりはまた・・・驚いた・・・

今まで・・・自分に構ってくれる・・・守ってくれる友達みたいなひといなかったのに・・・

「おいおいおいおいおい！どいつもコイツもッ！　私をコケにするなカスどもがァ！！　ミンチにしてやるッ！！」

大口を開けながら・・・迫ってきた！！

その時！

ガキィィィン！！

何か・・・硬い壁のような物にぶつかった様な鈍い音があたりに響いた。

第９５話　悲しき魔女の実態（後書き）

ありがとうございました！！

第９６話　闇から救えた心　（前書き）

よろしくお願いします！！

第９６話　闇から救えた心

突然現れた半透明の物体に頭から正面衝突したようだ。

「ぎゃああ！！顔が！！」

壁に顔面強打だ。

まあ　痛いだろう・・・　それに何本か歯も折れたのかも。

ぞぉ～

『だから・・・いってんだろうが・・・　女相手にお前らいったい何人がかりだよ・・・』

その壁の向こうに現れた男は・・・

カイトだ。

「カ・・・カイトさん・・・　まで・・・」

ゆかりは・・・もう目に・・・涙を溜めていた。

（とりあえず・・・無事でよかったよ・・・）

『後でゆっくり話そうな。新聞部のみんななら・・・　みんななら絶対大丈夫だからさ！』

ゆかりに笑いかける。

「つっ－！」

ゆかりは涙が出そうになるのを必死に堪えていた。

カイトは泣いたって良いんだ・・・と思っていたが、

まず　とりあえずは！

『まあ　まずはこのクズどもを片付けるか・・・』

そう言いリザードマン達の方を向いた。

「クズだとぉ！！クズはお前らだァ！！何度もコケにしやがッ・・・ッッ！！」

ガシィ！！

一瞬の内に懐に入り、顔面を掴み、持ち上げた。

「ぐっ！！がぁ！！」

ジタバタしている・・・

『どうした?ミンチにすんだろう?自慢のデッカイ口でやってみろよ』

ギロリッ!

至近距離で睨みつける。

委員長はたじろぎながらも、

口を開けようとしたが、全く動けない。

ただの・・・唯の握力で・・・口が・・・全く開かない!

まるで万力で締め付けられているようだ。

「グッ　ガァ!!(バカな・・・全く動けません!!　あ・・・赤い瞳・・・　まさかコイツ・・・　バンパイア・・・?)」

ミシミシミシッ!

委員長の顔面の骨が悲鳴を上げた。

「お前ェ!!」「死ねェ!!」

仲間の内の2人が飛び掛る!

が、

ビュオオォォォ！！

「う・・・うあああああ！！」「なんだ！！！なあああ！！」

突然現れた、まるで竜巻のような風に吹き飛ばされ上空高くに舞い上がり・・・

「「ぎゃあああ！」」ドガッ！！グシャッ！！

地面に激突した。痛そう・・・・ってレベルじゃないか・・・

『貴様らは二度目だ・・・　オレの友達に手を出そうとしたのはな・・・　一度・・・多少なら目は瞑ってやるが、よほどの事でなければな。だが・・・二度目は無い！』

ミシィ！！バキバキバキッ！！

「ギャアアア！！」

委員長の牙が全て折れていった・・・

痛そう・・・だ・・・

「・・・・・カイトさん凄い・・・　友達・・・・」

ゆかりはカイトの戦う姿は見た事無い・・・
その強さと・・・不思議な力に驚いていた。
そしてカイトの発言(ことば)にも・・・

「ゆかりちゃん・・・　大丈夫？」

つくねがを支えていたモカがつくねと共にゆかりに近付いた。

「モカさん・・・」

まだ・・・ゆかりは俯いたままだった。

「モカさん・・・　まだあいつらはまだ何人か・・・いる・・・
今はカイトの手助けに行かないと・・・！」

そう言うと、つくねは背中の痛みを堪えてモカのロザリオに手を伸ばした。

「ダメだ・・・」「こいつ・・・つええ・・・」

残ったのは2人・・・

少し離れた位置にいたため、竜巻【荒れよ暴風の嵐(ハヴォック・ゲイル)】を受けずにすんでいたのだ。

「こうなったら・・・」「ああ！」

2人は頷きあい、カイトと反対方向へ走り出した。即ち・・・　他の新聞部のみんなの方へ。

『！？』

目の前の奴（委員長！）をボコッていてすっかり他の連中を見ていなかった。

「！？こっちに来る！！」

つくねの声だ。

「貴様らを人質にすりゃー　形勢逆転だ！！！」「ぶっ殺してやる！！！」

殺しちゃあ人質になんないだろう。

っと一瞬突っ込みかけたが・・・

『ちっ！！』

ポイッ！！

ドッガラッ　ガッシャアァアン！！！

墓場やら、木やらを体で砕きながら吹き飛ぶ！

「ギャアアアアア！！！！」

二度目の絶叫。

二回手を出した・・・その報いと言う事だ・・・

あわれ・・・　吹き飛び動かなくなった・・・

まあ死んではいないだろうがな。

さすがに逝ってしまうと後味悪い・・・

一歩手前ということで♪

右手にいた委員長を放り投げた後、２人の方を見ると・・・

モカが・・・　覚醒していた。

『とりあえずは一安心だな・・・』

キィィイイン！！

「なんだぁぁぁ！！」「この・・・強大な妖気は！！！」

モカが静かに目を開き・・・　鋭く睨みつける。

「弱い者にしか手を出せぬ・・・　群れないと何も出来ない・・・
そんなクズどもが何のつもりだ？」

牙を・・・爪を構えながら向かってくるリザードマン達を睨みながら言う。

「こっ・・・このやろおぉぉぉぉ！！」「しっ・・・死ねェェェェ！！！」

2人は一瞬たじろいでいたが、

後ろにはカイトがいる。

もはや逃げ場は無い為そのままモカに襲い掛かった。

そして勢いに任せて　爪を振るうが・・・

ヒュンッ！

モカが視界からいなくなった。

「なっ！！　どこ・・・　《ドガァァ！！》ギャアアアアアア！！」

モカの蹴りが腹部に突き刺さる・・・

「くそぉ！！」

モカの方にもう1人が爪を振るう・・・しかし　やはり姿が消え。

メキョッッ！！

「グガアアアア！！！」

もう1人は顔面に直撃した。

それぞれ先ほどのメンバーの様に高く吹っ飛び・・・

湖に・・・

バッシャアアアン！！！

墜落した・・・

「弱い者にしか力をふるえんそんなクズが・・・　この私に向かってくるとはな。　身の程を知れ。」

モカは服に付いた埃を払いながら吹き飛んだ相手を睨みつけた。

そして・・・

「みんなっ！！　大丈夫！？・・・あれ」

くるむが少し送れて現場に駆けつけるが、

もう全て片付いていた。

（あ～ん・・・カイトが戦うシーン見れなかったぁ・・・）

『？？？』

何やらオレの方を見て少し落ち込んでるような…

（なんだろ？？）

カイトは困惑していた。苦笑

「どうして・・・」

そんな時ゆかりが、静かに口を開いた。

「わたし・・・皆にひどい事したのに・・・・・　どうして・・・どうして　わたしの事なんか・・・」

体を・・・震わせながらゆかりは言った。

つくねの返答は、

「・・・これから仲良くしようね。ゆかりちゃんもう一人じゃないんだからさ！」

友達を助けるのに理由は要らない。

そういうことなのだろう。

「う・・・　えぐ・・・」

ゆかりは今にも泣いてしまいそうだった・・・

『泣いたって・・・いいさ。　ここの皆、受け止めてくれる。もちろんオレもな。』

側までカイトが来て、ゆかりに笑いかけた。

ゆかりは・・・もう限界だった。

「うわあああん！」

泣き出した・・・

こんな暖かい感じ・・・

この学園に来て初めてだった・・・

まるで・・・降り積もり・・・そして凍った自分の心（悲しみ）を優しく・・・　暖かく・・・

そっと…とかしてくれてる・・・ようだった・・・

「わぁあああん！！わあああああ～～～」

ゆかりは暫く泣き続けた。

そこにいた者皆は、その叫び声は、なぜか・・・とても心地よく感じていた。

『ははは・・・　いい友達が出てきたな・・・　また学園（ここ）で・・・』

泣いているゆかりを見ながら、呟いた。

その横顔をモカ（裏）は見つめていた。

「・・・・・・（カイトも・・・　ひょっとして、表のモカのような経験があるのか・・・？）」

無言だが・・・

暫くぼーっと見ていたため、

その視線に気付かれた。

「ああ！モカ！！言っとくけど、カイトとつくねはわたしのだからね！！」

見つめてるモカを見てくるむはモカがカイトを狙っているんだと思ったのだ。

「なっ！！　違うわ馬鹿め！！身の程を知れ！！」

顔を赤らめながら、蹴り一閃！

ドカン！

「うひゃあああ！！」

くるむは飛んでいった・・・　もちろん比喩ではない。

地面に・・・「んきゃあ！」落ちた・・・

のびてるな・・・うん。

でも　まあ　大丈夫そうな感じはした。

だって　ギャグっぽい飛び方・落ち方だったから。

『んで、なんだったんだ？モカ？』

モカに話しかけると・・・

「なっ・・・　何でもない！　た・・・ただ　そうだ！私の獲物があまりにも手ごたえ無くてな、カイトを一発ぶっ飛ばそうとだな・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

『あー　左様で・・・　全力で拒否するがいいかがかな？』

若干引きながら話す・・・

戦闘狂（バトルマニア）じゃないし。

モカの一撃は防御しても痛い・・・

それなりに手加減はしてくれてると思うけど？（多分）

さすがは「力」の大妖・・・

自身の身体能力だけじゃ・・・　まあ良くて粉砕骨折・・・かなぁ・・・？

「ちっ・・・　手ごたえのある奴がいないから、お・・・お前とやろうと思ったんだがなッ！」

モカは暫く動揺しっぱなしだった。

純粋にオレの事を好意で見ていたのなら・・・

悪気はしないけど・・・そー言ったらまた蹴られそうだ。

ガードしても痛いし・・・

モカ（裏）は攻めるのは得意でも攻められるのは苦手みたいだ・・・

いや・・・蹴って終わらすから苦手って程でもないのかな・・・？

苦笑

『ははは・・・』

とりあえず笑って終わらした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その次の日の部活の時間。

くるむとモカは資料を部室に運ぶため、廊下を歩きながら話をしていた。

「ゆかりちゃん　おとなしくなったってねー　イタズラばっかりしてたのを　クラスの皆の前で謝ったんだって　皆もちょっと反省ムードになったみたいで　少しずつうちとけてるらしいよ。」

モカはクスっと微笑んだ。

「よかった・・・　大人になったんだね・・・　ゆかりちゃん。」

そして　部室に入ると・・・

「つくねさーーん！カイトさーーん！！ラブラブですーー♪」

つくねとカイトの2人に抱きついていた。

「えええー！！ゆかりちゃん！！」『おっとっと！　え！オレも？？』

モカは驚き目を見開いて・・・

くるむは持ってた資料をずっこけながら落としてしまった。

「あっ！こんにちは～　わたし　今日から新聞部に編入させてもらったんです　どうぞよろしくです～～！！」

新入部員！！

みんな驚いていた。

（オレは入ったと同時に抱きつかれたの方がびっくりしたけど・・・）

カイトは苦笑していた。

「だって・・・　わたし・・・モカさんのことも大好きだし・・・　そのうえつくねさん・・・それにライバルだと思ってたカイトさんまで好きになっちゃったですーー！！」

どどーーーん！！

つくねは顔を赤面！

カイトも若干赤面！！

モカは少しフリーズ・・・

くるむは頭に四っ角たくさん！　所謂ムカつきマーク♪

「というわけでーー　ラブラブするです♪♪」

ゆかりが2人に抱きつく。

丁度2人の顔で自分の顔が挟まるよーに。

「ちょっと！！何言ってるのよ！！！　2人はわたしの物よ！！」

くるむが割り込んできた。

「違いますーー　わたしとモカさんのですーーー！！」

ゆかりも負けていない。

「わぁーー！ちょっとー　ゆかりちゃんくるむちゃん待ってって！タチ悪くなってるよーー！」

『オレを私物化するのはダメーー！どっちの物でもなぁーいーーー！というか！男2人にって！！んなことあるかー！！』

くるむといいゆかりといい・・・　苦笑

つくねとカイトが何か言っているが聞えない。

すると・・・　さっきまでフリーズしていたモカが復活し、

「ダメよ・・・　ゆかりちゃん・・・血(ふたり)はわたしのーーーーっ」

がばーーーーッ

『えええええ!!モカも!!ってか血(ふたり)って!!!!!あげた覚えないし!!!』

その日の部活は、

もみくちゃにされた・・・

つくねは血を吸われたけど・・・　オレは何とか阻止!ぎりぎりね・・・

そろそろ本気で吸われるかも・・・　モカって力・・・強いから・・・　表も・・・

それにしても　ギン先輩がいなくて良かったな・・・

あの人いたら更に荒れそうだ・・・

それに「何でオレ抜きやねん!!!」ッとかいいそうだ。

まあ・・・とにかく・・・

『「疲れた・・・・・」』

カイトとつくねはその一言で締めくくった。

第９６話　闇から救えた心　（後書き）

ありがとうございましたー

第97話　つくねの誕生日（前書き）

よろしくお願いします！！
遅くなりましたー！！
ごめんなさーい！

第97話　つくねの誕生日

そろそろこの学園に入学して2ヶ月になります！

んで・・・　今つくね君が何やらそわそわしてます。

いつもの事だと思ったんだけど・・・

何やら今度は鼻血を出しながら・・・　チューッと口を尖がらせていた・・・

さすがに・・・

『キモイわ！！！！』「お前1人で何しとんねん！？」

スパーーーン！！

示し合わせた様に、

オレとギン先輩でのダブルツッコミが炸裂!!

「いたーー!　ギン先輩にカイト!!」

頭を抑えながら2人を見た。

「部活の時間やで!」『たくましい想像力してんなーつくね・・・』

ギン先輩はそのまま部室の前まで行き、カイトは呆けているつくねにツッコミを入れた。

「いっ・・・いや・・・　その・・・・・・」

あらら・・・顔赤くしてまぁ・・・

んで、ギン先輩はギン先輩で、

「フッ　モカさんは今日もべっぴんやなーー　愛しとるでほんまー!つき合うてくれへんか　モカさん!」

サラッと告白!

(うわーーーー　告白してる!!)

(あんな事(第90~91話　参照w)あったっていうのに・・・大したもんだな・・・いろんな意味でさぁ　図太い・・・)

おまけにギン先輩・・・　正体出しながらモカを追いかけてるし・・・

・

モカは逃げてる・・・

ぼーっと見ていたら・・・

「やっほーーー！2人とも!!今日も部活だねー!!だーい好きだよーー!!」

はぐーーーっと抱きついてきた・・・

勿論くるむだ。

「わぁ!!くるむちゃんっ」『うわっ!びっくりした!!くるむ・・・』

突然のはぐ攻撃にびっくりしていると・・・

次は掃除用具(ちりとり)やら机が飛んできた。

ちりとりはくるむを・・・　机はギンをそれぞれを襲った・・・

ぺしっ!

「きゃっ!」

ドコンッ!!

「ぎゃっ!!?」

うん・・・　明らかに机の方が痛そうだな・・・　頭から流血してるよ・・・

「つくねさん　カイトさん　そしてモカさんに手を出す人は許しません！　私が魔法で撃退するです～～～！　だって私！3人が大好きですから～！」

はい・・・ゆかりちゃん登場！

『すっごいな・・・　なーんで皆あんなにはっきり好き！っとか言えるのかね・・・』

「だよね・・・」

『まあでも　つくねは見習ったほうがいいんじゃないか？』

「うっ・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・ありゃりゃ』

どよーん・・・

つくね・・・落ち込みモードに・・・

「そんな事より・・・　誰？魔女？」

頭に血を流しながらギンはモカに聞いていた。

「進入部員のゆかりちゃん。天才少女だよ・・・」

ちょっと引きながらモカは教えていた。

今日も部活は絶好調！・・・・・・なのかなぁ・・・

『そういえばさ、つくねもう少しで誕生日だったんじゃなかったっけ？』

帰り際・・・　モカがまだいない時に聞いてみた。

「う・・・　うん！　オレ・・・その時モカさんに・・・・・・」

顔を赤くさせながら何やら決意を固めていた。

『ほほーう・・・　成長したじゃんつくね！　まあガンバレよ！・・・でも簡単にはいかないと思うけど・・・　なんたって・・・新聞部だし。』

「だよね・・・」

つくねは肩を落とす・・・

「あ・・・　そうだ・・・」

つくねはカイトに聞きたい事があった。

『ん？何だ？？』

カイトはつくねが何やら思いつめてそうだったのでキョトンとしながら聞く。

「あっ・・・あの・・・カイトはモカさんのk「おーーい！」ッ！」

乱入してきたのはモカだ。

「つくね！カイト！ちょっと話があるんだけど！」

何やら美術の本を見せながらモカが来た。

『ん？　どうした？　あー後つくね　聞きたい事って？』

「いッ　いやっ何でもないよ！カイト！　それよりモカさんどうしたの？」

つくねは話題をそらしモカの方を向いた。

『？？？　まあいっか、』

カイトも深く考えず、モカの方を見直した

「あのね2人とも、私美術の先生から絵のモデルを頼まれちゃって、これから1週間くらい一緒に帰れないんだ」

『モデルかぁ・・・　まあモカは美人だし選ばれてもあんまり驚かないけどな。』

「ええ！そっ　そんな事ないよぅ・・・」

モカはメチャ照れていた。　何か可愛かったな・・・

つくねは、

「えええええ！！」

逆に驚きまくってた。　苦笑

『うお！！つくね　そんなに驚くか？』

「だっ　だって・・・」

（じゃあオレの6日後の誕生日はどうなっちゃうんだーーーー！）

『「？？」』

「あっ　心配しないでよ！部活は頑張るから！」

モカははっとして、つくねに言った。

つくねは、そう心配しているんだろうと思いモカが言った。

「いやっ！！そーじゃなくって・・・　モ・・・・モカさん　もうすぐ・・・何の日か・・・しってる？」

つくねは焦りながらモカに聞いた。

（なーるほど・・・　そゆこと・・・）

カイトは何故つくねが動揺していたのかすぐに分かった。

まあ　つくね本人から聞いていたしな。　苦笑

だが　モカは・・・

「え?何の日?・・・・・・・・・?」

ただつくねに微笑を向けているだけだった。

（うーん・・・あのモカの表情は・・・　どうなんだろ・・・?
まあいっか・・・　何か考えてるのかもしれないし・・・　茶化さない茶化さない!）

でも、ほのぼのとしてて良いなー

つくねはなぜか泣いてるけど・・・　苦笑

（まあ　ガンバレよ!つくね。ちゃんと　オレも祝ってやるからさ。
もちろんモカの後にでも）

肩をたたきながらモカに聞えないように話す。

こう言うのは自分から言わないと格好がつかないから

ちょっと空気読んでみた!

自信は全く無かったけどね。空気読むって言う言葉はよく知ってるけど・・・　苦笑

（あ・・・　うん・・・　何とかガンバる）

なんとも歯切れが悪い・・・

まあ　つくねだし。

カイトはそう考えていた。

（でも・・・　さっきは聞きそびれたけど・・・　カイトってモカさんの事・・・　何とも思ってないのかな・・・・？　俺のこと応援してくれてるのは嬉しいけど・・・　何か・・・・　複雑だ・・・・）

カイトがモカの事を好きと思っていたら・・・

容姿やら学力やら能力やら・・・　ｅｔｃ

１２０パー負ける・・・

カイトのこれまでのモカとのやり取りを見てても、特別に好き！って感じは見えないけど・・・

ううーん・・・

（でも、特別に好きって　いう感じ・・・　じゃなくて・・・　何か・・・こう暖かい感じ・・・・？　恋愛感情じゃなくて・・・・ああもう！わかんないけど　何かそんな感じがするんだよなー　カイトって・・・）

『つくね・・・オレは男にしがみつかれて喜ぶ趣味は無いって前（第８８話参照！）言ったと思うが、見つめられて喜ぶ趣味も無いからな・・・』

考えていたつくね君はカイトの方をガン見していたのだった。

「わああ！ゴメンゴメン・・・　ちょっと考え事をしてて・・・」

カイトを見ていた自分に気がついたのか、慌てて謝る。

「あははは！　２人とも仲がいいね♪　やっぱりさっ！」

モカが笑いながら見ていた。

『仲がいいのは賛成だが、過剰すぎるのは如何かと・・・　オレはアブノーマルな気は無いぞ？つくね・・・』

「そっ！そんなのオレだってないから！誤解だってモカさん！！安心してよ！！」

慌ててつくねは拒否！

完全にからかわれているな・・・

「ははは♪　あそーだ！！血・・・　吸わせて？？」

いきなり話が変わったし！！

「えええ！そんな会話の流れだったっけ？？」

つくねが驚きながら言った。

『はい！モカ！つくねので良かったらどーぞ！』

羽交い絞めにしながら笑顔でモカに差し出す。

「えええ！カイトちょっとーーー！！」

（最近オレのも吸われそうで困ってるんだ！　それにつくね前（第７８話参照！）にオレは手助けするって言ったけど、拒否したよな～？　男は一度言ったら取り消さないよなー？？）

笑顔？でつくねに呟いた。

「う・・・　そっそれは・・・（確かに・・・言ったけど・・・あれは　負けたくないから・・・）」

しょぼんとしていたその時！

「すきあり♪」

「いただきます！」

かぷっ　　　ちゅうううううぅぅ～♪

「ぎゃあああああ～」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな3人を遠くで見ているものがいた・・・

何か言葉を発するわけでも無く、

唯・・・笑みを零し、

学園の中へと消えていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

第９７話　つくねの誕生日（後書き）

ありがとうございました！

第９８話　女子連続失踪事件　勃発（前書き）

よろしくお願いします！！

更新まだ続きますよ～　ちょっとですが・・・　苦笑

第９８話　女子連続失踪事件　勃発

「カイトは何時になったら　血を吸わせてくれるのかな～？」

モカがつくねの血を味わいながら吸い終わり・・・カイトのほうを向いた。

『なははは・・・　やっぱりほら！血は大切に・・・　しないと・・・な？　多分つくねの方が断然おいしいって！！　古来より、バンパイアの好物は人の血なんだからさ！！』

標的にされそうになったので・・・

苦笑しながら　やんわりと拒否の姿勢を貫いた。

ドストレートに断ったらさすがにかわいそうだからね・・・　苦笑

モカは不満がっていたが・・・

まあ　つくねの血を堪能したばかりもあって、思ったより早く諦めてくれた。

・・・裏モカにせめられたら、多分吸われるな・・・

あー後　つくね君はと言うと・・・

背後に死神が見えるかのような・・・

不穏なオーラを纏っていた・・・　それに・・・若干魂が抜けているような錯覚が・・・

「じゃあね♪　2人とも！また明日学校で！」

そんな事とは露知らず！

モカはベストスマイルで、手を大きく振りながら帰りの挨拶♪

『ああ！またなモカ！！』

オレもとりあえずは苦笑しながら返事をし・・・

つくねは

「・・・・・・・・・・」

言葉は発してないが・・・　手を上げて振っていた。

貧血ってレベルじゃないような・・・　笑

まあ、とりあえず・・・

『寮にはちゃんとつれてってやるよ。』

つくねに肩を貸しながら、下校した。

その次の日の部活！

いきなり事件は起きた！

っと言うか　起きてたかな？

「みんな事件やで！《女子連続失踪事件》や！」

ギン先輩が黒板に書き、説明した。

部室内は驚きで包まれる・・・

「「失踪事件って・・・」」

「こわいです～・・・・」

ゆかりはちょっと表情を暗くしながら、呟き、モカとつくねは驚いていた。

くるむも無言だったが、額に汗を浮かべながら資料に目を配っていた。

『まあ・・・この学園ならありそう・・・って思うのはオレだけかな？』

ギン先輩にそう言ってみるが・・・

「あほう！カイト！資料を見てみい　ひと月で7名や、確かに学園（ウチ）では行方不明は珍しくないけど、そのペースが異常やろ？」

確かに・・・

『7人・・・は多いな・・・大体クラスの5分の1・・・か・・・』

尋常じゃないな・・・　それに唯の失踪なら女子だけってのも・・・

「よし！理解したところで話し進めるで！　行方不明者に関する素早い情報収集頼むでみんな、　事件の真実を新聞部（オレら）で暴くんやっ！」

教卓をたたきながらギンは宣言した。

（ごく・・・ギン先輩ってマジな顔になれるんだ・・・）

つくねが唾を飲み込みながら、そう思っていると・・・

（つくね・・・　オレは裏があるような気がするぞ？　部活は何度もあったけど、こんなにやる気を見せたのといえば・・・）

（（女性がらみ！））

そゆこと～　苦笑

案の定・・・ギン先輩は、

「その写真・・・　見ての通り消えたコはみんなかなりのべっぴん

や・・・　もし・・・何者かに拉致されとるんやったら何とか救ってやりたい！　ええとこ見して仲良うなるチャンスやしな！！！」

どどーーーん！！

やっぱり・・・

『あのーそーいうことは、声に出さない方がいいんじゃない？』

さっきまでの全部台無しだ・・・

「わいは正直な己がモットーやねん！」

清々しい程に・・・高らかに宣言した。

『「・・・・・・・・・」』

苦笑・・・

でも・・・他の部員はずっと神妙な顔をしていた。

やはり、失踪していたのが全て女子だからだろう。

でも・・・ギン先輩は相変わらずだなぁ・・・

そしてつくねは相変わらず貧血っぽそう・・・

あれじゃ　部活やるっ！的な気分になれないわな・・・

『ゆかりちゃん。』

とりあえず、フラフラしてるつくねをイスに座らせた後、

表情を暗くしているゆかりの所へ。

「あっ　カイトさん・・・」

やっぱり　気分が優れないからなのだろう・・・

いつもの元気一杯！！が見られなかった。

・・・まあ　過剰にこられても困るけど・・・

『大丈夫だよ。前にも言ったけど　ここにいる皆・・・仲間なんだからさ、不安もあると思うけど・・・　1人で抱えないで皆を頼ってくれ。なっ？』

頭を撫でながら・・・　ゆかりに話した。

《帽子は、脱いでたみたいです》

ゆかりは驚いた顔をしていたが、すぐに笑顔になり・・・

「あ・・・ありがとうです・・・　カイトさん・・・　そうですよね！みんな仲間なんですから・・・」

少し・・・目を潤わせた。

がっ・・・その次の瞬間！

「やっぱりカイトさん好きですーーー！改めて感じたですーーー♪♪」

ドスーーーン！

『ぐえええええっ！！！』

ゆかりの身長のせいか・・・

鳩尾にもろハグと言う頭突きをもらってしまった・・・

「コラーーー！！わたしのカイトになんてことすんの！！！」

くるむが乱入・・・

なぜかつくねを連れて・・・

『ぐえええ！！　ちょっ！！みんなオレの上に乗らないで！！！』

ゆかりのヘッド・バッドで仰向けで倒れていたところ・・・

ゆかり＋くるむ＋つくねが乗っかってきた……

これは・・・　重い！！！

「カイトさんはわたしのですーーー！」

「つくねとカイトは渡さないわよ！！！」

「ううーーー！今貧血気味なのに……」

ワイワイしていると・・・

モカまでやってきて…

更にいやーんな展開に…

カイトとつくねにとったら災難だが♪

「何で！オレ抜きやねんーーー！！！」

ギン先輩が叫んでいたのは気のせいだろう…　苦笑

やっぱりこの台詞（セリフ）だったね♪

第９８話　女子連続失踪事件　勃発（後書き）

ありがとうございましたー！！

第９９話　美術教師とモカ（前書き）

よろしくお願いします！！

第９９話　美術教師とモカ

つくねとカイトの２人は・・・

若干ふらふらしながら歩いていた・・・

『ううむ…　酷い目にあった・・・』

「は・・・はは　そうだね。」

部活帰り・・・

何とか解放?されたつくねとカイトはとりあえず帰って休みたいので・・・

寮に向かっていた。

帰宅途中・・・

「あっ！　先生お待たせしましたーー！」

声が聞えてきた。

「この声って・・・ちょっとカイト来て！」

先に気付いたのはつくねだ。

『ん？』

言われるがまま、声がするほうに行くと。

「やあ・・・　本当に来てくれたんだね。ありがとう」

あれは・・・

『確か・・・美術の・・・』

「石神先生だね・・・それにモカさんも・・・」

2人は木の陰に隠れて見ていた。

何で？って思ったけど。

まあ、この方が楽だ・・・

今日はほんとに疲れたし、

「うれしいよ　モカさん！　私は君のように美しい存在(ひと)を見ると芸術(アート)として手許に置いときたくなるんだ。」

紹介するとこの教師は　美術教師　石神(いしがみ)　瞳(ひとみ)。

男っぽい感じから、男子よりは女子の方に人気がかなりある教師だ。

「君の美しさは既に最高のアートだねぇ！」

モカの事を芸術と呼び褒めていた。

「先生っ　これから一週間よろしくお願いします！」

モカは頭を下げていた・・・

『ん？なるほど・・・モデルってこのことか・・・　まあ納得・・・』

していたのはカイト１人！

つくねは　さらに　どよ～ん！！としてしまった・・・

『っておい・・・　どうしたんだよ・・・』

珍しくも無いが、ちょっとどよ～んとするタイミングがよくわからなかった・・・

「オレの誕生日・・・　６日後・・・なのにー」

？？独り言

でも　声が出ていた為なんで落ち込んだかは分かった。

『はぁ・・・　つくね？　オレはモカが覚えているかとか、何考えてるかとか　わかんないけど、クヨクヨするくらいなら、モカに直接聞いた方がいいと思うぞ？』

さすがにずーっと　暗くなられていると・・・

かえって　うっとう・・・じゃなくて、可哀想だ！

「・・・今　鬱陶しい！！って言わなかった？？？」

『・・・・・・・・・・・言ってない言ってない。』

コイツはエスパーか！？

裏モカみたいな事を！

つくねも成長したな・・・　フッ

「今の間は何！！？　もう・・・　まあ　いいよ。ありがと　カイト！オレ、モカさんに直接聞いて見る。」

そう言うと、まあ・・・ある程度元気にはなったかな？多分。

『ん・・・　ガンバレよ！とりあえずは元気があることが一番・・・だ。こんな学園でやっていくにもな。　明日からガンバレ！つくね。』

つくねの腹部に軽く拳を当てる。

「うん！　ああ・・・そうだ。・・・・・・・・カイト」

つくねが・・・なにやらまた表情を暗めながら聞いてきた・・・

でも・・・さっきの表情とは種類が違う感じがするな。

『ん？何だ？』

「カイト・・・・は　モカさんのこと・・・　その・・・　どう想っているの？」

つくねはちょっと・・・　複雑そうな表情をしながら・・・

声を搾り出すように聞いてきた、

『・・・・・・・この学園で出会った。かけがえの無いもの・・・かな・・・　もちろんつくねやくるむ・・・ゆかり・・・新聞部・・・　早い話この学園で出会ったもの全てと言っても大袈裟じゃない・・・な。』

カイトの表情はかなり深い・・・

唯単純に友達が出来て嬉しいとかそんな次元じゃない事はすぐに理解できた。

そんな表情をされたら・・・つくねはこれ以上言えなかった。

「そっか・・・　ありがとう、カイト。オレにとってもカイトは大切な友達だからね。きっとみんなもさ。」

つくねは初めは恋愛感情についてはっきり聞こうとしていたが・・・
やっぱり言えなかったみたいだ・・・

カイトは・・・　生前（転生前の）・・・の僅かな記憶を思い出していた。

失意の中・・・　事故で命が失われた。
未練は無かったが・・・　死ぬ勇気が無かった・・・
ほんとうは唯単純に・・・　人間関係の悪化で死にたかったわけじゃない・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あちらの世界で出来なかった事が　こちらでは出来ているのだ・・・
今の自分には護れる強さを持っている。
過信してはいけないが・・・少なくとも抗える力は持っている。
もう二度と大切なものを失ってはならない・・・
カイトは・・・　御剣陽一（カイト）は　闇・・・を持っていた。

転生しても・・・引きずっている。

大切なものが失うのが何より怖い・・・

そう・・・自分が傷つくより遥かに・・・・

また失うくらいなら、自分が・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『嫌な事・・・思い出しそうになった・・・な。』

カイトは少し苦笑をしながら呟いた。

「ん・・・？　どうしたの？」

『いや、なんでもないさ！　ありがとなつくね。』

そう言い２人は寮のほうへと向かった。

第９９話　美術教師とモカ（後書き）

ちなみに～闇～の設定はジャックさんのころよりまだ以前の（・。・）

転生前の設定のつもりです（・。・）

知らないよね・・・・・第０話で　描写してないし・・・　苦笑

いつか女神さんが言っていた何で自己犠牲精神を出しまくってくるのかな～っていう訳につながっているつもりです～

しんじゃいたい～って思った最大のりゆーは・・・

また考えます・・・　女のコに手を上げたくない！っていうところから考えて見ます～

第１００話　美術教師　石神瞳（前書き）

１００話もきてしまった・・・・1話1話短いからかな?ちょっとは伸ばそうとしてますが・・・・・苦笑

よろしくお願いします！！

第１００話　美術教師　石神瞳

次の日の授業・・・

科目は美術だ。

「え――――・・・　今日の美術なんだが、先週に続いて自分の「大切なもの」をテーマに絵を描いてもらおう。　大切なものこそ、それぞれ心の中にある芸術（アート）なんだ。　皆　自由に描くといいよ」

大切なもの・・・

つくねはそのテーマを聞いてモカの方を見ていた。

（あの様子じゃ・・・　まだ言えてないな・・・）

つくねの行動は後ろから見たら丸分かりだ・・・

まあ・・・面白いけど。

すると、クラスの女子生徒たちが、石神先生のほうへ集まりだした。

中には他のクラスから授業をサボってきている生徒もいた。

『やっぱり大人気だな。石神先生。』

教師と生徒が仲がいいことは、何か微笑ましいな～♪

3年B組～じゃないけど・・・　笑

んで・・・　皆席を移動しているみたいだから、

オレもモチーフを考えながら移動していると・・・

何やらつくねは美術の教本を凝視していた。

何やら体を震わせて。

『あれ？つくねって　そんなに美術好きだったっけ？』

側まで来ると・・・

「うひゃあ！」

驚きながら教本を閉じた。

「いっ　いや！なんでもないよ！！」

なんでもないように見えないけど・・・

『まあいっか・・・　とりあえず、絵描きに戻るわ。』

手をひらひらさせ、モチーフ探しを再開した。

大切なもの・・・ねぇ・・・

多すぎだな・・・　苦笑

授業が終わり、

つくねは何か、きっかけがあったのかモカと話そうとしたが・・・

ある時は、くるむに・・・

またある時は、ゆかりに・・・

更には、ギン先輩に・・・

妨害してるわけじゃないのに・・・

なぜか悉く失敗を繰り返していた。

その失敗シーン・・・

全てじゃないけどある程度は見ている。

もちろん、成功している感じはしない。

んで、思った！

（・・・・これじゃあ　漫画だよ・・・　ああ　小説か！

苦笑）

そして・・・早くもつくねの誕生日前日になってしまった。

つくねは単身モカがモデルをやっているらしい美術室の前に来ていた。

「こうなったら美術室に乗り込むぞッ！明日をオレの為にくれって直談判だッ！」

拳を握りこみ威勢良く美術室へ！！

ガラッ！！

「すっ・・・　すみませーーーん！モカさんに話がッ！！！」

力いっぱい叫んだ・・・が・・・

「・・・って誰もいないのか・・・　まあいいや・・・中でモカさんを待とう・・・」

ちょっと拍子抜けしてしまったが、すぐに切り替え美術室の奥へ行こうとしたその時・・・

《シクシク　シクシク　シクシク・・・》

すすり泣き声が・・・

ロッカーの中から聞えてきた。

「何だ・・・・・・？　ロッカーの中から・・・・　まさかモカさん！？」

あわてて　ロッカーを開けると・・・

そこにはモカはいなかったが・・・

「せっ・・・石像が！！！　うわあああああ！石像が泣いている――っ！！　何で？？こんなものが・・・　それに・・・このコ・・・何処かで・・・」

驚き後ずさりをしていると、

「・・・・・・おい　私のアートに何をしているんだ？」

石神先生がいつの間にかそこに立っていたのだ。

「わあ！　いっ・・・・・石神先生！！　すみません・・・っ！勝手に入っちゃって！！」

石神は・・・・まるで　害虫を見るような嫌悪の表情をしていたが。

すぐにつくねと分かると表情を戻した。

「ん・・・・・？なんだ3組のつくね君じゃないか。」

笑いながら話す・・・

がっ・・・つくねは安心できなかった。

先ほどの表情を見ているからだ。

（今・・・先生の顔死ぬほど怖かったような・・・・・）

石神は、開けられたロッカーを閉じ、笑いながら・・・

「フフ・・・・　つくね君モカさんを連れ戻しに来たのかい？モデルにかまけて全然かまってくれないから」

「えええ！！！　どっ　どうしてそれを！！？」

つくねは図星をつかれたせいか　さっきのことを忘れうろたえだした。

見てりゃ分かると思うんだけどね・・・　苦笑

石神も同様に。

「どうしてって・・・」

やれやれと言った感じで話そうとしたその時。

「あれ・・・　つくねが・・・　何で美術室（ここ）に？」

遅れたモカが美術室に入ってきた。

「モカさん!!　いやっ・・・　その・・・これは!」

モカは顔を俯かせた。

「きっ・・・聞いてくれ!オレ・・・「だっ・・・駄目よ」」

つくねが最後まで言い終える前に、モカが慌てて話した。

そして、つくねを美術室から追い出すように、背中を押した。

「恥ずかしいから来ちゃダメーーっ!　帰って!!」

・・・恥ずかしい?

「まっ・・・まさか本当にヌードモデルを??」

つくねは　授業で見た教本から連想させたのだろう・・・

そうモカに聞いてみる・・・　違うと信じて。

しかし返答は・・・

「わたしが何をしたってつくねには関係ないでしょ!!?　とにかく帰って――!!!」

自分には関係ない・・・

その言葉がつくねの脳裏に響いた・・・

「・・・・・そうだったんだ・・・　その程度だったのかよ・・・」

「え？」

「よくわかったよ　モカさんはオレのことなんてどーでも良かったんだっ！！！」

つくねは・・・モカに言われた言葉がよほど衝撃（ショック）だったのか・・・

返答を聞く前に美術室から飛び出した・・・

残ったのは・・・

「つくね――――っ！！」

モカの叫び声だけだった・・・

「そっ・・・そんな！違うの！つくねっ・・・・！」

モカも美術室を飛び出そうとしたその時、

ガシッ！

石神に腕を掴まれた。

「え？　・・・いっ　石神先生・・・？」

石神の表情は再び邪悪なものへと変わっていた・・・

「ごめんね・・・　君を帰すわけにはいかなくなったみたいだ・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第１００話　美術教師　石神瞳（後書き）

ありがとうございました！！

第１０１話　失踪事件の真相（前書き）

久々連続投稿終了ーします～！
また出来上がれば投稿するかもですが・・・　苦笑

駄文ですがご覧ください～！

第１０１話　失踪事件の真相

場所は少し変わり・・・

【新聞部部室】

「変です～～　モカさんとつくねさんに悪～～い「気」がまとわりついています・・・」

ゆかりは水晶玉を使った占いをしていた。

『ん・・・？　何してるの？』

近くにいたカイトがゆかりのそばまで来た。

「あっ　カイトさん・・・　あのですね・・・　ちょっと気になる事があったので・・・　ちょっと占いをしてみたんです！　そうしたら・・・　なぜかモカさんとつくねさんに危険が迫ってる結果が出たんです・・・」

ゆかりは不安そうに話した。

「え？・・・　占いなんて当たるのー？？」

くるむはうさんくさそーに聞いていた。

「わたしの占いを馬鹿にしないでくださいですーー！　当たるんですよ！！」

ゆかりは先ほどの顔が何処かに吹っ飛んだのか。

プンスカ～ッとくるむに向かっていき・・・

楽しそうに揉めていた・・・　苦笑

『馬鹿に出来ないよ、くるむ』

カイトははしゃいでいる2人に向かった。

『自然界の気を自らの能力とする魔女の占いは、事細かに的中させるのは無理でも簡単な占い程度ならほぼ１００％の的中率と言っても過言じゃないんだ。』

魔女と呼ばれた偉人も歴史上にかなりいる・・・

それらの「力」を恐れた人間達が魔女狩りといった強硬手段をとっていたのだ。

それほど・・・その「力」は巨大だったのだろう・・・

少なくとも人の世を変えるほどに・・・

「へぇ・・・それは知らなかったよ　わたしも！さっすがカイト♪」

まだはしゃいでいたけど・・・

まあ　スキンシップだな・・・？

「カイトさんの言うとおりです！！だから・・・つくねさん達が心配です～！今一体ドコに・・・」

ゆかりがそういうとほぼ同時に、

ガラッ・・・

つくねが入ってきた。

「はぁぁぁぁぁぁ・・・　ちゃーーっす・・・・・・」

いや・・・ちゃーっすって・・・

『つくね・・・どこの運動部だよ・・・んで、どうだった？』

「ううううう・・・・」

まあ表情を見たら・・・

・・・・・わかりやすいなぁ・・・苦笑

「よかったですー！」

「つくね♪」

くるむとゆかりもつくねの方へ駆けつけた。

「遅いで・・・」

ギン先輩は遅刻してきたつくねに少し不満があったようだ・・・

自分だって初日に遅れたのにね・・・

「昨日・・・　新たに8人目の行方不明者がでたんや　ビシッとせぇ！」

そう言うと一枚の紙切れを出した。

『あれ・・・？　行方不明者が出たのは知ってたけど・・・顔写真あったんだ』

「ん？ああ・・・　モカさんは参加出来へんみたいやから　それ以外の部員全員が集まったら話そー思とったんや」

ギン先輩と話していると・・

「ああーーーーーっ！こっ　このコは・・・っ！！」

・つくねがその紙を握り締めながら何やら大声を出した。

「何や？いきなり？」

『？？？』

突然騒ぐのは珍しくないからね・・・

でも・・・

つくねは数秒考え込むとすぐに血相を変え、部室を飛び出していった。

どうしたんだろ?

トイレか?

「あーん・・・つくねさーん　無事だったのに・・・　またどっかいっちゃった・・・」

ゆかりは残念そうに呟く・・・

『まーまー　つくねにもいろいろあるんだろ?でも　今回はちょっと不自然だな?』

カイトがそう言うと、

「ほら・・・　つくねこれを見てたよ?　ひょっとして顔見知りのコだったのかなぁ・・・?」

くるむがつくねが落としていった紙を拾いみんなに向けた。

『ん?　顔み・・・し・・・り・・・・・・?っツ!!　この写真

のコ・・・』

記憶を張り巡らす・・・

と言ってもつい最近の事だ。

そしてすぐに思い出した。

（確か・・・　あの美術の授業の時・・・　体育を抜け出したって言ってた・・・コ・・・？　美術室!?　!!!）

つくねの行動・・・　行方不明のコ・・・　最後に見た場所が美術室・・・　全部繋がる!

『そういうことか・・・ちっ・・・　ヤバイな・・・　原作　完全に忘れてるよ・・・』

そう呟くと・・・　とつくねに続きカイトも飛び出した。《原作とか言うなよ～見もふたも無い・・・　苦笑》

「あれ?? どこに行くの?」

「カイトさーんー!」

「ってか　部活せーや・・・どいつもこいつも」

みんなに答えるまもなく・・・

部室を後にした。

【美術室】

「きゃあああああ！」

もう放課後で誰もいない・・・

故にモカの叫びも誰にも届かない・・・

「きっ・・・　急にどうしたんですか　石神先生っ！！？かっ・・・・
髪が蛇みたいに・・・」

石神は邪悪な笑みと妖気（オーラ）を・・・出しながら・・・

「実は・・・さっきつくね君に少しまずいものを見られてしまってね・・・　おかげで君との楽しい時間ももう終わりにしなくちゃいけなくなったんだ・・・　」

そう言うと・・・

目をカッっと開かせ、それと同時に髪が・・・

まるで蛇のようにモカに襲い掛かった。

ガブッ!!

「きゃあああ!」

ドコオオオ!!

噛まれながらモカは美術室の隣の教員室に吹き飛んだ・・・

そこで見たものは・・・

無数にある涙を流している石像だった。

《シクシク　シクシク　シクシク　シクシク　シクシク・・・・・・・・・・・・・・・・・・》

その全てが・・・例外なく泣いている・・・

「な・・・何これっ・・・・　石像が生きているみたいに泣いてる！！？」

しかし・・・それよりも衝撃があったのは。

「ううっ！！」

左手に鈍い痛みを感じ　その手を見てみると・・・

「な・・・・　うそっ　左手が石みたいにっ・・・・」

そう先ほどかまれた左手からどんどん石化していっているのだ。

「それはメデューサの「石化能力」・・・　私の蛇のような髪に咬まれた生物は皆石になるのさ・・・　やがて・・・君もそのコ達と同じように全身が石になるんだよ・・・」

髪を妖しく靡かせながら・・・

ゆっくりとした足取りでモカに近付いていった。

「そのコ達・・・？な！　ま・・・まさかっ・・・・　この部屋の石像達はっ・・・・・」

石神の言葉でモカは全て理解した・・・

一連の事件の犯人は石神なのだということを・・・

第１０１話　失踪事件の真相（後書き）

一口妖怪辞典・・・作者都合上ｗ

メデューサ

古くギリシャ神話より知られる髪が蛇と言う
恐ろしい姿をした妖。
生物を石化させる能力を持ち、更に強い者になると
己自身の姿を見せるだけで相手を石化させることも出来ると言う。

原作引用です～
この敵は事あるごとにアートアートってバカの一つ覚えみたいに言
ってて・・・
ちょっともういいから！って思ったりしましたね　苦笑

第１０２話　マッド・アーティスト（前書き）

よろしくお願いします♪

第１０２話　マッド・アーティスト

石神は・・・・

邪悪な笑みを浮かべながら話した・・・

「そう学園（うち）のカワイイ生徒達さ　皆　私が石にしてあげたんだ・・・
どうだ？アートだろ？　君にも石に加わって私の芸術（コレクション）にしてあげるよ　赤夜萌香・・・」

ギュルン！！　ビシィィィ！！！！

その時　無数の髪の蛇がモカに巻きついていった。

「！！！　ひ・・・　あ・・・　ああ・・・」

モカは身動きが取れなくなった。

そこに石神が近付く・・・

「ふふ・・・美しいねぇ　その美しさをさらに私が高めてあげるんだ　君も光栄だろう？」

「先生・・・生徒が何人も行方不明になる事件・・・　先生が犯人だったんですね・・・」

モカが静かに問いただした。

それには石神は答えずただ・・・笑みを零した。

「見なよ・・・このコ達を・・・　泣いている・・・つまり石になっても生きているんだ。そして感情もある・・・　悲しみ・・・絶望・・・　動く事が出来ない、死ねない　泣く事しか出来ない・・・」

そう言うと石神は寒気がするような微笑の表情を浮かべながら石像を触る・・・

「ああ・・・・・・！何て美しいんだろう・・・　これぞ　真の芸術（アート）じゃないか・・・」

モカは震えた・・・

その表情に・・・

そして・・・その狂気に・・・

「さて・・・そろそろ・・・」

石神は再び髪の蛇を操った。

「君の仕上げに入るとするか」

「いやあああ！！！」

モカが咬まれる寸前！

「まてぇーーー！！」

つくねが蛇に掴みかかった。

モカを救おうと・・・

「つくねーー！！？」

「ふざけるな！！モカさんを石にされてたまるかァあ！！」

引き剥がそうとするが・・・

つくねの登場で明らかに不快感を露にした石神が更に力を強めた。

「チッ・・・　邪魔する・・・　・・・な！！！！」

ビュオオオッ！！！

髪の蛇でつくねを攻撃しようとしたその時、突然の突風が石神を襲う！

「な！！何だ！！！うわああ！！」

ドガアアア！！

教員室の外にまで吹っ飛ばされる・・・

が・・・

『ちっ・・・ご自慢の髪はまだ巻きついてるのか・・・　たいそうな髪の毛だ。』

つくねより少し遅れて入ってきたのはカイトだ。

「「カイト！！」」

『全く・・・つくね・・1人で突っ走るなよ・・・』

ため息を吐きながら言う・・・

「ごめ・・・ん・・・」

『まあいいさ、つくねが後先かまわず飛び込んでくれたおかげで、不意打ちできたし・・・　オレは・・・・・・やっぱし女は極力手を上げたくないもんでな・・・』

頭を掻きながら苦笑をする。

『まあ　とりあえず先にその悪趣味な髪を引っぺがそう。』

「おねがい！！カイト！」「うん！」

そう言い2人に近付こうとしたその時、

ガブッ！！！ガブガブッ！！！

突然髪が動き出し、つくねに咬みついた。

『つくね！！！』

「がっ・・・」

つくねは・・・咬まれたショックからか床に倒れた。

「女には・・・　手を出したくないか・・・　随分優しいんだな・・・　カイト君　　でも　その甘さが命取りだったね・・・」

フッ飛ばしたはずの石神が出てきた。

『ち・・・！のびてなかったのか？　オレの主義を曲げるのは嫌なんだが・・・・　そうも言ってられないようだな・・・』

そう言うと・・・

ギュオオオッ・・・

カイトの周囲が・・・図形とオーラで包まれていった・・・

臨戦態勢だ。

（こ・・・これは・・・　なんだ??この威圧感は・・・）

石神は圧倒的な・・・それも理解できない妖気(オーラ)?に驚いていた。

『お前を気絶でもさせりゃ　妖気が消えて解けるだろ?この呪縛は、そういうものだからな・・・固有の能力は。』

右手と左手に魔力を集中させながら近付いていく・・・

「くくくくく・・・　素晴らしい・・・・・　これ程の力を持ったものがいたとはな・・・　アートだよ・・・」

カイトを見ながら笑みを浮かべる・・・

『オレはアンタの芸術に加わる気は無いが?』

そう言うと・・・ゆっくり間合いを詰める・・・

すると次の瞬間　笑っていた、石神は突然動き出した。

それほどのスピードでは無い、
だが・・・
攻めてくると思いきや、距離を取ったのだ。
『逃げるのか!?　逃げるなら石化を解いていけよ・・・　なら手荒な真似はしない。』
「フフフ・・・　やっぱり君はあまいよ・・・　私が逃げたって?　なら・・・　モカさん巻きついてる髪は何故健在なのかな?」
そういうと石神はモカの方を指差した。
『なに・・・!』
伸びている髪が再びモカに襲いかかろうとしていた。
(くそっ!　早くアイツを片付けないと!)
急いで石神の方へ向かおうとするが、
「動くな!　ちょっとでも動いたら・・・　石化している部分を砕く・・・　場所によったら死にはしないかもしれないが　保障はできないぞ?」
そう言うと・・・モカの石化している足と手に髪が巻きついていった。
『下劣な・・・』

カイトは怒りをあらわにしていた・・・・

「君が私が距離を取ったのを黙って見過ごしたのが敗因だよ・・・
これだけ距離をとれば私の髪の方がケリを付けるのが速いぞ。
少しでも妙な動きを・・・??・・・ッツ!!!　グガアアア!!」

『ん?』

言う前に、頭上にでかいのを一発ぶつけようとしたカイトだったが、
【氷神の鉄槌(アイシクル・ペイン)】（　第６４話参照）

突然苦しみだした石神に驚いて。　術を止めた。

それと同時に・・・後ろから強大な妖気が・・・

ゴアアアアッ!!!

モカが・・・覚醒していた。

第１０２話　マッド・アーティスト（後書き）

ありがとうございました！！

第１０３話　失踪事件　終息（前書き）

よろしくお願いします！！！

第１０３話　失踪事件　終息

石神の悲鳴は止まらない・・・

「ぎゃあああ！髪がぁ！！！いきなりなんだコレはーーー！！けっ　桁違いのパワー！！！一体っ・・・髪がッ　たっ・・・耐え切れないぃぃぃ！！！」

モカのパワーを髪で抑えるには少々きつい・・・

いや、無理だろ！！ぜっーたい！

モカのバカぢk「ギロリッ！！」・・・いえいえ「力」の大妖と呼ばれるほどの力は何度も受けてる・・・

防御してるのに・・・痺れるんだよな・・・・・　苦笑

とりあえず　石神は苦痛で唸ってるから　その間にカイトは倒れているつくねのもとへ向かった。

『モカ！つくね！』

つくねの手にはロザリオが握られている・・・

つくねは、完全に石化する前に、

モカからロザリオを外していたのだった・・・

「ひとり・・・で・・・きちゃ・・・ったけど・・・さ・・・
や・・っぱり役に・・・立ちたかった・・・から」

そう言うと・・・つくねは顔面まで石化してしまい・・・　動けなくなった。

『つくね・・・　ありがとな。　オレ助けにきといて・・・助けられたよ。』

倒れているつくねを起こした。

「ひいいいいい！　痛いっ！！ちぎれるゥウゥウゥウゥウゥウ！！！！」

そのころ、

覚醒したモカは石神の髪の束を一本・・・また一本と力に任せながらちぎり・・・

ズバァァァァ！！！

最終的には纏わり巻きついていた髪　全てを千切った。

「ぎゃあああああ！髪があァあ――――――！！　私の髪が！！！！！」

石神は頭から血を流し・・・

完全にキレた。

「おのれっ・・・　おのれぇえええ！！　芸術（アート）も理解できないクズがぁ！！！とっとと　石になれぇえええ！！」

白目を向けながら怒りの形相でモカに飛び掛った！！

『んなもん理解なんぞ出来るか！！　したくも無いわ！　戒めの風壁（バインド・ウインドウ）』

石神の周囲に風が現れ・・・

それらが石神の動きを風の楓壁により束縛。

「ぐがあ！！　く・・・そ！！　なんだこれはーーー！！！！おのれ！！オノレーーー！！！！」

ヒュン！！

その次に石神が見たのは・・・

ズギャアアッ！！

モカが踵落としをする寸前の光景だった・・・

「が・・・　は・・・・・」

「どうだ？　自分が石にした蹴りの重みは？」

モカが半分ほど石化している右足を叩きながら言った。

石神は頭から血を噴出しながら倒れた。

まるで鯨の潮吹きだ・・・・

『ああ、痛そうだ、メチャクチャ・・・』

後ろにいたカイトが苦笑しながら言った。

束縛する必要なかったかな？

モカなら・・・　苦笑

「カイト・・・つくね・・・」

カイトはつくねを背負いモカのそばまで来ていた。

『つくねに助けられたな。全く助けに来といて助けられてたら世話無いな・・・』

石になったつくねに笑いかける。

「ああ・・・　つくねは蛇の群れに手を入れて私の十字架（ロザリオ）を外した・・・　並みの度胸じゃ出来ない事だ。」

モカはつくねのそばまで来た。

「礼をいうぞ・・・お前も成長してるようだな・・・」

『そのセリフ・・・　起きている時に言ってやれよモカ。　これ以上無い誉れだと思うぞ？お前に言われるんだからさ。』

そう笑いかける・・・

そしたら・・・やっぱりモカは顔を赤面させた・・・。

「ふ・・・ふん！」

（・・・　♪　ここでまーた照れてるって言ったらきっと蹴らｒ）

ビュン！！

水面蹴りが炸裂！！

足が石なだけに攻撃力さらにＵＰだ！

『うおっ！』

咄嗟にジャンプでかわす！！これは受け止めたくない！！！

とりあえず粉砕骨折程度で済みそうだが・・・

いやだーー！ぜーったい！！

・・・・・・・・・・・・・

『モカ・・・　お前やっぱ読心術でも使えるんじゃないか？』

苦笑しながら言う。

「前に言わなかったか？お前は言う前に既に顔に出るんだよ！今回は特にな！！　そして大体想像がつく！　ちっ・・・　満足に動けたなら今日こそは戦い合(はなしあ)おうと思ったのだがな・・・」

モカは石化している足を忌々しそうに睨んでいた。

『だーかーら・・・　漢字違うって・・・　それに、オレは・・・』

「・・・女には手を出せないんだろ？」

っつ！！先を読まれた・・・

「さっきも見てたが・・・　やはりお前は石神に直接ダメージがいくような攻撃は殆どしてなかった、全て間接的な攻撃。　様々な攻撃手段を持つお前がな・・・　吹き飛ばしも妖にとったら　大した

ダメージにはならない。その主義・・・戦いの場には不要だぞ。」

モカがきっぱりと！言ってくれた・・・

「これからカイト・・・お前の最大の弱点に成るかもしれないぞ？今のうちに克服しておいた方がいいんじゃないか？」

そう言うとモカは腕をぐるん！っと回し・・・指をパキッパキッっと鳴らし始めた。

何・・・？準備体操・・・？

ええ！今から！？　・・・苦笑

『ははは・・・・確かに・・・な・・・　オレは極力・・・　女には手は出したくない・・・傷つけたくない・・・　自分で手を出したくないと言うことだから、卑怯と思われるかもしれんが・・・な。石神のことなんざどうでもいいんだが・・・　自分が傷つけなければいいんだから・・・』

少し・・・表情が曇った・・・

あの時の横顔に酷似していた・・・

「何か・・・あったんだな？」

モカは臨戦態勢をとりつつあったが・・・

（ってマジだったの？？）

カイトの表情を見て、それが消えうせたようだ・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・』

カイトは何も言わない・・・

ただ顔を曇らせるだけだ・・・　いつもなら絶対にしないような顔に・・・

「フ・・・話したくない・・・っか　それぞれに事情はあるものだしな・・・」

モカが悟るように言う・・・

表のモカにも・・・裏のモカにも・・・

そういうことはあるものだ・・・

不思議じゃない。

『いつか・・・整理がつけれたら話すさ、その時・・・克服できるのかもな・・・　でもやり過ぎないように・・・だけどな。』

「フン・・・そのときが来たら戦い合(はなしあう)うとするか？」

最終的にはそうなるのか・・・

モカはカイトとよっぽど戦いたいらしい・・・

『ははは・・・　分かった、その時は付き合うよ。組み手みたいなもんだ・・・』

苦笑しながら言う。

「それは、楽しみだな・・・」

モカも笑う。

そして苦笑していたカイトは顔を戻し真っ直ぐモカを見つめた。

『モカ・・・ありがとな・・・　話・・・聞こうとしてくれたんだろ?今まで話せるような相手はいなかった・・・　モカになら話せそうな気がしたが・・・やっぱりまだ迷ってるみたいなんだ。こんな話。最初にしたのがモカで良かったよ。』

そう言ってモカに笑いかけた。

「つッ!!・・・・・・／／／」

(何て表情(かお)をするんだ・・・／／)

カイトの「ありがとう」の所の顔に・・・モカは一気に顔が赤面していくのが分かった。

『ん??』

モカの様子が・・・

「フ・・・フン　私はもう眠る・・・　またな。」

詮索しようとしたら早々にロザリオをつけようとした。

『ん・・・　ああ。おやすみモカ。』

モカは顔が赤いのが悟られぬよう顔を背け、自身とつくねを頼み誤魔化しながら　笑

十字架（ロザリオ）を身につけ眠った。

『さて・・・　石化はつくねはまだだけどモカは解けてる・・・な、猫目先生にでも頼むか・・・』

そう言い、さすがにモカ＋つくね、石神、女生徒８人を運ぶのはきついので、猫目先生に連絡した。

そして・・・失踪事件も幕を閉じたのだった・・・

第１０３話　失踪事件　終息（後書き）

裏モカさんの踵落とし！！

地面にめり込んでしまいますよね・・・

ぞぉーって感じです・・・

ありがとうございました！！

第１０４話　ささやかな誕生日会（前書き）

よろしくお願いします！！

第１０４話　ささやかな誕生日会

・・・・・・・・・・

翌日・・・

「・・・・・・！！　はっ！！」

つくねが目覚めたのは保健室のベッドの上・・・

「あっ・・・あれ？ここは？」

いまいち状況が掴めてないみたいだ・・・

その時

「つくねーーー！よかった！！！目が覚めたんだ！！！」

モカの声が聞えた。

横を見ると・・・モカがいて抱きついてきた。

よほど嬉しかったのだろう。

「わあ！モカさん！？？　これはっ・・・・！？　オレ・・・石に・・・　あれ？カイトは無事？」

戸惑いながらモカに聞いた。

「えっとね、石神先生が倒れて皆に掛かってた妖術が解けてもとの姿に戻れたんだ。でも、つくねだけ丸一日　目を覚まさないから心配してたんだよ！」

（丸一日！！！　ええ・・・寝てたってことは・・・もう誕生日じゃん・・・　結局・・・モカさんに言えなかった・・・）

ガーン・・・ショックが大きい・・・

カイトの安否のこと・・・帰ってきてない事はいいのかよ！？？

って突っ込んでみたい！

「えっとね・・・あとカイトだけど　さっきまでは一緒にいたんだけど。ちょっと先生に呼ばれちゃって、今出てるんだ」

「へー　そーなんだ・・・」

反応薄ッ！！

「つくね・・・見て！！」

落ち込んでいるつくねにモカはある人物画を見せた。

「じゃーん！！　・・・なーんてね。」

つくねの絵だ・・・

「「大切なもの」ってテーマでがんばってつくねを描いたの！へたっぴだけどね！」

モカはテレながら話した・・・

「？？？？」

つくねはまだ状況を理解できてないみたいだ・・・だが、

「プレゼントだよ！」

このモカの一言で理解した。

「隠しててごめんね　心配させたけど　これを描く為に石神先生に絵を習いに行ってたんだ！モデルをする代わりにね。　お誕生日おめでとうつくね！！　わたしは　つくねが大好きだよ！」

モカは顔をパアッっと明らめて・・・　照れくさそうに言った。

殆ど告白だね♪

つくねは・・・

覚えてくれた事に感慨極まったのか・・・

目に涙を浮かべていた。

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

【保健室前】

『・・・・・・・フフ　良かったな・・・　つくね。』

保健室の扉にもたれかかっているのはカイト。

数分前に到着し、つくねが目を覚ました事に気付いたのだが・・・

今は入らない方が良いと思い、そのまま暫く待っていた。

無理に入るのは野暮ってもんだ！

そして右手には簡単なキーホルダーのアクセサリーを手に持ってる・・・

ささやかだがプレゼントだ。

『購買部にはこんなんしかなかったけど・・・　まあいっか・・・』

そのアクセサリーを袋に入れた。

その時、

「「あ！！　カイト！！」さん！！」

突然！声（大声！）が聞えた！

『へ？？』

ふと前を見ると・・・

「心配したんだよー！！　もーこの間！！」「本当ですー！！」

ドーーン！

2人そろってタックル～～♪

『うげ！　ああ　ダメだって！今は！！』

言ってももう遅かった・・・

3人の重量に耐え切れなかった扉が壊れ、そのまま3人＋不満顔のギン先輩が、保健室へ入ってしまった・・・

「「！！！」」

仕方ないから、つくね達の方を見てみると・・・

うん・・・ずっこけていたね。残念なタイミングだったらしい・・・

苦笑

やれやれ・・・

2人を抱えたまま、

『つくね・・・目を覚ましたんだな。良かったよ。』

何事も無いように振舞いながら話しかけた。

「あーほんとだ！　よかったぁ　つくね！！目を覚ましたんだね！！！」

「よかったですーーー！！」

「なーーんで　こいつらだけ・・・こんな・・・」

くるむ、ゆかりがそれぞれ続いた。

ギン先輩は・・・・・・

まだ、ぶつぶつ言ってたな～　　苦笑

「モカから聞いたよ！今日　誕生日だってね！　はい　プレゼント　クッキー1年分！！」

「私は　わら人形のわらわら君を！！」

んで、ギン先輩はバラの花束を持っていた・・・

それぞれまあ・・・個性的なプレゼントをしていた。

『クッキー1年分！！　・・・食べるの大変そうだ・・・　んで1年したらまた追加で無限ループするの？』

とか、

『ゆかり・・・それでつくねに誰を操ってもらいたいのかな?』

とか、

『ギン先輩・・・　その花束・・・ぜーったいモカにだろ?つくねじゃなくて!』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・って　ツッコみたかったけど・・・

まあ　自重した。

つくねとモカは背中合わせで座ってて苦笑しているし。

「ところで、今何しとったんや?自分ら??」

ギン先輩が爆弾発言を!!

でも・・・つくね達には聞えてないみたいだ、

(結局・・・好きって言えなかったな・・・)

やっぱり・・・

そんなつくねにカイトは近付き、

そっと袋を渡した。

「あ・・・カイト。」

『ほらよ!おめでとさん。』

つくね以外には聞えないほどの声でつくねに言い、

軽くウインクをした。

「あっ・・・カイトもありがとう!」

つくねは若干落ち込んでいたが・・・

（・・・まあ　いっかぁ　また・・・いつか・・・）

直ぐに立ち直っていた♪

・・・・・・・・・

さーーて!!

「「「ハッピーバースディ　つくね!!」」」

保健室にクラッカーの音と祝い声が響いて・・・

つくねの誕生会が盛大に始まった。

～号外　内容～

女生徒拉致の美術教師
無期限の停職へ！！

拉致されていた女生徒は無事保護！

容疑者　石神　瞳　先生
《美術教師》

第１０４話　ささやかな誕生日会（後書き）

ありがとうございました！

第１０５話　締切前と脅迫状（前書き）

よろしくお願いします！
今回は原作の中でもトップクラスに嫌なやつが・・・・
作者の意見ですがね♪

でわ　どーぞ！

第１０５話　締切前と脅迫状

つくねの誕生日から1日過ぎ・・・

我々新聞部は「修羅場」を迎えていた！！

締切前という修羅場を！！！！

「そういえば・・・季節感無いよね？いつまで冬服なんだろ？」

つくねは窓の外を見ながら・・・

（今更だけど・・・　マジで人間界とは遮断されてんだなぁ・・・
学園（ここ）って・・・）

ほけーーっとしていた・・・

『現実逃避するのは結構だが　手は動かせ！！　つくね！』

ビクッ！！

つくねは　はっとして、カイトのほうを向いた。

「あ・・・ははは・・・　ばれちゃってた？現実逃避入ってたの？」

苦笑しながら話す・・・

『まあ・・・気持ちはわかるが・・・』

「あはは・・・わたしも　分かるよ　昨日つくねの誕生日だったのに　いきなり締切前でハードだもんね・・・」

モカも同様の様だ・・・

実を言うと今先日の美術教師の事件を新聞にしているところなのだ。

そして新聞はスピードが命！！

誕生日のわいわいムードから一転！全力回転せねばならない新聞部なのであった・・・

大変そうだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

暫くは無言でやってたのだが・・・

『・・・・・・・・・・・・・ふ・・・　フフ・・・・・・・フフフフ・・・　いつまでも　部活トラウマになってるオレじゃないぞー！！！　オラァーーー！！どんどんかかって来いやぁー！！』

突然！！

カイトスイッチがＯＮになったようだ！！

オラオラオラーッ！！っと！！　カリカリ・・・と・・・書いている・・・

「！！？　　・・・ははは　良かったね？カイト・・・克服できたじゃん・・・」

「そうだね・・・」

モカとつくねはいきなりでびっくりしていたが・・・　と言うか全員苦笑していた。

「カイトがすっごいやる気なのは素敵だと思うけど～　さすがに折角の土日に部活でカンズメなんてね～」

いつもなら　素敵ーっと飛びついてくる　くるむなのだが・・・

さすがに疲れているのか、グーーーっと背筋を伸ばしため息をしていた。

「本当ですー　これじゃ　まるで締切に追われる漫画家ですぅ・・・おまけにノーギャラ？」

ゆかりは・・・何やらリアルな事を言っていた・・・　その時、

「甘ったれんな！！　新聞も漫画と同じで締切厳守やッ！！！　」

編集・・・じゃなくギン部長から檄が飛ぶ・・・

「一面を飾る美術教師の事件がおとといの木曜！つまり来週の頭には　そいつが記事にならへんと　？新聞？とは呼べんで　ぜーいんカイトを見習えや！　それに泣き言は締切守ってから聞いたるわ」

新聞を読みながら珈琲を片手に・・・

まるで優雅な朝のよう・・・・・って！！

「ギン先輩もコーヒーでくつろいでないで手伝ってくださいッ！！先輩こそカイトを見習ってよ！！」

モカがもーーっと声を出す。

『オラオラオラ・・・・・』

一心不乱にカイトはひたすら書いていた。

回り全然見えてないな・・・

「あは！カイトさん凄いですー　それに比べ　ギン先輩はえらそーな編集者みたいですぅ！」

ゆかりはケタケタケタッ笑っていた・・・

「いや・・・　何で漫画に結びつけてんの！！？・・・・・・・別に問題ないけど・・・」

つくねがゆかりにそういってたが・・・

そうです、別に問題ないよね～

にじ小説だもん　♪

「まあ　わたしは　つくねとカイトが一緒なら何やったっていいもん♪」

そう言うとつくねにまずは抱きつく・・・

カイトは今トランス状態だもん・・・　ジャマしちゃ悪いしね♪

「ちょっと！くるむちゃん！！」

モカがくるむに詰め寄り　火花を散らす・・・　バチバチッっとね♪

「また泥沼の争いが始まったですーー！」

ゆかりは楽しんで、つくねは呆然としていた。

「モカ！つくねの誕生日に抜け駆けするつもりだったみたいだけど！そうはさせないよっ！　つくねもカイトも絶対渡さないもん！！」

「くるむちゃーーん！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

楽しそうに騒いでいる新聞部を・・・

遠くから覗いている者がいた。

「・・・・・うふふ　いたいた・・・♪　ぼくの愛しいひと・・・かわいいなぁ　やっぱり　こうやって見ているだけじゃ我慢なんてできないよ・・　まっててね・・・すぐに君のこと・・・抱きしめてあげるから・・　フフフ・・・」

そう呟くと・・　盗撮をし、そして　校舎へと消えていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

さーて・・・

部活動もスパートをかけてマス！

ギン先輩もやっと仕事してくれてるし、

そこへ・・・

「みんなやってるー？　差し入れ持ってきたヨ！」

入ってきたのは新聞部顧問　猫目先生だった。

「いや・・・カットは多いし　ページは多いし　大変です・・・・・・」

『オ・・・ら・・・お・・・ラ・・・』

カイトくん・・・が・・・

「カイトも・・・　そろそろやばいかも・・・」

と言った感じだ・・・

時間に追われるプレッシャー・・・　そして仕事量・・・

想像以上だったようだ・・・

「まぁまぁ　差し入れ食べて元気出して！」

そう言って先生は袋を差し出した。

中身は・・・

「先生！？　コレ　生魚ですけど・・・？」

はい・・・　しかもまだ生きてます。

「おいしいわよー！　リフレッシュできるし！」

人差し指をピン！っと上げ言い切った・・・

「「生で！！？」」

寿司かよ・・・

ワイルドな食べ方をしなきゃならないのか・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・』

ついに言葉が無くなったが・・・まだ書き続けていた。

「カイト～　先生が差し入れもって来てくれたし（生魚だけど・・・）ちょっと休憩しよ？　息抜きもいるよ！」

・・・・・・・・

『グフッ・・・・・』

バタン！！

ちょ！！！

「えええ！！カイトしっかり～！！」

机に突っ伏してしまった・・・

『・・・・・・・・・い・・・息継ぎ・・・・　わ・・・すれて・・・・た・・・・・・・』

一心不乱だったせいか、

酸素欠乏（チアノーゼ）になってしまったみたいだ・・・　苦笑

とりあえず、風通しの良い所へ・・・

ちょっと加減しようよ・・・　苦笑

「あっ！そーだ！くるむちゃん！」

猫目先生が何やら思い出したらしく、

カイトを介抱していた（追い討ち？）くるむに声を掛けた。

「教室の前にこんな封筒落ちてたわよ！」

「封筒？」

先生から受け取ってみると・・・

《愛するくるむちゃん　　ながれ》

と書かれていた。

（ラブレター？　誰？こんなときに・・・　カイトかつくねだった

ら良かったのに・・・　いや！2人からほしいわね♪）

くるむは若干赤くなりながら、中身を確認していた。

中身は・・・・

【くるむちゃんH写真集！！】

そして・・・

ばらまかれたくなかったら校庭まで1人で来い・・・って感じの短い文だった・・・

ここから事件が始まった・・・

第１０５話　締切前と脅迫状（後書き）

ありがとうございました！！

第１０６話　グラビア撮影ごっこ（前書き）

よろしくお願いします！！

第１０６話　グラビア撮影ごっこ

（きゃああ！何コレーーッ！　わたしのえっち写真じゃないッてゆうか脅迫状！！？）

中身を確認すると　その内容に思わず　無意識に隠そうとして、用具箱に突っ込んでしまった。

「どうしたの？くるむちゃん？？」

つくねはカイトがとりあえず復活した為、再び仕事を再開しようと机に向かったところ・・・

くるむが何やら慌てていた為、話しかけた。

『ふう・・・　ごめんみんな。世話かけちゃって、くるむもありがとう。』

そこにカイトもやってきた。

くるむは　いてもたってもいられなくなり・・・

「あははは・・・どういたしましてーカイトー　・・・ちょっと用事を思い出しちゃった！わたし抜けるねー」

足取りがおぼつかない様子で立ち上がる・・・

「くるむちゃん！ちょ・・・　締切はッ・・・」

モカが慌てて止めようとするが・・・

「後はよろしく！！」

そう言うと・・・

くるむは部室から出て行った。

「どうしたんだろう・・・」

つくねも困った感じで呟く。

「くるむちゃん・・・」

モカも・・・複雑な表情を作り・・・　黙りこむ。

「とりあえず作業再開や！　時間があらへん！」

さすがにギン先輩もこのままでは間に合わないと感じたのか、

驚くことに一番先に仕事を再開した！

「ええー　部長が真っ先に仕事してるですー　これは驚き！槍でもふるですかー？」

ゆかりは驚きながらも笑いながら話す。

「あほな事言ーな！間に合わんやろ！」

ギャイギャイ言い争いが・・・　苦笑

『・・・・・・・何か　違和感があるな・・・　あのくるむの表情・・・　まあ　とりあえず作業再開しよう、つくね、モカ！せっかくギン先輩もやる気みたいだし』

「うん」「そうだね・・・」

2人は頷くと・・・　机に戻り作業再開した。

何時間たってもくるむが帰ってくる様子はなかった・・・

「・・・帰ってこないね　くるむちゃん・・・」

つくねがそう呟いたのがきっかけだった。

「この程度で逃げ出す人は用なしです～～」

容赦の無いゆかりの一言！！

（言う事きっついよなぁ・・・　ゆかりちゃん・・・11歳にして・・・）

つくねは若干引き気味・・・

『逃げ出すくるむじゃないと思うけどな～オレは。』

カイトはゆかりと反対の意見だった。

「そうだよー　ゆかりちゃん！」

「でも　戻ってこないですー」

・・・・・・・・・・・・・・・

更に暫くすると・・・　今度はモカが口を開いた・・・

「・・・ねぇ　くるむちゃんって　新聞部のことどう思ってるのかな・・・・」

暗い顔をしながら呟いた・・・

「「『え？』」」

皆がモカの方を向く・・・

「くるむちゃんが新聞部にいるのって　カイトとつくねが好きだから・・・　だよね？　わたしなんて最初はとっても嫌われてたし・・・」

モカは更に表情を曇らせながら続けた・・・

「本当は　わたし達のこと　友達と思っててくれてないのかも・・・だって皆がこんなに大変な時に1人でどこかへ言っちゃうなんて・・・絶対に変だよ！」

この言葉に・・・皆が沈黙した・・・

ギン先輩まで顔に手をつき、黙る。

それを遠目で見ていた猫目先生は、

（・・・あらまぁ　団結力の強いメンバーかと思ったら・・・　意外と脆そうねぇ・・・）

困った表情をしていた・・・

「なっ　何言ってんだよ！いつも仲良くやってるじゃんか～～　きっとホラ・・・　くるむちゃん　今日は大事な用事があったんだよ・・・　そうに決まってるって！　ね？」

つくねが必死に笑い顔をつくり、場を和ませようとしていた・・・

『そうだな、くるむはモカが思ってるような子じゃないと思うぞ？良くも悪くも真っ直ぐだから・・・』

最後の方は若干苦笑気味・・・

「・・・・・・」

モカは黙っていた・・・

くるむに自分は嫌われてるんだ・・・・・・

そう思っていた為・・・

簡単に信じられないみたいだった。

一方その頃・・・

くるむは、脅迫文（ラブレター）の送り主である、叶（かのう）　流行（ながれ）と会っており・・・

「グラビア撮影ごっこ」

なるものを強要されていた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

暫くは必死に我慢してたくるむだったが・・・・

もう！！

「こんなの話が違う～～～！！いい加減に！！」

キ――――――っと怒ろうとしたが・・・

「おっと・・・良いのかい・・・？そんな口きいちゃって・・・・」

じめじめした顔を近づけられながら・・・　くるむに言う・・・

「う・・・・？」

その気持ち悪さにくるむはたじろいだ。

「このぼくには女のコのヒミツがわかっちゃう特殊能力があるんだよ～♪　くるむちゃんのことも　いろいろと知ってるんだよぉ！！」

そう言うとくるむに耳打ちした・・・

「○△×□△△凹凸！！！！！！！！　へっ　へんたいーーーー！！！！！」

一体何だったのか・・・・・・それは想像にお任せします・・・苦笑

そして　叶は、不気味な笑みを零しながら・・・

「そーゆーの　ぜ～んぶ　つくね君やカイト君に教えちゃおっかな～～？」

鼻歌交じりに・・・

わざと聞えるように呟いた。

「！！！？　な・・・何で2人の事・・・　やめて！それだけは！！！」

くるむは動揺していた・・・

「ふーん・・・二股かけてるのに～結構純情なんだね～♪♪くるむちゃんってさぁ・・・」

またまた気持ち悪いほどの笑みでジトーっとくるむを見つめた・・・

「ふ！二股じゃない！！　わたしは2人の事がほんとに好きになっ

たの！！間違ってるかもしれないけど　自分に嘘をついていく自信なんか無いわ！」

二股・・・

その言葉にくるむは真っ向から反論した。

叶はちょっと驚いていたが再び笑みを出し。

「そっ・・・　なら話しは早いや！　じゃあ　バラされたくなかったら　このコスプレやってもらおうかッ！！」

取り出したのはメイド服・・・

くるむはかなり引いていた・・・

（やばい・・・　このひと調子に乗ってくる・・・　いっその事魅惑眼（チャーム）で・・・）

くるむはそう考えたがすぐに首を振った・・・

そして、カイトとつくねの言葉を思い出した・・・

《君は魅惑眼（そんなの）使わなくたって、十分魅力的だしな。オレはそう思うよ・・・》

《くるむさんって根っからの悪いコには全然見えないもん！きっと仲良くなれると思う・・・》

2人がくれた・・・とても優しい言葉だ・・・

そのときくるむは誓った事を思い出した。

（わたしは・・・そーゆーひどいことするのやめたんだから！）

そして・・・くるむは嫌々ながら・・・着替えて叶のところへ戻っていった。

第１０６話　グラビア撮影ごっこ（後書き）

この敵？キャラは嫌なキャラです～！！　苦笑

ありがとうございました！！

第１０７話　誰もいない部室・・・（前書き）

ちょっと短いですー！

第１０７話　誰もいない部室・・・

無理矢理付き合わされたグラビア撮影・・・

暫く・・・というかすっかり日も落ちた頃・・・

くるむは解放された。

「や・・・やっと・・・　解放してもらえた・・・　１２回も衣装チェンジして・・・」

足取りおぼつかなかったが　急いで部室の方へ向かった・・・

（・・・みんな　まだがんばってるのかな・・・）

部室をそ～っと開けると・・・

部員全員負のオーラに包まれていた！！！

周辺から妙な風が吹き巻いている・・・

その表情はまるで阿修羅！！

・・・にくるむは見えた。

（ひいいいいい！！！　怒ってるッ　みんなめちゃ怒ってる～～～

ッ　怒鳴られるぅ）

くるむは顔を青くして震えた。

「ああ・・・　お帰りくるむちゃん　遅かったね・・・　でもちょうど今日の作業切り上げたところなの・・・・・　残りはまた明日がんばろうって・・・」

モカが弱弱しい声で言った・・・

他の皆さんもうヨロヨロだ・・・

カイトくんは・・・・・・・・・・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・ゲフッ』

吐血!!!

と言うのは嘘!だが、　苦笑　　さすがに疲れきっていた。

「え!」

くるむは何かを言う前に・・・

みんなおぼつかない足で部室の外へ・・・

「だからもうくるむちゃんも帰っていいよ・・・」

そう呟き出て行った。

1人取り残されたくるむは呆然としていた・・・

（遅かった・・・・・）

そして後悔していた・・・　以前までの自分に・・・

そう・・・叶に目を付けられたのは元々自分のせいだった・・・

くるむは無言で作業机の前にきて・・・そして座った。

（サキュバスの能力で・・・男の人を虜にしていい気になってた昔・・・　そうやってチヤホヤされても・・・心からの友達は1人も出来なかったけど・・・それでも良いっておもってた・・・）

くるむはめに涙を溜めていった・・・

（ああ・・・あんなバカみたいなことをしてたからきっと今になってバチが当たったんだ！）

「謝らなきゃ・・・　みんなに・・・」

そう言うと・・・　後ろから声が聞えてきた。

「うふふふ・・・・何だい？どうしたのくるむちゃん・・・」

くるむが驚き振り向く。

叶だ・・・

「いやぁあ・・・　本当に今日は楽しかったねぇ♪　明日もまた遊ぼうね・・・くるむちゃん・・・」

悪夢のような事を言ってくる・・・

「なっ　ながれ君！　どうしてここにっ　明日はやだよっ　デートの約束は今日だけのはず・・・」

そう言うと叶は、

「そんなつれない事言うと・・・　今日取った写真見せちゃうよ～　だれに・・・とは言わないけどさぁ・・・」

写真を構えながらジリジリと近付く・・・

「ええ！？やめてっ　誰にも見せないって言ったのにッ・・・」

驚きながら言うと・・・

叶はこれでもかって程の気持ち悪い笑みをあらわにし・・・

「じゃあ　明日も遊ぶだろッ！！？　もう離さないからなッ！！」

「ダメ・・・・　明日だけは・・・　もうわたしに付きまとわないで！！！」

くるむは我慢できなくなり部室を飛び出した。

部室に残った叶は、机の上にある作りかけの新聞を手に取り・・・

「へぇ～へぇ～　作りかけの新聞かぁ・・・　いいなぁ　コレ・・・」

再び・・・気持ち悪い笑みをあらわにし・・・　作りかけの新聞と共に部室を後にした・・・・・・

第１０７話　誰もいない部室・・・（後書き）

ありがとうございました！！

第１０８話　盗まれた原稿とくるむの真相（前書き）

よろしくお願いします！

第１０８話　盗まれた原稿とくるむの真相

日曜日・・・・

モカが真っ先に異変に気付いた。

「ないっ！！！！　昨日途中まで仕上げてた原稿が・・・　全部なくなってるっ！！？」

『「「「　えええええええええええええええええ！！！！！！　」」」』

悲鳴が当たり一面に木霊した・・・

『マジかよ！！　あの死闘（さぎょう）をもう一回するの？？　それはキツすぎる！！』

カイトもあわてて辺りを探す・・・

しかし　見つからない。

「そんなアホなっ　盗まれたんか！？」

ギン先輩も探すが・・・・やはり無い。

「ど・・・どうしよう　全部やり直してたら絶対間に合わないよ～！」

その次に・・・ゆかりから悲鳴が！

「やあああぁっ！　わたしのデータも消されてます～～っ　バックアップのＭＯは無くなってるし・・・・　おまけに日記まで読まれてますぅ！」

何故に日記まで！！

「しかも　キーボードはナメクジ這ったみたいにべとべとしてるぅ～・・・・」

そう言うとくるむが過剰に反応した。

「！！！！！」

（あいつだ・・・　何よりあいつ　昨日の夜　この教室に入ってきたし・・・　じゃあ　これは・・・　原稿を人質に取ったから言う事聞けっていう・・・　脅迫状だ！）

くるむは顔を青くしていた・・・

つくねだけが・・・その表情に気付いた。

「くるむ・・・ちゃん？」

だが、ギン先輩から指示が飛ぶ。

「・・・・くっ　　しゃあない！今から犯人を探しとるヒマあらへん！もっぺん最初ッから作るでッ！！　減ページでええ！何とか

するんや!!　つくね、　モカさん、くるむちゃんは作業場所をきれいにしといてや!そんなべとべとじゃ、出来へん!ゆかりちゃんは、ＰＣ作業を最初から頼むわ!　カイトは、新しい原稿用紙の準備!オレは猫目先生に現状を伝えたらすぐ他の作業に取り掛かる!
　なんとしても間に合わすんや!」

そうギン先輩が言うとみんな頷きあい、作業を再開した・・・

１名を除いて・・・

『不味いな・・・　まだ用紙あったか?　少なかったような気がする・・・』

カイトは資料室へと直行!ギン先輩は携帯で連絡、残ったのは４人・・・

くるむは・・・　震えながら・・・　口を開いた・・・

「み・・・　みんな・・・　こ・・・こんな時に　悪いけど・・・
わたし　今日部活休むね・・・」

すると・・・モカが・・・

「な・・・何で?どうしちゃったのよくるむちゃん・・・」

モカもかなり驚いたのか、足をふらつかせながらくるむに近付く・・・

「みんなが・・・大変なときに自分だけ・・・　くるむちゃんは何とも思わないの??」

くるむは表情を曇らせた・・・

そして言おうとしたが・・・

皆の原稿が人質である以上迂闊な事はいえない・・・

『どうした！騒いで！！』

騒動に気がついたのか、カイトが戻ってきた。

「カイトからも言って！くるむちゃん・・・　こんな時に休むって言うの！！」

モカが・・・怒気を篭めた声をあげた・・・

『え・・・？』

モカの声に驚きながらくるむを見る・・・

「カイト・・・　わ　わたし・・・」

くるむは目に涙を溜め・・・　何か言おうとしたが・・・唇を噛み飲み込んだ。

「ごめん・・・　行くね・・・」

そう言うと皆に背を向ける・・・

モカはもう・・・我慢できなくなった。

「見損なったよ！くるむちゃん　結局わたし達のこと　友達とも何とも思ってないんだねっ！　それなら新聞部なんか出て行ってよ！！」

叫んだ・・・が・・・

くるむが振り返る事は無かった・・・

重苦しい空気の中・・・

作業が再スタートした。

そんな時・・・

カイトが、

『オレ・・・くるむを探してくる』

口を開いた、

「オレも・・・行くよ」

続いてつくねも立ち上がった。

モカが慌てて2人を止めようとした。

「だっ・・・ダメ！2人まで今いなくなったら本当に間に合わなくなちゃう！！　お願い　今はこっちに集中して！2人とも・・・」

モカは説得をしようとするが・・・

つくねは、聞かずそのままモカを横切った・・・

モカはショックだったのだろう・・・唖然とした表情をした。

『・・・いつものモカなら　気付いていたと思う』

カイトが口を開く、

『くるむの顔・・・「助けてっ」・・・って叫んでるような顔をしていた・・・　オレはそんなくるむをほっとく事は出来ない。』

続けてつくねも・・・

「オレもそんな感じがしたんだ・・・　さっきのくるむちゃん・・・」

つくねも感じたようだ。

カイトに同意していた。

「・・・お前らが抜ければ　皆で作ろう言う多新聞がめちゃくちゃになる・・・どうなってもええんか？」

静かに聴いていたギン先輩も口を開いた。

2人の事も分かるが・・・今はやはり新聞を優先させたいみたいだ・・・

（・・・みんなあっという間にバラバラね）

応援に駆けつけた猫目先生も残念そうな表情をした・・・

だが、次のつくねの言葉で場の空気が変わった。

「どうなってもいいわけじゃありませんよ。ギン先輩・・・　皆で作ろうって決めた新聞（もの）だから　くるむちゃんが一緒じゃなきゃ完成しないと思ったんです。」

！！

『そう・・・だよな・・・　新聞は皆がひとつになっての共同作業・・・　誰一人かけちゃあいけないよな・・・』

つくねの言葉に感動してしまった・・・

モカもギンも目を見開いている・・・

その時、

別室で作業をしていたゆかりが叫んだ。

「みなさん！大変ですぅ！！　原稿の手がかりを探していたら道具箱からこんな物がっ・・・・」

皆がゆかりに近付き・・・

事の発端に気がついた。

第１０８話　盗まれた原稿とくるむの真相（後書き）

ありがとうございます！

第１０９話　わたしの大切なもの・・・（前書き）

よろしくお願いします！！

ナメクジなんてきらいだー！　苦笑

第１０９話　わたしの大切なもの・・・

皆が脅迫状を見ていたその頃・・・

叶と決着（けり）を付けるためにくるむは対峙していたのだが、

・・・体に力が入らなくなってしまっていた。

「きゃあああ！」

その隙に、叶はくるむの胸を腕を伸ばし鷲づかみにする

ぐにゅん！

「やめっ！！」

くるむは手で掃うが・・・

やはり力が入らない・・・

「やわらかいね♪　うふふ・・・どうしたのかぁ？　さっきまでの威勢は　まるでお人形のようにおとなしくなっちゃって・・・」

くるむはわけがわからなかった・・
が・・・
叶を見てみると・・・
何かを噴出しているのが見えた。
（これは・・・毒ガス！！！　こいつ・・・体から毒ガスを？
いけないっ・・・このせいだ・・・　このままじゃ・・・）
くるむは咄嗟に背後にある体育倉庫へ逃げた。
「うふふ・・・・気付いたみたいだね・・・僕の能力・・・　でも逃げられないよぉ～～」
そう言うとジリジリと倉庫に近付いていった。
体育倉庫の扉に鍵をかけ・・・
くるむは爪を伸ばし臨戦態勢に入った。
（あんなヤツに・・・　負けられない・・・絶対に！　何とか時間を稼いで反撃のチャンスを・・・）
策を考えていると・・・
「かっわいいな・・・こんな狭い倉庫に逃げ込んじゃって・・・
もしかして僕をさそってるのかな～？」

足元から・・・

声が・・・

「なっ！！！」

叶は扉の下の僅かな隙間から体を伸ばし侵入してきたのだ・・・

「何なの・・・あなたの体・・・」

全身に悪寒が走る・・・

ねばねばとした粘液を出しながら・・・近付いてきた。

「うひひ・・・　いいだろうこの体・・・！　知ってる？ナメクジの体ってどんな狭い隙間もぬけられるんだよ～　さっきして見せたみたいにさぁ・・・僕はナメクジの妖なのさ　おかげで女のコの部屋に忍び込んで秘密や弱みを掴んだりだって出来る。」

目をギョロギョロ動かしながらくるむをニタァ・・・と見つめる・・・

「あなた・・・今まで何人の女のコにこうやって酷い事を・・・」

くるむは唖然としていた・・・

「そんなのは覚えてないねぇ～～　でも君は今までで最高のエモノだよ・・・くるむちゃん・・・　さぁて・・・　今日はえっちな写真をいーーっぱい撮ろうねぇ・・・」

大きなナメクジの体をくねらせながらくるむに徐々に迫っていく・・
・

（ダメ・・・力が入らない・・・　いやだ！！やっつけなきゃ！！
みんなの原稿・・・取り戻すんだ！！）

「やあああああ！！」

すると・・・・その次の瞬間・・・

倉庫の扉をたたく音と、外から声が聞えてきた。

「くるむちゃん!?　この中にいるの??　部活の道具箱からくる
むちゃんの写真と脅迫状が出てきたの・・・　事情は分かったよ！」

モカの声だ・・・

（モカが・・・なんで・・・）

くるむは驚いていたが・・・

モカが続けた。

「そうともしらず・・・ゴメンね・・・本当に・・・わたし・・・
　くるむちゃんわたしの事今でも嫌ってるんだって決め付けてて・・
・全然くるｍぬちゃんのこと見て無かったよ・・・　くるむちゃん
にとって・・・わたしは邪魔者でしょ?」

（モカ・・・）

「でも・・・　わたし達はくるむちゃんがいないだけであっという間にバラバラなの・・・　今助けるから・・・　わたしにはやっぱりくるむちゃんも皆同じくらい大切だよ！」

モカは涙を流しながら謝罪していた・・・

その時、扉が開いた。

出てきたのは・・・

メチャクチャでかいナメクジ！！！

『なっ！！！』「ええ！！！！」

これは誰でも驚く・・・

フリーズしたとしても責められないだろう・・・

それほどに気持ち悪いんだ・・・

詳しくは・・・原作で・・・　ぞぞぉーーーー！！

「ついてるッ！ついてるなぁ！！今日はッ　次の標的にしようとしていたモカさんを同時にゲットできるなんてぇ♪」

そう言うと毒ガスを一気に噴出してきた・・・

『ぐっ・・・』「なっ・・・・」「きゃあああ！！」

モロに吸い込んでしまった・・・

（くそ！この程度すぐ解毒できる！！）

すぐに・・・解毒をしようとしたが・・・

ナメクジのほうが動くの早かった。

ナメクジの癖に・・・

「いっただっきまーーーーす♪♪」

モカに飛び掛った・・

「きゃあああああ！！」

「モカぁあああああ！！」

その時・・・突然

ズズズズン！！！

地鳴りが起きた・・・

「なっ・・・　何だ？　この地鳴りはっ！！」

叶は振り向くと・・・

「や・・・やめて・・・　わたしの・・・大切な友達に手を出さないで！！」

コァアァァァ！！

くるむが目を見開くと・・・

あたりの地面が割れ、裂け目から木の根が飛び出してきた。

「わあああああ！！　な！なんだぁ！！これっ・・・　木の・・・木の根っこが！！なんで！！」

自分の周囲で起きている事が理解できない・・・

「許さない！！！友達に手を出したら許さないんだからぁあああ！！！」

ボコボコッバリッ！！

そのくるむの声に同調し・・・

今度は巨大なお化けツリーが出現！！

それらが、一斉に叶をにらみつけた・・・

「こんなの・・・うっ・・・嘘だ！　夢・・・夢か！コレーー！」

おびえてしまい足が動かない・・・

『こ・・・コレは凄いな・・・・』

精神堅牢（メンタル・レジスト）の能力があるカイトだが・・・

くるむが放つ幻術はしっかりと見えている。

くるむの潜在能力を・・・垣間見た瞬間だった。

が・・・

「この・・・　くっ　体が・・・・・・・」

幻術で叶を縛り付けてはいるが・・・

体が動かない・・・

「あんただけは・・・・・・　ぜったいに・・・・・ゆるさない！！
犠牲になった女のコ達の分も・・・・」

必死に体を動かそうとする・・・

目に涙を浮べながら・・・

・・・・パアアアアッ！

「あ・・・あれ！！？」

次の瞬間　急に体が軽くなった！

『健やかな風（リジェネ・サークル）の囁き』

カイトがくるむに離れた位置から治癒の精霊術を施す・・・

接近した方が効果が上がるのだが、この程度の毒ならば問題ない。

本来なら、自分であのナメクジ野郎をぶっ飛ばした方が明らかに早いのだが・・・

くるむが頑張ってるからね♪

・・・ってのは彼の言い訳！

本当は・・・

ナメクジがだいきｒ　『うるさーい！！　シャラーーップ！だまれーー！！』

・・・・・・はい　ごめんなさい・・・　３回言うなんて・・・・・

・　ぐすん

「動く！よし！！　このぉおおおぉお！！！」

くるむは空に飛び上がり一気に急降下！！

「くっ　くるなーーー！！　うあァああアァァ！！」

叶も縛られてて動けないが必死に腕を伸ばし反撃体勢！

が・・・くるむのほうが素早かった。

ザシュッ！！！

そのまま急降下の勢いで一気に切り裂いた！

「ぎゃふあァああァ！！！！」

あわれ・・・叶　流行は血を噴出しながら動かなくなった。

「あれ・・・木の枝や根が消えていく・・・」

モカとつくねは毒のせいでまだ若干からだが動きにくそうにしていた。

《・・・幻だ・・・》

そこにロザリオから声が聞えてきた。

《今のは全てくるむが「幻術」で作った幻だよ　上位のサキュバスは幻術のみで相手を殺傷すら出来ると聞く・・・　まさか　くるむがこれほど大きな能力（ちから）を秘めていたとはな・・・》

珍しい事もあるものだ・・・

裏のモカがくるむを褒めていた！！

《・・・・・・・・・・・・・・・》

・・・あ・・・あれ？　殺気が・・・　ひぃいいい！！・・・ごめんなさいごめんなさい！！！

蹴らないデーーーーーー！！！

グエエエエ！！・・・・・・・・・・・・・・・・・・

死・・・・・・・・

・・・・・・ええっと・・・　簡単に死んでられないし・・・

話しの都合上直ぐ復活しました・・・・・　苦笑

くるむは原稿を取り戻し、3人のところへ来た。

「大切なもの・・・　と・・・取り戻したよ！　わたしの大切なもの・・・」

そう言うと原稿を抱きしめ・・・　涙を溜めていた・・・

月曜日の早朝

猫目先生が新聞部の部室へ入ってきた。

「そろそろ締切よ！新聞の出来具合はどう？？」

入ってみると・・・

「「「「「『ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ・・・・・・・・・・』」」」」」

全員爆睡・・・撃沈状態だった・・・

男性陣に関しては・・・・　寝ながらも苦しそうに唸っていた・・・

精根尽き果てたと言った感じだろうか　？　　苦笑

（これは・・・できているのかしら？）

不安に思いながらみんなの側まで行ってみると・・・

陽海新聞　7月号！

が出来上がっていた！

（ちゃんと出来上がってる・・・）

念のため中身を確認してみるが、全く問題ない。

猫目先生は微笑みながら・・・

「（新聞部の絆は脆くなんてなさそうね！）お疲れ様！後は先生に任せてゆっくり休みなさい・・・」

そう言うと・・・　起こさぬように・・・

新聞を投稿する為　部室を後にした・・・

【～くるむの夢の中～】

くるむは夢を見ていた・・・

「モカ・・・わたし・・・新聞部に戻ってもいいの？」

くるむは謝りながらモカに聞く。

「や・・・やだ！何言ってんのくるむちゃん！　急がなきゃ新聞の締切に間に合わないよ！いろいろあるけどこれからも頑張ろうね！」

モカは照れくさそうに頭を掻きながら笑っていた・・・

もう蟠りなんて無さそうだ・・・

『そーそー！　皆仲良し！これが一番だ。くるむ、お疲れ様。』

カイトは、くるむの頭をそっと撫でた。

「カイト・・・・ありがとう！！」

いつものはぐーは無かった。

でも、いつもより・・・幸せそうな感じがしていた。

「皆・・・わたしの・・・大切な・・・」

くるむの夢　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

くるむは・・・寝ていたのだが・・・

その表情はとても穏やかで・・・目にはうっすらと涙が浮んでいた。

第１０９話　わたしの大切なもの・・・（後書き）

ありがとうございました！

第１１０話　これからもずっと・・・（前書き）

ちょっと遅れちゃいましたー！
リアルに仕事が忙しく・・・
パソコン開けてない～
まあ・・・言い訳です・・・・・
では、よろしくお願いします！！

第１１０話　これからもずっと・・・

【学園寮】

今は夕方・・・

ロビーで人間界と繋ぐ事の出来る電話を使用している者がいた。

「あ・・・母さん　うん・・・オレ　今学園の寮のロビーから・・・」

つくねだ。

つくねは家族と連絡を取っていた。

「お金ちゃんと振り込まれてた・・・　うん　いつもありがとう
こっちは元気にやってるよ。」

話し相手はつくねの母　青野かすみ、

《そう――・・・？まあ　元気なら何でもいいんだけど・・・
まぁ　とにかく体だけは気をつけなさいね　つくね》

料理を作りながら・・・笑顔でつくねと話をしていた。

穏やかな一時・・・だったが！

《でも　本当にいいの？あんたの学校　見学に行かなくて？》

爆弾発言ーーー！！

ぎくぅぅぅぅ！！！

っと聞えるかのようなつくねの驚きの表情・・・

《今度の休み　お父さんとあんたのとこ行こうかっｔ「ダメエエエエエ！！　こっちには絶っっっ対！来ちゃダメーーーーッ！！」！！！！！！！！！！》

キーン　キーン　キーン・・・・・・・・・

つくねの母は、耳に２００のダメージを受けた・・・・・　苦笑

《つ・・・つくねぇ・・・？》

頭痛そう・・・

「い　いや！父さんも母さんも忙しいんだしさ！とにかくこないでっ！！（妖怪の学園に通ってるってばれたら大変だァァ！　）　と・・・とにかく・・・」

つくねは深呼吸をし、自分を落ち着かせた。

「大丈夫だよ、友達だって出来たし　新聞部に入って　新聞作った

りさ　明日それを校門の前で配るんだ！　そっちにいた時より楽しくやってるよ。・・・うん　はーい・・・じゃあまた・・・連絡するね・・・　じゃあ！」

ガシャン・・・

受話器を元の位置に戻し、一息つくと・・・

『「わっ！！」』

背後から突然声が！！

「　わひゃあああああ！！？」

モカとカイトだ。

「あはは　びっくりした？　つくね♪」

「そりゃ！！　モカさん！！何でここにっ？？　それにカイトも！！」

顔を赤くさせながら・・・驚きながらつくねは話した。

『だってそろそろ食事の時間だし・・・　何より　あんなでかい声で電話してりゃな・・・』

カイトは半分あきれて言う・・・

モカとカイトはほぼ同時に食堂へと降りてきたようだ。

そして　電話に熱中しているつくねを発見すると・・・

示し合わせて驚かしたのだ♪

最初は、カイトは乗り気じゃなかったけど（空腹だもん・・・）。

マンザラでもないみたいだ♪

「あはは！結構響いていたからね♪」

モカもくすくすと笑う・・・

つくねは・・・

モカの部屋着姿に見惚れていた・・・

（かっ　可愛い・・・・　部屋着姿のモカさんも　何て可愛いんだッ！！）

ポーッとしていた　苦笑

（相変わらず・・・だな・・・）

そんなつくねを微笑ましそうに眺めるカイト・・・

こんな楽しい時間がずっと続けばいいと思いながら・・・

「さっきのはつくねのお母さん？」

モカがつくねに尋ねた。

「うん　まぁ・・・」

モカは・・・

「いいなぁ・・・お母さんかぁ　いつかわたしもつくねの言えに遊びに行ってみたいな♪」

っと言った瞬間・・・

ブハァッ！！

つくねが噴出した！！

『うわわっ！！！汚いな！コラァぁ！つくね！！』

パシッっと頭を叩く。

でも・・・まだトリップしているみたいだ・・・・・・

『あははは・・・　モカはつくねの両親に挨拶に行きたいのかな？？』

ニヤニヤしながら言う・・・

「ええ！！いやっ・・・あの・・・」

「なななな！！！何言ってんの！！！カイト！！！」

2人して顔真っ赤ッ！

からかいがいがある♪

『ははは　まあテレなさんなって！とりあえず食堂に付いたし　席に座ろう。』

ケラケラッっと笑いながら一足先に食堂へと入っていった・・・

まだ　2人は顔を真っ赤にしていた・・・苦笑

やぁっと2人・・・トリップから　帰ってきた！！　笑

暫く一緒に食事を取っていると・・・

「・・・何かさ・・・　オレいろいろうまく行き過ぎて怖いくらいだよ・・・」

つくねが話しだした。

『ん？　怖い？』

「うん　だって初めはどうなることかと思ったもん　こんな妖怪だらけの学校に入っちゃってさ・・・」

ああ・・・なるほど。

入った時のつくね・・・　やばかったもんな・・・

主に反応(リアクション)が！！

「でも・・・　モカさんやカイト・・・　新聞部の皆と仲良くなれて・・・　それにくるむちゃん達もすごく優しくって　おれ　この学校入ってよかったよ！　きっと大丈夫だよね！これからもずっと仲良く楽しくやっていけるよね？」

モカは顔を更に明るくした。

「うん！きっと大丈夫・・・　いや絶対大丈夫だよ！」

優しく微笑む・・・

『でも・・・油断はするなよ？つくね、　お前は結構危なっかしいんだから・・・　幸せ感でいっぱいでも・・・な　下手な事しないでくれよ。』

カイトも苦笑しながら話す。

「大丈夫！きっとその時はカイトが助けてくれるから♪」

「あははは・・・」

モカは笑いながら・・・

つくねはちょっと複雑だが苦笑していた。

護ってられればかりじゃ・・・やっぱ格好はつかないな・・・

『・・・つくねが　この学校でやっていけるというのは・・・　共存を目指す課程で一番大切なことなのかもな・・・』

カイトはそう呟いた。

最終的なこの学園の目的はそこなのだ・・・

【人間との共存】

それなのに学園で・・・人間が入っているのがばれたら即抹殺ちょっとなぁ・・・

人にも良い人もいれば悪い人もいる。それは妖だって同じなのに・・・

確かに・・・本性をむき出しで　人と妖が対面すれば・・・

それは　小競り合いではなく全面戦争になってしまうだろう・・・

人が妖を狩り・・・　妖が人を喰らう・・・

大袈裟な表現じゃない・・・

カイトが暫く考え込んでいると・・・

「どうしたのさ?」

つくねとモカが聞いてきた。

『ん・・・?ああ、すまん　オレ達みたいに、みーんな仲良くなれたらいいのにってふと考えていたんだ。』

苦笑しながら答える。

（最終的には本音で・・・語り合えるほどに・・・な・・・）

みんなは笑っていた・・・

この時の笑顔を・・・忘れないようにしよう・・・

「・・・そうだ!」

モカは何かを思い出したようだ。

「明日は頑張って新聞配らないとね!　皆が一生懸命作った新聞だもん!　たくさんの人が読んでくれるといいね!」

『オレ・・・死ぬほど気合いいれてたしなァ・・・（実際死に掛けたような・・・　苦笑）』

苦笑していたが、つくねは、

「そうだけど・・・　モカさん?食事残してるよ。元気付けとかないと　大変だよ　明日は!」

たくさん残した夕食を見てつくねは心配していた。

「いん・・・何だか食欲無くて・・・・　体調が悪いのかな?」

モカがちょっと表情を落とす・・・

「ええ・・・大丈夫なの?」

『そりゃ大変だな・・・　明日、保健室に連絡しておくか?』

それぞれが心配していると・・・

モカがはっ!っとして。

「あ!そーだ　ここ何日かつくねの血を吸ってないからかも・・・
いや!それだっ♪」

顔を一気に・・・輝かして身を乗り出す・・・

つくねはガクッっとテーブルに顔面強打!

カイトはずっこけていた・・・

「つくねーー!血を吸わせて♪」

「ダメーーーッ」

追いかけっこがスタート!!

珍しく今回はつくねだけを標的にしてたみたいだ。

(難易度が軽いからかな・・・?つくねの方が)

っと安心していると・・・・・・

「グフフフ・・・・・　カイトくーん!!」

すぐ後ろに・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『うわぁ!!!』

生徒が立っていた。

この生徒の名は、

鳴神(なるかみ)五月(さつき)・・・・

カイトくん親衛隊の四天王の一角!!

→カイトくんが勝手に決めてます!　なんと言ってもしつこいのは大体4人ほどらしいので四天王だそうで・・・苦笑

そして・・・　そのグフッな発言が無かったら・・・そこそこ可愛い顔立ちなのに・・・・・・・

台詞（セリフ）で台無しになってるよ・・・

『さっ・・・さつき！！』

「やっと・・・　寮で見つけたわよーー！いっつも時間ずらすんだから絞り込めなかったけど！！」

そういうと。

じりじり迫ってきて・・・

「今日こそ付き合ってーーーーーーーーーー！！！　グフフフフッッッッ！！！」

超ダッシュ！！

『うっひゃあああああ！！』

相手は1人だったから・・・暫くふつうに走って逃げていたのだが・・・

ってか、はやっ！！

マジで！！

『いつのまに！ンな早くなったんだーーー！！』

逃げながら叫ぶ！

「グフフッ！カイトくんを捕まえる為に！頑張ったのよ！！　愛があれば何とかなる！なったのよぉーーー！！」

『げげげげ！マジで！』

またまたスピードが上昇・・・

んなアホな！！

単純な身体能力で互角かそれ以上？？

『ッッ！（はええよぉー！）天翔る羽（フェアリー・ウィング）！！』

とっさに・・・　反射的に使用！

「あーー！またそれ！！それはズルイ！！」

何やら騒いでるけど・・・

天翔る羽（フェアリー・ウィング）の特性と使用していることを理解しているみたいだ・・・

（ばれないように使ってるつもりなんだけど・・・）

恐ろしい観察力！！

お前は黒〇めだ〇か！！

ってかもし・・・・そんな奴に追いかけえられたら・・・・・
オレは死ぬ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

追いかけっこは深夜まで・・・続いた・・・
強化魔法使ってるのに・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

部屋まで押しかけてこないのが幸い・・・だなぁ・・・
・・・押しかけてきたらどうしようか・・・
結界はっておくか？

しかし・・・疲れた・・・

『ぐへぇ・・・・明日に疲れが残りそうだ・・・・』

そう言ってベッドに倒れこみ・・・

そのまま夢の中へ・・・

一方つくねの方はと言うと・・・・・

もちろん♪

最終的には　かぷっ　　ちゅーーー

っと　吸われてました♪

第１１０話　これからもずっと・・・（後書き）

出しちゃいました。四天王　鳴神　五月！
名前もぜーんぶテキトーです！

身体能力が以前と比べるとかなり上昇しているらしいです・・・
怖い怖い・・・　苦笑

さてさて・・・やっと前半の山場・・・　公安にこれました・・・・・

オリジナルキャラ・展開もとりあえずはちょこっとは出そううか・・・

って思ってます。
うまくいくか心配ですが・・・・　苦笑
ガンバリマス！

ありがとうございました！！

第１１１話　新聞部を取り巻く影（前書き）

よろしくお願いします！！
２つ連続投稿です～

駄文ですが・・・　苦笑
どうぞ！！

第１１１話　新聞部を取り巻く影

翌日・・・

簡単な新聞配布スペースを学園の入り口に設置し、

配布開始！！

「新聞部でーす！　わたし達の作った校内新聞をよろしくお願いしまーす」

「先日の女生徒失踪事件や・・・　その他　いろんな学園での出来事・情報が載ってまーす　」

「「「よろしくお願いしまーーす！！」」」

女性陣が一斉に呼び込みを開始すると・・・

ズキャーーーーン！！！

一斉に男子生徒が・・・・・・反応ッ！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

うぉぉおおおォォォ！！？

何だァ　今朝の　校門前の輝きは！！

天使だ・・・天使が舞い降りたようだ！！

ここだけファンタジィな空間が出現してるゥゥ！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

キュピピーーン！！

1人・・・

「モカさんだ♪モカさんが新聞配ってる！！」

また1人・・・

「うわぁい　くるむちゃんもだーー」

またまた1人・・・

「凄い！！何て美しい光景なんだぁ！！」

そして・・・・

「「「「「「くれェェェェェェェェ！！！その新聞！！！」」」」」」

怒涛のように・・・

あっという間に男子生徒でいっぱいに・・・

「きゃあ！」

モカたちはあまりの勢いに驚いていた。

（お前ら餌見つけたピラニアかよ・・・・・）

（すごいね・・・・）

男性陣は苦笑していると・・・

「あ！カイトくんだ！！」「え！え！ほんとだ♪」「わぁー私もちょうだい」「グフフ・・・・・」

続きまして・・・　女生徒たちが・・・　四天王も・・・　苦笑

（カイトもじゃん・・・）

『・・・・・・・・・・・・はぁ』

今日は逃げるのよそう・・・

お客さんだし・・・

覚悟を決めて営業スマイル！

もちろん普段より数１０倍は疲れると思う・・・

つくねとそれに気付いたモカは苦笑していた。

暫くすると・・・

ある程度・・・というか新聞は大好評でどんどん無くなっていった！

「うれしーッ！！大好評だね　つくね！！好きっ！」

つくねにハグーーっと！

もちろんくるむだ・・・

「わあ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

つくね君ただいまくるむのハグ攻撃にて窒息中・・・・・　笑

「あああーーーっ　くるむちゃん　つくねにだきつかなくてもーっ！」

モカが慌てて出てきた。

「いーじゃない！カイトは・・・メチャ忙しそうだから後でするし！2人ともわたしのだもーーん♪」

2人はまたバチバチッっと火花が散る・・・

(ケンカしないって　仲直りしたばかりなのに・・・　仲いいのかな？これは・・・)

つくね・・・　笑いながら2人を見ていた。

『コラーーー　サボるな！！！お前ら！！手伝ってくれーーー！』

「カイトさん～♪♪」「こっちにもちょーだい♪」「きゃああ

あ♪」「グフフフフッ！！！」

・・・・・・

止まる事なき連撃のようだ・・・・・・・・・・・・

「「ははは・・・・・・・・・」」

モカとつくねは苦笑・・・

《ちっ・・・　カイトめ・・・　何をデレデレと・・・・・・・・・》

「ん？？」

ふと声が聞えたような・・・

モカがきょろきょろとする・・・

《！！！・・・・・・》

しかし　聞えなかった・・・

「気のせいかっ・・・」

そして・・・再びカイトのほうを見てみると・・・

くるむが何やら「カイトは私のよー」と言って・・・女子生徒達ともめていた・・・・・

カイトは助かったーって感じの表情だね♪

ゆかりちゃんは・・・

男子生徒に追いかけられてた・・・・

「ひゃあああ　怖いッ　ロリコン怖いですぅ～～」

「ゆかりちゃーーん♪」「かわいいーー！」「魔女ッコだ～ぁ♪♪」

まあ何にしても・・・・・

（でも・・・よかった　新聞は本当に好評みたいだし　本当に良かった・・・）

『物思いにふけってないで手伝えつくね――――――！そして助けろー！！』

カイトくんの悲痛な叫びが木霊した・・・・・・・

くるむやら女子やらに・・・捕らわれて・・・・いる・・・・　さっきまで　くるむ　ＶＳ　多数の女子生徒だったはずが・・・

『うぅ・・・・こんなに疲れるものなのかなぁ・・・新聞配布って・・・』

ため息しか出てこない・・・・・・

疲れたぁ～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・

？？？　side

そこには・・・人影が・・・3人・・・

女が陽海新聞を男に差し出していた・・・

「・・・・何・・・新聞部が・・・？」

渡された新聞を眺めながら聞く・・・

「はい・・・　今校門前にて新聞を配布している模様です。当然、
我々（・・）には無許可ですが・・・」

男は歯軋りをして新聞を睨む・・・

「新聞部・・・　また奴らか・・・！我々をさしおいて正義きどり
とは・・・　糞が」

そう言うと新聞をての上で燃やしつくした・・・

「相も変わらず頭固てーな・・・　九曜よぅ・・・・・」

イスに足を組んで座っていた、もう1人の男が静かに口を開いた・・・

「なんだ・・・？文句でもあるのか？」

男に言う・・・

「はっ・・・文句なんざねぇさ・・・　だがよ・・・　あの部・・・何人か新入部員いるらしいが・・・それは1年坊・・・　もう新聞部には森丘銀影しかいねぇし・・・　んな　つまらん仕事なんざしてても面白くねぇからな・・・・・」

めんどくさそうに呟く・・・

「ふん・・・貴様はそう言って今までも殆ど活動をしてないだろうが・・・」

呆れていたようだ・・・

そして　他のメンバーも呼ばれたのか集まってきた・・・

「楓牙(ふうが)様が・・・」「いらしていたのか・・・」「・・・・・・・・ごくッ」

それぞれのメンバーが驚いていた・・・

感じ的にいえば・・・この2人がこの組織のトップなのか・・・？

「集まったか・・・　では　取り締まりに行こう・・・　活動を検閲した覚えがないからな・・・　後、楓牙・・・貴様はしたくなければ何もしなくてよい！いつも通りにしておけ」

そう言うとメンバーを引き連れ・・・この場所を後にした・・・

「ふぅん・・・　やっぱ行くのか・・・　そんなに前の事根に思ってんのかぃ？　まあいい、オレも様子見と行くか・・・そして・・・面白いもんでもあったらぁ・・・参加するかぁ。」

そう言うと、ゆっくり立ち上がり、

ビュオオオ・・・・・・・・

突然現れた風が吹くと同時に・・・

姿形が無くなっていた・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第１１１話　新聞部を取り巻く影（後書き）

ありがとうございました～
完全オリジナルキャラ楓牙くんです！

さて。。正体は？
なんでしょうね・・・・・・　苦笑

ガンバリマス！

第１１２話　学園守護　公安委員会（前書き）

とりあえず・・・

九曜と接触です！

ガンバレーみんな！！

特にカイトくん！！

オリ敵キャラもちょっとですが・・・出てきます！

よろしくお願いします！！

第１１２話　学園守護　公安委員会

【校門前】

新聞は大好評！

全体の半分ほどが配布出来た頃。

「どないやー？　新聞ちゃんとさばけとるかァ」

ギン部長がやってきた・・・

「あ！ギン先輩！」

モカも気付いた。

「おお！中々好評やないか！こりゃ次号から金とらんとな」

今頃か！！

『もうちょっと・・・早めに来てくれよな・・・』

カイトはげんなりしていた。
ちょっと休憩中のようだ。
「あはははー　カイトがんばってたもんね♪　もう半分もなくなったし！　嬉しいですね♪」
モカもいい笑顔だ・・・
モカだけじゃない・・・くるむも　ゆかりも　つくねも・・・
皆が一丸となって作ったこの新聞を配るのに多少疲れてはいるものの・・・
いい笑顔だった・・・
「てゆうか　先輩も手伝ってくださいよー　新聞配るの　」
つくねがモカの笑顔に癒されながらそう言うと・・・
「フッ　あほか――――　そないめんどうな事は下っ端の仕事やろやってられるかァ」

いつもとおんなじのりでスルー♪

って！！

「えーーーッ！！　うちの部長やる気ねぇ！！」

つくねが叫ぶ。

『はぁ・・・全くだ・・・』

もう何か言うのも面倒だ・・・

しかし・・・そんな時ゆかりが改心の一言！

「部長がやる気出すのは　えっちな事だけですもんね　発情期のノラ犬みたいですぅ～」

うん・・・子供は素直が一番だ・・・　よな？

さすがにピクッっときたのかギン先輩がゆかりに近付いていく。

「オイィ　ゆかりちゃんはおっぱいぺちゃんこなくせして　悪口だけは達者やなァ！　ああ？」

ゆかりも自身の体（主に胸！）を言われすかさず反論！

「なァァ！ぺちゃんこがわたしのステイタスですぅ！！」

むかっ！！って感じだ。

「じゃあそれもみまくってでっかくしてやるで　コラァァ」

すると怒ったゆかりはステッキを取り出し・・・

「もぉ　このセクハラァァ！」

金盥をギンの頭にヒットさせていた・・・

ガキか・・・　この部長は・・・

半分呆れていると・・・

「わあああ！！」

急に広場が騒がしくなってきた！

広場を見てみると・・・

黒い制服の連中が広場にいた。

「どけっ！ジャマだてめェら　道を開けろ！」

そう言うと、新聞をもらいに来ていた生徒を突き飛ばし強引に入ってきた。

『なんだ？あれ・・・』

さすがに強引過ぎる為、体を起こした。

「わっ・・・何だ何だ!?」

つくねも驚き、そちらを見る・・・

「―――・・・!!」

ギン先輩は先ほどと違って厳しい表情をして黙り込んだ。

「うわっ　やべぇ　この黒い制服ッ!」「なんで　あいつらがここに・・・」

その黒い制服の団体の名は・・・

【陽海学園守護　公安委員会】

するとそのうちの1人が近付いてきた・・・

「どうも・・・　私は公安委員会の幹部・・・　九曜という者だ。以後お見知りおきを・・・」

優雅に挨拶をしてきた・・・

「（公安委員会?）公安っていうと・・・学園の治安を守るとかいう・・・あの・・・?何の用事でしょうか?」

モカが驚きながらも聞きに行こうとすると・・・

ギン先輩がそれを止めた。

「ギン先輩？」

すると九曜は新聞を１枚抜き取ると・・・

「・・・フフ　新聞部か　いや・・・活動をするのは大いに結構！
！　だが！君たちは誰に許しをもらってこんな内容の新聞を配っ
ているんだ？　我々は事前に
検閲した覚えはないぞ！」

目を鋭くさせると・・・

新聞の置いてある長机を蹴り飛ばす。

ドガァ！！

「困るんだよなぁ！　君達のように学園の規律を乱し好き勝手や
輩がいるとッ！！！」

それが合図だったかの様に他の公安の連中も一斉に場を荒し始めた！

いきなりの事で訳が分からない！

「きゃあああ」

「なっ！」

『！！？』

モカとつくねは驚いていた・・・

九曜は続けざまに・・・

「いいか！？　この学園の治安を守っているのは我々公安委員だッ！　学園内で何か活動をするなら必ず我々の許可を取れッ！　無許可の場合こうして厳しく取り締まりをさせてもらうッ！！」

そう言うと新聞を撒き散らし踏み潰していった・・・

皆で作った新聞が・・・・

それを見たくるむが慌てて、

「なっ！！　やめてえぇ！　わたし達はただ新聞を配ってただけなのにっ・・・！」

止めに行こうとすると・・・

「！！無駄やっ　奴らインネンつけてきよるだけやッ」

ギン先輩がそれを止めた。

その時、

公安の女が口から輪状の糸をくるむに飛ばした。

ビシャ！

「きゃあ！何これ・・・！ネバネバした糸みたいなものが・・・」

そして・・・

女が近付いてくる・・・

「相変わらず新聞部はガラが悪いのね・・・　下品で頭悪そうなコ・・・去年から何にも変わってないのね新聞部って」

くすくすと笑いながらくるむを見据えた。

「下品！！？このっ！！」

くるむは再び掴みかかろうとしたが・・・

ゴ　　ウッ　　！！！

「ッッッ！！」

突然威圧感？　圧力（プレッシャー）に襲われくるむは足が動かなかった・・・

（（（（な・・・に・・・？これ・・・・・？））））

他の部員も同じだった・・・

その発生源は・・・

『・・・・・・・・・』

カイトだ。

九曜は虫けらを見るかのような表情でカイトに近付いていった。

「何かな・・・？　我々は今取り締まりをしている・・・　ジャマしないでもらおうか！」

ヒュン！

九曜は蹴りを入れたが・・・

パシッ！！

カイトは蹴(それ)りを受け止めた。

「む・・・？」

受け止めたカイトを睨む・・・

『・・・・・・・拾え』

カイトは静かに言った・・・

「あ？」

九曜は何を言ってるか分からない！と言った反応だ。

『もう一度言う・・・　分かりやすくな。　貴様らが撒き散らした新聞(もの)を・・・　拾え！！』

受け止めた足を叩きつけるように投げ返し、睨む。

「貴様ーーーっ！！」「九曜様に何のつもりだァ！！！」

何人かが抑えかかろうとするが・・・

ギ　　ンッ！！！

静かに・・・それでいて力強く・・・睨み付けた・・・

「！！！！？」「つッ！！！」

それだけで・・・

足が動かなくなる・・・

（何だ！コイツッ・・・）　（足が・・・　動かない・・・　声も・・・）

公安のメンバー（取り押さえようとした2人）はただ震えていた・・・

楓牙　ｓｉｄｅ

それを生徒達（ギャラリー）にまぎれてみている者がいた。

公安委員、楓牙だ・・・

「へぇー　九曜相手に上等かますような奴がいたんだなぁ・・・こりゃあ　面白くなりそうだ・・・ククク・・・その顔ぉ・・・覚えたぜぇ・・・」

楓牙は・・・　カイトの姿を覚えると・・・・・・・

ビュオオオオオオッ！！

再び風と共に消えた・・・

side out

第１１２話　学園守護　公安委員会（後書き）

ありがとうございました！

第１１３話　監視者と忠告（前書き）

よろしくお願いします！！

第１１３話　監視者と忠告

場所は学園校門前・・・

カイトと九曜の睨みあいはまだ続いている・・・

まさに一触即発だ・・・

カイトと九曜の睨み合い場の空気が一気に固まる・・・

それは仲間の新聞部も例外ではない・・・

そして九曜もカイトに何かを感じているのか、動かずじっと見ていた・・・

（目を見ればわかる　それにこの殺気、　こいつ・・・只者じゃなさそうだ・・・　この私でも少々梃子摺りそうだな、さてどうするか・・・）

策を考えているその時、

「カイト！止めるんや！！」

ギン先輩がカイトの肩を掴んだ。

『なぜ止・・・！！ギン・・・・・先輩？』

なぜ止めるのかと振り払おうとしたが・・・

ギンのいつもの表情じゃない・・・顔を見て・・・いや目を見てそう感じた・・・

そして、殺気を消し・・・新聞部の仲間の方へと歩いていった。

「ふん・・・」

九曜も拍子抜けといわんばかりの表情でその場所を去る・・・

メンバーの１人　螢糸という女が公安（われわれ）に逆らったらこんなものじゃ済まさない！っと残し九曜の後に続いた。

公安　ｓｉｄｅ

暫くは黙っていた九曜だが・・・ある程度離れた所で・・・

「螢糸」

「は！」

女に指示を出す。

「新聞部(やつら)がどう出るか・・・　お前が監視しておけ・・・　ただし
あの男には絶対に気付かれんようにな・・・お前には荷が重い」

そう言うと、

螢糸も分かっていたらしい・・・

すぐに理解し、監視に行こうとしたその時。

ひゅうううう・・・・・・

辺りに風が舞う・・・

「やめときなぁ・・・・・」

それと同時に声が聞えてきた。

楓牙だ。

「楓牙か・・・」

確認すると九曜は若干ため息をついた・・・

この男は私でも扱いにくいが故にだ。

力は申し分ないのだがその性格がな・・・

「楓牙様・・・止めておけというのは？」

螢糸も気になり聞く、

「お前さんは気性が荒いだろぉ　そしてさぁ直ぐに動こうとするだろぉ？　そんでもって、あの男にそれがバレたときにゃ　即殺られるぞ？」

苦笑しながら言う・・・

螢糸　ｓｉｄｅ

楓牙様がそこまで言うとは・・・

新聞部前部長の時以来だ・・・

螢糸は若干怖気づいたが・・・・

「それ以外は大した事ありません・・・　私で十分です。」

そう言い放つ・・・

仮に新聞部が大人しく従わないというならば、捕らえて1人ずつ始末すればいい・・・

私の能力ならば簡単だ・・・

あの男がいない時を見計らって。

あの男は未知数だが、九曜様・・・そして楓牙様の公安トップ2が相手ならばひとたまりもないだろう。

螢糸はそう考えていた

side out

「まぁ　いいさぁ・・・　おれぁ忠告しただけだ・・・　ま・・・あの男が公安(うちら)に手ェだせば大義名分が立てるってもんだ・・・　九曜よぅ・・・　そうなったら　あの男・・・俺に殺らせてくれゃ」

男は・・・　楓牙は・・・　味方も寒気がするような笑顔で九曜にそう言った・・・

その時、九曜を除く全員がこう思った、

【この男が敵じゃなくてよかった・・・】っと・・・

それほどまでに・・・凶悪な・・・邪悪な笑みだった。

「ふん・・・意外だな・・・貴様ならば面白いと思った時点であの男のところへ行くと思ったのだが？」

そんな邪悪な笑みも軽く受け流したのは九曜・・・　彼も又・・・やはり只者ではないのだ。

「くくくく・・・　おれぁ・・・気まぐれな面もあるんだが・・・規則には従うんだぜぇ・・・　仕事はたまにさぼるがなぁ・・・殺るときは・・・　ちゃーんと規則に従って殺るンだよ・・・」

そう言うと再び笑い出す・・・

「ふん・・・　好きにしろ・・・　だが　奴らが明確な敵意をださんと手は出すなよ・・？　公安（われわれ）と言えど理由もなく潰すのはできんのだからな。」

九曜はそう言う・・・

すると、

「さっきも言っただろうが・・・　おれぁ　規則には従うってんだよ・・・」

ため息交じりで首を左右に振る・・・

そして次の瞬間！

ヒュオオオオ！

突然の突風・・・

そして　楓牙は姿を消した・・・

「ふん・・・　あの気まぐれ男め・・・　猫のようだ・・・　最もそんな愛嬌は無いがな・・・・」

何がたまにさぼるだ・・・

殆どサボってんだろうが・・・

九曜もため息をつく。

「螢糸・・・妙な邪魔が入ったが、あいつが警告するのは珍しい気を抜くな」

そう言うと螢糸は頷き素早く移動していった・・・

「ふふふ・・・　まあ元々新聞部には勝機などは無いが・・・・　これで万が一の可能性も無くなった・・・な・・・　あの男も動いたことだし、そして　この私もいる・・・　精々我々に逆らわんようにするんだな・・・」

そう笑みを零しながら呟くと・・・

本部へと去っていった。

side out

第１１３話　監視者と忠告（後書き）

ありがとうございました！！

自信満々の九曜！そして楓牙！

さてさて・・・

どうなる事やら・・・・

２人とも確実に強いですから～きっとｗ　笑

コロッと倒せたりはいないかとｗ　苦笑

ガンバリマスー！

第１１４話　新聞部と公安委員の過去（前書き）

よろしくお願いします！

第１１４話　新聞部と公安委員の過去

【校門前】

皆むちゃくちゃにされた新聞を前に立ち尽くしていた・・・

「・・・くるむちゃん大丈夫？　さっきの・・・」

モカが口を開く。

「・・・うん　何か糸みたいなのがからまって取れなくって・・・」

そう言うと　少しずつ手首に絡まった糸のようなもの外していった。

「ひどいですぅ・・・　何なんですか!?あいつらいきなり・・・」

ゆかりは潰された新聞を見ながら泣いていた・・・

カイトはゆかりの頭に手を置いた。

「ううぅ・・・　カイトさぁん・・・」

そう言うと・・・カイトに抱きつき・・・再び涙を流す・・・

普段ならくるむは怒って抱きついてきそうなのだが・・・　今はそれどころではなかった。　苦笑

そんな時・・・

「・・・奴らは公安委員会　一言で言うたら風紀委員をもっと暴力的にしたような奴らや・・・」

ギン先輩が説明しだした・・・

「この学園を守る為　力で「悪」を取り締まる為に結成された武闘派集団　それが【学園守護　公安委員会】生徒によって組織された【学園警察】とも言えるな」

その警察と言う単語につくねが反応した・・・

やっている事と単語が合わないからだ。

「学園警察!?あんな奴らが!!?だいたいオレ公安(あいつら)に会ったの初めてですよ」

そうつくねが言うと、

ギン先輩は頭を掻き・・・

「そりゃそうや・・・　奴らめったに活動なんぞしてへんからな」

!!!?

皆　驚いた・・・

警察といえば・・・

「24時!!」

じゃなく・・・　　　苦笑

もっと活動しなければならない組織の1つなのに・・・

「腐っちまったんや　今の公安は暴力にものを言わせて金や貢ぎモンを集めるヤクザ同様の集団や・・・新聞配るんやッたら許可取れって言っとったやろ？　あれはつまり自分らに金を貢げっちゅう事なんや・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

皆言葉を失う・・・

（なるほどな・・・・・　武闘派揃いなら陽海学園とは言っても力でねじ伏せるのは簡単だろうな・・・・・　何にしても胸糞悪い・・・）

カイトはゆかりを慰めると・・・その後暫く目を瞑り腕を組んでギンの説明を聞いていた・・・

怒りを露にしながら・・・

いつもと明らかに違うカイトの雰囲気にも・・・　ちょっと　部員は不安に思っていた。

カイトも分かっているのだ・・・自分の今の雰囲気が皆の不安を煽っている事くらい・・・

だが・・・やはり分かっていても怒りが湧く・・・

心の底から・・・

自分たちの誇りといっても過言じゃない・・・

それ程の新聞（もの）だった・・・

皆で協力し合い・・・そして絆を深めた・・・

それをいきなり全て踏みにじられた・・・

怒りを覚えない者はいないだろう・・・

そんな行為が許されるのは・・・　奴らが力にものを言わせ抑えているからだ・・・

ならば・・・オレも・・・　力にものを言わせようか・・・・・・・・

ギン先輩はそんなカイトをじっと見ていた・・・

そして、

「しゃーないわ　今回は諦めへんと　新聞は焼き捨てて公安には逆らわんちゅうことアピールせなあかん・・・」

!!!!!?

再び皆が驚愕!

「えええぇ!!!焼くって・・・　この新聞を??　まだ配れるやつたくさんありますよ!!」

そう言うが・・・

ギン先輩は譲らず、

「ええから全部焼いとけや　あんな奴らとやりおうても何もならへん　長いモンには巻かれてりゃええんじゃ」

そう言った・・・

「「「「ええええ!!!!　そんなぁ!!ギン先輩!!?」」」」

皆の叫びが木霊する・・・

その時、

「あー　後カイト・・・話しがある。付き合えや。」

『・・・』

カイトは無言で頷き・・・

ギンはカイトを呼び2人で去っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この時・・・

木の陰から新聞部を見ている者がいた。

（くくく・・・・あの男も森丘銀影も消えた・・・　好都合ね・・・・）

そう笑みを零すと・・・　引き上げていった残りの新聞部部員の後をつけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

カイト・ギン　side

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

２人は暫く無言だった・・・

黙って付いてきて、ある程度離れたところで・・・

『・・・話って　何ですか？ギン先輩・・・』

カイトから口を開く・・・

普通なら男らしくないギンの発言に・・・それも部長の発言に、どういうことかと問い詰めるのだが・・・

カイトはあの時・・・　九曜と絡んだときのギンの目を見ている・・・

やりきれない悔しさの滲み出るかのような目を・・・

「カイト・・・　お前は強いわ・・・　確かにな・・・　しょーじきな話し、公安（やつら）とやりあえることも、とりあえずは問題無いやろ・・・？」

ギンは静かに口を開く・・・

「でもな・・・　１人で強くたってなんにもならへんのや。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『どういう意味です・・・?』

「・・・・・・昔　やりあったわ・・・　わいら新聞部で　公安とな・・・」

『!!?』

驚愕した・・・　もう・・・カイトは原作など殆ど覚えていない・・・

それ程にこの「世界」にのめりこんでいるからだ。

ギンは続ける・・・

「前部長の後　続いて　部長になってなぁ・・・前の部長は争いごとが何よりも嫌いで・・・平和が何より好きでやさしいひとやったんや・・・　だからこそ　今の腐ってもうた公安のことを一番否定しとった。　そんな人を見とったからか・・・　わいも嫌いになったんやろうな・・・　公安の事」

懐かしむ感じじゃない・・・

悔しそうな・・・表情だった。

「今新聞部・・・2年のわいしかおらんやろ?ほんまはもっとおったんや・・・　だけどな、奴らの正義という暴力に皆やられ、残ったのはわいだけやったわ。」

『・・・・・・・』

カイトは自分だけ強くたって何にもならないと言った意味が・・・分かった。

自分1人だけ無事だったが・・・仲間は皆やられてしまったんだろう・・・

「あんな奴らとやりおうても何にも残らん、お前だけならええかもしれんがウチにはまだおるやろ・・・　お前にとっても大切な部員(なかま)がな・・・　その辺を考えてくれや・・・」

再び頭を掻いた。

黙って聞いていたカイトも口を開く・・・

『ギン先輩が言った事・・・よく分かりました。』

そう言う・・・

ギンも本音は奴らをぶちのめしたいはずだ・・・

だが・・・それ以上に再び失うのがどうしても嫌なのだろう・・・

オレと同じだ。

『でも・・・あいつらは絶対止まりませんよ。特にくるむは・・・
この新聞で皆との絆を深めたんですから・・・』

そう言うとギンは苦笑した。

「あいつらが・・・余計なことせんかったらええっちゅうこと・・・やな？　少なくともこっちから喧嘩は・・・」

『ふっかけません。　だけど・・・』

カイトは視線を鋭くする・・・

『皆に手を出そうとするのなら・・・　オレも黙っていません。例え部長命令でも・・・』

そう言うとギンは何も言わず後ろを向き手を上げ・・・

皆のところへ戻れと言い、帰っていった。

何にも起こらんように・・・っと思いながら・・・

カイトもその場を後にした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第１１４話　新聞部と公安委員の過去（後書き）

過去のお話は原作ではここまで描写されてませんね～♪ギン先輩の口からは言われてませんｗ

ちょっとギン先輩キライになった理由とかは作者の妄想です！

しつれいしましたーー！

第１１５話　全面対決の序章（前書き）

よろしくお願いします！
この話には・・・・・
カイトくん出ません・・・・・・
名前のみです・・・

主人公ーーー！　苦笑

あ！楓牙くんはちょろっとは出ます♪

では！！

第１１５話　全面対決の序章

それは、ギン先輩がカイトを連れて行っていたときの事・・・

【校舎の裏】

くるむが皆で作り、絆を深めた大切な宝物（しんぶん）を燃やしてしまうことにどうしても納得がいかなかったのか、ギン先輩を無視し新聞を配ろうとしていた。

彼女をつくねは止めようとしたが・・・

泣きながら思いを言うくるむに何もいえなかった。

その時。

大人しく公安に従う気は無いと判断した公安委員　螢糸はつくね達を攻撃した。

「バカな新聞部・・・　やはり今のうちに潰しておきましょう！」

くるむ達が配ろうと持っていた新聞を奪い・・・

うすら笑みを浮かべていた。

「ちょ！・・・　返してッ　私たちの新聞ッ！」

くるむが取り返そうと螢糸に掴みかかろうとしたが、

つくねが割ってはいる・・・

「ま　待ってください！何でオレ達を目の敵にするんですか？　オレ達は何も―・・・」

「何も知らないの？　いまさら何言ってるのよ・・・」

螢糸がつくねが話し終わる前に何も知らないのかという・・・

「新聞部なんて去年からとっくに目をつけられているのよ　私達公安に牙をむいたクズ集団としてね。去年の新聞部はね・・・　自分たちでこの学園を変えようとか妄想するバカな集団だった！そしてあろう事か新聞の記事を使って公安の存在を批判したの！だから部員たちを粛清して廃部寸前に追いやってやったわけ！」

螢糸は憤怒の表情でこれまでの公安と新聞部の経緯を話す。

つくねは・・・驚きながら・・・そしてギン先輩の

《長いもんにはまかれてりゃええんや》

という言葉を思い出した。

「！！？先輩たちにそんな過去がっ！？　じゃあ　何故あんな事・・・」

まだ理解していないつくねに螢糸は怒りを露にし、

「妖のごった煮みたいな紺の学園はねっ！　公安が支配しているから平穏でいられるの！それも理解できずに逆らう新聞部など　潰れて然るべきよッ！」

叫んだ。

しかし、

つくねは・・・どうしても理解できない。

「待って・・・　待ってください！　オレ達争うつもりなんて全然無いのにっ！　そっちが一方的に突っかかってきているだけじゃないですか！オレ達は　ただ普通に活動できればいいんです！　お願いだから新聞部（オレたち）の事はほっといてください！」

つくねの方が正論だ。

間違いなく・・・

だが・・・

公安とは初めは唯暴れまわる妖の生徒たちを力で抑えることによって平穏をもたらしてきた。

しかし、長い年月を重ねる事で、その力を間違った方に使用しているのだ・・・

そして　間違いを正義と信じて疑わない連中だ・・・余計に性質（タチ）が悪い。

つくねの言葉（せいろん）は・・・

「・・・放っとけ・・・ですって・・・？口を慎めッ！　誰に向かって口きいてんだ　このガキャアア！！！」

全く届かない。

螢糸はつくね達の新聞を焼却炉へ叩き入れた。

ゴオオオオオオ・・・・　パキッパチッ・・・・・・

あっという間に燃え上がる。

その新聞を薄ら笑いしながら眺める・・・

そして、

「わたし達の新聞がァァ――――ッ！！！」

くるむの叫び声が・・・木霊する・・・

つくねも唖然としていた。

その隙に螢糸は

フッ！！

口から先ほど同様に糸のようなものを吐きつくね達を捕まえる。

「うわっ！これは！！」

くるむとつくねの腕に纏わりつく・・・

「これは私の能力で紡いだ「糸」よ！ベッタリ絡み付いて離れないでしょう　やっぱり今　あなたたちを潰す事にしたわ！厄介なのがいないうちにね！！」

糸で繋いだつくね達を無造作に振り回し、

ドガアアア！！！

「きゃあああ！」「うわあああ！」

地面・樹木・校舎・・・

いたるところに叩きつけ蹂躙した。

「あんたはそこで大人しく見てなさい！まずはあなたよ・・・　美味しそうな匂いの・・・」

そう言うと・・・徐々につくねに迫っていく。

「さあ！体液をジュルジュルす吸ってやるわ！公安に逆らった見せしめよ！覚悟しなさい！！」

蜘蛛のような手足でつくねに纏わりつくと一気に距離を詰め襲い掛かった。

「うわぁあああああああ！」

「やめてーーーーー！」

ドンッ！！

「！！？　うわぁ！！？」

つくねが襲われかけた瞬間まさに間一髪！

モカが助けに入った。

「モカさーーんッ！！」

「つくねっ　嫌な予感がして来たのっ・・・・・　でもこれは一体・・・」

助けに入ったモカだが状況がいまいちの見込めていなかったようだ。

その隙に・・・

「何だ！キサマはァ！！」

ブハァ！！！

先ほどのように糸を今度はモカに向けて放つ！

「きゃあ！！」

糸はモカの腕に絡み付いてしまった。

「ああッ！モカさんーッ！！」

「クズめ・・・　公安とは学園の秩序であり正義だぞ！その私に手を上げるとはッ！　死刑だ！死んで反省なさい！このアバズレがァァ！！」

まるで刃物のような腕を一気にモカへ・・・

「きゃあああああああ！」

ズバァァァ！！！

次の瞬間・・・

鮮血が舞い散る。

しかしその血はモカのものではなかった。

その血は・・・

「つくねぇぇぇーーーー！！！！」

モカの叫びが木霊する・・・

そう　つくねがモカの身代わりとなり、

背中に重症を負った・・・

「モ・・・モカさん・・・　何で・・・こうなっちゃうのかな・・・？　オレはただ皆と楽しくやりたいだけなのに・・・・・・」

そう言うと・・・　つくねは崩れ落ちた・・・

最期の力でモカのロザリオを外して・・・

「このガキャーーーッ！！どこまでも私にたてつく気だァァァ！！」

螢糸は牙をむき出しにしつくねに喰らい付こうとしたその時！

カッ！！！！！　ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！

「なッ！！　何ィィ　これは・・・・！！？」

強大な妖気・・・　モカが覚醒した・・・

モカの覚醒の時の反動の妖気で吹き飛ばされた。

「つくね・・・・・・」

モカは暫くつくねを見つめていた・・・

傷で苦しんでいるつくねを・・・・

「うっ・・・何だ！！この女！！（これが　この女の正体なのか！！？　何て・・・強大な妖気・・・　あの男以外にこんな・・・・・）」

螢糸は唖然としていたがすぐに冷静になり、

（いや・・・だがついてるぞ　奴の腕に私の「糸」が絡まったままだ・・・　今ならこいつが何者であれ勝てるッ！　さぁ　来いッ！
切り刻んで体液をすすってやるゥゥ）

一気に蛍糸はモカに繋がった糸を引っ張るが・・・

ビィィン！！

糸が伸びきったところでビクともしない！

（うっ・・・　動かない！！？　バカなッ！　あいつ・・・全く動いてないのに！ビクともしないッ！！！）

パニックになっていると・・・

「・・・・おい」

静かにモカがしゃべりだす・・・

そして、蛍糸を鋭くにらみつけながら、

「よくもつくねをやってくれたな・・・！」

モカの・・・威圧感が篭った声が聞えてきた・・・

ゾクッ！！

螢糸の全身に悪寒が走る・・・

あの時のように・・・

「まっ　待って・・・！わ・・・私が悪かったわ　こっ　これ以上公安に手を上げるとあなただってただじゃすまないのよ！？　ここまでに――・・・　」

勝てないととっさに判断し止めようと言うが・・・

ぐいっ！

モカは軽く糸を引っ張った・・・

すると！

「え・・・・・！！？」

凄い勢いで螢糸の体が・・・まるで吸い寄せられるかのようにモカの方へ飛んでいく・・・

そして・・・向かってくるところを！

ゴッキャッッ！！！！！

蹴りで顔面を打ち返した！

「ふがァあああアァァ！！！！」

螢糸は血を噴出しながら吹き飛び・・・体を痙攣させ動かなくなった・・・

「逆だろ・・・？　私に手を出せばお前らがだだじゃすまないんだ身の程を知れ」

そう言い放つと・・・

つくねの元へ行き・・・

「モ・・・モカさん・・・・」

無言でつくねに肩を貸し・・・
くるむと共にその場を後にした。

楓牙　ｓｉｄｅ

楓牙はため息をついていた・・・

「だから・・・言わんこっちゃ無い・・・　おれぁ　忠告したんだぜ？蜘蛛譲ちゃんよぉ・・・」

楓牙は意味もなく学園内をうろうろしていると・・・

強大な妖気を感じ、妖気を辿っていくと　倒れている螢糸を見つけた。

「ただ・・・これで・・・いけるだろう。　ククククッ・・・そういった意味ではグッジョブだぜぇ・・・」

薄気味悪い笑顔で気絶している螢糸を見る・・・

「ふむぅ・・・　でもなぁ・・・　一応九曜に言っとくかぁ・・・
これで存分に殺れる・・・ってことの確認と一緒になぁ・・・」

そう言うと・・・螢糸を担ぎ、本部へと帰っていった。

side out

第１１５話　全面対決の序章（後書き）

ありがとうございます！！

一応仲間はちゃんと連れて帰ってくれるんですね～・・・

自分で書いてて意外！って思っちゃいましたよ楓牙くん　笑

次は・・・　ある秘密が・・・　ばれちゃいます！

もう　すぐに投稿しちゃいます！　出来てますので♪

第１１６話　知られた秘密（前書き）

よろしくお願いします！！

原作を知っている方なら・・・

一発で分かっちゃいますね♪

では！！

第１１６話　知られた秘密

【公安本部】

「楓牙様！！それは・・・！」

１人の公安委員が楓牙の帰還に気付き・・・

背負っている螢糸を見て驚きながら話した。

「ほらよぉ！」

ドサッ・・・

螢糸を九曜の前に運ぶ・・・

「螢糸がやられただと・・・？あの男か？」

九曜がいきり立つ・・・

「いや・・・ちげぇな・・・　あいつじゃあない・・・　あの殺気は覚えてる・・・おれぁこいつがぶっ倒れていた側にいたんだ・・・アイツだったら　気付くさ。　また別のでけぇ妖気の持ち主だ・・・誰がやったかまでは知らんがな・・・」

そう言うとくすくすと笑う・・・まるでおもちゃが増えた子供のように・・・

「あいつら・・・去年どうなったか忘れたのか?」「バカなやつらだ・・・」

本部にいた実力者だろう・・・

それぞれが呟いた。

「いいだろう・・・　そこまでバカなら今すぐに潰してやる!この私自らの手でメチャクチャにな!!」

歯軋りをしながら・・・怒りをあらわにする・・・

ここまで明確に我々に敵意を向けられたのだ。

もう策など必要ない。誰であろうと真っ向から叩き潰すのみだ。

「おいおい・・・　九曜よぅ・・・　オレとの約束・・・忘れてねぇか・・・　オレもウズウズしてンだよぉ!!」

楓牙も妖気を出しながら笑う・・・

その時・・・

「ふふふ・・・　怖いな・・・　公安のトップ2が揃うとこうも怖いとはな・・・」

入り口から誰かの笑い声が聞えてきた・・・

「「誰だ!!」」

公安委員の2人が反応した・・・

その後九曜と楓牙も誰かを確認した。

「お前は・・・!」「これはこれは・・・　指名手配犯じゃねぇかよ・・・」

確認し・・・　楓牙の方はまた・・・笑みを零す。

面白い物を見たかのように・・・

「フフ・・・いくら公安とはいえ　理由も明確じゃない今・・・部

活を1つ取り潰しにはできんだろう・・・　だけど私ならすぐにでも奴らを学園から消すことができる・・・　と言っても今はちょいと不自由な身だ。変わりに教えようか　新聞部破滅の手を・・・奴らの弱点を・・・」

そう言うと薄ら笑みを浮べ・・・

「新聞部の弱点は1人の部員の「正体」・・・」

「青野月音　あの男には「人間」の可能性があるんだ」

その声の主はそう宣言した・・・

「ヒュウー♪♪」

楓牙はこれ以上に無いほどの笑みを浮かべ口笛を吹く・・・

九曜は逆に冷静にその「者」の顔を見ていた。

「妖しか入ることの出来ぬこの学園に人間が紛れ込んでいる・・・と？」

再び目を見て確認する。

すると助言者は笑い。

「ふふふ・・・それがもし本当だったら・・・どうする?」

「掟に従い・・・新聞部の仲間もろとも・・・」

そう言うと・・・次の瞬間には九曜・楓牙の表情が変わる・・・

「殺してかまわんだろう?」「ククッ　皆殺しだなぁ・・・・こりゃぁ・・・」

【公安本部】

ここで不気味な笑みが木霊していた。

その笑みの発生源は・・・

「ククク・・・こいつぁ　おもしれぇな・・・傑作だぁ・・・
まさか学園（ココ）に人間（クズ）が紛れてるなんてなぁ・・・」

楓牙だ・・・

だが、初めこそは殺気立っていた九曜だったが今は冷静に考えている・・・

まあ　隣の男（ふうが）が強烈過ぎるからだろうな・・・

「・・・フン　ご機嫌の所を水さすが　そう簡単に人間など入ってこれるわけ無いだろう・・・　何より私は正義を成し治安を守る公安の九曜　お前のような者の戯言を簡単に信じるわけにはいかないな」

そう言い・・・背を向ける。

「おぃおぃ・・・　九曜よ・・・確かめもしねぇで　決め付けても

いいのか？　疑わしきは罰せよ・・・ってなぁ！　間違ってたらすまねぇでいいじゃねえかよ。」

去ろうとする九曜を呼び止める。

九曜は足を止めた。

そこへ

「公安にたてつく新聞部の奴らを潰したくないのか？　新聞部1年　青野月音・・・　こいつが本物の「人間」ならどうする・・・・・？」

すかさず助言者が九曜に向かって言う・・・

そして薄ら笑いをし・・・

「掟では殺してかまわないんだろ？　新聞部の仲間もろとも・・・な・・・」

暫く九曜は考えていた・・・

「ふん・・・」

確かに・・・私が調べるといったらそれは正義の為の行為だ・・・　目的をも含めて・・・

「確かめてみるか・・・　貴様の言う事を・・・」

そう呟くと、

部下を数人引き連れ本部を後にした。

「ククク・・・固い頭の持ち主だが・・・　行動はすぐにする奴だなぁ・・・　それよりも先生よぉ・・・　いや　元先生？」

九曜の方を見ていた楓牙は・・・その助言者の方を向いた・・・

「・・・なんだ？」

「あんたが・・・そんなに執拗以上に喰ってかかんのは・・・　あの新聞内容ぉ・・・　ひょっとして新聞部の連中がやったことなのかぃ？」

笑いながら話す・・・

その表情と笑いに苛立ちを覚えたのだが・・・

ここは我慢をする時と判断し押し殺す・・・

溜飲は新聞部の連中を始末する時だ・・・

「だったら何だ？？」

その反応だけで十分だった・・・

「いやぁ・・・あんたを笑うつもりはねぇよ・・・　こいつはぁ好奇心旺盛な時にでるんでなぁ・・・　カンベンしてくれや・・・」

手で顔を覆いながら三日月の様な口元を元に戻す。

「あんたに聞きたいのはぁ・・・　あの男の事と蜘蛛譲ちゃんをヤった奴の心当たりを・・・だ・・・・」

「！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

side　out

第１１６話　知られた秘密（後書き）

ありがとうございました！！

つくねくん・・・・　間違いなくピンチです！

さあどうなるどうなる？？　苦笑

読んでいただきありがとうございました！！

第１１７話　動き出した公安　（前書き）

よろしくお願いします！！

第１１７話　動き出した公安

【新聞部部室】

ギン先輩が遅れて部室に入る・・・

今ここにはカイト以外の全員がいた・・・

「なんや？カイトはサボりなんか？」

つくねに聞くと・・・

「いやいや・・・　クラスの用事で遅れてるだけですよ！　サボるわけ無いじゃないですか・・・（こんな大変な時に・・・）」

苦笑しながら答える・・・

時折傷の痛みに顔を歪めながら・・・

「ん？どーしたんや？？傷（ソレ）？」

ギン先輩が不安感いーっぱいといった様子で聞いた・・・

「え・・・っと・・・　実は・・・・・・・・」

そこにいた全員が言葉を詰まらせながら・・・・

さっきの出来事を告白した・・・

全部聞いた途端!!!

「こんのアホンダラァァァーーーーッ!!　公安の奴らとケンカした挙句ぶちのめしてもうたやと!!」

皆「ずーーーーん」といった感じで直立不動でたっていた・・・

説教タイムだな・・・珍しく。

「言うたやないかッ!!奴らにゃ絶対手ェ出したらアカンて　公安は「日本妖怪」を中心に組織されとる凶暴な学園警察で、トップ2

人が腐っとるから組織丸ごとタチわるいんやと!!（折角カイトの奴を説得したってゆーのにっ!!）」

黒板にもう言った事まんまを書き叩く!!

まるでダメ教師だな・・・　教科書丸写しして怒鳴るだけの・・・

苦笑　「やかましいわ!それどころでないねん!!!」

・・・・・・すみません・・・　（ギン先輩・・・顔がマジだ・・・　汗）

「あんな奴らとケンカしてオレの大好きなモカさんがけがでもしたらどうすんねん!!　今のお前みたいにー!」

モカを抱き寄せながら怒る・・・

そっち目当てか・・・？

「いやいや・・・　公安ぶちのめしたのモカだし・・・　秒殺で」

くるむが突っ込む・・・

つくねは・・・

やはり傷が痛むのか時折顔を歪ませる・・・

「結構酷いんか・・・？」

ギン先輩もさすがに心配なのかつくねに容態を聞いていた。

それを変わりにゆかりが答える。

「わたしの調合した魔法薬で傷は塞ぎましたけど・・・　本当ならなん針も縫うほどの大ケガだったですぅ・・・　カイトさんがいてくれたら・・・　もっと早く良くなると思うですが・・・」

ゆかりはそう呟く・・・

公安との小競り合いの際のカイトの激情を目の当たりにし・・・皆ちょっと話し掛づらかったみたいだ・・・

気持ちは皆カイトと同じなのにな・・・

「それより・・・トップ2人？　あの・・・九曜って奴以外に・・・誰かいるんですか？」

つくねがそう聞くと・・・

ギン先輩は頭を掻き出した・・・

「あぁ・・・　厄介なんがおるわ、名前は楓牙、九曜に並ぶ公安屈指の実力者や・・・　ただ・・・気まぐれな奴で、滅多に活動せん公安にさらに輪に掛けてサボる男や・・・　好戦的なんは好戦的なんやが・・・　九曜に比べて活動回数が少ないからまだマシな存在や」

ギン先輩はそういう・・・

しかし・・・不安は消せなかった・・・

仮に・・・　あの場にはいなかったが、

奴が動いたとすれば？

かなりやばい事態となる・・・

「そんなのが・・・　痛ッ・・・・」

つくねは傷を抑える・・・

モカはそんなつくねを見て、庇ってくれた時の事を思い出した・・・

「ごめんね・・・　わたしを庇ってこんな大ケガを・・・・」

モカが心配そうに・・・申し訳なさそうに言う・・・

だがつくねは必死に堪えてかまわないと笑っていた・・・

（つくねは「人間」だからわたし達妖よりずっともろいはずなのに・・・）

涙ながらつくねを見つめる・・・

「ありがとうつくね・・・わたし・・・」

「モカさん・・・」

ドキドキッ！　な空間が・・・

しかしそんなのはくるむちゃんが許しません！！　苦笑

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・じぃーーーーーーー」

っと無言で睨みつける・・・

2人もはっと気付く！！

「全く油断もスキもない！」

ドン！

「あうっ」

モカを押しのけつくねに抱きつく

「つくね・・・大丈夫・・・？」

「くるむちゃん！！」

今度はくるむだ・・・　苦笑

「つくねはわたしが付きっきりで看病してあげるから安心して／／」

ぎゅうううう　っと抱きつく！！

しかし　今のつくねにとったらハグは拷問だ・・・

「ぎゃあああ！待って待ってッ！　「ぎゅーー」はやめてッ　いたいィィ！！」

またまた羨ましい空間が・・・

しかしそんなのはギン先輩が許しません！！　苦笑

ダーーーー！！っと2人を放り投げる。

「なんでやねん――――ッ！カイトといいお前といい！なんでお前がオレよりモテるんや？納得いかへんわァァ！」

ぐあっとつくねに顔を近付け、その次はつくねの耳を掴む。

「おまえなんぞ　公安のエサにしたる！今回の罪　お前1人かぶって死んでまえッ！」

「えええええェェェ！！」

そのままつくねを今度はヘッドロックをかましながら部室の外へ出ようとした。

そこへゆかりがまたしても改心の一言をこっそり・・・

「男の嫉妬は醜いですぅ」

・・・ですよねぇ・・・　相変わらず毒舌♪

「オラオラオラァ！ギブか？？」

首を絞めながら言う！

「ギブギブ！！」

つくねもあっさりとタップ・・・

そんな平和もつかの間・・・

「・・・愚か者め・・・今更騒いでももう遅い・・・」

廊下から絶望の声が響いてきた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第１１７話　動き出した公安　（後書き）

ありがとーございました！

ほっとんど原作のままですね・・・苦笑

カイトくんー急いでェ！

ガンバリマス！！

第１１８話　気まぐれな男（前書き）

よろしくお願いします！

第１１８話　気まぐれな男

カイト　ｓｉｄｅ

【学園廊下】

クラスの用事を終わらし、

カイトは部室へと向かっていた、

考え事をしながら・・・

『ギン先輩の言った事も分かる・・・　だが・・・あの傍若無人な振る舞い・・・　オレ達が大人しくしていても・・・公安が黙ってるとは思えないな・・・』

そう・・・

それが心配だった。

いかに皆を説得したとしても、

奴らと因縁がある以上　向こうから来てもおかしくはない。

武力で制圧しているグループのトップと言う者は・・・

簡単に想像がつく。

異常にプライドが高そうだということ。

そんなヤツがこのまま新聞部を放置するだろうか？

『否・・・　必ず何か仕掛けてくる・・・　な、早めに部室へ行こう』

部室へ行こうと移動速度を上げたその時、

ビュオオオオオ！！！

突然目の前に、突風が吹き荒れた。

『くっ・・・！！？　なんだ？』

手で顔を覆い・・・

発生源を凝視してみると・・・

男が立っていた・・・

「お初にお目にかかるなぁ・・・　御剣怪斗くん・・・」

不気味に笑いながら・・・　1人の男が出てきた・・・

「おい・・・！あれって・・・」「公安の・・・・まさか・・・楓牙・・・？」「なんでここに・・・」

周りの空気が一気に緊迫した・・・　生徒の殆どに悪寒が走ったようだ・・・　畏怖の念を持って・・・

『公安委員か・・・何の様だ？』

そんな周囲の緊迫感などお構い無しに話しかける・・・

楓牙はその様子を見ると再び笑い出す・・・

『なんだ・・・？　用が無いのなら行くぞ・・・　部活があるんでな。』

そう言い立ち去ろうとすると・・・

「クフフ・・・・　おめでたいねぇ・・・・　部活・・・かぁ」

意味深に笑う・・・

先ほどの時とは違う・・・

今度はカイトの背中に悪寒が走った！

『おい！　皆に何かしたのか！』

振り向くと、

楓牙はそこにはおらず、天井に立っていた・・・

「何にもしらねぇのかい・・・　おめでたい仲間だねぇ・・・・　クックック・・・　この間の君の殺気のせいで絡みづらくなってんのかぃ・・・？君達??」

再び笑う・・・口元を抑えながら・・・

『・・・・・・質問に答えろよ・・・・・・』

ゴ　　ウッッ!!!

カイトも・・・　抑えていた殺気を出す・・・

（こいつだぁ・・・　こんの感じ♪・・・ハンパねぇなぁ・・・
近くで味わうとまた一段と格別だぜェ・・・）

そんな殺気も笑いながら見据えている・・・

「ククク・・・　怖い怖い・・・　オレが震えるなんざ・・・　ひっさしぶりだぜぇ・・・♪」

口ではそう言うものの・・・　明らかに顔は笑っていた・・・

『・・・・・・3つ数える・・・　言え!』

カイトは・・・

殺気を出しつつ・・・　精霊術を発動する際の・・・オーラを体に纏わした・・・

「へぇ・・・こりゃあすげーな・・・　まだ隠し玉あんのカ?お前・・・　まあいいわ・・・　教えてやるさぁ・・・」

決して怖気づいたとかそういった類ではない・・・

なんなんだ?この笑みの真意は??

「今・・・九曜から連絡が入った・・・　どうやら・・・おたくの部員さんは・・・うちらに手ェあげたらしいな・・・」

『なに!』

続けて言う・・・

「今頃・・・新聞部のほうへ向かってんじゃねぇの?奴らに粛清する為になぁ・・・」

笑う・・・

その発言に焦りを覚えたが・・・カイトはその笑いの方が気になっていた・・・

『貴様・・・　それを何故オレに言う・・・?』

静かに睨みつける・・・

(へぇ・・・驚いたなァ・・・血相かいて飛んでいくって思ってたンだがなぁ・・・)

意外な言葉に少し驚いたが・・・すぐに調子を取り戻す・・・

「おれぁ・・・公安内でも気まぐれなンでな・・・　やることすることぜぇんぶその時の気分しだいなのさぁ・・・　今回はお前だけが仲間はずれなのは可愛そうって思ってなぁ・・・　逝く時は1人より誰かと一緒がいいだろぅ?」

笑い出す・・・

顔を抑え高らかに・・・

『後悔するぞ・・・　今言った事を・・・・』

そう言うと・・・今はこいつにかまってる暇はない・・・

真偽を確かめる為にも一刻も早く部室へ行く必要がある・・・

カイトは空間に素早く図形を書く・・・

「天翔る羽（フェアリー・ウィング）」が発動した・・・

「おっ！」

楓牙は驚き見入ってると・・・

瞬く間にカイトはいなくなった・・・

「ククク・・・ほんとに驚いてばっかだなぁ・・・　こんな奴が1年坊にいるなんてよぉ・・・　指名手配犯に聞いたところ、あのモカって小娘も「力」の大妖みたいだしなぁ・・・　まぁ　さすがにその2人そのまんま相手にするには・・・骨が折れそうだからなぁ・・・　仕方ねぇは・・・　元々のオレの獲物はあの男1人・・・だしなぁ　人間（クズ）と女は九曜に譲ってやるよ・・・」

そう呟くと・・・

楓牙も姿を消す・・・

彼がこの場でケリをつけようとしなかったのは・・・

　1つ目に　極限のカイトやりたいからだ・・・　怒れば怒るほど・・・隠していた?力が露になる・・・　戦闘狂というやつだろう・・・

そして2つ目　場所が気に喰わない・・・生徒(ギャラリー)がうぜーし・・・場所も狭ぇ・・・　至極単純な理由。

そして最後・・・　これはさっき言った通り・・・　逝く時は1人より一緒が良いだろう・・・?これだ・・・彼成りの・・・・

歪で歪んだ悪意の塊の様な・・・優しさだ。

そして・・・彼は気まぐれが故に・・・嘘もついていた・・・

九曜から連絡が入ったというのは本当だが・・・

それは・・・　奴らを捕らえたと言う連絡だ・・・・・

故に・・・今新聞部に行ったとしても・・・

間に合うはずがない・・・

もう捕らえられそこにはいないのだから・・・・・・・・・・もしかすれば・・・

もう・・・・・・

「くくくく・・・・・　たンのしみだなぁ・・・・　さぁて・・・・　オレもイクとするかぁ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【新聞部部室】

『皆！！！』

カイトは部室の扉を開く・・・

そこにはまだ部員はいた・・・

そうつくねとモカ以外は・・・・・・・・・

「カイト・・・・」

「カイトさん・・・・」

くるむとゆかりがこちらを向く・・・

『・・・・つくねと・・・モカは？』

声を・・・怒りを必死に押さえながら聞く・・・

「・・・・・人間やと　ボケェ・・・　オレはこないな面倒関わるのはごめんや・・・」

『ッツ！！！！』

カイトは驚いていた・・・

公安に手を上げたというのは知ったのだが・・・

そこまでは知らなかった・・・

意図的に教えなかったのか？

オレを焦らせる為に？一体焦らせてどうすると言うんだ？

「カイトの表情（かお）もそうと言うよるわ・・・　クソがッ・・・」

ギン先輩が歯軋りしながら言うと・・・

くるむが・・・真っ向から反対した！

「なっ　何よーーーっ　信じてんの！？つくねが人間のわけないじゃない！！部長のハゲェェ！！！」

グアーーっと顔面を押し付けながら言う。

ギンも負けてなかった。

「誰がハゲやこの巨乳娘ェェェ　ホンマやったらどないすんねや！人間と妖は共存してても敵同士やと　相場ァきまっとんやでェ！！」

力強く言う！だが・・・

「知らないもんっ！ヘアバンドつけっぱだとハゲんのよバーーカ！！」

この言葉に！！

「ええ！うそっ！！マジなん！？」

・・・頭を抱えだした・・・苦笑

「待ってください・・・でも　言われてみれば確かに・・・つくねさんて人間ぽいですぅ・・・　さっきのお薬を塗った背中の傷も人間みたいに治りが遅かったし・・・カイトさん・・・？」

ゆかりが冷静に・・・そして最後はカイトに問うように言った・・・

カイトは黙り込んでいる・・・

「・・・・・・!!!もしホンマに・・・　つくねが人間やったら確実に処刑されてまうで・・・　そして・・・たぶんオレらも・・・人間をかくまっていた罪に問われて同罪や・・・」

そうギンがいうと・・・すっとカイトが立ち上がる・・・

そして・・・部室を出ようと歩き出した・・・

「まてや!カイト!落ち着け・・・相手は九曜・・・楓牙はおらんかったが　それでもあの九曜なんや・・・間違った自分の考えを絶対正義と疑わへん男・・・　そして自分に逆らう奴はみんな悪モンで　正義(じぶん)のためだったら何やってもええ思ってんや　そないなやつまともに相手してもこっちがヤバイ・・・・ッ!!」

ギンは最後まで言い切る前に・・・カイトの目を見た・・・

揺るぎない信念が宿ってるのかのような目を・・・

『ギン先輩が言うのも分かる・・・だが　オレはあの時・・・言ったはず・・・皆に手を出そうとするのなら・・・　オレも黙ってないと!』

そう言うと入り口の方へ・・・

『オレは2人を助けにいく・・・　つくねとモカはかけがえのない仲間だ・・・　たとえつくねが人間だとしても・・・な』

そう言うと扉を開ける・・・

その時、

「まって!!わたしも行く!!!」「わたしもですぅ!!!!」

くるむとゆかりが来た・・・

ゆかりは怯えてはいるが・・・

決心しているようだ・・・

『そっか・・・ありがとな。』

カイトがそう言うと・・・

「何言ってんの?カイト!2人はわたしにとっても大切な仲間なんだから!」

「です!です!!」

そう言い笑っていた・・・

そして　ギン先輩だけが部室にいた・・・

拳を握りこんでいた・・・

『ギン先輩・・・・　オレは・・・　ツッ!!!!!』

そう言うその瞬間！！

後ろから邪悪な気配・・・　そして殺気が・・・

それは・・・　その殺気はオレではなく・・・

くるむとゆかりを狙っていた。

第１１８話　気まぐれな男（後書き）

動き出しちゃいました・・・
襲ってきたのは・・・・・・
ダレでしょう　笑

まあ大体分かるかと！！
ありがとうございました！！

駄文失礼します・・・　苦笑

第１１９話　公安幹部の片鱗？（前書き）

タイトルで分かっちゃいましたね・・・

ダレが戦うのか・・・笑

さぁー　がんばれー！！

よろしくお願いします！

さぁ・・・　作者は明日夜勤だぃ・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・

第１１９話　公安幹部の片鱗？

背後から・・・邪悪な殺気がくるむ達を襲った。

『いかん！！　くるむ！！ゆかり！！伏せろー！！』

咄嗟にカイトは飛び出した。

そして勢いに任せくるむ達の方に飛び押し倒す。

その瞬間・・・くるむの首があった部分の壁が・・・

スパァァッ！！！

まるで鋭利な刃物で切ったかのように・・・切れた！！

「一体なんや！！」

ギン先輩も部室の外を見た・・・

「ククク・・・ここも・・・狭ぇが・・・うざいのがいねぇし・・・最高のシチュエーションじゃねぇか・・・　カイト君よぉ・・・オレを・・・たおさねぇと・・・お友達を助けには行けねぇぜぇ？」

男が・・・風と共に現れた・・・

「なっ・・・　楓牙！！？」

ギンも驚く！

まさか・・・動いていたとは・・・と。

「よぉ・・・　森丘銀影・・・　ひっさしぶりだな・・・　今はおめぇに興味はねぇけど・・・　逃すと厄介だなぁ・・・」

そう言うと・・・両手両足・・・いや　体から風が発生してるかのように風を纏わせた。

「不意打ち、すまねぇなァ・・・　全員切り裂いてやんょぉぉ！！！」

ビュオオオオオ！！！！　ズバアアアアアアッッ！！！

風が・・・　周囲の物を刻みながら・・・近付いてくる。

「ひゃっはーーー！！いくらテメェの瞬速でもぉ・・・ここは狭ぇからよぉ！にげらんねぇぜぇ！　全滅だなぁ！！　精々苦しめやぁあああぁ！！」

高らかな笑いと轟音が響く。

触れる物皆刻んでいく風を纏う刃。

広範囲の刃の風が迫ってくる・・・

「何なのよ・・・これ！？」

「ひっ！！」

「ちぃ！！」

くるむとゆかりも身を硬くしてしまった・・・

ギンは攻撃に備えくるむたちの前に身構える。

そして部員達に届くか届かないかの刹那！！

バッシュウウゥゥゥ！！！！！

風が・・・何かに掻き消された・・・

「・・・・何ィ・・・・！」

さすがに楓牙も驚いていた・・・

それなりには力を入れて放ったはずなのに・・・

消した先には・・・

両の手に傷をつけているカイトだった・・・

ポタッ・・・・　ポタッ・・・・・　ポタッ・・・

カイトの手から血が滴り落ちる・・・

「やぁっぱてめぇか・・・・　ククク・・・・　こりゃ楽しくなりそうだ・・・・」

楓牙も本格的に臨戦態勢に・・・

『くるむ！ゆかり！！先に行け！！　ここは任せろ！！』

後ろにいたくるむ達に激を飛ばす！

「で・・・でっも！相手って　公安のトップの一角なんでしょ・・・

1人じゃ・・・」「カイトさん1人じゃ危ないです!!」

そう言うと・・・カイトは!

『・・・オレよりも　もっと危ないのはつくね達だ!!　早くあいつらの所へ!!頼む!!』

冷静に・・・そして大声で叫ぶ・・・

「でも・・・でも・・・」

くるむはまだ迷ってるようだ・・・

今は一刻を争う。

もう一度言おうとした、その時!

「いいから!行くんや!!」

ギン先輩が2人を抱えた!

「ちょっと!何を!!」

「ツッ!!」

くるむとゆかりは暴れている・・・

「あほう！黙ってじっとしとれや！！　舌ぁ噛むで！！！」

そう言うとカイトのほうを向いた。

『礼を言うよ、ギン先輩。』

「ちぃ・・・・」

ギンも複雑そうな顔をしながらも窓から飛び出した！

バリィンッ！！！！

「っは！！逃がすかよ！！そう簡単になぁ！！！」

ギンの方に手を向ける！！

が、

ドン！！！！

『皆には手出しはさせない！』

「くぅっ・・・！！！」

一瞬で間合いを詰め、

カイトの蹴りが・・・楓牙の腕に炸裂。

少し遅ければ脇腹を直撃していた筈が気付き腕を下げたのだ・・・

ミシミシミシッ・・・・・

防御した楓牙の腕が軋む・・・

その次の瞬間！

ドガァァァァ！！！

楓牙が吹き飛ぶように部室の壁に激突した。

（こいつ・・・　足から感触が無くなっていった・・・衝撃を・・・？）

吹き飛んだ方をみると・・・

楓牙が服を払いながら出てきた。

「ひゅう～・・・あんなバカみてーな蹴り・・・　ずっと堪えてらんねぇわ・・・　壁の方がまだいいってもんだ。」

衝撃受け止めずそのまま後ろに受け流したのだ・・・

『強いな・・・お前。少なくとも今までの奴らに比べると格段に・・・』

正直な感想だ・・・

「クックッ・・・　光栄だがぁ・・・一体誰と比べてんだコラ・・・　オレをよ・・・・・」

そう言うと・・・

再び風が楓牙の周囲に舞う・・・

『ちっ！教室の中じゃ不便だ！』

カイトはそう言うと！ギンのように窓から飛び出した！

地面に着地し、楓牙の方を見る・・・

風を従えているかのようにゆっくりと・・・降りてきた。

「ククク・・・広い方が殺りやすいんだがなぁ・・・」

不気味に笑う。

『殺ってみろよ・・・』

カイトもまた・・・軽く笑みを浮べ・・・にらみつけた。

「死ねやァァァ！」

ギュルオオオ！！！

楓牙は今度は直線状に刃の風をカイトに向かって放つ！

無駄な破壊はしなく一直線・・・それでいて攻撃力はさっきの以上だろう。

受け止めれば・・・かなりのダメージになる！

『ぬううう！！』

カイトは両の手を翳し・・・

ガキィィィィ！！　ドッ！！　ズガアアアアアア！

受け止めたと同時に上空へと受け流した。

力の方向を上方へと変えたのだ。

それを見た楓牙は再び笑い出す・・・

「クククククク・・・　お前やっぱつぇぇな・・・・　あの蹴りも然り・・・　そしてオレの真空の刃を二度も止めた・・・・　でもさぁ・・・・　まだだろぉ？」

笑いながら・・・言う。

『何が言いたい？』

「・・・出し惜しみは良くねぇって事だよぉ・・・　全力でやろうぜぇ？　互いになぁ・・・」

そう言うと・・・

再び薄気味悪く笑った・・・

その時、

楓牙（やっ）の妖気が上昇していくのを感じた・・・

ここからが本番のようだ。

第１１９話　公安幹部の片鱗？（後書き）

ありがとうございました！！

当然ながら・・・１話では決着つかなかったですね・・・

さて・・・どれくらい掛かるか・・・

まあ直ぐだと思います・・・　作者に腕がないので・・・　苦笑

戦闘描写も難しいです・・・・・

ガンバリマス！！　これからもよろしくです！

第１２０話　風斬の大妖（前書き）

楓牙さんの正体です！！

はい・・・オリジナルです・・・

オリジナルの大妖はセドナに続き2人目ですが・・・

はぁ・・・どうですかね？　苦笑

もっとセンスあればなぁ～

とりあえず！よろしくです！！

第１２０話　風斬の大妖

不敵に笑う・・・

そしてこちらを睨みつける。

楓牙の妖気が上昇していく・・・

そして楓牙は・・・

まるでピントが合ってないようにブレた。

『なんだ!!?　目の・・・錯覚・・・か?あいつ!!』

次に楓牙が増えた。

そして・・・姿が人の形から変わる・・・

その正体は・・・・・・・・・・

『おまえ・・・その姿・・・・』

３つに増えた楓牙に言う。

「そうさぁ・・・　オレぁカマイタチ・・・風を統べる・・・　そしてぇ　人間（クズ）を見つけてはぁ　ぶっ倒し・・・　切り裂いて　生き血を吸う・・・　人間界の惨殺魔だよぉ！！　さぁ・・・早いとこオレを殺らねぇと　助けられねぇぜぇ？　大切なお友達をよぉ！」

カマイタチの攻撃・・・　３つの体全てが楓牙らしい・・・

それぞれが、役割を持っている・・・

一人目が足に纏わり獲物の動きを封じ、二人目が切り裂き、三人目が、切り裂いたところから生き血を吸う・・・

風があたる限りそれは延々と続くらしい・・・

風を我が身のように使用するのが最も厄介なところ。

精霊の力を借りるカイトと風に関しては同系統の力だ。、

厄介だ・・・

風斬の大妖「カマイタチ」

公安のトップというのも頷けるな・・・

この分じゃ・・・九曜の方も・・・高位の妖怪である事は間違いない・・・

あいつら・・・　無事・・・なのか・・・？

「・・・考え事してる暇あんのかぃ？？」

『ツッ！！』

風を纏った楓牙の移動速度はまさに疾風の如く・・・

一瞬でカイトとの間合いを詰め。蹴りを一閃！！

ドゴッ！！！

「さっきの借りだぁ　受け取れや！！」

ザシュ！　ザシュ！！　バシュウウウ・・・・・

蹴りの次は・・・他の楓牙の斬撃・・・そして生き血、すなわち妖気を吸う・・・

三位一体・・・それは舞のような・・・　まさにその連撃・・・本人の風貌からは連想が出来ないほどの美しい舞・・・

まさに「舞闘」と呼べるだろう・・・

カイトは堪えきれず吹き飛んだ・・・

ドガアアアッ！！

『ぐあッ！』

受身を取ることは出来たが・・・

幾らか傷を負ってしまった・・・

「・・・ククク　お前・・・その程度じゃァ無いだろぅ？　もっと楽しませてくれゃ・・・オレをよぉ！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

くるむ・・・　ｓｉｄｅ

暫く担がれていたくるむだが・・・

「ちょっと！いい加減おろしてよ！！」

くるむが暴れた！！

当然だろうな・・・

エロ部長に担がれてるんだから！

「あばれんなや！！　まぁ・・・ここならええか　ほらぁ！」

くるむとゆかりを下ろした。

「ギン先輩！！なんでカイトを残してきたんですか！！」「そうですよぅ！！」

くるむが詰め寄る！

「アイツは・・・　あの楓牙ちゅうやつ危険な奴なんやあの場におったら、先にお前らが切り刻まれてんで！！場所も最悪なんや！」

風を操る能力を持つあの男には多人数で攻めてもあまり関係が無い、全方位どの角度からでも風による斬撃攻撃ができる凶暴的な能力だ・・・

そんな奴相手に、おまけに至近距離なら何時攻撃されててもおかしくない。

「お前らがあそこにおればお前らをあいつは庇おうとする！絶対にな！そういう奴や！！　おまえらがようわかっとるやろうが！そしたらあいつはいらん傷をおうことになったんやでぇ！」

ギンも激を飛ばした・・・

本心では残りたかったのであろう・・・　拳を握りこんでいた。

「「・・・・・・・」」

そんなギン先輩に何も言えなかった・・・

「と・・・とにかく!今はカイトも心配だけど・・・つくねよ。カイトに頼まれたんだから!」

そう言うとゆかりを連れて公安の本部へ行こうとする・・・

「待て!　落ち着けや!!」

ギン先輩が叫ぶ。

「計画も立てんで殴りこみゃ　事がでかくなるだけやんか!」

そう続ける・・・

言ってる事は分かる・・・

だが、

「ギン先輩!!助けてもらってなんだけど!仲間をおいてきたんだよ!自分達は安全なとこにいて・・・　そして連れて行かれたほうの仲間は!?　助けに行かないで・・・逃げ出して・・・　そんなのわたしは嫌だ!!カイトに・・・カイトにつくね達を頼むって

いわれたもん!!　ジャマするならどっか行って!!もう絶対先輩の力・・・もう借りないからッ!!」

ギンも・・・黙る・・・

「・・・・・感情的になりよってッ　何が仲間や!　なら頼まれたつくねがホンマの人間でも助けに行けるんかッ?」

くるむは・・・

ほんの一瞬だけ目を瞑り・・・考えた・・・

そして直ぐに、

「頼まれたからとか言わないでよ・・・　頼まれなくたって助けに行くわよ・・・　そんなの当たり前じゃないバカ・・・　人間とか妖とか・・・　そんなの関係ないよ・・・」

言い切った。

目に涙を浮べ・・・

ゆかりもギンも・・・目を見開いてくるむを見ていた・・・

そしてもうくるむはそれ以上何も言わず・・・

ゆかりと共に公安本部へと向かった。

「くっ・・・・・」

ギンは・・・・頭を抱えている・・・　過去のトラウマと戦っていたのだ・・・

第１２０話　風斬の大妖（後書き）

ありがとうございました！！
カイトくんー！
負けるなぁーーーー！！　ガンバレ！　苦笑

第１２１話　猛り立つ怒り（前書き）

よろしくお願いします！！

１時間経過・・・

ってそんなに暴れたら・・・　校舎壊れる・・・　とか　つくねたちが・・・とか・・・あると思います。

書いてて思っちゃいました・・・

軽くスルーしてください・・・　他に表現と言葉が・・・　苦笑

さあ！カイトー！反撃だーーい！

第121話　猛り立つ怒り

【校舎裏】

戦闘時間は1時間ほど経過していた・・・

2人の戦闘はまだ続いていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふん・・・・そんなもんなのかぃ？カイトくんよぉ・・・・」

カイトは・・・・暫く応戦していたが・・・

スピードにおいて風を使う楓牙の方に分がある・・・

カイトが天翔る羽（フェアリー・ウィング）を使ったとしてもだ。

そして、

打撃、斬撃、吸収・・・おまけに使役する風の力。

全く乱れぬ舞闘術・・・

技の錬度も実に凄まじい。

カイトは防戦一方だった・・・

少なくともこの段階は、

（もうちょっと・・・だな・・・）

・・・・・・・・・・・・・・・・

カイトの周りにオーラが湧き出る・・・

その輝きは・・・

鮮やかなエメラルド・グリーンだ・・・

「ちっ・・・そいつはさっきから見てるぜぇ・・・　つまりはぁ・・・虚仮脅しかよ・・・　チッ　つまんねぇな・・・」

正直防戦一方のカイトに嫌気が差してきた。

さっきの蹴りはそれはそれでかなりの威力だったのになぁ。

オレが正体を現したとたん防御中心に戦ってるみたいだ。

（んな　もんでオレをぉ　倒せるって思ってンのかねぇ・・・　コイツァ・・・　・・・！！　いやまてよ・・・・・）

楓牙はあることを思い出していた・・・

この男は、怒れば怒るほどに力を増していく・・・

ならば・・・　怒らせればいい・・・

この男の芯に噛み付いちまえば簡単だ・・・

即ち・・・

「おまえ・・・もう良いょ・・・・・・・」

楓牙は携帯を取り出し、そして・・・どこかにかけた。

『！！！』

カイトは驚き楓牙の方を見た！

「九曜・・・こっちは・・・　終わりそぅだ・・・　ははっ・・・たーいしたことなかったさぁ・・・　ンでよ・・・　つくねって奴は？？　ああン？まだなのカよ・・・　ん？　オレを待ってくれてンの・・・？　へぇ・・・　いいょ・・・　殺っちゃってくれてもさぁ・・・　まぁ　大した事無くても、そこそこは楽しめたからさ

ぁ・・・」

そう言うとカイトの方を見る・・・

「最後につくね君の声ぇ・・・聞いとくかぁ？　待っててくれてるってょ・・・　九曜にしちゃあ　粋な事してくれてンよなぁ・・・」

ニヤニヤしながらカイトを見る・・

そう・・・　この男は自分よりも他人を傷つけられる事に何よりも激しく激昂する・・・

前に既に見たことだった。

カイトは・・・それが挑発だったかどうかは・・・　もう分からない・・・

ただ・・・　仲間の危機に・・・激しく反応した！

『きっ貴様あぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』

ドゴオオオオオオ・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ゴウッ！！！

叫びと同時に・・・　先ほどとは比べ物にならないほどの・・・・

威圧感とオーラに包まれる。

そして・・・　巨大な図形が空高く飛び上がる・・・

「へっ・・・・・・へへへへ！！！！　さっきまでと比べもんになんねぇわ・・・　やりゃ出来んじゃねぇかよ！！　出し惜しみしやがってよぉ！！！」

楓牙が風を纏いカイトに突進しようとしたその時！

ギンッ！！

「なっ！！！！！」

それは一瞬の出来事だ・・・

睨まれただけで・・・

異常な気配を感じ、

楓牙はいつもの立ち間合いの倍以上後ろへ下がってしまった！

おまけに・・・足が・・・

「なっ・・・なん・・・だよ？　コレ・・・　オレの・・・足が・・・」

（震えてる？このオレが？？睨まれただけで？）

すぐさま楓牙は頭の中でそれを否定・・・

「ふざけんじゃねぇええ！！　いいぜぇいいぜぇ・・・！　マジで付き合ってやんよぉおおお！！！！」

楓牙は・・・カマイタチの分身全てが同じ構え（フォーム）を取った。

「・・・・　こいやァ！　惨劇の風ェ・・・　答えろォ！　殺戮の風ェ・・・　命あるものを全て切り刻めェェ　風を纏う死神ィィ！！！！」

3人に纏っていた風が集まり・・・周囲が・・・まるで台風の目のように・・・

「殺戮せし暴風(グリフォネル・マーダー)ァァァァァ！！！！！　切り刻めェェェェ！！！！」

ギュルオオオオオオオッッッッ！！！

周囲が・・・全てバラバラになっていく・・・・・

カイトは・・・

左腕を伸ばし止めるような構えをする・・・

「ひゃはははは！！！　バカが！！コレをとめるだぁ？腕一本でぇ

？？　なめてんじゃねぇぇぞ！！」

楓牙が叫んだとほぼ同時・・・

カイトに直撃する！！

ギュルオオオオオ・・・・・・・・・・　ズガアァァアアァアァ！！！！

「バカが・・・マジで、まともに受けやがった・・・　はっはー！くたばちまいやンの！！！はぁーっはっはっは！！」

楓牙は高らかに笑う。

そう・・・自身の勝ちだと確信して。

第１２１話　猛り立つ怒り（後書き）

ありがとうございました！

はい！ごめんなさい・・・本格的な反撃は次話になっちゃいました・・・

ガンバリマス！！

第１２２話　決着・使役する者の格の差（前書き）

よろしくお願いします！！
はい～やっと決着でッす！！

第１２２話　決着・使役する者の格の差

「ハァーッハッハッハッハァーッ！」

楓牙は高らかに笑っていた。

そう自分の勝ちを信じて疑わなかったからだ、

だが・・・

彼は信じられないものを見た・・・

「・・・・・な・・・・に??」

自信の最強の技が直撃し・・・跡形もなく切り裂かれているはずの男が・・・

衣服すら破れていない様子で立っていたのだ・・・

「ば・・・ば・・か・・・なぁ・・・・　オレの・・・・マジの全力だ

ったぜ・・・　今の？何で無傷・・？何で服すら破れていねぇ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・呆然とし立ち尽くしていた・・・

『この戦い・・・お前が一方的にしゃべって・・・攻撃して・・・
　そればっかりだったよな・・・　振り返るとな・・・・・』

怒りでどうにかなりそうだったカイトだが・・・

こんなに相手が呆然として・・・そして震えてたら・・・さすがに逆に冷静になってくる・・・

しかし許すつもりは毛頭無いようだ。

楓牙は口を開く・・・

「こ・・・答えになってねぇ！！　なんでだ！！おまえ・・・いったい・・・・」

楓牙は戦慄した・・・震えも止まらない・・・

こんな感覚・・・・・・あの前部長以来・・・・　い・・・いやそれ以上の・・・

『お前、風を統べるって言ってたけどよ・・・　本物の風の力・・・見せてやるよ！』

ドンッ！！！！

楓牙と同じ様に・・・

風を体に纏う・・・

「！！！なっ！！！！」

驚いたときにはもう遅い・・・

一瞬で間合いを詰められ、鳩尾に、

ドボォッッ！！

拳の一撃を入れられた・・・

そして追撃の風の斬撃が襲う・・・

ズバァァアア！

「グッガァァァ！！　なっ・・・か・・・かぜを・・・！」

吹き飛びながらも・・・・

楓牙は・・・動揺していた。

風を使った攻撃を受け・・・このオレがここまでのダメージを？

風斬の大妖である自分が・・・　まさか同じ属性の攻撃でここまで・・・？

それは・・・

雪女を氷漬けに・・・　人魚を水に沈め・・・　炎龍を焼き尽くす・

・・それと同じだ・・・

つまりは・・・

（こんなん・・・ありえん）

楓牙は上空高く飛ばされた・・・が！

パシッ！！

カイトは既に楓牙が飛んだ位置まで先に来ており、

左手でその胸倉を掴む。

「なにィ！！！」

再び驚愕した・・・

その異常なスピードに。

『簡単に統べるとか言うんじゃねえよ。　お前の攻撃がオレに効かなかったのは・・・　風は・・・お前には従わず、オレに従ったからなんだよ！』

「な・・・なに・・・？」

そう言うと・・・カイトは空いたほうの手を握りこむ・・・

『風神一天（ふうじんいってん）・・・』

その手に風が集中していく・・・・・・

楓牙の様な風じゃない。

無駄に暴れて周囲を壊すのではなく・・・

唯手に集中していく・・・

極限まで圧縮された風・・・いや暴風。それは一切回りに漏れていない。

拳に圧縮した暴れ狂う風を閉じ込めているかのような！！

体の震えが止まらない・・・

「！！！！　　まっ・・・・！」

『斬光覇（ざんこうは）！！！』

キュルルルルル！！！！　ドゴオオオオオオオ！！！

風を・・・　いや暴風を纏った拳が楓牙の鳩尾を貫いた！

「グガアアアアアアアアアアァアアァアアァァァァ！！！！！！」

拳が楓牙を貫くほぼ同時！

解放された風たちは楓牙を蹂躙するかのように暴れ回り・・・　最後には楓牙を地面に叩き落した！

あたり一面には巨大な砂埃が舞う・・・

『仲間を・・・　オレの仲間達を傷付けようとした報いだ・・・』

地面にめり込んでいる楓牙を見下ろしながらそう吐き捨てた。

第１２２話　決着・使役する者の格の差（後書き）

ありがとうございました！！

まだ　九曜君が要るのに全力全開でやっちゃっていいんですかね・・

・　苦笑

とりあえずがんばれーカイト！！

では！

第１２３話　強大な力の代償（前書き）

よろしくお願いします！！

ちょっと・・・短くなってるのはごめんなさい・・・

上手い事話と話の間・・・きるの難しい・・・

ガンバリマス！

第１２３話　強大な力の代償

上空高くにいたカイトは動かない楓牙を見ると、

地面へと降りていった。

『・・・ふう　力・・・使いすぎたな・・・　だがまだ終わってない・・・　皆のところへ行かないと・・・』

にじみ出る汗を拭き・・・

直ぐに頭を切り替え・・・　公安本部へ行こうとしたその時、

「ぐっ・・がぁ・・・　ふぅ・・・　ま・・まて・・・よお・・・」

声が聞えた・・・

『・・・マジで意識あるのか?頑丈だな・・・　3日間は目が覚めないと思ったけどな・・・　あきれたな・・・』

そう言う。

実際にこいつのタフネスには驚嘆に値していた。

「けっ・・・　オレも・・・びっ・・・くりだ・・・よぉ・・・そう構えんなぁ・・・　無理・・・だ・・・指の一本・・・動かせねぇンだ・・・」

大の字で倒れたまま楓牙は話した。

『何のようだ?今度は・・・?』

確かに・・・

妖気も何も感じない。

さっきの一撃で全て使ったようだ。

「へ・・・へへ・・・　1つだけでいいんだぁ・・・教えて・・・くれよ・・・　おまえ・・・なに・・・者なんだ・・・？　この・・・・オレを・・・　こんなにまで・・・すンなんて・・・・よ・・・・」

明らかにボロボロなのだが・・・　男は笑いながら・・・言う。

この男・・・精神力が凄まじい・・・

『・・・』

黙っていたのだが・・・　ここまでの状態になれば・・・何も危険はないだろう。

バラした所で問題があるわけじゃないしな。　（まぁ・・・校則違反だけどね♪）

『オレは精霊魔導師（エレメンタル・マスター）、自然界の精霊を統べる妖・・・だ。』

一言そう言うと・・・

返事を聞かずその場を去った。

「へ・・・へへ・・・　エレメン・・・ト・マス・・・ターっていやぁ・・・　マジか・・・根源の・・・妖・・・じゃねえか・・・

クソッ・・・　かなわ・・・ねぇ　わけだな・・・自然の・・・
ちからぁ・・・　つかう・・・おれじゃ・・・」

そう言うと、完全に気を失ったのか、楓牙は動かなくなった・・・

公安本部へと向かう途中・・・

足が縺れ・・・視界が・・・・ぼやける・・・

『ぐぅ・・・・　さすがに・・・・・　きついな・・・・』

膝を付き・・・頭を右手で支える。

無理もないだろう・・・

先ほどの楓牙との一戦・・・　傍から見れば圧勝のようだったが・・

・実はそうでもない。

風斬の大妖と呼ばれる妖「カマイタチ」。

大妖に分類される妖の力は・・・侮れない。

それは楓牙も例外ではない。

それが証拠に彼が使役するその風を簡単に支配できるはずもないほどの・・・ものだった。

カイトは・・・

体中の力を奪われたような感覚に襲われていた。

楓牙との前半戦・・・

防戦一方だった時、

手を出さなかったのではなく出せなかったのだ。

それほど彼が使役している風の力は凄まじい。

その上仲間たちも危険にさらされている。

《時間的》にも敵の《力量的》にも最悪だった。

その為、カイトは時をかけ術式を完成させていった。

強大な力・・・彼の風を上回る風を使う為に、

精霊魔導師の力・・・

それは字の如く自然界に存在する精霊たちの力を使う。

それは自身の魔力を削って使うのだ。

簡単に言えば自分の魔力・・・即ち精神力を餌とし使用する・・・

時間を掛け行った術式は自身の魔力を何倍にも増幅する術式。

【天空魔法陣（てんくうまほうじん）】

ただし・・・リスクはある。

日に一度だけしか使えない上　魔力が上がるのは魔法陣の下にいる間だけだ。

日に一度しか使えない・・・ってのはカイトが付けた制約・・・というか限界点。

使おうと思えば使えるが　複数回使用したならばどうなるかわかったもんじゃない・・・

最悪死ぬ危険性もある・・・

今でもかなりやばいのに・・・

そして　魔方陣の外に出れば使った力に見合うだけ　肉体的にも精神的にもボロボロになる・・・

それほどまでしなければならないほどの相手だった。

それに、ああ言う性格の男に完全に負けを認めさるのは、自分と同じ属性で・・・同じ土俵に上がってその上で核の違いを見せ付けるのが一番効果的だ。

早く戦いを終わらせる為に・・・

そしてこの代償がこれ・・・

『確か・・・女神さん・・・　「んでまあその辺のＲＰＧみたくレベルが必要！！っとかは無いから安心してね！」っていってたけど・・・　オレの基礎体力・精神力を上げないと・・・　術使っただけで、逝ってしまいそうだ・・・』

頭を抑えながらも苦笑する・・・

『でも・・・こんなとこで、何時までも時間食ってる場合じゃない。つくね・・・みんな・・・・　急いで・・・行かないと。』

自分の体を奮いあげ・・・　公安の本部へと急いだ。

第１２３話　強大な力の代償（後書き）

そりゃーね・・・

ジャックさんならともかく　（苦笑）

大妖！！って分類してる（オリジナルですけど！）妖怪をあっさり倒しちゃって・・・

代償みたいなのが合ったみたいです・・・

さて・・・残りはあの狐だけですね・・・

どうなるか・・・

お楽しみに！！

ではありがとうございました！！

第１２４話　人間であると言う事（前書き）

よろしくお願いします！！
この話はほぼ原作引用ですー！！
オリジナリティないですね・・・ごめんなさい・・・　苦笑
カイトくんの名前だけは出てきますが・・・
今必死に向かってると思います・・・　苦笑

では！

第１２４話　人間であると言う事

【公安本部】

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

九曜はつくねに「正体」を晒せ！

と詰め寄るが。

つくねは正真正銘「人間」。

妖としての正体なんか出せるはずも無い。

九曜は薄ら笑いをし・・・

「おまえ・・・まさか本当に人間なのか・・・・・・・？」

気味が悪いほどの笑顔だ・・・

「止めてください！つくねはっ・・・　つくねは！」

モカが必死に止めようとするが、

ドスッ

九曜の拳がモカの腹部へ一撃・・・

モカは倒れ・・・

「うわあああ！！モカさんっ！！」

つくねは叫ぶ。

そしてつくねへの制裁が始まった・・・

九曜は薄ら笑みを浮かべながら・・・つくねを蹂躙する。

無抵抗のまま・・・抵抗する事すら出来ない速さでの攻撃で・・・

――やば・・・い・・・　殺・・・される・・・　モカさん・・・

カイト・・・みんな・・・・―――

つくねは痛みが強すぎて視界が薄れかかった。

目の前には狂気の表情の九曜が見える・・・

――ああ・・・こんな妖怪の学園で最後は1人ぼっち・・・・・　ここでは人間ってだけでこんなにも危険と隣りあわせだったのか・・・

――

もう・・・立つ事どころか身動きすら取れない。

そんな時・・・

見に覚えのある声がかすかに聞えてきた。

「・・・おいおい　待てよ九曜　約束が違うぞ・・・　本当に死んだらどうするつもりなんだ?」

(知ってる・・・覚えているぞ・・・　こ・・・この声は・・・・・・)

そう・・・つくねの正体が人間であることを公安にばらしたのは・・・

元・美術教師：メデューサ　石神　瞳だった。

「こいつらを殺すのはこの私だぞ?やりすぎは困る　私は新聞部に地位も名誉も奪われたんだ。髪をちぎられた挙句に新聞でさらし者にされた。」

そんな石神をうすら笑みを出しながら九曜は見ていた。

「こいつらを殺す権利があるのはこの私だッ!全員皮を剥ぎバラバラにしてからその首を石にしてやらねば気がすまないッ!!」

完全に自業自得だ・・・・・・・

石神は復讐心の塊と化していた。

（・・・大変だ・・・　こいつらの狙いは・・・はじめから新聞部全員の命・・・だったんだ・・・　みんな・・・・・逃げッ・・・）

つくねは叫びたかったが体が全く動かない。

そこへ石神がつくねをムリヤリ起こし・・・

「やっぱり人間だったんだねぇ・・・つくね君・・・　これで堂々と君達を皆殺しにして復讐を果たせるよ・・・　モカを解放できる君はこのザマ・・・そして　もう1人・・・」

石神はニヤッっと笑った。

「あの男・・・御剣怪斗・・・あの男は公安の楓牙がもう殺してしまってる所だろう・・・　もう君には手がないさぁ・・・」

クククッと笑う。

（そ・・・そん・・・な、カイトまで・・・・・・）

つくねは更に絶望する・・・

「冥土の土産に教えてやろう。なぜ君の正体が気付いたのかをな・・・　覚えているか？私の髪で君の体中を噛み付いたことを・・・あの時君の正体に気付いたのさ君から紛れも無い「人間の味」がしたからね・・・　フフッそれにしても　よくもやってくれたよ　人間の分際で・・・」

石神の蛇の髪がゆっくりつくねに迫っていくその時、

「・・・おい　どいてろ石神」

ゴウァァァッ

九曜が・・・

炎を纏い直ぐ後ろで構えていた。

「つくねが「人間」であると分かった以上　新聞部を潰す理由は十分　用無しのそいつは掟に従い今すぐ殺さねばならないそれは公安である私の役目だ。」

手に炎を集中させる・・・

「チッ・・・　だがつくね以外のメンバーを殺すのはこの私だぞ」

石神は睨みながらいうが・・・

「知らないな」

初めから約束など守るつもりは無かったようだ。

無造作に集めた炎をつくねが倒れている場所へ放った。

カッ　　ゴアァァァ！！！

つくねがいた場所は一瞬にして炎に包まれた・・・

「キサマッ・・・」

石神は怒っていたが・・・それ以上に九曜の熱気に戦慄していた・・・

（くっ・・・何て熱だ！これほどの炎を操るとは九曜とは何者だ！？人間がこれを喰らえば骨すら残るまい・・・）

そう思っていたが、

「・・・・・・チッ　女め・・・」

九曜が忌々しそうに攻撃した場所を睨んでいた。

石神もそちらを見ると・・・

モカがつくねを間一髪助けていた。

「赤夜萌香!!（目を覚まして助けていたか・・・　ククク・・・
これは思わぬ見せ物だな）」

そう言うと同時に石神は身を隠し完全に傍観者の位置に立った。

残酷で悲惨な最高のショーを見るために・・・

「モっ・・・モカ・・・さん」

つくねは必死にモカの方を見る。

「つくね・・・わたしの十字架(ロザリオ)を外して　大丈夫・・・人間だってばれても・・・私がつくねを守るから・・・絶対に。」

涙を流しながら・・・つくねを見つめる・・・

「・・・・！　（モ・・・モカ・・・さ・・・ん）」

必死に手を伸ばし外そうとすが・・・　視界がぼやける・・・モカが3人に分かれて見える・・・

なんとかロザリオに触れるが外れない。

（ひどい・・・　どうしてこんなになるまで・・・つくね・・・）

「つくねぇ・・・」

モカはつくねを抱きしめた。

「バカな女だ・・・　自分のやっていることがわかっているのか？その男は人間なんだろ？それを承知で助けるとは・・・・」

九曜がゆっくりと近付き・・・そして表情を変えた。

「この妖の裏切り者め！　おまえがやっていることは学園に対する重大な反逆行為ッ！　十分に極刑に値するッ　邪悪なクズどもめ我が炎で骨の髄まで浄化してくれるわッ！」

再び九曜は炎を手に集中させる。

モカは・・・つくねを抱きしめる力を強めた・・・

身を挺してでも・・・

そして・・・

「死ね」

無情にも九曜はそう言い放ち　手に炎を・・・

つくねに・・・・・・

第１２４話　人間であると言う事（後書き）

ありがとうございました！！

第１２５話　人間の・・・　月音の味方（前書き）

久しぶりの連続投稿ですー！
よろしくお願いします！！

第１２５話　人間の・・・　月音の味方

無情にも九曜は炎を放とうした。

その時！

「危ない！！！」

誰かの声と同時に植物のような物で九曜の手を拘束。

炎の攻撃の初動を防いだ。

「何よ・・・モカだけじゃ全然頼りにならないんだから　やっぱり私がいないとダメね！」

「くるむちゃん！」

くるむだった。

幻術を使い九曜を拘束したのだ。

（助けに来てくれたんだ・・・くるむちゃん・・・）

そしてもう1人。

「つくねさん酷いケガですぅ　早くお薬を塗らないと！」

「ゆかりちゃんまで！」

ゆかりはすぐにつくねの元へ駆けつけた。

2人とも何とか間に合ったようだ。

九曜は突然の乱入・そして裏切り行為に心底怒りに震えていた。

そして手に絡まったものを燃やそうとするが・・・

（・・・何だ？これは　植物のつたか・・・？いや・・・それにしては実在感がない・・・炎で燃やせない・・・！　つまりは・・・なるほどな・・・幻術（まやかし）の類か！）

そして九曜は更に妖気を解放した。

ヴォォォォォ！！！

「笑止ッ・・・・・・こんな子供だましの術で私の動きを封じるとは・・・・・・」

九曜を中心に妖気が吹き荒れる・・・

「う・・・わっ！幻術が・・・」

くるむは必死に抑えようとするが、

妖気のレベルが違う！

幻術が完全に返されてしまった。

「全員まとめて塵にしてくれるわッ！」

そう言い炎を放とうとしたその時、

ゾクッ・・・・

九曜に寒気が走る・・・

「おいおい何やー　ホンマえらいことになっとるな・・・」

入り口から・・・誰かが入ってきた・・・

「え！・・・・あ」

「キサマ・・・・」

入ってきたのは。

「「「ギン先輩！！」」」

新聞部・現部長　森丘銀影だ。

突然の登場にくるむは驚く・・・

「どうして・・・？だってさっき・・・」

ギンは来た理由を言わず。

「話しは後や　こないなってもうたらしゃあない・・・とっととカタぁつけるで」

頭を掻きながら九曜の前にまでくる。

「・・・く　何なんだ一体っ・・・お前らそろいもそろってこの私に牙をむきやがって　私はこの学園の「正義」だぞッ　全員どっかおかしいんじゃねぇのかッ！」

おかしいのはお前だ！っと突っ込みたいが、ギン先輩の方が早かった。

変身を解き駆け出す。

（確かに正気やあらへんかもな・・・けどオレかて仲間失うのはもうゴメンや・・・）

決意は固い！

「・・・ったく　お前らまとめにゃならんオレの身にもなれっちゅうんや　ボケェ！！　問題ばっか起こしおって　お前らホンマ　アホばっかりやー！！」

ドン！！！

まさに瞬速・・・

一瞬で間合いを詰めた。

「ぬうううぅァァ！！」

九曜も迎え撃つ構えだが、

「・・・な！！」

目の前の男が・・・まるで分裂したかのような錯覚に陥る。

その次の瞬間！

ドン！

傍から見ればギンは九曜の横をすり違っただけのように見えるが・・・

ドドドドドドドドッッ！！！

打撃が・・・遅れて九曜の全身を襲った。

「がああああああああァァァァ！！！」

そして九曜は地面に倒れた。

（速い・・・　この男・・・すれ違う一瞬で無数の打撃を・・・
コイツ・・・瞬速の大妖ウェアウルフか・・・・・！）

石神は驚きながら見る・・・

「正義がなんぼのもんや　ただウチの部員に手ェ出した奴ァ散らす！よう覚えときやアホー」

ギンは倒れた九曜を見ると、そう吐き捨てた。

「ギン先輩！！」

くるむとゆかりが歓喜の笑みを浮かべながら近付くと・・・

むにゅ！

ギン先輩が・・・

くるむの胸を鷲づかみ！！！！

「はっは♪たすけてやったほうびやー　やわぁ～」

むにむにむに・・・・しっぽをふりふりふり♪　胸をむにむにむに・・・♪

くるむはわなわなと震え・・・

ゆかりは顔を赤らめながら・・・

興味津々！！って感じにずーっと見ていた。　笑

・・・・・・・・・・・・・・・・バチーーーーーーーン！！！

「ぎゃあ！」

ビンタ一閃！！

モカは笑っていた。

（・・・よかったねつくね。みんなつくねの事　人間だって聞いたはずなのに・・・それでも助けてくれたよ・・・）

つくねもモカと同じように感じていたのか、目に涙を浮かべていた。

みんな・・・つくねの方へ歩み寄る。

「みんなありがとう・・・」

モカがうまくしゃべれないつくねの代わりに・・・

礼を言う。

「わ・・・わたしはつくねの為だもん！」

くるむは恥ずかしそうに言う・・・

「あはは！くるむさんテレてるですー！」

ゆかりも笑う。

「ちょっと！ゆかりちゃん！！」

みんな笑った・・

「あっ！そうだ・・・カイトは・・・？」

モカは顔を暗めながら言う・・・

つくねもモカの話を聞き・・・顔を暗める・・・

「大丈夫！カイトわたし達の為に戦ってくれてるんだ！つくね達を助ける為にね！さあ！今度はわたし達が助けるバンだよ！」

くるむは明るくそう答える・・・

本当は心底心配だった・・・

でも・・・今2人に心配かけるわけには行かないと感じ（主につくね♪）

そう答えたのだ。

みんなカイトの事は不安だったが・・・

とりあえずつくね達が無事だった事を喜び、カイトのところへ行こう！と言って此処を離れようとしたその時！

コアアアァァァ・・・・・・

「！！！？ッ」

真っ先に気付いたのはギン先輩だ！

背後から・・・

凄まじいまでの妖気が迸ってきた。

第１２５話　人間の・・・　月音の味方（後書き）

ありがとうございました！！

第１２６話　公安幹部の片鱗？（前書き）

よろしくお願いします！！

第１２６話　公安幹部の片鱗？

後ろから凄まじい妖気の迸り・・・九曜だ！

「危な・・・　みんな下がれーッ」

全員を九曜から遠ざける。

石神　ｓｉｄｅ

後ろで傍観している石神が笑う・・・

（フフ大したもんだよ・・・新聞部のクズどモ・・・　だが・・・
今回は相手が悪かったようだな・・・）

辺り一体焼きつく程の妖気が支配する・・・

（お前らはよくやった・・・公安のトップ２の一角・・・九曜を本気にさせるなんて・・・だがここまでのようだな。さあすがにこい

つあお前らには手には負えまい・・・）

「なんという美しい姿・・・　これが九曜の「正体」か・・・　ふふ・・・芸術（アート）だねぇ　これで見物にまわった甲斐があったよ　それじゃあ新聞部のクズ共・・・この私から全てを奪った罰だ。せいぜい苦しむがいい・・・・！」

最後の方は・・・新聞部の敗北を確信し・・・声に出して笑い・・・

興奮したように見ていた。

全身から発する熱気・・・そしてこの姿・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ゴアアアアアアアアアアアア！！

「「「きゃあああああああああ！」」」

思わず叫ぶ・・・

「よ・・・妖狐!高位の者になると神として祀られることもある日本の大妖怪や・・・!これが九曜の正体かァー!!」

ギンも叫ぶ・・・

その叫んだ内容を聞いたとたん・・・

皆戦慄した・・・

「焼けつくみたい・・・この場にいるだけで!!こんな奴どうやって倒すのよ!!」

くるむも叫ぶ・・・

ゆかりは・・・・・　その圧倒的妖気に・・・ただ震えていた。

「ニンゲ・・・ン　青野月音　お前・・・本当に人間なんだろう?この妖だけの学園の存在を知った人間は・・・必ず殺さなくてはならない!それが学園の掟だ!学園の存在を外部に漏らしてしまうかもしれないからなっ!その危険な人間を・・・なぜ妖であるお前たちがかばうのだ新聞部!　どこまで私にたてつけば気がすむ・・・」

次の瞬間!

九曜は目を見開いた!!

「お前達全員ッ　学園の正義を司るこの九曜がここで葬ってくれるわァ！！！」

雄たけびを上げ！

完全な臨戦態勢に入る・・・

――人間・・・！そうだ・・・そのせいで今こんな大変な事になってるんだった・・・　オレが人間だから・・・　人間なのに妖怪の学園に入ってしまったから・・・そしてそれが公安委員の九曜にバレてしまったから！――

つくねは・・・自身のせいだと・・・　自分を責める・・・

（全部・・・オレのせい・・・　オレのせいでみんなが殺されるかもしれないなんて・・・）

そう・・・自分のせいで友達が殺される・・・・・・・

「つくね・・・そんな顔しないで・・・大丈夫だよわたし達が一緒だから　それにカイトだって・・・　つくねの為に・・・今戦ってくれてる・・・　そして、きっと来てくれる。」

（モカさん・・・）

つくねの表情からモカが答えた。

続けて・・・

「そうよ！つくねはケガしてるんだから・・・じっとしてて！（カイトとの約束・・・必ず守って見せるんだから！）」

「後で　わたしが治療してあげるですぅ！」

くるむとゆかりがつくねの前に立ちはだかる！

（くるむちゃん・・・ゆかりちゃんまで！）

くるむとゆかりも・・・つくねの味方だ！

どんな事があっても・・・

そう例え人間だったとしても！

「んなことよりつくね・・・・・」

そこへギン先輩が・・・爆弾発言を!!

「ホンマんとこ自分の正体ってなんや?　ホンマに人間やったりして」

ドキッ!　ギクッ!!!　ドキンッ!　ドキーン!

・・・・・・・・・・・・・・・みんな面白いように反応する!

苦笑

「あ・・・その　実はオレ・・・・」

つくねが・・・・告白しようとする・・・・

そんなつくねに・・・

石を拾い投げつける。

コンッ!　「たっ・・・・」

「アホ・・・・冗談や　言わんでえぇ　この学園じゃ他人に自分の正体明かしたらあかんのや!・・・・まあみんなバレバレやけどなー（笑）」

「ギン先輩――――」

ギン先輩はつくねのほうを向くと・・・・

「それに　お前の正体なんかな――――　だーれも知りとーなんかあらへんわ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

みんな・・・つくねの味方だ。

そしてこの場にまだいないカイトもきっと・・・・・

「キサマらァ・・・・　その男が人間だと分かってもあくまでシラを切る気だな・・・・？この・・・救いようの無いクズどもめッ・・・・・　フンそれにあの男はこの場にはこれんな、既に楓牙に殺られている。奴から連絡もきていた。　直ぐに同じところへ送ってやる！」

九曜は妖気を高めていく・・・・・

「そんなことウソよ！カイトがあんな奴に負けるわけ無い！！」

「そうですぅ！　それにカイトさんは絶対約束を破ったりしないです！」

「うん！！」

「・・・あいつばっかり・・・くそぅ・・・・・・・」

九曜の言う事を皆否定。

皆カイトを信じている。

ギン先輩は微妙な発言だったが・・・・・　苦笑

「ふん・・・現実を見れないクズどもが・・・　殺す！！」

九曜は４つある尾を合わせた・・・

ガゴアッ！！

（！！何や・・・これ・・・　奴の尾の先に妖気が集中して・・・・・
やばいッ　何か仕掛けてくるッ！！）

ギンが驚愕していたその時！

「朧・火炎車!!!　　我が力を思い知るがいい!!」

ゴガアアアアアアアア!!

1つの炎を中心に3つの炎が回りながら迫る。

（あかんッ!この位置は・・・オレがかわしてもうたら後ろのアホどもが・・・・・!!）

ドガゴオオオオオオォォォッ

朧・火炎車が命中した瞬間!燃え上がる!!

新聞部が立っていた所を・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

第１２６話　公安幹部の片鱗？（後書き）

ありがとうございました！！

第１２７話　全開　戦闘形態（前書き）

九曜の最終形態は・・・原作を見ると分かりますが・・・
人型ではありません　笑

尻尾があるし、二足歩行だけどなーんか足がヘンだし　耳はエルフみたいだし・・・

詳しくは原作で♪

カイト君！
間に合えー！！　苦笑

では！よろしくお願いします！！

第１２７話　全開　戦闘形態

カイト　ｓｉｄｅ

体中が悲鳴を上げながらも・・・

カイトは歯を食いしばり、公安本部へと向かっていた。

『もう少し・・・　後もう少し・・だ。』

苦痛の表情を隠せない・・・

隠そうとしているが・・・

やはり魔法陣下で力の使用しすぎが祟ったのか、

見ているこちらが・・・逆に苦痛に感じるほど・・・だ・・・

常人ならば・・・いや妖怪であってもそれは明らかだ。

だが・・・それでもカイトが止まる事は無い、

倒れる事は無い。

仲間(みんな)が・・・危険に晒されているのだ。

自分の大切なものが・・・

その思い一点がカイトの瀕死とも言える体を突き動かしていた。

以前・・・カイトはギン先輩にハッキリと言っている。

『皆に手を出そうとするのなら・・・　オレも黙っていません。例え部長命令でも・・・』・・・と、

今正に手を出されている・・・　オレの大切な友達に・・・

『倒れてられない・・・止まってなんかいられない・・・　死んでも絶対に必ず皆助ける・・・』

そう言ったその瞬間！

ドガゴオオオオオオォォォッ！！

凄まじい轟音が聞えてきた。

場所は直ぐ側・・・

それが連想させるのは・・・

皆の・・・・

『みんな!!!』

カイトの全身に纏わりつく疲労感・痛み・・・全て吹き飛ぶ。

どこに彼にそんな余力があったのか・・・

カイトは、移動スピードを更に上げた!!

公安の本部はもう目と鼻の先だった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

新聞部　ｓｉｄｅ

熱気が体中を襲っていたが・・・

モカ達に怪我はなかった。

あれ程の大爆発だったのに・・・

その真相は直ぐに皆分かった。

爆煙がはれ・・・視界が戻った時。

見たもの・・・皆が驚愕・・・

ギンが・・・・・・・

仲間の前で仁王立ちしていたのだ・・・・・

「先輩!!!」「ギン先輩ィィィ!!」

皆叫ぶ・・・

誰よりも素早い先輩が・・・

「ボケ・・・　オレのボケェェ・・・・・」

そう呟きギンは力尽き・・・・倒れた。

皆が駆けつける・・・・・

「な・・・何で　避けないの・・・？誰より素早い先輩がッ・・・・
まさか・・・わたし達を庇って・・・・」

倒れたギン先輩にみんな動揺する。

そう・・・　部長として・・・そして・・・仲間の為に、身を挺して庇ったのだ。

「オ・・・オレのせいだ・・・・」

つくねが・・・

「え？」

モカがつくねの方を見る。

「オレのせいでギン先輩がこんな目にッ・・・・・」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

つくねが・・・・再び自分を責める。

その時！

「フハハハハッ　何が瞬速の大妖ウェアウルフだッ　所詮私の相手ではなかったようだな！」

九曜が高らかに・・・・言った。

皆九曜を睨みつける。

しかし・・・ギン先輩が戦闘不能・・・・

頼れる先輩が・・・・

「・・・まずは1人・・・お前達が束になっても私の足元にも及ばないということを・・・今から思い知らせてやろう！」

獣の姿をしていた九曜がゆっくりと・・・

姿を変化させていった。

その姿は・・・

二本足で立つ。

即ち人型のようだった。

「・・・・！？　九曜の姿・・・人型に戻っていく　なぜ・・・？私たち相手じゃ人間の姿で十分ってこと！？」

くるむが言ったが・・・

ゆかりは気付いていた。

「・・・・・・・・・違う・・・！違いますぅ　これはっ・・・人間の姿じゃありません！　圧縮された妖気・・・無駄の無い型（フォルム）これは・・・研ぎ澄まされた戦闘形態ですぅ！！！」

ゆかりは・・・震えている・・・圧倒的な力を目の前に・・・・・・・・

「さあ・・・次は誰が死にたい？」

九曜が・・・笑いながら言う・・・

戦意喪失・・・とまでは言わないが。

皆・・・震えていた・・・

その圧倒的な妖気に・・・

第１２７話　全開　戦闘形態（後書き）

ありがとうございました！！

第１２８話　死ぬのはお前だ・・・　九曜　ｖｓ　怪斗（前書き）

よろしくお願いします！
昨日に続いて連続投稿です！
投稿できる時にしとこうかなっと思いまして・・・

ようやく　決戦です！！
がんばってぇーーー！！

では！

第１２８話　死ぬのはお前だ・・・　九曜　ｖｓ　怪斗

九曜の。

「次に誰が死にたい？」

その言葉に皆が恐怖していた・・・

その時！

トンッ・・・・・・・

九曜の肩に手を触れたものがいた・・・

「？」

九曜が振り向いた。

『次に死ぬのは・・・お前だァ！！！』

ドガアアァァァ！！

九曜が振り向いたその瞬間、

隙だらけの眉間に、魔力を込めた拳を叩き込んだ！

「ガハァッ！！」

ベキベキ・・・　バキャアアァァン！！

九曜は奥の部屋の扉を突き破り、奥まで吹き飛んでいった。

皆・・・・一瞬何が起こったのか・・・分からなかった。

『皆・・・・無事・・・じゃないな。・・・ギン先輩・・・・』

倒れているギン先輩の方に行き。

『健やかな風（リジェネ・サークル）の囁き・・・・』

ギン先輩に治癒の精霊術を施す。

すぐに完全に快復などは出来はしないが、応急処置にはなる。

「「「カイト！！」」」さん！」

ようやく事態が把握できたようだ。

カイトが来てくれた・・・

「よかった・・・　無事だったんだ・・・よかったよぉ！！！」

くるむが泣きつく。

「ほんとですぅ・・・・あの時・・・わたし達・・・おいていっちゃって・・・　ううぅ・・・・」

くるむに続き・・・ゆかりも泣き抱きついてきた。

「カイト・・・ほらやっぱり来てくれた！来てくれたよつくね・・・・！」

モカも涙を浮べてた。つくねを支えていた為、

他の2人のように飛びついてきたりはしなかったが・・・

つくねがいなかったら・・・飛びついてきそうだな　苦笑

（カイト・・・・）

つくねも目に涙を溜め・・・

それは一筋の雫となり・・・

流れ落ちた。

『こっちのセリフだ。無事でよかった皆・・・　つくねも・・・良かった。』

カイトもうっすらと涙を浮かべていた・・・

だが・・・　安心して入られない。

まだ、終わってないのだ。

『このまま・・・再開を喜び合っている場合じゃない・・・　皆はここを離れてくれ。アイツが戻ってくる。』

そう言い九曜を吹き飛ばした方を見る。

確かに・・・そちらから・・・妖気圧力（プレッシャー）が・・・徐々に・・・確実に強くなっている。

「ダメ!!又・・・1人になんて!それに・・・カイト凄いケガじゃない!!」

くるむは拒否する。

他の皆も・・・同様のようだった・・・

カイトは・・・それでも・・・

『いいから!!早くこの場から離れろ!!』

声を荒げる。

それはもはや怒鳴り声だった。

「「「!!!」」」

皆・・・突然のカイトの形相に驚いていた・・・

『悪い・・・　興奮した。　頼む・・・!少なくともギン先輩を早く病院へ連れて行ってくれ!つくねも・・・だ。』

カイトの表情は硬くなる・・・

『言い方を変えよう・・・　つくねを・・・守ってくれ。』

カイトは言い方を変えた。

『今のつくねじゃ直ぐには快復しない。つくねを守って・・・　そしてモカを覚醒させてくれ。こんなとこにいちゃそんなの絶対無理だろ？　気も休まらないってもんだ。』

カイトは苦笑した。

しかし表情は硬いままだ。

「でも・・・・」

モカもやはり賛同できないみたいだ・・・・

カイトの状態が悪いのは見て明らかだ。

医者じゃなくたって分かる。

もはや　ドクターストップの領域であろう。

『この怪我はオレの固有のものだ、どうって事無いさ。だから頼む！』

カイトはそう言っていたが・・・

皆安心できない・・・

特にくるむ達はこのままだと二度目の逃げ出しだ・・・

今度は・・・カイトが殺されるかもしれない・・・

その言葉だけが皆の頭の中を過ぎて行った・・・

その時！

「よくも・・・やってくれたな・・・この私に！！」

激しい炎と共に・・・九曜が姿を現した。

『ち・・・』

復活が早い・・・

隙だらけの眉間に叩き込んだ魔力強化の打撃なのだが・・・

自分が思ったよりも遥かにパワーダウンしているようだ。

「やはり・・・　キサマか・・・　楓牙はどうしたのだ・・・？」

睨みながら聞く・・・

『奴なら・・・今頃校庭で昼寝してるだろ。気持ちよさそうにな。妖通(ひとどお)りの悪いところだ・・・　寝るのには最適だ。誰にもジャマされんだろう。』

そう言うとカイトは九曜に指をさす。

『後はお前だけだ・・・この狐野郎が・・・』

ピクッ！！

九曜はカイトの言い方『狐野郎』に頭にきたのか青筋を立てていた。

「おのれ・・・　キサマ！我が炎で骨の髄まで焼き尽くしてくれるわ！！」

九曜は手に炎を集中させる・・・

その一瞬の間に！

カイトは再び間合いを詰めた。

『どいつもこいつも、おしゃべりがすぎる。　お前ら公安の連中はよぉ！！まあ　今回はオレもしゃべってたがなぁ！！』

「ちい！！」

九曜は避けようとするが。

ドン！！！

カイトの蹴りが炸裂。

「ぐう！！」

避けられないと思った九曜は防御の姿勢をとった。

『仲間（みんな）達を傷つけてくれた礼だ！たっぷり返させてもらう！！』

そう言うと・・・

拳と蹴りを多用した止む事の無い連撃！

ドン！ガッ！！　ズガァァァ！！

最後には、

右手を九曜の体に密着させる。

『我が右手に宿りしは、凍てつく波動！　彼の者に氷撃の捌きを。』

キリリリィィィ・・・・

密着させた右手を中心に術式が展開される・・・

その術式は九曜の体に刻み込まれていく。

『猛り立つ氷撃（フリーズ・クラッシュ）！』

パキィィィィ！！！

「ぐううう！！！」

九曜の腹部に凍てつく冷気の掌底破をぶち当てる・・・

ドガアアア！

九曜は再び吹き飛んだ！

「さすが！カイトぉ！！」

くるむが歓声を上げる・・・

しかし・・・その次の瞬間とんでもない物を見た。

ドスンッ・・・・・・

カイトの肩に炎の槍が突き刺さっていたのだ。

『が・・・・・　は・・・ぁっ！！』

その槍は瞬く間にカイトを炎で包む・・・

そして　カイトが吹き飛ばした方を見ると。

「くくく・・・威勢がよかった割には大した事無いな・・・　まったく効かんぞ・・・？　本当にキサマ楓牙を倒せたと言うのか？・・・だとしたら相当腕が落ちたんだな　アイツは・・・」

九曜が笑いながら　カイトを見ていた。

「「「カイト！！」さん！」」」

皆が悲鳴に似た叫び声を上げる・・・

そしてカイトの方へ駆け出した！

すると・・・

炎の中から手が出てきた！

『くるなぁ！大丈夫・・・だ！　早く行け・・・』

膝をつき・・・肩を抑えながらも九曜の炎を払いのけ、　カイトは九曜の方を見据えている。

（くそ・・・　こんなにオレは消耗しているのか・・・？　このままじゃ・・・　くそ！こんなもんじゃないだろッ・・・　オレは・・・）

カイトは消耗しきった自分自身に怒りさえ覚えた・・・

このままじゃ・・・　また・・・

「ほう・・・驚いた。この私の炎を・・・　攻撃は大した事は無かったがそのキサマの防御の力だけは評価するに値するな。だが・・・この私を侮辱した事は断じて許してはおけんな・・・」

先ほどと違い・・・

完全に余裕の笑みを持っている・・・

九曜は楓牙を退けたカイトをかなり警戒していた。

だが・・・　カイトの攻撃を数発受け、その警戒は杞憂と判断したのだ。

確かにそこそこの力はある、が　完全な戦闘形態と化した今の九曜には大したダメージにはなってない。

九曜は今度は両の手に炎を集中！

そして徐々に開いていく・・・

「我が炎で断罪してくれるわァ！・・・死ね。　朧・紅蓮剣（ぐれんけん）！」

両の手を開ききった途端！

巨大な炎の剣が現れ・・・

一閃のもとに断罪した。

ズガアアアァァァッ！！！！！

カイトがいた所を炎の斬撃により、跡形もなく破壊した・・・

第１２８話　死ぬのはお前だ・・・　九曜　ｖｓ　怪斗（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・

九曜つええ・・・・・・・

原作じゃ・・・あっさりだったような・・・

っと詳しくは原作参照してくださいね♪

カイト君！負けるなーー！！

ありがとうございました！！

第１２９話　人柱・・・（前書き）

よろしくお願いします！！
何か・・・戦いの雲行きが怪しくなっています・・・
カイト・・・
がんばれー！　苦笑

第１２９話　人柱・・・

石神　ｓｉｄｅ

影でじっと見ていた石神は再び笑う

（フフ・・・　やはりこの学園は・・・おもしろいね・・・　これほどの化け物・・・強者がごろついているんだから・・・）

跡形も無くなったカイトがいた場所を見て更に不気味に笑う・・・

（カイト君の登場には少々驚いたが、あの九曜相手じゃもはや意味は無かったってことだ。　くくく・・・精々絶望の中・・・死んで行くがいいさ・・・新聞部！）

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「そ・・・そんな・・・・」

つくねは・・・

膝を落とし信じられないような目で見ていた・・・・・・・・

「カ・・・イト・・・・・？」

モカも同様に・・・そしてくるむもゆかりも・・・・・・

「くくくく・・・　「仲間」とは素晴らしいなぁ　助けに来てくれて本当によかったろ？　新聞部諸君。」

パキッパキッ・・・

指を鳴らしながらつくね達のほうを見る。

カイトが・・・やられた・・・・・・

皆がそう思った。

その時・・・

『なんつう・・・顔してんだよ・・・　皆・・・　誰が・・・やら

れた・・・って・・・？』

カイトが・・・九曜の後ろ側に立っていた。

「「「「「！！！！」」」」」

皆驚き［石神を含む］と喜びが混ざったような顔をし、喜んだが・・・

カイトの状態は満身創痍なのは明らかだ・・・

それは九曜も気付いている。

「ふん・・・死にぞこ無いが・・・」

そう言い再びフラフラのカイトに止めと言わんばかりに攻撃をしようとしたその時。

「ま・・・まってーーーッ！！　オレ達の負けですッ！謝りますからッ！！正式に罰をうけますから！！！」

つくねが、もう見ていられなくなり叫んだ。

『ば・・・ばか・・・野朗・・・　つくね・・・・　何を!!』

止めようとするがつくねは止まらなかった。

「だから・・・もう許してください・・・　どうか・・・皆だけでも・・・見逃してください・・・!友達なんです　妖でも人間でも・・・　皆大切な・・・仲間なんです　だから・・・　どうかっ・・・・皆を助けてくれるのなら・・・オレは・・・」

つくねが跪き懇願をした・・・

他の部員はつくねに続くようにつくねの前に立ち

「ダメ・・つくねを・・・やるんだったら私を!!」

「ダ・・・ダメ・・・です・・・　わた・・・しの初めてのお友達なんです・・・!　お・・・お願いします・・・」

「ッつ!　そう・・よ!　大切な友達なの!お願い・・・　お願いします!!」

くるむ・・・ゆかり・・・そして　モカも、皆同じ事を言い前に立つ・・・

それを九曜は黙って聞いていた。

そして　九曜の表情から笑みが消えていた・・・

「・・・フフ人間の癖に見上げた奴だ。それに他の連中も私の　この圧倒的な力を前にまだこんなに勇気があるとはな・・・　貴様らの勇気に私も少し心を打たれたぞ・・・　いいだろう・・・お前たちの勇気に免じ　今回は助けてやってもいい・・」

九曜の予想外の言葉に皆驚いていた。

特につくねは・・・

だが・・・

1人だけ九曜を信じていない者がいた。

それは　カイトだ。

力を振り絞り・・・つくね達の前へと行く。

『てめ・・・ぇがそんなタマじゃねぇ事くらい・・・　分かってんだ・・・　猿芝居は・・・やめろ！いや・・・「狐」芝居か・・・？この三流役者が・・・』

つくねたちを庇う様にして前に立つ！

「カイト！ダメだ！！」

つくねがカイトに叫ぶ！！

九曜の情けを信じて・・・

しかし・・・

それは無情にも打ち砕かれる・・・

「くくくくくく・・・よく分かっているじゃないか・・・カイト君。　それはそうだ・・・　私がそんなことを言うわけないよな？　何が友達だよ・・・うすら寒くてヘドが出るよ・・・」

つくねはその言葉に・・・・・絶望した・・・

『この・・・外道・・・がぁ！！』

カイトが九曜を攻撃しようと構えるが・・・　力が・・・入らない・・・

（こりゃあ・・・　マジで　ヤバイかもな・・・）

魔力が・・・確実に下がってきている・・・

先ほどから行っている自己治癒能力強化のせいか・・・

攻撃・防御に転じる事ができない。

だが・・・治癒の方をやめれば立つ事もできないかもしれない。

そう考えていた時・・・

それは来た。

「カイト・・・　キサマから止めをさしてやろう　仮にも楓牙の「

敵」だ。見物しているといい！　愚かな人間め」

ゴアアアアッ！！

カイトに向け九曜は炎を飛ばす・・・

先ほどよりも遥かにデカイ炎だ・・・

カイトは、

（避けるわけには・・・いかない・・・・！！）

避けずに受け止める体制を作る・・・

その瞬間！

信じられないものを見た！

「うわぁあああああ！！！！」

ドゴオオオオ！！

「・・・おいおいおいおい・・・　面白くないな　お前が真っ先に炭になってどうする・・・」

九曜の攻撃を・・・受けたのは・・・

カイトを庇ったのは・・・

そう・・・人間であるつくねだった・・・

目の前で・・・カイトの目の前で・・・彼に直撃するはずの炎が・・・

つくねが生きながらにして焼かれていくのが・・・

まるで周囲がスローモーションになったかのように・・・

はっきりと見えた。

『なっ！！！！！！！！！！！！！』

ピキピキピキッ・・・・・・・・・・・・・

その瞬間・・・

カイトはまるで時間が止まったかのような・・・

世界が壊れていくような・・・

そんな感覚が体中を走った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第１２９話　人柱・・・（後書き）

原作でのつくねがモカを庇う勇気はすげー！って思っちゃいました♪
炎の固まりに・・・つっこんでいくなんて・・・
出来ませんよね？　苦笑

彼は今回も庇って飛び込んでしまいました。

・・・どうなってしまうのでしょうか・・・

では次話にて！！

ありがとうございました！！

第１３０話　深層意識の・・・闇（前書き）

よろしくお願いします！

大変な所を見てしまったカイト君・・・・

さて・・・彼はどうなってしまうのか・・・

駄文ですが暖かい目でお願いします～

カイト君の女のコに手を上げれないってお話の訳も含まれてます。。

では！

第１３０話　深層意識の・・・闇

？？？カイト　ｓｉｄｅ

【パキッ！！！】

なんだよ・・・・・なんなんだよ・・・コレ・・・・・

カイトはその瞬間・・・・・

世界が壊れていくような感覚に陥っていた・・・

時間はまるで止まってるようだ・・・

そして・・・

深い深い闇へと落ちていく感覚に襲われる。

もう何も見えないし聞えない・・・

底の無い闇に落ちて・・・落ちて・・・

そこで見たものは・・・

それは・・・半壊した城の映像・・・

声が聞えてきた・・・

《アカーシャ!!　来るな!　行けッ!》

???

だれだ・・・　この男は・・・・・・・　それになんだこの化け物・・・

どこかで・・・見たことが・・・ある?

《さようなら・・・　モカ・・・そしてジャック・・・・・　負けないで・・・2人とも・・・　私は愛していたわ・・・　モカもジャックも・・・・　それにジャック・・・もうちょっと早くに・・・貴方に会っていれば・・・きっと・・・貴方に・・・・・・・》

そう言うと・・・ゆっくり・・・その女性は化け物に取り込まれ、最後には食われてしまった。

男性(ジャック)?の方は・・・

その女性(モカ)?が言う時にはもう既に化け物に喰われてしまっていた・・・

ジャック・・・・?　誰だ・・・?それ・・・

それに・・・これは・・・・??モカ・・・か?・・・モカ・・・

2人いる・・・?小さい裏モカと・・・大きい表のモカ・・・?

い・・・や・・・・　ニテルガ・・・　ナニカガ　チガウ・・・・・・

ダレ・・・?

ナンナンダコレハ・・・?

シラナイ・・・・セカイ・・・?平行(パラレル)・・・世界(ワールド)ッテヤツカナ・・・

？

アア・・・マタシカイガ・・・・・・クラク・・・・・ナル・・・・　イシキガ・・・・・・・・・・・・

再び・・・・・・

暗い暗い闇の中へ落ちていく・・・・

そして・・・・・・

そこで目にしたものは・・・・・

背後には美しい夕焼け・・・

それをバックに腕を組んで歩いている2人組がいた・・・

「いい！陽一！！　女に手を出す男なんてサイテーなんだからね！！　正当防衛もみとめませんー！！いい！！」

「おいおい・・・そりゃ横暴じゃね？」

「ダメなの！ぜっーたい！　私と約束して！！ね！！！」

男の方は苦笑していて・・・

女の方は更にヒートアップしていた。

2人の・・・・　男女の風景・・・

コレハ・・・

これは・・・しってる・・・・　だが・・・

思い出したクナイ・・・・・・

ヤメテクレ！

意思とは裏腹に・・・

その映像は続いていく。

「はぁ・・・　分かったよ。約束する！　てゆうか、お前・・・昨日のニュース絶対見ただろ？　それで感情的になってんじゃないか？」

つっこむ男・・・とてもいい笑顔。

「う・・・　そーなんだけどさ！絶対に許せないじゃない！あんなのさ！！」

図星だったみたいだ・・・・

「あははは・・・　まあお前らしいわ・・・　しゃーない！約束だ。絶対そんなことはしないよ。　お前に言われなくてもな。オレはそんなことしないさ。」

顔を赤らめながら俯く女・・・　２人は恋人だろうか・・・
仲良く・・・　腕を組みながら帰っていく・・・

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――

すると・・・まるでノイズが走ったような風景になったと思えば・・
・場面が変わった・・・

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――

病院のベッドのようだ・・・
「おい・・・おい！！　た・・・たのむ・・・　オレを・・・おい
ていくな・・・」

男は・・・涙を流している・・・

その後ろには・・・家族だろうか・・・

立ち尽くし・・・涙を流している・・・

ヤメて・・・

「・・・ははっ　ゴメン・・・ね？　陽一・・・・　ずっと・・・・一緒だって・・・言ったのに・・・・・・・」

女は優しく微笑む・・・　痛々しい姿だ・・・　恐らくは交通事故・・・

ヤメテクレ・・・！！

「ゆき・・・な・・・」

手を強く強くにぎる・・・

「わら・・・ってよー　陽・・・一　　そ・・・だ、もう・・・・

1つ約束・・・　私との・・・約束・・・してくれる?最後に・・・」

女は微笑みながら　手を握り返しながら・・・言う。

「最後なんて言うな!　言わないでくれ・・・」

「すぐに・・・　「こっち」にきちゃ・・・ヤダから・・・ね・・・陽一・・・は・・・直ぐズルする・・・から・・・　くぎを・・・ささな・・・い・・・と・・・　かんた・・・んに・・・　きたら・・・ゆる・・・さない・・・から・・・　わたしの・・・ぶん・・・まで・・・・・・・・・」

そう言うと・・・握っていた手がだらりと下がる・・・

「ゆきなぁぁぁぁ!!!!!!」

守れなかった・・・

オレは守ると誓ったはずの・・・恋人(ひと)を・・・・オレは・・・　マモレナカッタンダ・・・・・・

それは御剣陽一　彼が15歳・・・の秋のことだった。

【バキッ・・・・】

マタ・・・・　オレハ・・・

オレハ　ナニモマモレナイノカ・・・？

オレハ・・・・

「何か異常な・・・　気配を感じたから、また来て見れば・・・
これが・・・私にも読めなかった君の心の奥の更に奥・・・　深層域の闇なんだ・・・・・　君の自己犠牲精神は・・・ここから・・・来ていたのか・・・・　私・・・なんてコを・・・　誤って死なせちゃったんだろう・・・・？」

誰かが呟く・・・・

ダレ・・・・・？

「謝ったって許しちゃくれない・・・　よね・・・　貴方はそんなのいらん！って言いそうだけど・・・　私が今の貴方にしてあげられる事・・・　うん。　貴方に力を少しだけ返す。　この「世界」での大切な人たちを守れるように・・・　何より・・・この世界で私が出来る事はそれしか出来ないし・・・」

ダレナンダ・・・？

「君から奪った「力」の一部を・・・　もう一度だけ君に渡すよ・・・　でも・・・「力」に飲み込まれないでね・・・　以前とは状況が違いすぎるし　何より　少しとはいえ・・・貴方の前の力は・・・それほどまでに強力で強大だったんだから・・・下手をしたら世界を壊せてしまう程に・・・　そんな力に飲み込まれたら・・・　君に・・・御剣怪斗に・・　戻れなくなるよ・・・心を強く持って・・・」

声が聞えるが・・・・

ウウウウウウ・・・・　ダレナンダ！！！

「でも・・・今の彼には酷な話しよ・・・ね。　トラウマの深部にまで触れちゃったから・・・　でも何でだろう?今の君の仲間ならきっと・・・君を助けてくれる・・・　そんな気がする。　少なくとも今の状況よりは・・・悪くはならない・・・　気をつけて・・・」

この声の主の不安は当たる。

【ピキッッ　バキッ・・・　バリィィン!】

何かが・・・音をたてて・・・壊れていく・・・・・・・・・

彼に力を・・・宿し　そして・・・彼が壊れていく・・・・・・

しかし、力に飲み込まれたわけじゃないだろう・・・

唯・・・彼の心が限界だったみたいだ・・・

最終的に声の主の不安通り・・・・

その時、

カイトは・・・・

現実に・・・戻った時には御剣怪斗じゃなくなってしまっていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第１３０話　深層意識の・・・闇（後書き）

ありがとうございました！
なーんか無茶なお話になったような気がします・・・　苦笑

力・・・全部は返してくれないんですね～　笑

さて・・・

次話は戦いのシーンに戻ります！
ありがとうございました！

第１３１話　無言・・・そして迫る極大焔（前書き）

よろしくお願いします！！
さぁて・・・　どうなるんだろう・・・？苦笑

ガンバッテー！！

では！
駄文よろしくです！

第１３１話　無言・・・そして迫る極大焔

カイトは・・・まるで立ったまま死んでいるかのように動かず・・・・・・いや小刻みに体中が震えている・・・　立っているのがやっとと言う感じだった。

「つくねーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！」

モカの叫びがだけが木霊する・・・

するとそれに答えるように・・・

偶然なのかつくねの最後の力なのか・・・

つくねの手にモカのロザリオが引っかかり・・・・外れ・・・

モカが覚醒した。

ドゴォォォォ！！！！！

「モ・・・モカっ・・・モカぁああ！　どうなっちゃったの？つくねは！！！！！カイトは！！！！！」

くるむも現実を受け入れられず・・・叫ぶ。

石神　ｓｉｄｅ

石神は頭を抑えながら・・・

モカを見ていた。

（赤い瞳・・・凶々しい妖気・・・この美しい私に深い傷をつけた女・・・・吸血鬼・・・力の大妖　バンパイア）

石神の額から血がドロッっと流れてくる・・・

まるであの時のように・・・

（ロザリオを外すと覚醒するモカの本性・・・・・・）

石神はその血を舐めとる・・・・

モカを睨みつけながら・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「モカぁああ！！つくね！！息してない！！　ああ！っカイトぉおお！！どうしちゃったの！！！！！」

くるむも半狂乱になったかのように叫んだ。

モカは抱きかかえたつくねを・・・・・・見る・・・

傷は・・・全身を満遍なく焼き尽くしている・・・

明らかに人間であるつくねにとっては確実に致命傷・・・　もはや手遅れのレベルだ。

治す方法はある・・・が・・・

そう　簡単にはいかなかった。

「つぎは・・・キサマか・・・　赤夜萌香・・・なるほど　バンパイア・・・　「不死者（ノスフェラトゥ）」と呼ばれている「力」では並ぶ者はいない大妖怪か・・・　だが私にかかればカス同然！　さあ！！死ねぇ！！　そこの男（カス）と一緒に！」

カイトとモカを同時に狙うかのように・・・　九曜はすぐさま炎を放ったのだ・・・

「ちぃ！！」

バッ！！

なんとかモカは九曜の攻撃を回避。

カイトとつくね・・・両方を助ける事は出来た・・・

だが・・・つくねを助ける隙が無い・・・

このままでは本当につくねの命が・・・

その時！！

ヴォォォォォォォォォォン！！！！！

カイトの周辺の空間が妖しく光る・・・

そして・・・

全く動いてなく・・・まるで死んでいたかのような・・・カイトが・・・再び動き出した。

「！！カイト！！良かった・・・　無事だったか！！　これで・・・つくねを助けれる！」

モカがそう言うと、

ガブッ・・・・・

モカがつくねの首筋に噛み付いた！

丁度血を吸うかの様に・・・

それを見たくるむは驚いた！

「モカぁああ！！？　何でこんな時まで！！つくねの血を吸ったりしたらますます助からなくなっちゃうよぉぉ！！」

くるむが叫ぶが・・・

構わずモカはつくねに噛み突き放さない。

暫くして・・・モカはつくねから離れた。

そしてモカは膝をつきながら・・・

「くるむッ　つくねを頼む・・・」

くるむにつくねを託した。

「心配するな・・・血を吸ったのではない。私の血（バンパイア）をつくねに注ぎ込んだんだ。助ける為にな。」

！！！

くるむが驚く。

ゆかりはモカが言ったことを直ぐに理解した。

妖の・・・

それも不死の異名をとるバンパイアの血ならつくねを助けられるかもしれないと・・・

くるむは喜びをあらわにするが・・・

「残念だが・・・問題が何点かある。そして助かる確率は低い・・・そして　助かったとしても・・・　妖の血を混入したつくねの体に何が起こるかわからない。・・・だが　今はこの方法のほか無い・・・　カイトの所へ行ってくる。つくねをまかせたぞ・・・」

そういいモカがカイトに近付く・・・

が・・・

カイトは何も反応しない・・・

唯・・・九曜の方へ歩き出す・・・

非常に緩やかな移動速度で・・・

「くくく・・・　死にぞこないがなんだ？　キサマ・・・ショック死でもしたのかと思っていたのだが？　変な奴だな・・・　まあ、もう良いさ。余興は終わりだ！　貴様らもろとも跡形もなく消してやる・・・　この私最大最強の浄化の炎でな！！」

そう言うと九曜は自信を中心とし、半径５ｍほどの炎の円（サークル）を出現させた・・・

「！！！　ッ！！（あれはマズイ！！）」

裏モカでさえかなり警戒するほどの威力を秘めているほどの炎。

「カイト！！！　下がれ今のお前じゃそれは！！」

モカが叫ぶ。

だが・・・カイトは聞く耳を持っていない。

いや・・・聞えていない・・・のか？

唯無表情なまま・・・

九曜に近付いていっていた。

「カイト！！ダメぇぇぇ！！」

「カイトさーーーーん！！！！！もどってぇー！」

つくねを抱えたままくるむは叫ぶ・・・

ゆかりも涙を流しながら叫ぶ・・・

が・・・やはりカイトは答えないし反応しない・・・

唯・・・九曜に向かって歩いていくだけだ。

炎の円（サークル）はやがて九曜の下へ小さくなり・・・集まり九曜の手に集う。

それは球状の・・・

「死ね！！　我が最大の神なる焔・・・　朧・炎神紅玉（えんじんこうぎょく）！」

ボゴオォォォォォ！！！

手に集まった球状の炎は九曜が叫んだ途端　巨大で強大な炎へと変貌した。

それは・・・まるで球状・・・　太陽のような・・・

凄まじい熱気を孕んでいた・・・

「死ねぇエエエエ！！！！」

九曜は特大の炎をカイトへ向かって解き放った！！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・

その炎は触れるまでも無く・・・

唯近付いただけで周囲を焼き尽くしていく・・・

そしてゆっくりとカイトの元へ近付いていった・・・

「「「カイトォ！！！」」」さん！！」

皆手で顔を覆いながら・・・

必死に叫んだ。

第１３１話　無言・・・そして迫る極大焔（後書き）

ありがとうございました！！
ええっと・・・九曜くんの技は・・・〇ンピースの〇ース君の技を思い浮かべて書きました♪　苦笑

時話あたりで・・・・・・

どうなるんだろう・・・　？？　笑

改めて読んでいただき、ありがとうございます！

第１３２話　大地に降り注ぐ破滅の力（前書き）

よろしくお願いします！！

仕事（リアル）の方が・・・ヤバス・・・

大変になってきました・・・

ひょっとしたら、更新が前触れも無く遅れるかもです・・・

いやいや！ガンバリマス！

遅れたら・・・　ごめんなさい・・・

では！駄文ですがどうぞ！

第１３２話　大地に降り注ぐ破滅の力

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・

球体の炎が・・・渦巻きながらゆっくりと向かっている・・・

カイトはそのまま緩やかに進み・・・

迫り来る炎の極大炎球を・・・・

ゴッ！！　ガギイイィイィィィィィイイィ！！！！！！

無言で九曜へと弾き返した！！！

「なっ！！！！」

九曜は・・・

当然驚く・・・

自身の最強奥義といってもいい技を・・・

いとも簡単に・・・

「そんな・・・！！　ばかなあああぁぁ！！！！！」

ズガアアアアアアアアアアアァ！！！

驚きながらも必死で跳ね返ってきた自分自身の技を抑える！

いくら自分自身の最強の奥義であっても自分の技で死ぬような事は無い！

が・・・　九曜の精神的なダメージは計り知れなかった。

「ぐううう！！！！　きさま・・・私の炎を・・・　いっ

たい・・・　さっきまでとは・・・別人だ・・・！　なんなのだ！！！」

そう叫びながら改めてカイトを見る

すると・・・

九曜はカイトの変化に・・・気付いた・・・

モカもだ・・・

「これは・・・　カイトの髪の色・・・　いつもの黒い・・・髪じゃない・・・・」

これは・・・

赤みが掛かった茶髪??

明るい・・・・・・鮮やかな・・・

『Ｃｒｙｓｔａｌｌｉｚｅ・・・　ｔｈｅ　ｏｒｉｇｉｎ　――ｐｏｗｅｒ・・・』

《結晶せし根源たる力よ・・・》

カイトが初めて・・・声を出す・・・

『Ｇａｔｈｅｒ　ｔｏ　ｓｅｌｆ．』

《我が前に集え》

いつもと違う・・・

いつもの彼の詠唱じゃない。

英語で詠唱を行っている。

『Ａｎｄ　．．．　ｉｔ　ｃａｎ　ｐｏｕｒ　ｉｎｔｏ　ｔｈｅ　ｅａｒｔｈ　．．．』

《大地に降り注ぐは・・・》

そして・・・仕草の全てがいつもと・・・・・違う。

『Ｐｏｗｅｒ　ｏｆ　”ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ．”　Ｕｌｔｉｍａｔｅ　ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　ｗｈｉｃｈ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄｓ　ａｌｌ　．．．』

《始まりにして究極の破滅の力・・・》

一言一言発するたびに・・・異常な妖気が周囲にあふれかえってい

った。

（これは英語だよな・・・？　大地に・・・・降り注ぐ破壊・・・
破滅の・・・力!?）

彼の・・・カイトの詠唱を訳したモカは・・・

もし・・・本当に彼のの詠唱（ことば）の通りになるのならば・・・

これから起こる事に・・・戦慄していた。

そして・・・

それは来たのだ。

ゴゴ

カイトを中心に、公安本部が、まるで地震が起きたかのように揺れ

だした！

『・・・・・・・・死ね。』

カイトは・・・まるで生気の無い目で・・・　九曜を睨みつける。

そのカイトの仕草全てに九曜は戦慄した・・・

そして彼の頭に思い浮かんだのはたった1つの文字・・・

？死？

これが・・・・・死への恐怖・・・？

「この・・・私が・・・恐怖を・・・・？　死を・・・・？　バカなッ！！あ・・・ありえないッ！　この・・・私が・・・・・・ッ！！」

九曜は動こうとするが・・・

まるで地面に縫い付けられたように足が動かない。

足だけではない。

体が動かない・・・

まるで金縛りに合ったかのように・・・

体は全く動かせないのだが・・・　意思とは関係なく。

唯・・・　体が震えているだけだった。

赤みがかかった茶髪を靡かせながら・・・

カイトは赤い瞳をゆっくりと開く・・・

そして・・・

『Ｍｉｎｃｅ　ｔｈｅ　ｔｉｍｅ　ｏｆ　ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ：？ＭＥＴＥＯＲＩＴＥ　ＳＴＲＩＫＥ！？』

《始まりの時を刻め・・・　惑星直撃（メテオ・ストライク）》

カイトがそう呟いた瞬間！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

建物が崩壊を始めた・・・

「！！！いっ・・・いかん！！　全員！ここ脱出しろぉ！！」

モカが叫ぶ！！

「な・・・　なにが・・・」

くるむが何か言ってるがそれどころではない！

「早くしろ！！！　巻き込まれるぞ！！」

モカの形相にくるむは一瞬硬くなるが・・・　今は尋常じゃない

周囲の状況・・・　まるで大地そのものが

暴れ狂ってるかのような・・・

翼があるくるむはゆかりとギン先輩を運び・・・

モカは自力で公安本部から脱出をはかる。

（確かに・・・　ここにいちゃあ一巻の終わりだ！　傍観で死ぬのはゴメンだ！　傍観はこれまでだ！！）

見ていた石神も素早く本部より逃げ出していた。

そして・・・　外で見たのは。

巨大な・・・　岩？　いや・・・・・・・

隕石だ・・・！！

‥それが本部を直撃する瞬間だった・・・

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！

着弾した途端。

本部は大爆発により・・・　一瞬のうちに瓦礫の山となった。

衝撃は上方に向かって爆散していき　空の彼方へと消えていく・・・

破壊力を・・・全て一点に凝縮し・・・　まるで本部のみを標的にしたかのような一撃だった。

あれ程の隕石?が衝突したというのに・・・

学園には何も影響していない。

本部に近付く一般人は殆どいない為か、

騒ぎにすらなっていなかった。

もしかしたら・・・　大地が揺れているように感じは公安本部のみだったのかもしれな・・・

それに、元々公安本部へ近付く者など委員以外にはいない事も幸いしただろう。

そう、公安本部だけが・・・

コナゴナに破壊されていた。

一見しただけでも想像がつく・・・

この公安本部で生きていられるかどうかなんて・・・

「カ・・・　カイト・・・・・・？」

皆・・・唖然としていた・・・

特にくるむ達はつくねの方に集中していたため・・・

何が起きたのか理解不能だったようだ。

唯・・・そこにあった建物が・・・見るも無残な形へと変貌している・・・

ぺたん・・・と膝をつき　泣いていた。

「そん・・・な・・・　カ・・・カイト・・・が・・・・・」

認めたくない気持ちでいっぱいであったが・・・

あの大爆発を目の当たりにした以上は・・・

「うっ・・・　うっ・・・」

ゆかりも・・・　涙を流していた。

カイトが・・・　彼が来てくれなければ・・・　自分たちが死んでいただろう・・・

もしかすれば・・・楓牙の一件もある・・・

公安本部（ここ）にすら・・・　来れていなかったかもしれない・・・

皆が絶望に彩られていた中、

モカは信じていなかった・・・

「・・・・・　あいつが・・・　そう簡単にくたばるものか！！」

モカがそう叫び！

瓦礫と化した本部へ行こうとした時。

ガラ・・・・・・

突然瓦礫の中央付近が崩れ始めた。

第１３２話　大地に降り注ぐ破滅の力（後書き）

ありがとうございました！

久しぶりに英語の詠唱ですね・・・
やっぱり考えててちょっと恥ずかしい・・・　苦笑

女神さんが返した力って・・・

これ見たいですね・・・　根源の力？　元素？　まあ・・・以前のヤツに比べたら格段に威力は落ちると思います・・・　多分つっこみどころ満載ですが・・・
軽くスルーしてください！　苦笑

誤字等あれば指摘してくれたら嬉しいです！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0415u/

ロザリオとバンパイア～Another story～

2011年11月1日01時50分発行